

2014 年度

東洋大学審査学位論文

インド思想における世界構成原理の研究
—サーンキヤ思想を中心として—

文学研究科仏教学専攻博士後期課程

3 年 4120090005 三澤祐嗣

インド思想における世界構成原理の研究
—サーンキヤ思想を中心として—

三澤祐嗣

はじめに

インド思想の最大の特徴は世界および人間をどのように把握するのかという飽くなき営為であり、その理論構築にあたって最大の寄与をなしたのがサーンキヤ思想である。本研究は、この古代インドの哲学思想であるサーンキヤ思想が、その初期段階において如何なる内容であったのか、さらにこの思想が、インド思想史上においてどのように展開していったかの一端を解明しようと試みるものである。

この古代インドの哲学思想であるサーンキヤ思想は、世界の成り立ちを一定数の原理に分類・分析するものであり、古くからインド思想の根幹を担ってきた重要な思想の1つである。サーンキヤ思想は、六派哲学というインドの伝統的な学問体系に包含され、従来の研究の多くは、この六派哲学の一派としてのサーンキヤ学派の解明に注意を注いできた。確かに、インド思想の中ではほとんど唯一と断言できる形而上学的問題を中心に据えた学問体系である。だが、しかし、インド思想史において、サーンキヤ思想の最も顕著で決定的であった影響はヒンドゥー教世界における宇宙論の構築であった。彼らの思想は、古代においては自己と世界を結びつける宇宙論を発展させ、時代が下ると、現象世界の成り立ちの説明原理として多くのヒンドゥー教諸派やプラーナ文献においても採用されたのである。

サーンキヤ思想は、4世紀頃に根本教典 *Sāṃkhyakārikā* の編纂により、学派としての体系化された思想が構築され、六派哲学というインドの伝統的な6つの学問体系の一つとしてあげられている。この体系化されたサーンキヤ思想は、古典サーンキヤと呼ばれ、*Sāṃkhyakārikā* とその註釈文献を中心に展開した。しかし、この *Sāṃkhyakārikā* で体系化された教説は、無神論的傾向のものなど、いくつかの説をまとめあげたものであり、体系化される以前の段階には多くの異なる説が存在した。それらは総称して初期サーンキヤと呼ばれる。彼らの哲学的探求の始まりは哲学文献群であるウパニシャッド文献にはじまり、大叙事詩 *Mahābhārata* において花開き、様々な説が見られるようになった。また医学書 *Carakasamhitā* やダルマ文献 *Manusmṛti* などにも影響が見られるように、広い学問分野にわたって大きな影響力を持っていたことが分かる。それとは別に、一群のヒンドゥー教聖典であるプラーナ文献、さらにはパーンチャラートラ派やカシュミール・シヴァ派な

どのヒンドゥー教諸派へと継承され、思想のバックボーンとして大きな影響を与えた流れがある。ただし、いずれも様々な説を取り入れ発展させてきたので、その影響をさぐるには注意が必要であろう。

このように、サーンキヤ思想は複雑に展開していくため、古典サーンキヤのみでも、初期サーンキヤのみでも、その全容は把握できない。従来の研究は、古典サーンキヤを中心に扱われていたのであるが、本研究の特徴は、初期サーンキヤに光を当て、パーンチャラートラ派などヒンドゥー教諸派への展開をふまえた、サーンキヤ思想に基づく古代インドの宇宙論を多角的に扱うことである。甚だ大きな問題であるため、著者の手に余るところも大きいですが、サーンキヤ思想の展開の一端を解明しようと試みた。

まず第1章「ヴェーダ聖典およびウパニシャッド文献における世界構成原理」では、ヴェーダ聖典およびウパニシャッド文献における世界構成原理について取り扱った。その第1節「ヴェーダ聖典における世界構成原理」では、内容的に直接サーンキヤ説に繋がるものではないが、後のサーンキヤ説に見られる重要な述語が登場するので、それを取り上げた。第2節「ウパニシャッド文献におけるサーンキヤ思想の萌芽」では、ウパニシャッド文献において、サーンキヤ思想に関連があると考えられる箇所をいくつか取り上げ、検証した。

次に第2章「*Mahābhārata* における世界構成原理」としてエピック・サーンキヤの中心をなす *Mahābhārata* における世界構成原理についての考察を行った。その第1節「Mokṣadharmā-Parvan 第187章および第239–241章におけるサーンキヤ古説」では第12巻187章と第12巻187–239章を扱った。これらの章は、類似点がいくつも見られ、同じテキストから生まれた別ヴァージョンと考えられており、Mokṣadharmā-Parvan におけるサーンキヤ思想の最も基本的なテキストとして重要視されてきた。先行研究に依りつつも、世界の構成原理と3種のグナを検証した。第2節「Mokṣadharmā-Parvan 第203章における8種の根本原因と16種の変異の説」では、第12巻203章において説かれる世界創造説は、構成原理を8種の根本原因と16種の変異に分けるものである。この説は他の箇所にも説かれるもので、おそらく、エピック・サーンキヤの中では最も明瞭で簡潔にまとめられたものである。列挙された原理はSKと非常に類似したものであるが、展開の順序やその数などが異なる。この節ではそれらの検証を行った。続く第3節「Mokṣadharmā-Parvan 第291章における25原理説」では第291章を取り上げ、そこに説かれる諸原理の展開について考察した。ここでは、8種の根本原因と16種の変異の説に基づきつつも、25番目の原理としてヴィシュヌをあげて世界を説明する独自の理論を展開する。第4節「Mokṣadharmā-Parvan 第298章における24の原理と9の創造説」では、第298章で説かれた24の原理の説と9の創造という2つの創造説が並列された箇所について検証した。第5節「Nārāyaṇīya-Parvan における原理展開」では、パーンチャラートラ派の教義が説かれたこの書の中で、8つの根本原理をあげる第327章と、ヴェーハ説が

説かれる第 326 章を取り上げ、検証した。第 6 節「*Bhagavadgītā* における世界構成原理」では、*Bhagavadgītā* における構成原理と 3 種のグナについて説かれた箇所を取り上げ考察した。サーンキヤ思想に関連した創造説の記述は少ないが、特徴的な思想が見られる。

さて、第 3 章「*Manusmṛti* における世界構成原理」では、サーンキヤ思想の観点から *Manusmṛti* を再解釈した。第 1 節「*Manusmṛti* 第 12 章におけるアートマン」では、輪廻を主題としている第 12 章において説かれる心のあり方やアートマンなどについてもとりあげ、サーンキヤ思想との比較を行った。第 2 節「*Manusmṛti* 第 12 章における 3 種のグナ説」では、輪廻に関する分類を 3 種のグナにより規定する説にサーンキヤ思想が関連するため、当該箇所を取り上げ、考察した。第 3 節「*Manusmṛti* 第 1 章における原理展開」では、*Manusmṛti* の創造説について説かれる箇所を扱った。サーンキヤ説の影響はわずかながら、そこには独自の理論がみられるため取り上げた。

第 4 章「*Carakasamhitā* および *Buddhacarita* における世界構成原理」では、第 1 節「*Carakasamhitā* における 8 種の根本原因と 16 種の変異の説」と第 2 節「*Buddhacarita* における 8 種の根本原因と 16 種の変異の説」において、エピック・サーンキヤの最も典型的な説と考えられる 8 種の根本原因と 16 種の変異の説について扱った。

第 5 章「古典サーンキヤにおける世界構成原理」では、*Sāṃkhyakārikā* に説かれる説を中心にとりあげ、まず、第 1 節「*Sāṃkhyakārikā* における 25 原理説」において、古典サーンキヤにおける原理展開、すなわち開展説について概観した。次の第 2 節「*Sāṃkhyakārikā* における 3 種のグナ説」では、宇宙論に関する箇所や輪廻に関する説などを多角的に取り上げた。

最終章の第 6 章「パーンチャラートラ派における世界構成原理」においては、*Ahīrbudhnyasaṃhitā* と *Lakṣmītantra* についての考察を行った。第 1 節「*Ahīrbudhnyasaṃhitā* における世界構成原理」では、第 7 章における *śuddhetarasṛṣṭi* 説（「不浄なる創造」説）を取り上げ、初期サーンキヤや古典サーンキヤとの比較を通じ、その思想内容と影響関係の検証を行った。第 2 節「*Lakṣmītantra* における最高神の顕現」では、第 2 章で説かれる最高神の顕現について取り上げ、ビューハ説の複雑な展開の中に見られる、最高神の顕現についての考察を行った。そこにはアートマンの二側面の概念など重要な思想が見られる。

以上のような章立てのもと、サーンキヤ思想の史的展開にそってそれぞれの世界構成原理を考察した。また巻末に、それらの考察に用いたサンスクリット原典と試訳を補遺として掲載した。

目次

はじめに	i
序論	1
第1節 サーンキヤ思想の史的展開	1
第2節 エピック・サーンキヤ	3
第3節 サーンキヤ学派の成立とその展開	6
第4節 パーンチャラートラ派	16
第1章 ヴェーダ聖典およびウパニシャッド文献における世界構成原理	21
第1節 ヴェーダ聖典における世界構成原理	21
第2節 ウパニシャッド文献におけるサーンキヤ思想の萌芽	23
第2章 <i>Mahābhārata</i> における世界構成原理	35
第1節 Mokṣadharmā-Parvan 第187章および第239–241章におけるサーンキヤ古説	35
第2節 Mokṣadharmā-Parvan 第203章における8種の根本原因と16種の変異の説	48
第3節 Mokṣadharmā-Parvan 第291章における25原理説	53
第4節 Mokṣadharmā-Parvan 第298章における24の原理と9の創造説	62
第5節 Nārāyaṇīya-Parvan における原理展開	69
第6節 <i>Bhagavadgītā</i> における世界構成原理	79
第3章 <i>Manusmṛti</i> における世界構成原理	85
第1節 <i>Manusmṛti</i> 第12章におけるアートマン	85
第2節 <i>Manusmṛti</i> 第12章における3種のグナ説	94
第3節 <i>Manusmṛti</i> 第1章における原理展開	99
第4章 <i>Carakasamhitā</i> および <i>Buddhacarita</i> における世界構成原理	103
第1節 <i>Carakasamhitā</i> における8種の根本原因と16種の変異の説	103

第 2 節	<i>Buddhacarita</i> における 8 種の根本原因と 16 種の変異の説	105
第 5 章	古典サーンキヤにおける世界構成原理	107
第 1 節	<i>Sāṃkhyakārikā</i> における 25 原理説	107
第 2 節	<i>Sāṃkhyakārikā</i> における 3 種のグナ説	111
第 6 章	パーンチャラートラ派における世界構成原理	133
第 1 節	<i>Ahīrbudhnyasamhitā</i> における世界構成原理	133
第 2 節	<i>Lakṣmītantra</i> における最高神の顕現	150
第 7 章	結論	161
	おわりに	165
	補遺：訳註	175
補遺 A	<i>Mahābhārata</i> , Mokṣadharma-Parvan 抄訳	175
A.1	Mokṣadharma-Parvan 第 187 章	175
A.2	Mokṣadharma-Parvan 第 203 章	188
A.3	Mokṣadharma-Parvan 第 239 章	198
A.4	Mokṣadharma-Parvan 第 240 章	203
A.5	Mokṣadharma-Parvan 第 241 章	208
A.6	Mokṣadharma-Parvan 第 291 章	211
A.7	Mokṣadharma-Parvan 第 298 章	221
補遺 B	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> 抄訳	229
B.1	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 11	229
B.2	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 12	233
B.3	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 13	237
B.4	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 14	241
B.5	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 15–16	244
B.6	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 22	251
B.7	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 23	253
B.8	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 24	257
B.9	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 25	259
B.10	<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i> ad. SK 26	261

補遺 C	<i>Ahīrbudhnyasaṃhitā</i> 第 7 章訳註	263
C.1	<i>Ahīrbudhnyasaṃhitā</i> 第 7 章「不浄なる創造説」1–43ab	263
補遺 D	<i>Lakṣmītantra</i> 第 1–3 章訳註	279
D.1	<i>Lakṣmītantra</i> 第 1 章「シャーストラ（聖典）の顕現」	279
D.2	<i>Lakṣmītantra</i> 第 2 章「清浄なる道の明示」	297
D.3	<i>Lakṣmītantra</i> 第 3 章「3 つのグナから成るものの明示」	313

図表目次

1	サーンキヤ思想の分類	1
2	SK のおもな註釈書	13
3	MBh 12.187 における原理展開	39
4	MBh 12.239; 240 における原理展開	40
5	MBh 12.187; 239 におけるサットヴァ	44
6	MBh 12.187; 239 におけるラジャス	45
7	MBh 12.187; 239 におけるタマス	46
8	MBh 12.203 における粗大元素と知覚器官・対象の対応	52
9	MBh 12.203 における 8 種の根本原質と 16 種の変異の展開	83
10	MBh 12.291 における原理展開	84
11	MS における 3 種のグナの 9 分類	99
12	SK における開展説	130
13	SK における 25 原理の分類	131
14	SK における 3 種のグナの性質	131
15	SK における 3 種のグナによる生まれの違い	131
16	8 種の神の位	132
17	5 種の獣の位	132
18	AhS 7 における原理の展開	134
19	LT 2 における最高神の顕現	158
20	LT 2 におけるヴェーハ神の顕現	159

略号

- *Ahīrbudhnyasaṃhitā* : AhS
- *Atharvaveda* : AV
- *Buddhacarita* : BC
- *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* : BṛhadUp
- *Carakasamhitā* : CS
- *Chāndogya Upaniṣad* : ChāndUp
- *Gauḍapādabhāṣya* : G
- *Jayamaṅgalā* : J
- *Kāthaka Upaniṣad* : KāthUp
- *Lakṣmītantra* : LT
- *Mahābhārata* : MBh
- *Maitrāyaṇīya Upaniṣad* : MaitUp
- *Manusmṛti* : MS
- *Māṭharavṛtti* : M
- *Ṛgveda* : RV
- *Sāṃkhyakārikā* : SK
- *Sāṃkhyatattvakaumudī* : STK
- 『金七十論』 (*Suvarṇasaptati*) : SS
- *Śvetāśvatara Upaniṣad* : ŚvetUp
- *Yuktidīpikā* : Y

序論

第 1 節 サーンキヤ思想の史的展開

第 1.1 節 サーンキヤ思想の 3 分類

サーンキヤ¹思想は、伝統的な哲学体系である六派哲学の 1 つにあげられ、インド思想において主要な思想の 1 つとされる。このサーンキヤ思想の思想史的展開は、従来より大きく 3 つに分類されてきた。その分類は図表 1 の通りである²。

I.	Proto-Sāṃkhya speculations 《初期サーンキヤ》	『マハーバーラタ』、ウパニシャッド文献など 多様な説が見られるが、ほとんどの著作は断片のみ 『マハーバーラタ』を中心に説かれたサーンキヤ説はエピック・サーンキヤ(Epic Sāṃkhya)と呼ばれる
II.	Classical Sāṃkhya 《古典サーンキヤ》	『サーンキヤ・カーリカー』およびその註釈文献 先行する思想の体系化、学派の成立と発展 サーンキヤ学派の中心的思想
III.	Renaissance or Later Sāṃkhya 《後期サーンキヤ》	『サーンキヤ・スートラ』など 種々の思想との折衷や有神論的一元論に傾斜

図表 1 サーンキヤ思想の分類

4 世紀頃に根本教典 SK が編纂され、学派としての体系化された思想が構築され、発展していった。それは古典サーンキヤと呼ばれる。その後、時代が下ると発展は衰えるが、種々の思想との折衷などにより再解釈が行われた。それは「後期サーンキヤ」と呼ばれ、古典サーンキヤとは区別される。一方で、学派成立以前にも多様な発展をとげ、その思想

¹ Sāṃkhya の名称の由来は、「数 (number)」「数え上げる (enumeration)」を意味する語 sam- \sqrt{khya} と言われ、さらに、カテゴリーを列挙するという意味によって、「論理的に思考する (reason)」や「分析する (analyze)」という意味をも示している。しかしながら、この語は、様々な著者や伝統によって、多様な方法で使用され、理解されてきたということに注意しなければならない。そのため、ある 1 つの意味に限定することは不可能である [Larson 1979: p. 3]。

² 分類は Larson による [Larson 1979]。

は様々な文献の中に見られる。それは初期サーンキヤと呼ばれる。特に MBh には多くの記述がみられ、その思想を中心としたものを、特にエピック・サーンキヤと呼ぶ。

第 1.2 節 初期サーンキヤ

まず、1 番目の段階は、初期サーンキヤ (Proto Sāṃkhya speculations) と呼ばれ、体系化される以前の段階である。ヴェーダ文献やウパニシャッド文献には、サーンキヤ思想の萌芽が現れ、さらに MBh の Mokṣadharmā-Parvan 中にも多くの思想が見られる。この段階は、あくまでも体系化以前の段階であるため、サーンキヤ説についての独立した著作は存在しないが、イーシュヴァラクリシュナ以前のサーンキヤ学者による言及は多く見られる。

サーンキヤという名称の登場は古く、カウティリヤ (Kauṭilya) 作の『実利論』 (*Arthaśāstra*) に記述されている。このカウティリヤは、マウリヤ王朝のチャンドラグプタ王の宰相に帰せられ、紀元前 321–300 年頃に活躍したとされている。学問として、哲学 (*ānvīkṣikī*) と 3 ヴェーダ学と実業学と政治学とをあげ、さらに哲学として、サーンキヤ (*sāṃkhya*)、ヨーガ (*yoga*)、唯物論 (*lokāyata*) とを挙げている³。また、MBh 12.337.59 には、次のように説かれる。

sāṃkhyam yogaṃ pancarātram vedāḥ pāsūpatam tathā /
jñānāny etāni rājarṣe viddhi nānāmatāni vai // MBh 12.337.59

サーンキヤ、ヨーガ、パンチャラートラ、ヴェーダ文献、およびパーシュパタ、これらの知識は実に異なる思想と知るべきである、王仙よ。

以上のように、学問として、サーンキヤ、ヨーガ、パンチャラートラ (= パンチャラートラ)、ヴェーダ文献、パーシュパタの 5 つが挙げられている。すなわち、紀元前後の段階ですでに、サーンキヤは学問としてある程度地位を築いていたことが分かる。さらに、また、パンチャラートラ派の名前もみられ、この派が同時代にすでに影響力を持っていたことが窺える。また、MBh には、サーンキヤの思想を説いていたり、あるいは、バックボーンとしての影響が現れている箇所がいくつもあり、サーンキヤ思想は、初期の段階においてかなりの影響力を持っていたと考えられる。

第 1.3 節 古典サーンキヤ

第 2 の段階は、古典サーンキヤ (Classical Sāṃkhya) と呼ばれ、六派哲学におけるサーンキヤ学派とはこのことを指す。イーシュヴァラクリシュナにより 4 世紀頃根本教典 SK

³ [中村 1982: p. 101]

が編纂された。これにより先行する思想が体系化され、学派として確立した時代である。SK 自体は *Śṣṭitantra* 全体の趣意とされるが、この書は散逸してしまい、断片が残るのみである。SK にはその後、多くの註釈が書かれ、発展していった。古典サーンキヤとは、SK とその註釈文献を中心に展開したサーンキヤ学派の中心的思想である。

第 1.4 節 後期サーンキヤ

第 3 の段階は、後期サーンキヤ (Renaissance or Later Sāṃkhya) と呼ばれる。12 世紀から 15 世紀頃、種々の思想との折衷や有神論的一元論に傾斜し、サーンキヤ学派は衰退の時期をむかえる。中心的な文献としては *Sāṃkhya-Sūtra* や *Tattvasamāsa* などがある。

第 1.5 節 サーンキヤ思想の展開

以上のように、サーンキヤ思想史を 3 つの段階で概略したが、SK で体系化されたのは、無神論的傾向のものなど、いくつかの説をまとめ上げたものであり、サーンキヤには、SK 以前の段階で多くの異なる学派が存在したことが指摘されている⁴。特に、MBh において多く見られるエピック・サーンキヤの思想の内いくつかは、古典サーンキヤとは別の流れ、つまりプラーナ文献やパーンチャラートラ派へと展開していったと考えられている。その代表例がパーンチャラートラ派の聖典 AhS であり、そこには、古典サーンキヤ、エピック・サーンキヤ、両方の影響が見られる。また、現象世界の説明原理としてサーンキヤ思想の理論は確かに息づいており、単純に 3 つの区分に分けて終わらせることは、不可能であると言わざるを得ない。エピック・サーンキヤは古典サーンキヤの登場と共に廃れたわけではなく、また、古典サーンキヤも後期サーンキヤの登場と共に廃れたわけではない。サーンキヤ思想は、広く、そして複雑に展開していったのである。

第 2 節 エピック・サーンキヤ

エピック・サーンキヤ (Epic Sāṃkhya) は、ウパニシャッド文献から続いてきた思索の影響を受け、明確なサーンキヤ説を打ち出す。しかし、SK のように体系化された説は説かれておらず、原理の数が違ったり、主宰神をたてたりと、多様な説が混在している。

⁴ *Yukti-dīpikā* には、諸学者の異説が並記され、サーンキヤ諸派の存在が確認されるという [中村 1982: p. 156]。

第 2.1 節 *Mahābhārata*

インドの 2 大叙事詩の一つである MBh⁵は、全 18 巻と補遺からなり、その詩節の数はおよそ 215,000 偈にのぼる。*Mahābhārata* とは、mahā (偉大な) bhārata (バラタ族)、つまり、「偉大なるバラタ族の物語」であり、同族内での戦争物語を主軸としていて、それを中心に数々の挿話がなされている。そこには、神話や伝説、法律や政治・経済、哲学思想など、多種多様なものが挿入され、百科全書とも言える内容を持っている。そのため、古代インドにおける思想や生活を知るための重要な資料となりうる。

伝説上作者はヴィヤーサ (Vyāsa) に帰せられるが、長い年月をかけて数々の挿入・改変が繰り返され完成していった。主軸となる戦争物語は紀元前 10 数世紀ごろに実際あったものを元にしていないのではないかといわれ、この主軸の戦争物語が最も古くに完成し、紀元前 4 世紀から紀元後 4 世紀頃の間にはほぼ現在の形が成立したといわれている⁶。

MBh の中で、哲学説がまとまって説かれているのは、5 巻中の「サナトスジャータ篇」、6 巻中の「バガヴァッド・ギーター篇」⁷、12 巻中の「モークシャダルマ篇」(Mokṣadharmā-Parvan)、14 巻中の「アヌ・ギーター編」である。その中で最も量が豊富なのは Mokṣadharmā-Parvan であり、大半が教訓に当てられていて、物語の流れとはまったく関係がない。そのためこの 12 巻の成立は最も新しい部類に入るとされる⁸。

この書はサーンキヤの哲学説について数多く言及し、古典サーンキヤ以前にあった様々な学説が説かれている。しかし、MBh 自体に、中心のストーリーとはまったく関係のないものが挿入され、さらに挿入の中に挿入を加えるなどされて、その量は膨大に膨れ上がっており、その結果、全体的統一感は失われ、どこが主軸の部分かも非常に不明瞭のものとなった⁹。また、そのような経緯があるため、同じ章内においてさえも異なる教説や矛盾も多くみられ、前後関係がわからない箇所も多くある。さらに、叙事詩の形式であるため、説明が簡潔に終わっているところが多々ある。このようなことから、この書の理解は非常に難しく、研究が進展しない原因となっている。さらに、SK と MBh の間にあるサーンキヤ思想の資料は散逸してしまっている。つまり、両者の間に大きな隔たりが出来てしまう

⁵ 本論文の章番号は Critical Edition による。

⁶ [ヴィンテルニッツ・中野 1965: p. 168]

⁷ 『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavadgītā*) は、MBh 第 6 巻「ヴィーシュマ篇」(Bhīṣma-parvan) 第 23–40 章に該当する。神の歌を意味し、インド古典中最も有名な聖典の一つである。中心主題は行為の放擲や最高神への信愛(バクティ)であるが、バックボーンとしてサーンキヤ思想の影響も見られる。成立は紀元後 1 世紀頃とされる [上村 1992: p. 221]。

⁸ 『マハーバーラタ』は、基本的に後になるほど時代が下るので、この 12 巻も成立は新しい。しかし、冒頭にある水供養の儀式の箇所は、主軸となるバラタ族の戦争物語とつながるため、最古層に属すると考えられている [徳永 2002: p. 161]。

⁹ そのため「一個の詩的な作品ではなく、一つの全体的な文献である」とも言われる [ヴィンテルニッツ・中野 1965: p. 16]。

ため、古典サーンキヤの視点からエピック・サーンキヤを理解しようとする、重大な誤りをおかす可能性がある¹⁰。おそらく、Mokṣadharmā-Parvan が編纂された時代には、エピック・サーンキヤが思想界での主流をなしていたと十分考えられるが、まだまだ体系化する動きは見られない。そのため、MBh はサーンキヤ哲学の系化以前の思想を知る重要な手がかりとなっている。

エピック・サーンキヤの重要な研究としては、Buitenen¹¹、Frauwallner¹²、中村了昭氏¹³などによるものがある。MBh には多くの版があるが、本論文では Critical Edition¹⁴を用いた。その他に部分的ではあるが、参考として、ニーラカント註が付されたプーナ版¹⁵も参照した。

Mokṣadharmā-Parvan の翻訳としては、Critical Edition に対する茂木氏の和訳がある¹⁶。プーナ版の全訳としては中村了昭氏のものがある¹⁷。

第 2.2 節 Manusmṛti、Carakasamhitā および Buddhacarita

エピック・サーンキヤ思想は、古典サーンキヤとも異なる説がいくつも存在し、多くの文献にその説が説かれているだけでなく、バックボーンとして多大な影響を与えている。BC 第 12 章や CS 第 4 巻第 1 章などにも説かれ、MS にもその影響が見られる。MS は、ダルマシャストラ文献の 1 つであり、紀元前 2 世紀から紀元後 2 世紀の間に成立したと考えられている¹⁸。中心的内容は、ブラーフマナと王を中心的対象にしているが、すべての人間に対してそれぞれの生き方を規定することを目的として構成され、ダルマ¹⁹の権威とその普遍性の徹底化を図ったものである。

¹⁰ サットヴァをめぐる議論の中で、Buitenen は、研究者たちは SK を基準にして見てしまったために間違った解釈をしてしまったと指摘している [van Buitenen 1957b: p. 88]。

¹¹ [van Buitenen 1957b]、[van Buitenen 1957a]、[van Buitenen 1956]

¹² [Frauwallner 1973]

¹³ [中村 1982]

¹⁴ [Belvalkar 1954]、[Belvalkar 1947]。

¹⁵ [Nīlakaṇṭha et al. 1988]

¹⁶ [茂木 1993a]。以降、学術雑誌上で随時発表されている。

¹⁷ [中村 1998b]、[中村 1998a]

¹⁸ [渡瀬 2013: p. 476]

¹⁹ ダルマ (dharma) とは、リグ・ヴェーダの時代には、宇宙秩序の中における万物それぞれの本来の在り方を固定し、支え、保持する原理もしくは潜勢力であり、その力の源は、宇宙秩序 (リタ) であった。徐々に人間世界に関心が増えていくにつれ、より深く人間世界と結びつけられていき、アーラニヤカ・ウパニシャッド文献の時代において、ダルマは 4 ヴァルナ制の秩序原理とされるようになった。さらに、ダルマシュトラ文献に到ると、社会機能が固定され、人間本来の在り方、生き方が具体的に叙述された。そして、『マヌ法典』では、ダルマの語は新たに「功德をもたらす行為」あるいは「功德」そのもの、さらにはこの觀念から派生する「徳」や「義」を意味するようになった。つまり、『マヌ法典』でいうダルマとは、人々の本来の生き方であり、ヴァルナ体制に基づく社会秩序である。さらにそのダルマは創造主ブラフマンによって啓示され、神的なリシたちの手によって人々のもとに伝えられたされる。[渡瀬 2013: pp. 468–485]

本論文の執筆に際して、翻訳は渡瀬氏のものを用いて²⁰、適宜補った。渡瀬氏が依った原文を入手することができなかつたため、サンスクリット文は Olivelle のものに基づいた²¹。

CS は、インド二大古典医学書の 1 つであり、現在の形になったのは、紀元 500 年ごろと考えられている。しかし、第 6 巻第 14 章までは、紀元 100 年～200 年ごろとされる²²。第 4 巻 Śārīrasthāna. 1 は世界創造について説いており、そこにエピック・サーンキヤの影響が見られる。

BC は、世紀 100 年ごろを中心に活躍したアシュヴァゴーシャ（馬鳴）の作品である。仏典資料というより、文学作品としての要素が強いとされる²³。そこでは、サーンキヤ思想が登場するが、それがエピック・サーンキヤの説である。

第 3 節 サーンキヤ学派の成立とその展開

第 3.1 節 イーシュヴァラクリシュナ以前のサーンキヤ論者

イーシュヴァラクリシュナにより体系化が始まったサーンキヤ学派であるが、彼以前にも多くのサーンキヤ学者が存在した。開祖とされるカピラを始め、その数は 26 人にものぼる²⁴。

1. Kapila
2. Asuri (Āsuri)
3. Pañcaśikha
4. Vindhyavāsa or Vidhyavāsaka or Vindhyavāsin
5. Vārṣagaṇya
6. Jaigīṣavya
7. Voḍhu

²⁰ [渡瀬 2013]

²¹ [Olivelle 2005]

²² [矢野 1988: p. xvi]

²³ [原 2004: p. 356]

²⁴ MBh 12.306.57–60 にもあげられている。

jaigīṣavyasyāsitasya devalasya ca me śrutam /
 parāśarasya viprarṣer vārṣagaṇyasya dhīmataḥ // MBh 12.306.57
 bhikṣoḥ pañcaśikhasyātha kapilasya śukasya ca /
 gautamasyārṣiṣeṇasya gargasya ca mahātmanaḥ // MBh 12.306.58
 nāradasyāsureś caiva pulastyasya ca dhīmataḥ /
 sanatkumārasya tataḥ śukrasya ca mahātmanaḥ // MBh 12.306.59
 kaśyapasya pituś caiva pūrvam eva mayā śrutam /
 tad anantaraṃ ca rudrasya viśvarūpasya dhīmataḥ // MBh 12.306.60

8. Asitadevala or Devala
9. Sanaka
10. Sanandana
11. Sanātana
12. Sanatkumāra
13. Bhṛgu
14. Śukra
15. Kāśyapa
16. Parāśara
17. Garga or Gārgya
18. Gautama
19. Nārada
20. Ārṣṭiṣeṇa
21. Agastya
22. Pulastya
23. Hārīta
24. Ulūka
25. Vālmiki
26. Śuka²⁵

その中でも、サナカ (Sanaka)、サナンダナ (Sanandana)、サナータナ (Sanātana)、アースリ (Āsuri)、カピラ (Kapila)、ヴォードゥ (Voḍhu)、パンチャシカ (Pañcaśikha) の7人は特に有名とされるが、最初の4人は、疑う余地無く、単なる神話的人物にすぎないという²⁶。

サーンキヤ学派の開祖とされるのがカピラであるが、おそらく彼も神話的人物の可能性が高いとされる²⁷。

パンチャシカは、MBh の様々な箇所が登場するため、実際に存在した可能性が高いが、それら複数の箇所で説かれるパンチャシカが、すべて同一人物である可能性は低い。なぜなら、「もしそれらのパンチャシカが同一人物であったならば、まったく異なる、あるいは矛盾さえしている学説が、同一の人物に帰せられることになってしまうから」²⁸である。他に、歴史的存在としての可能性がある人物は、ヴァールシャガニヤ (Vārṣagaṇya)、ヴィ

²⁵ [Jha 2004: (Introduction) p. 11]

²⁶ ガウダパーダ (Gauḍapāda) によって言及されているという [Hulin 1973: p. 136]。

²⁷ Jha は “We find no strong proof for believing Kapila a historical person.” と説明する [Jha 2004: (Introduction) p. 12]。

²⁸ [Hulin 1973: p. 137]

ンディヤヴァーサ (Vindhyavāsa)、デーヴァラ (Devala) である。ヴァールシャガニヤは仏教徒との対論で知られる²⁹。

これらの学者について、「それぞれの学者が持つ独特の思想を推測することを可能にするためには、あまりにも混同され、矛盾していたとしても、それは少なくとも、『サーンキヤカーリカー』に直に先立つ時代において、サーンキヤ学派の多様性と重要性を証明するものである」³⁰ということが言えるのである。

第 3.2 節 根本教典 *Sāṃkhyakārikā*

SK は、イーシュヴァラクリシュナ (Īśvarakṛṣṇa) に帰せられ³¹、おおよそ歴史的に存在したことが認められている。SK の成立年代は、はっきりしておらず大まかな年代しか分からない。ここは Larson などに従い、紀元後 350 年から 450 年頃に成立したと捉えたい³²。

SK はおよそ 70 前後の詩節よりできているが、註釈書によって 69 詩節と 73 詩節の間で変わるため、正確な数を決定することはできない。しかし、それらの異なる数の箇所は中心的な思想と関係がない箇所であり、あまり重要視されていない。

SK がこのように簡潔に説かれたのは、先行する文献を簡潔にまとめたものであるからである。その文献が『シャシュティタントラ』(『六十科論』、*Ṣaṣṭitantra*) であり、SK 72 において以下のように言及されている。

saptatyāṃ kila ye `rthās te `rthāḥ kṛtsnasya ṣaṣṭitantrasya /
ākhyāyikāviraḥitāḥ paravādavivarjitāś cāpi // SK 72

実に、70 [の偈] において [論じられた] 主題は、挿話は除かれ、さらに他者の主張も取り除かれた、『シャシュティタントラ』全体の主題である。

このように、SK は、先行する『シャシュティタントラ』という文献の全体の内容を簡潔にまとめたものである。しかし、『シャシュティタントラ』は失われたようであり、現存するものは他の書において言及されたものだけである³³。しかも、作者は、パンチャシカ、

²⁹ 本多氏は「瑜伽師地論・俱舍論にも雨衆外道の説が述べられている。故に、この頃の仏教徒にとっては、ヴァールシャガニヤはサーンキヤ派の代表的学者と見做されていたに相違ない。」と説明する [本多 1980: p. 53]。

³⁰ [Hulin 1973: p. 137]

³¹ Hulin は次のように説明する。「Vindhyavāsa と同時期に存在していたことは証明できるようである。そのため、彼の活動時期は、A.D. 4 C. から 5 C. 頃ともなる可能性がある。少なくとも、最古の部類に入る『金七十論』が A.D.557 から A.D.567 の間に出来たため、6 世紀前半は下らないであろう。」 [Hulin 1973: p. 138]

³² [Larson and Bhattacharya 1987: p. 15]

³³ 失われた原因は分からないが、おそらく仏教徒や他学派に負けたためではないであろうか。仏教徒や他学派に追求された矛盾点をうまく克服し体系立てたのが SK であり、それにより根本聖典として長くその地

カピラ、ヴァールシャガニヤなど、様々な学者に帰せられ、さらに、引用されている書の間で矛盾している場合もあるという。

『シャシュティタントラ』は、「サーンキヤ哲学に関して、60の原理体系として〔まとめられた〕事項」³⁴と言う意味で、例えば、それら60の原理のリストや題目がSTKにおいて示されている。

tathā ca rājavārttikam //
 pradhānāstitvam ekatvam arthavattvam athānyatā /
 pārārthyam ca tathā 'naikyam viyogo yoga eva ca //
 śeṣavṛttir akartṛtvam maulikārthāḥ smṛtā daśa /
 viparyayaḥ pañcavidhas tathoktā nava tuṣṭayaḥ //
 karaṇānām asāmarthyam aṣṭhāviṃśātidhā smṛtam /
 iti ṣaṣṭiḥ padārthānām aṣṭabhiḥ saha siddhibhiḥ” // STK (2) ad SK 72

まさに、『ラージャ・ヴァールツティカ』は〔次のように説いている〕。(1) プラダーナの実在性 (pradhānāstitva)、(2) 一であること (ekatva)、(3) 目的を有すること (arthavattva)、(4) 異なること (anyathā)、そして、(5) 他のためにあること (pārārthya)、および (6) 多数性 (anaikya)、(7) 分離 (viyoga) と、まさに (8) 結合 (yoga)、(9) 残りの作用 (śeṣavṛtti)、(10) 非作者性 (akartṛtva)、〔以上の〕10が根本教義と言われる。5種類の誤謬、および9の喜びが説かれる。諸々の器官の無能力は28種と言われる。以上、8つの成就 (siddhi) と共に、60の項目を形成する。(STK 72)³⁵

全く異なる一覧表が、AhSに見いだされ、そこでの題目は、32の根本原因と28の変異に分類されており、両方のリストは古典サーンキヤとは異なる原理を含んでいるという³⁶。

第3.3節 古典サーンキヤの概説

さて、以下では古典サーンキヤの思想について外観する。まず、SKの第1偈は、次のように始まる。

duḥkhatrayābhigātāj jijnāsā tadapaghātake hetau /
 dr̥ṣṭe sā 'pārthā cen naikāntātyantato 'bhāvāt // SK 1

位を築くこととなったのであろう。

³⁴ [Keith 1975: p. 69]

³⁵ Vācaspati は、SKの失われた註釈書である *Rājavārttika* に言及していて、MとSSにわずかに異なるリストがあるという [Hulin 1973: p. 137]。

³⁶ [Hulin 1973: pp. 137–138]

〔人はこの世に生存している限り〕3種の苦に悩まされるので、それを除去する方法を知りたいという欲求が生じる。〔除去の方法は〕経験的に知られているから、それ（欲求）は無意味であるというならば、それは正しくない。〔経験的に知られている方法は〕確実には、また究極的には〔苦を除去〕しないからである。

この世界に存在している私達は苦そのものである。人は生きている限り苦に悩まされるのであり、そのことを思想の根底におき苦の除去方法を追求する。そして、その究極的な除去方法を教示するのがサーンキヤ思想にほかならないというのである。

苦を除去すること、すなわち解脱であるが、一方で解脱できなければ輪廻すると考えられていて、輪廻がいかなるものかについても説かれている。サーンキヤとは人間存在と世界の根源を考え、それを分析し、発達させてきたものである。

苦は3種に分けられる。

- 内的原因による苦 (ādhyātmika、依内苦)
- 外的原因による苦 (ādhibhautika、依外苦)
- 運命的な苦 (ādhidaivika、依天苦)

人は生きている限り苦に悩まされるのであり、そのことを思想の根底におき苦の除去方法を追求する。そして、その究極的な除去方法を教示するのがサーンキヤである。

二元論

世界を精神と物質の2つによって説明し、その究極的で根本的なものを想定した。永久に実在するのはこの二元のみであり、創造神や主宰神といったものをたてない。

- 精神原理 (puruṣa)
精神的根本原理。純粹精神、靈我。活動もなく、ただプラクリティを觀照するだけであり、本来清浄で、独存している。多数存在する。
- 根本原質 (prakṛti)
根本的な質料因、つまり物質的なものの根源。第一の物質 (pradhāna)、根本原質。活動する。単一である。3種のグナは均衡状態にある。

プルシャは享受のため、プラクリティはプルシャの解脱のため、両者は結合するとされる。それは、すなわちプルシャが觀照してプラクリティが活動を始めることである。この2者の関係は享受するものとされるものである。インド思想では一般的に、享受者と享受される対象を想定している。例えば、見たり聞いたり、あるいは樂や苦などを感じたり、これらを最終的に受け取る存在、つまり究極的な主体がいると考える。これがアートマンであり、サーンキヤではプルシャと呼ばれるものである。

3種のグナ (triguṇa)

三徳、三性とも訳される。それらは、サットヴァ (sattva、純質)、ラジャス (rajas、激質)、タマス (tamas、翳質) という3つから成る³⁷。

プラクリティをはじめあらゆる物質は、3種のグナにより成立している。この3種のグナの優劣により世界は多様化する。このトリグナは相反する性質を有するが、相互に関係し合う。サーンキヤのトリグナは構成要素とも属性ともとれる曖昧なものである。そこには、実体と属性の機能を明確に分けないサーンキヤ思想の特徴が表れている。さらに言えば、サーンキヤの根本的考え方では、作用 (vṛtti) と作用を持つもの (vṛttimat) の間に区別がない。言い換えるなら、主体と属性の区別がないのである。例えば、耳と聴覚を明確に分けない。25原理のシュロートラとは、耳であり、聴覚なのである。このように行為するものと行為そのものを一緒にしてしまうと、因果論等の重要な問題を回避してしまう恐れもある。

25原理 (25tattva) と開展説 (pariṇāma-vāda)

開展 (転変) は、プルシャの観照を受け、ラジャスの活動が始まり、トリグナの均衡が崩れることにより起こる。それにより、世界が展開し、プラクリティからマハット (ブッディ) を始めとする23の原理が現れる³⁸。

プラクリティは未開展のもの (非変異、未顕現 = avikṛti, avyakta) とも呼ばれる。プラクリティより展開したものを、開展したもの (変異、顕現 = vikāra, vyakta) という。

マナス (manas、思考器官) は、思惟する性質も有し、5知覚器官 (5 buddhīndriyāṇi)、5行為器官 (5 karmendriyāṇi) からの情報をアハンカーラ (ahaṁkāra、自我意識) に運ぶ。アハンカーラは、自己に関連づけ (I or not I / mine or not mine)、そして、ブッディは、決断の作用をなす。それらが5知覚器官・5行為器官にもどり、実際の行動を起こす。これが心の作用と行為である。心の作用も物質的なものに属する。

プルシャは観照のため、プラクリティはプルシャの独存 (= 解脱) のため、両者は結合する。

3種の認識手段 (pramāṇa)

サーンキヤ学派としては次の3種を認めている。

- 直接経験 (直接知覚、pratyakṣa)
- 推理 (推知、推量、anumāna)

³⁷ 詳しくは、本論文の第5章第2節を参照。

³⁸ 詳しくは、本論文の第5章第1節を参照。

- 信頼しうる言葉 (āptavacana)

因中有果論 (sat-kārya-vāda)

原因の中に結果が潜在的に存在している。つまり、あらゆる結果はすでに原因の中に存在し、原因に存在しないものが結果で現れることはないということ。因中無果論を主張するヴァイシェシカ学派と論争するが、お互い持っている時間論が異なるため、終始水掛け論に終わる。

輪廻の主体

ブッディ、アハンカーラ、11 インドリヤ、5 タンマートラより微細な有機体 (liṅga) をつくる (注釈書によって、あげているものが一致しない)。この微細な有機体とプルシャの結合により誤解が生ずる (いわゆる、自分らしさ、自己の精神らしきものか)。

微細な有機体は、本来プルシャにのみ属するはずの知性を持っていると誤解し、一方、プルシャは本来トリグナが活動の主体であるはずが、プルシャが活動の主体であるとあたかも誤解している。

また、輪廻の主体はこの微細な有機体である。プルシャと結合している限り輪廻し続け、苦は除去されない。つまり、プルシャは物質と結合している限り、独存がなされず、純粋性を発揮できないのである。それは、プラクリティの活動を意味し、苦を生み出す。

知による解脱

25 の原理に習熟することによって、誤解がなくなり、清らかで純粋な知識を得ることができる。つまり、プルシャとプラクリティを識別する (プルシャとプラクリティは異なるということを理解する) ことにより解脱を得られるのである。

プルシャはすでに見た (理解した) として観照をやめ、プラクリティはすでに見られた (理解してもらった) として活動を停止する。そして、世界の逆展開が起こり、両者が結合しても世界の展開は起こらない。解脱してもまだ肉体は生存している状態を生前解脱、死後に肉体の束縛を離れ二元が完全に分離した状態を離身解脱として区別している。

第 3.4 節 Sāṃkhyakārikā の注釈書

このように SK は簡潔に説かれていたため、様々な注釈書が書かれた。

SK の註釈書で主にあげられるのは図表 2 の 8 つである³⁹。

³⁹ 年代は Larson による [Larson and Bhattacharya 1987]。

名称	作者	成立年代
『金七十論』 (<i>Suvarṇasaptati</i>)	Paramārtha (翻訳・註釈)	A.D. 557—569頃
<i>Sāṃkhyavṛtti</i>	作者不明	A.D. 500—600頃
<i>Sāṃkhyasaptativṛtti</i>	作者不明	A.D. 500—600頃
<i>Gauḍapāda-bhāṣya</i>	Gauḍapāda	A.D. 500—600頃
<i>Yuktidīpikā</i>	作者不明	A.D. 600—700頃
<i>Jayamaṅgalā</i>	Śaṅkara or Śaṅkarāya (Yaśodhara)	A.D. 700以降
<i>Māṭhara-vṛtti</i>	Māṭhara	A.D. 800以降
<i>Sāṃkhyatattvakaumudī</i>	Vācaspatimiśra	A.D. 850 or 975頃

図表2 SK のおもな註釈書

Hulin により簡潔に紹介されているので⁴⁰、氏に依りつつ、以下にまとめる。

SS は、仏僧 Paramārtha (499–569 年) による註釈である。彼は紀元後 546 年頃に SK を中国にもたらし、翌年の間に、それを中国語に翻訳したと考えられている。この註釈書は 71 詩節よりなるが、実際には、72 詩節にコメントしていて、他の註釈での 63 詩節にあたる箇所を欠いている。この註釈は非常にシンプルであり、特に、初学者のために書かれているようである⁴¹。

G は、SK の註釈書の中でも、最も標準的なテキストの 1 つであり、明確に、しかも簡潔に書かれている。他の註釈の影響があまりみられないため、この書が成立したのは、比較的古代であることが推測されるという⁴²。名前が同一であることを根拠に、このガウダパーダを、ヴェーダーンタ学派の『マーンドゥーキヤカーリカー』(*Māṇḍūkyakārikā*) の著者と同一視することが主張されることもあるが、ほとんどありえないとされる。また、他には、パラマールタによる SS の基礎をなしていたという可能性も指摘されたが、その

⁴⁰ [Hulin 1973: pp. 139–142]

⁴¹ [Hulin 1973: p. 139]

⁴² [Hulin 1973: p. 139]

2 作品はあまりに異なっているため、その説は排斥されているという⁴³。

M は、SS のオリジナルとみなされたこともあったが、現在では一般的に認められおらず、かなり後代の作品であるという可能性さえあるとされる。これは、その註釈が、例えば『ハスターマラカストートラ』(*Hastāmalakastotra*)⁴⁴ や『バーガヴァタ・プラーナ』(*Bhāgavatapurāṇa*)⁴⁵などのテキストからの引用が見られることから分かるという⁴⁶。また、それは、サーンキヤ文献の最後期における特徴的な印である、ヴェーダーンタを想起させる思想をもその箇所を示している。しかしながら、M に関係する困難な問題は、紀元 5 世紀頃のジャイナ教の作品に M と思しき文献に関する記述が見られ、それがもし M と確定された場合には、成立年代は 3 世紀近く遡ることになるという⁴⁷。

J は仏教徒によって書かれた註釈である。このことは、少なくとも、テキストの始めの帰敬偈の中に暗示されている。他方、奥付では、著者として、シャンカラ (Śaṅkara) という人物に言及しているが、ヴェーダーンタ学派の有名な哲学者であるシャンカラと同一視することは不可能である。インド哲学の泰斗 Gopinatha Kaviraja によって、シャンカラヤ (Śaṅkarāya、あるいはヤショダラ (Yaśodhara)) という人物が『カーマーストラ』(*Kāmasūtra*) と J の著者でもあるとの説も出されたが、Hulin は、わずかな証明に基づくものであり、さらに、『カーマーストラ』への註釈は A.D.12 世紀後半の確証もあるため、年代的に同一視するには無理があるとしている⁴⁸。

Y は、SK の註釈書の中で、最も重要なものの一つであり、この書が発見されたのは新しい。一つの写本の奥付には、ヴァーチャスパティミシュラの名が書かれているが、批判版を編んだ Chakravarti と Pandeya の両者によって、否定されているという。確定的な証拠はないため、作者不明の作品とみなされている。

作品の年代決定は、かなり広い年代が設定されるのみであったが、1998 年に新たな批判本を刊行した Wezler と茂木氏は、この書が書かれた年代を仏教学者 Dignāga と Dharmakīrti の間とし、約 680–720 年の年代を提示している⁴⁹。Y の中心的な関心の 1 つは、過去の様々なサーンキヤ学者に対する多くの言及にある。これらの言及を収集し、批判的研究がなされるならば、より正確なサーンキヤ学派の前史を再構成するための研究を推進することができるであろうと指摘される⁵⁰。

ヴァーチャスパティミシュラ (Vācaspatimiśra) により著された STK は、比較的平易な

⁴³ [Keith 1975: p. 80]

⁴⁴ 作者は Śaṅkara に帰せられ、A.D.8 世紀頃に成立したと考えられている。

⁴⁵ A.D.10 世紀頃の成立。

⁴⁶ [Hulin 1973: p. 139]

⁴⁷ [Hulin 1973: p. 139]

⁴⁸ [Hulin 1973: p. 140]

⁴⁹ [Wezler et al. 1998: p. XXVIII]

⁵⁰ [Hulin 1973: p. 141]

サンスクリットで書かれ、数世紀の間、先進的で最もポピュラーなサーンキヤ思想の教科書であった。Hulin は、ヴァーチャスパティミシュラの活動年代は、確実な証左に基づいて決定されたと、長い間見なされてきたが、それは作者自身の「898年に」作品を完成させたという主張に依拠しているもので、実際はヴィクラマ歴で表されているので、A.D.841年に対応させることができるとする⁵¹。ヴァーチャスパティミシュラは、厳密に古典サーンキヤ説に基づいて註釈を行っているが、いたるところでサーンキヤの概念をヴェーダーンタのイディオムに入れ込もうとしているようである⁵²。

第3.5節 サーンキヤ学派の終焉と *Sāṃkhyasūtra*

さて、サーンキヤ学派はこのような註釈書によって隆盛してきたが、おおよそ、サーンキヤ体系の影響は、7世紀の早い時期に拒否され始めたこととされ、それでもまだ、10世紀頃までは、サーンキヤはまだ盛んであったようである。

後期サーンキヤ (*Renaissance or Later Sāṃkhya*) は、サーンキヤ思想における第3の段階であり、最後の段階でもある。その期間は1300年頃に始まり、その継続期間はおよそ3世紀に渡る。

インド思想全体の発展において、この期間は、折衷主義へ傾いた時代として特徴づけられる。このころ、ヴェーダーンタ哲学が、他の全ての哲学学派より優勢となり、他の学派は消滅の方に赴くのではなくヴェーダーンタ学派の教義に融合されていくようになった。このことは、統合的で包括的な「超越的体系」が完成されたことを意味していない。明らかに、どの学派も自身の独自性を保持しているが、有神論の枠組に合わせるために、多かれ少なかれ、自身の教義を再構成している。サーンキヤ学派も例外ではなく、教義の洗練化は進んだかもしれないが、適切には「サーンキヤ学派衰退期」と呼ばれている⁵³。

この時代の代表的な文献は、

- 『タットヴァサマーサ』 (*Tattvasamāsa*)
- 『サーンキヤ・スートラ』 (*Sāṃkhyasūtra*)

の2種である。

『タットヴァサマーサ』は、非常に短い書である。かつて、Max Müller は、非常に古い文献であると主張し、サーンキヤ学派の解説全体の根拠とした。彼の見解では、『タットヴァサマーサ』はサーンキヤ学派の原初的な形態を体現したものであり、SK よりも先行する文献と考えた。しかし、そのような仮説を指示する根拠はない。Müller に従えば、そ

⁵¹ [Hulin 1973: p. 141]

⁵² [Larson and Bhattacharya 1987: p. 32]

⁵³ [Hulin 1973: p. 152]

の文献の中に他では見られない多くの述語が登場することがこの書の成立年代の古さを表しているというのであるが、逆にそのことにより後代の作品と考えることもできる。さらにこの書は、『全哲学綱要』にも言及されておらず、『タットヴァサマーサ』の現存する註釈書は16世紀よりも遡ることはできない。『タットヴァサマーサ』は一貫した議論の道筋をたてておらず、22(あるいは25)の sūtra に分割された述語の一覧表以外の何ものでもない⁵⁴。この書は、古典サーンキヤの良く知られたカテゴリーと共に、まったく異なるカテゴリーを持ち出している。一方、この書は『シャシュティタントラ』の60の題目を列挙している。このようなことから、疑いなく新しい年代のものであるにもかかわらず、少なからず古い要素を含んでいる可能性がある⁵⁵ということがいえるだろう。

『サーンキヤ・スートラ』は、後期サーンキヤ思想を知るための最も重要で、唯一の作品とされる。伝統的にカピラに帰せられてきたのであるが、実際には後代の作品である。なぜなら、カピラの弟子と考えられているパンチャシカに言及しており、Mādhava の *Sarvadarśanasamgraha* にも引用されていないからである。しかし、1500年頃のマドスーダナ・サラスヴァティーがたびたび引用しているので、1350–1500年の間とされる⁵⁶。『サーンキヤ・スートラ』は、SK をたびたび引用して用いているとされ⁵⁷それだけでなく、ヴェーダーンタの教義の影響を色濃く受けている。しかしながら、ヴェーダ聖典とウパニシャッド文献の思想と彼らの教義を融合させるような努力は行っていない。また、解脱の方法としての教典と知識という典型的なヴェーダーンタ的問題に直面している。そして、世界の周期的な帰滅と再創造において、プルシャとプラクリティの再解釈をしている⁵⁸。このような特徴が『サーンキヤ・スートラ』には見られる。

第4節 パーンチャラートラ派

パーンチャラートラ派は、ヒンドゥー教の主要な教義の一つであるヴィシュヌ派の一派であり、そのヴィシュヌ派の中でも、バーガヴァタ派と共に最も早期に成立したものである。パーンチャラートラ派は、タントラ的なヴィシュヌ教を説き、ナーラーヤナとしてのヴィシュヌ、及び神妃ラクシュミーを崇拝し、教義上108の聖典があるとされる。この派は、MBh にも登場し、サーンキヤ思想などとも関係が深いものとして説かれている。パーンチャラートラ派自体は衰退したが、現在でも続くシュリー・ヴァイシュナヴァ派へと影響を与えるなど、後代への影響は疑いなく大きい。このようにパーンチャラートラ派

⁵⁴ [Hulin 1973: p. 152]

⁵⁵ [Hulin 1973: p. 152]

⁵⁶ [本多 1981: p. 3]

⁵⁷ [本多 1981: p. 14]

⁵⁸ [Hulin 1973: p. 155]

はインド思想において重要な位置を占める。

第4.1節 *Ahirbudhnyasaṃhitā*

AhS⁵⁹は、パーンチャラートラ派の文献の中でも、体系的に教義が説かれたものの一つである。

AhS の重要な研究として Schrader の研究があり⁶⁰、第1章から第7章までは、松原氏により英訳がなされている⁶¹。これらによって様々な検証がなされているが、宇宙論に関してはいずれも *śuddhaṣṛṣṭi* 説（「清浄なる創造」説）を中心としているため、「不浄な創造」に関しては検証が十分とは言えない。

AhS の年代について、Schrader は8世紀ごろを推定しているが、それよりももっと早期の4～5世紀頃である可能性もあるという⁶²。一方、松原氏は600年頃を推定し⁶³、さらに、Sanderson は1050年以降を、Rastelli は13世紀頃を想定している⁶⁴。SKより年代が早い可能性があるとの指摘があるが⁶⁵、単に古いものを保持しているだけの可能性もある。

AhS では、特徴的な世界創造が説かれる⁶⁶。それは、「清浄なる創造」（*śuddhaṣṛṣṭi*）と「不浄なる創造」（*śuddhetaraṣṛṣṭi*）に分類するものである。さらにそれは、内容にしたがって「不浄なる創造」を2種に分け、全部で3段階、すなわち、第1段階：「高次」または「清浄」、第2段階：「中間」または「清浄かつ不浄」、第3段階：「低次」または「不浄」に分けて解釈する⁶⁷。

その第1段階では、ヴィシュヌのシャクティが目覚めて世界創造が始まり、ラクシュミーの顕現やヴェーハ説が説かれる。次の第2段階では神話的でかつ個我の集合体が扱われ、神的エネルギーすなわちシャクティの展開が説かれる。そして、第3段階にいたって実際の現象世界の出現に至る。この第3段階の現象世界の創造説においてサーンキヤ思想の理論が用いられているのである。

⁵⁹ アヒルブドニヤとは11のルドラたちの一人であるが、この AhS では、シヴァのサットヴァ性の形態で、解脱の知識の師匠である [Schrader 1916: p. 109]。

⁶⁰ [Schrader 1916]

⁶¹ [Matsubara 1994]

⁶² [Schrader 1916: pp. 111–114]

⁶³ [Matsubara 1994: p. 27]

⁶⁴ [Rastelli 2009: p. 448]

⁶⁵ AhS 12.19–30 で言及された60の原理のリストや題目が、STK で示されたものと全く異なるという理由によってである [Hulin 1973: pp. 137–138]。

⁶⁶ AhS 第4–7章。

⁶⁷ [引田 1997: p. 56]。Schrader は、Higher or 'Pure' Creation、Intermediate Creation、Lower Primary Creation と説明している Schrader [1916]。

第 4.2 節 *Lakṣmītantra*

LT は、ヴィシュヌ派の一派であるパーンチャラートラ派の主要な文献の一つであり、およそ 9 世紀から 12 世紀の間に編纂された。この書の主要なテーマの一つはパーンチャラートラ派独自の哲学と宇宙論である。その哲学的見解は、ヴィシュヌ神を奉ずる多様な教派の早期の伝統を組み込んでいるだけでなく、様々な思想を自由に取り入れ、折衷している。そして、様々な要素を統合するものとして、ヴィシュヌ派における母なる女神ラクシュミー（ヴィシュヌ・ナーラーヤナの妃）のシャクティ（宇宙の根源力）を最高の形而上学的原理に据えているところにこの書の特徴が現れている。そのために、LT はパーンチャラートラ派のテクストの中で特別な地位を占めているのである。それにもかかわらず、LT の本格的な研究は不十分と言わざるを得ない。テクストについては、Krishnamacharya により校訂されたものが出版されている⁶⁸。本論文もこれを使用した。翻訳については、サンスクリット原典からの英訳⁶⁹が Gupta よりなされており⁷⁰、翻訳に際し、大いに助けとなった。

以下、Gupta に依りつつ⁷¹、LT の概略を示す。

成立年代は先に示したとおり、おおよその年代しか推定されておらず、さらに、この書が編纂された場所は不明で、南インドの可能性が示唆されているのみである。

LT は全 57 章からなり、主にパーンチャラートラ派の哲学と宇宙論を扱い、また *mantraśāstra*（言語学的オカルティズム）も扱う。崇拜の儀礼面については最低限度が言われていて、図像学はこの派で扱われる重要な神、Lakṣmī-Nārāyaṇa、Vyūha、Lakṣmīからの顕現体（流出体）、彼女の眷属などに対して *dhyāna*（観想）の形をとって議論されているのみである。寺院様式（建築論）や寺院崇拜（寺院で行われる儀礼）は全体的に省かれている。また、祭礼や *śrāddha-dharma*（祖先供養儀礼）、減罪儀礼も無視している。

この書が他のパーンチャラートラ派の文献と異なるところは、ヴィシュヌよりもむしろラクシュミーの崇拜を強調していることである。LT はこの点について曖昧さを許さず、徹底したラクシュミー崇拜を貫いている。

LT の最も際立った特徴はそのパーンチャラートラ派哲学の扱いである。インド思想の展開期に編纂された多くのテクストがそうであるように、このテクストも基本的に先行する聖典の思想や註釈書の見解を取り入れている。このテクストの姿勢は、最高の形而上学的原理としてシャクティを様々な要素を統合するものとして確立しようとするところに表

⁶⁸ [Krishnamacharya 1959]

⁶⁹ その他、ヒンディー語訳も存在する。

⁷⁰ [Gupta 2000]

⁷¹ [Gupta 2000: Introduction]

れている。そして、少なくともある程度の調和は、特に宇宙論の描写において、成功している。しかし、サーンキヤ思想の实在論的二元論とヴェーダーンタ学派の徹底した一元論（不二一元論学派）という2つ矛盾する思想が併記されることもあり、あらゆる観念を整合性をもって融合することに必ずしも成功しているわけではない。

このように LT は何か特定の哲学体系に従っていたということを主張することはできない。サーンキヤとヴェーダーンタという2つの重要な哲学体系を融合させるだけでなく、大乘仏教の影響もみられる。さらに、『バガヴァッド・ギーター』の影響も明らかであり、その詩節が、しばしば、そっくりそのまま引用されている。しかし、シャクティ（ラクシュミー）の至高性の擁護が LT の主要な目的であり、それ故、シャクティを崇拝する学派の中で普及している様々な概念を自由に取り入れている。

以上のように、様々な思想を融合させ、その中心にシャクティをおいたのが LT である。このシャクティは、女神信仰が盛んになると同時に、重要性も増していき、もはやこれを抜きにしてインド思想を語ることはできない。パーンチャラートラ派は、ヒンドゥー教の宇宙論の構築において重要な役割を担ってきたのであり、その派の中でシャクティ信仰を中心にした LT が成立したということは、いかにこの概念が重要であったが分かるであろう。LT はパーンチャラートラ派の中での重要な聖典というだけでなく、インド思想においても特異な文献なのである。

第 1 章

ヴェーダ聖典およびウパニシャッド 文献における世界構成原理

第 1 節 ヴェーダ聖典における世界構成原理

サーンキヤ学派の開祖はカピラとされているが、そもそものサーンキヤ思想の始まりは明らかではない。『リグ・ヴェーダ』(*Rgveda*) や『アタルヴァ・ヴェーダ』(*Atharvaveda*) で説かれる説は内容的に直接サーンキヤ説に繋がるものではないが、後のサーンキヤ説に見られる重要な述語が登場する。本節では、これらの述語について取り上げる。

第 1.1 節 *Rgveda* に登場するプルシャとタマス

まず、『リグ・ヴェーダ』¹10.90 の「プルシャ（原人）の歌」(*Puruṣa-sūkta*) と呼ばれる箇所において、プルシャの語が見られる。

プルシャは千頭・千顔・千足を有す。彼はあらゆる方面より大地を蔽いて、それよりなお十指の高さに聳え立てり。(1)

プルシャは、過去および未来にわたるこの一切（万有）なり。また不死界（神々）を支配す、食物によって成長するもの（生物界、人間）をも。(2)

彼の偉大はかくのごとし。されどプルシャはさらに強大なり。一切万物は彼の四分の一にして、四分の三は天界における不死なり。(3)

(10.90.1-3、辻直四郎訳 [辻 1970: p. 319])

¹ 紀元前 1200 年頃を中心として長い間に作られたとされる [辻 1970: p. 5]。

プルシャは、人・男としての意味で古くより用いられてきたのであるが²、ここでのプルシャは、千の頭と千の顔と千の足を持つ、大地を覆う程の巨人として描かれている。さらに、過去から未来にわたるあらゆるものであり、人や神々をも支配するものである。それでも、一切万物は彼の4分の1にしか過ぎず、残りは、天界における不死である。さらにこの後、プルシャは祭祀 (yajña) の祭供 (havis) として神々に捧げられる。この祭祀により、詩節・旋律・韻律・祭祀・諸々の動物が生まれ、体の各部分は、4 ヴァルナ・月・太陽・インドラ・アグニ・風や3つの世界などとなったという。つまり、この「プルシャ (原人) の歌」は、「巨人解体による世界創造神話の一種であるが、更にここでは、プルシャの身体の各部分 (或いは器官や機能) が、それぞれ、宇宙、自然の中に、対応するものを有するという観念が認められる」³ということである。

SK でのプルシャは精神原理であり、個々人の究極的な主体と考えられているが、MBh では、25 番目の原理として最高神と同一されている箇所があり⁴、この原人としてのプルシャのイメージが引き継がれていると考えられる。

さらに、『リグ・ヴェーダ』10.129 の「宇宙開闢の歌」(Nāsadāsītya) には、タマスの語が現れる。この「宇宙開闢の歌」は、リグ・ヴェーダの最高峰を示すものであり、神話の要素を除外し、人格化された創造神の要素を脱し、宇宙の本源を絶対的の唯一物に帰しているとされる⁵。

太初において、暗黒は暗黒に蔽われたりき。この一切は標識なき水波なりき。空虚に蔽われ発現しつつあるもの、かの唯一物は熱の力により出生せり (生命の開始)。

(3)

最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意 (思考力) の第一の種子なりき。詩人ら (靈感ある聖仙たち) は熟慮して心に求め、有の親縁 (起原) を無に発見せり。(4)

(10.129.3-4、辻直四郎訳 [辻 1970: p. 323])

ここでは、まず太初は暗黒 (tamas) であり、水 (salila) のみがあった。そこに唯一者が熱 (tapas) の力によって出生したというのである。さらに、唯一物 (tad ekam) に意欲 (kāma) が生じ、それは意 (manas) となったというのである。そしてこれは、有の起原が無にあることを説いているのである。後の文献に見られる開闢説と比較して考えれば、本多氏が指摘する通り、次のラインが考えられるであろう⁶。

² [村上 1978: p. 23]

³ [村上 1978: p. 24]

⁴ MBh 12.291;326;327 などに説かれる。

⁵ [辻 1970: p. 322]

⁶ 辻氏は、「ただし展開の順序は正確に述べられていず、厳格な論理で律することができないため、見解の相違が起こるのはやむを得ない」とし、「唯一物 (と原水) —意 (思考力) —意欲 (展開への欲求) —熱

(無)—暗黒 *tamas*—水 *salila*—熱 *tapas*—唯一者 *tad ekam*—意欲 *kāma*—意 *manas*—現象界⁷

このようにタマスは大初の暗黒を意味し、それより世界が展開するというのである⁸。しかし、ここでのタマスの意味と、3種のグナにおけるタマスの意味が異なることに注意しなければならない。タマスは原初の暗黒として説かれており、3種のグナとしての意味は見いだせないのである。

第1.2節 *Atharvaveda* における3種のグナ

『アタルヴァ・ヴェーダ』⁹の「スカンバ讃歌」中には、3種のグナの萌芽が見られる。

九門（人体の孔穴）を有せる蓮華（心臓）は、三性（*guṇa*）に蔽われたり。その中にある神的顕現（*yakṣma* アートマン）は、ブラフマンを知る者ぞ知れ。

(10.8.43、辻直四郎訳 [辻 1979: p. 216])

ここで説かれる「三性」は、後世の哲学における3種のグナの前駆をなすものと考えられている¹⁰。Buitenen は、この箇所に関して、「3つのグナがサットヴァ・ラジャス・タマスの前身を表しているということを疑う理由はない。」と説明するが、しかし、「それらが実際にサットヴァ、ラジャス、タマスであることを示す証拠は何もない」としている¹¹。

いずれにせよ、この3つのグナの中身がどのようなものか説かれていないため、性質を3つで一組と考える伝統が、かなり古い段階から存在したと考えるに留めたい。

第2節 ウパニシャッド文献におけるサーンキヤ思想の萌芽

ウパニシャッド文献 (*Upaniṣad*) において、サーンキヤ思想と関連する説が見られるものとしては、以下のものが重要である。

1. 初期散文ウパニシャッド

- 『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』 (*Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad*)

カ—現象界」というラインを想定した [辻 1970: p. 322]。

⁷ [本多 1980: p. 4]

⁸ 大初の暗黒としてのタマスから世界が展開する説は、MaitUp 5.2 にも説かれる。詳しくは本論文の第1章 第2.5節を参照。

⁹ 紀元前 1000 年頃中心に成立したとされる [辻 1979: p. 251]。

¹⁰ 辻氏は「おそらく肉体・物器界を構成する3要素。後世の哲学における3種のグナ、善性・動性・暗性の前駆か？」と説明する [辻 1979: p. 217]。

¹¹ [van Buitenen 1957b: pp. 106–107]

- 『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』 (*Chāndogya Upaniṣad*)
- 2. 中期韻文ウパニシャッド
 - 『カータカ・ウパニシャッド』 (*Kāthaka Upaniṣad*)
 - 『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』 (*Śvetāśvatara Upaniṣad*)
- 3. 後期散文ウパニシャッド
 - 『マイトラヤニーヤ・ウパニシャッド』 (*Maitrāyaṇīya Upaniṣad*)

本節では、ウパニシャッド文献において、サーンキヤ思想に関連があると考えられる箇所をいくつか取り上げ、検証する。

第2.1節 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* における創造説

BṛhadUp 1.2.1–4¹²には、創造説が説かれるが、その始まりは次のように説かれる。

naiveha kiṃcanāgra āsīt. mṛtyunaivedam āvṛtam āsīt, aśanāyayā, aśanāyā hi mṛtyuḥ;
tan mano 'kuruta, ātmanvī syām iti. ... *BṛhadUp* 1.2.1

最初にここには何もなかった。これ（世界）は、まさに死によって覆われていた。すなわち、飢えによってである。なぜなら、死は飢え（＝餓死）であるから。彼に意欲（マナス）が起こった。「私は私自身かも知れない」と。（以下省略）

世界は、何もないところから始まる。Buitenen は、「死は終わりではなく始まり」であり、この何もないということは「もうないではなくまだない」と説明する¹³。さらに、続けて、このあとの展開を3種類に分けて分析している¹⁴。以下では、その論を簡潔に紹介する。

Account I (*BṛhadUp* 1.2.1–2)

「彼は、詠唱することに取りかかった。彼の詠唱により、水は存在するために来た。（彼は言った。）『私がちょうど詠唱したとき、kam（水）が来た。』これは arka（歌、太陽）の神秘的な意味である。つまり、arka の神秘的な意味を知っている彼（死）に、kam（水）が生じた。arka（歌）は水と等しい。水面のアシであったもの、それは、丸く固まって、大地になった。その上で、彼は彼自身を消耗させた。彼の彼自身を消耗させ、熱する行為により、本質である tejas が現れる、それが火である。」

¹² *BṛhadUp* は、*ChandUp* など共にウパニシャッド文献の最古層をなし、仏教成立以前に著されたとされる [Radhakrishnan 1953: p. 22]。この書は『白ヤジュル・ヴェーダ』に所属する『シャタパタ・ブラーフマナ』の終わりの部分を形成している。3つのセクション (kāṇḍa) から成り、6つのアディヤーヤ (adhiyāya) に分かれる。

¹³ [van Buitenen 1957b: p. 90]

¹⁴ [van Buitenen 1957b: pp. 90–91]

ここでは、雨乞いと関連付けられている。餓死が雨を作るまで増え続け、そして、彼の呪文から、雨が降ったということである。呪文 (arka) が働き雨になるので、呪文は雨である。そして、雨は川を増大させ、下流へ運ばれたアシの浮遊物は水に浮く大地を形作る。また、この大地の上で、創造者は、自身を疲れさせ、そして、火を生み出すのである。これは、3つの季節を連想させるものである。雨は新しい命を作ることが可能であり、雨がなければ餓死がある。それ故、餓死は雨を作ることによって創造を始め、作物を生み出し、命を維持するのである。

Account II (BṛhadUp 1.2.3)

創造者は自身を、彼自身、太陽、風の3つに分割する。「この prāṇa は3つにされる」という同じ箇所と同様の3分割もなされた。そこでは、ātman = prāṇa であり、「一つの生物を作るもの」である。また、原人 (Cosmic Person) が彼の体の異なるパーツで世界を構成するという、異なる創造神話、3分割のパターンの中に埋め込まれているが、整合性にかける。そして、その終わりで、Account I へのリターンがある。「彼は水の中で安定している (堅固にある)」と説かれる。

Account III (BṛhadUp 1.2.4)

「私は私自身かも知れない」と考え、さらに続けて、「私自身に対して、もう一つ (2番目) の自身があれ」と彼 (死) は望んだ。この意欲を通じて、彼は Vāc と性交し、そして、彼の精液は年になった。彼は1年もの間それを生んだ。その長い1年の後で、彼はそれを流出した。それが生まれたとき、彼はそれに向かって彼の口を開けた。そして、彼は bhāṇ という音を発し、その音は Vāc となった。そして彼は「私が私の意志をそれに使った (意志的に考えた) なら、私は少しの食物を作るだろう。」と考えた。Vāc と交わって彼はあらゆるものを生んだが、彼が創造したものは何でも、彼は飲み込み始めた。いわば、創造者は、食物を取り、そしてそれによって、創造の命をスタートさせたということである。

これらは、3つの過程による、食物の創造である。そして、インドの人々の生命の現実を現実的に描写したものである。つまり、夏の荒々しいきざし=餓死から、肥沃にする雨期=雨を通過して、収穫期=大地へという3つの段階である。以上のように、Buitenen は説明する。そして、この3段階が次節で述べる ChāndUp の3つの形態に繋がるものであるという。

第2.2節 *Chāndogya Upaniṣad* における3つの形態およびアハンカーラ

ChāndUp 6¹⁵には、3段階がより顕著に現れている。

まず、最初に有があり、そこから創造が始まる。

tad aikṣata, bahu syām prajāyeyeti, tat tejo 'srjata: tat teja aikṣata, bahu syām prajāyeyeti, tad apo 'srjata, tasmād yatra kva ca śocati svedate vā puruṣaḥ, tejasa eva tad adhy āpo jāyante. ChāndUp 6.2.3

それは考えた。「私は多くありたい、私は生み出したい」と。それは熱 (tejas) を流出した。その熱は考えた。「わたしは多くありたい、わたしは生み出したい」と。それは水を流出した。それ故、人は泣くか汗をかくときはいつでも、まさに熱からその水が生まれる。

tā āpa aikṣanta, bahvyaḥ syāma, prajāyemahīti, tā annam asrjanta, tasmād yatra kva ca varṣati, tad eva bhūyiṣṭham annam bhavati, adbhya eva tad adhy annādyam jāyate. ChāndUp 6.2.4

その水は考えた。「私は多くありたい、私は生み出したい」と。それは食物を流出した。それ故、雨が降る所はどこでも、食物は非常に多くなる。まさに水からその食物が生まれる。

有から熱 (tejas) が生まれ、熱から水 (āpas) が生まれ、水から食物 (annam) が生まれるのである。これら熱 (tejas)・水 (āpas)・食物 (annam) は、3つの形態 (rūpa) と言われ、それぞれ、夏期・雨期・収穫期に対応させることができる¹⁶。さらにこれらは、3色にも対応している。

yad agne rohitam rūpam tejasas tad rūpam, yac chuklam tad apām, yat kṛṣṇam tad annasya apāgād agner agnitvam, vācārambhaṇam vikāro nāma-dheyam, trīṇi rūpāṇīty eva satyam. ChāndUp 6.4.1

火における赤の形態が、熱の形態である。白の〔形態〕が、水の〔形態〕である。黒の〔形態〕が、食物の〔形態〕である。火から火性が消えた。変異は、言葉による把握であり、命名である。3つの形態というもののみが真実である。

このように、熱は赤色、水は白色、食物は黒色とされる。この色の順番で、ŚvetUp にも現れる。

¹⁵ ChāndUp は BṛhadUp と並び、ウパニシャッド文献の最古層に位置する。『サーマ・ヴェーダ』に所属し、全部で8つの章 (adhyāya) から構成されている。

¹⁶ [van Buitenen 1957b: pp. 91–92]

この3つの形態が3種のグナのプロトタイプとされるが、3つの形態が最初から宇宙発生の起源と関連付けられていたのと異なり、3種のグナはその関連性は希薄であるという¹⁷。

さて、サーンキヤ思想において重要な概念であるアハンカーラは、この ChāndUp においてすでに説かれている。

sa evādhastāt, sa upariṣṭāt, sa paścāt, sa purastāt, sa dakṣiṇataḥ, sa uttārataḥ, sa evedaṃ sarvam iti, athāto 'haṃkārādeśa eva, aham evādhastāt, aham upariṣṭāt, aham paścāt, aham purastāt, ahaṃ dakṣiṇataḥ, aham uttārataḥ, aham evedaṃ sarvam iti. ChUp. 7. 25. 1

実に、それは下にある、それは上にある、それは西（後）にある、それは東（前）にある、それは南（右）にある、それは北（左）にある。まさにそれはこの一切であるという。さて、次に、アハンカーラについての教示がある。つまり、私は下にいる、私は上にいる、私は西（後ろ）にいる、私は東（前）にいる、私は南（右）にいる、私は北（左）にいる。まさに私はこの一切であるという。

以上のように、アハンカーラが自己に関連させるものとして登場する。

第2.3節 *Kāthaka Upaniṣad* における原理展開

KathUp¹⁸は、サーンキヤに関連する説がまとまった形で説かれている最古の文献と考えられている¹⁹。この KathUp 1.3.10–11 には、サーンキヤに繋がるであろう原理の展開が説かれている。

indriyebhyaḥ parā hy arthā, arthebhyaś ca param manaḥ,

¹⁷ [van Buitenen 1957b: pp. 92–93]

さらに Buitenen は3つの形態と3種のグナの関係について次のように論じている。ラジャスは本来「中空間」を意味し、雨を降らせ、川を増大させる雨雲であるから、水の領域である。そのため、水 (āpas) と対応する。タマスと食物 (annam) は直接には結びつかない。本来、食物 (annam) と黒色は関係がないからである。ポピュラーだった赤・白・黒という色の組み合わせに、3つの形態を当てはめた時、熱 (tejas) は赤色、水 (āpas) は白色は容易に結び付けられる。そこで、残りの黒色を単に食物 (annam) に当てはめただけである。一方、ラジャスは白色ではなく、執着 (rāga) という意味から赤色と結び付けられるようになった。そして、一般的に光と関係している、抽象的なグナは、白として言われるようになったというのである [van Buitenen 1957b: pp. 93–94]。

¹⁸ この書は、「ナチケートス物語」という本来的部分 (ヴァリー、1–2) と、後世の追加である (ヴァリー、3–6) の2編からなるとされる [湯田 2000: pp. 439–440]。

¹⁹ 中村氏は、KathUp がサーンキヤ説がまとまった形で記載されている最古の文献であり、それ以前のウパニシャッドにはサーンキヤ説が登場しないという Garbe の説に基づき、このウパニシャッドの年代設定が、学派成立に関して重要な意味を持つと述べる。そして、おそらくは、その成立は釈尊の生存期の周辺と結論づける [中村 1982: p. 109]。

manasaś ca parā buddhir buddher ātmā mahān paraḥ. KathUp 1.3.10

実に、諸々のインドリヤを超えて諸々の対象があり、そして、諸々の対象を超えてマナスがある。また、マナスを超えてブッディがあり、さらに、ブッディを超えてマハット・アートマン（大なるアートマン）がある。

mahataḥ param avyaktam, avyaktāt puruṣaḥ paraḥ

puruṣān na paraṃ kiñcit: sā kāṣṭhā, sā parā gatiḥ. KathUp 1.3.11

マハット（＝マハット・アートマン）を超えてアヴィヤクタ（未展開のもの）があり、アヴィヤクタ（未展開のもの）を超えてプルシャがある。プルシャを超えるものは何もない。それは到達点であり、それは最高の帰趨である。

これらをまとめると、次の展開が考えられるであろう²⁰。

諸々のインドリヤ (indriya、感覚器官) → 諸々の対象 (artha) → マナス (manas) →
ブッディ (buddhi) → マハット・アートマン (ātmā mahān、大なるアートマン) =
マハット (mahat) → 未顕現 (avyakta) → プルシャ (puruṣa)

このように、原理展開にサーンキヤの萌芽が見られるが、明確な二元論を説いてはいない。一元論的に傾斜しているが、高次の存在として未顕現とプルシャをたてるのはサーンキヤ説に繋がるものと考えてよいであろう。また、マハットはSKにおいてブッディの異名とされるが、ここにおいては、別の原理として考えられている²¹。また、アハンカーラが説かれていないことも特徴的である。アハンカーラが登場しないサーンキヤ説はMBh第187章などでも見られ、アハンカーラが概念が遅れて体系に入ってきたことはおおよそ認められるところである²²。しかし、上述した通りChāndUpにはすでにアハンカーラの述語が登場し、後に取り上げるŚvetUpやMaitUpではブッディやマナスなどと関連付けられて説かれることから、アハンカーラは概念そのものが新しいというわけではない。

第2.4節 Śvetāśvatara Upaniṣadにおける二元論の萌芽と3つの色

ŚvetUp²³には、二元論の萌芽が見られる。

²⁰ [中村 1982: pp. 113–114]

²¹ 第6章第1.3節を参照。

²² [中村 1982: p. 114]

²³ ŚvetUpは伝統的にヤジュル・ヴェーダ学派に所属するとされ、サーンキヤ・ヨーガの影響やルドラ・シヴァの崇拜が説かれる[湯田 2000: p. 479]。また、ŚvetUp 5.2にはカピラ (Kapila) が登場し、このウパニシャッド文献が彼の名が現れる最初の文献と考えられている[本多 1980: p. 20]。ここでのカピラはサーンキヤ説の創始者であるカピラと考えられているが[中村 1982: p. 125]、彼は神話的人物とみなされている。

samyuktam etat kṣaram akṣaram ca vyaktāvyaktam bharate viśvam īśaḥ.

anīśas cātmā badhyate bhoktr̥bhāvāt jñātvā devam mucyate sarva-pāśaiḥ. ŚvetUp 1.8
滅するものと滅しないもの、そして顕現と未顕現に結びつけられたこの一切を主宰神（īśa）は支える。そして、自在神がいなければアートマンは束縛される。〔それは〕享受者という存在であるから。神を認識すれば、一切の束縛から解放される。

滅するものと滅しないもの、顕現と未顕現があり、これらすべてを主宰神（īśa）が支配するのである。そして、神を認識することにより、一切の束縛から解放されるのである。

さらに、次のようにも説かれる。

kṣaram pradhānam amṛtākṣaram haraḥ kṣarātmānāv īśate deva ekaḥ

tasyābhidhyānād yojanāt tattva-bhāvād bhūyaś cānte viśvamāyā-nivṛtṭiḥ. ŚvetUp 1.10
滅するものはプラダーナであり、不死であり滅しないものがハラ神である。唯一の神は、滅するものとアートマンを支配する。彼（神）に関する瞑想により、〔神との〕結びつきにより、さらに、〔神の〕真理（真実の状態）に成ることにより、終わりの時に、一切のマーヤー（幻）は停止する。

プラダーナは滅し、一方ハラ神は不滅である。この唯一の神が、滅するものとアートマンを支配している。さらに、神への瞑想や神との結びつきによって、マーヤー（幻）を停止することができる。

このように、滅するものと滅しないもの、顕現と未顕現という2つの世界の対立が明確に意識されている。ただし、それを超越した高次の存在として自在神（īśa）が現れるところにウパニシャッド的一元論の性格が見られる²⁴。

上述した赤、白、黒という3つの色がここでも説かれるが、それは次のごとくである。

ajām ekām lohita-śukla-kṛṣṇām bahvīḥ prajāḥ sṛjamānām sarūpāḥ

ajo hy eko juṣamāno ’nuśete jahāty enām bhukta-bhogām ajo ’nyaḥ. ŚvetUp 4.5

一つのいまだ生まれていないもの（＝雄山羊）は、赤・白・黒の同じ色をもつ多くの子孫を生みつつある、一つのいまだ生まれぬもの（＝雌山羊）と楽しみつつ、〔彼女の〕そばに伏している。他のいまだ生まれていないもの（＝雄山羊）は、享樂された彼女を捨て去る。

ここで“aja”は「いまだ生まれていないもの」および「雄山羊」の両義を持ち、プルシャを意味すると考えられる。同様に、“ajā”は「いまだ生まれぬもの」および「雌山羊」の両義を持ち、プラクリティを意味すると考えられる。赤・白・黒の3色はサットヴァ・ラ

²⁴ [中村 1982: p. 122]

ジャス・タマスの3種のグナを指すとも、火 (tejas)・水 (āpas)・地 (annam) を指すとも考えられる²⁵。ただし、注意しなければならないのは、MBh 12.291.45 では、この3色が白・赤・黒の順番で登場することである²⁶。そのため、順番を考慮に入れると後者を指すほうが適切に思われる。同色の子孫を生むという比喩は、プラクリティより生じるすべての原理も3種のグナよりなることをあらわすとも考えられる。また、この雌山羊と楽しんでいる雄山羊は、輪廻しつつあるプルシャを指し、一方彼女を捨て去った他の雄山羊とは、解脱したプルシャを指すという解釈もある²⁷。

ヴァーチャスパティミシュラによる SK の註釈書である STK の帰敬偈では、この詩節の字句を少し変更するのみで引用している。

ajām ekām lohitaśuklakṛṣṇām bahvīḥ prajāḥ srjamānām namāmaḥ /
ajā ye tāṃ juṣamānām bhajante jahaty enām bhuktabhogām numastān // 1

多くの子孫を生みつつある一つの赤・白・黒のいまだ生まれていないもの (= 雌山羊) を我々は敬礼せん。いまだ生まれていないものたち (= 雄山羊たち) は、楽しみつつある彼女 (雌山羊) を愛樂し、[すでに] 享樂された彼女 (雌山羊) を捨て去る雄山羊たちを我々は賞賛せん²⁸。

このように、3色の説は STK にも引き継がれているが、こちらは明白に3種のグナのことを表している。ここではむしろ、ウパニシャッドに結びつけることによって、3種のグナの正当性を補填するためか、あるいはヴァーチャスパティミシュラの意図であるヴェーダーンタへの結びつけのために、この語句を用いたのであろう。

また、この書においてもアハンカーラは登場し、それは次のように説かれる。

aṅguṣṭhamātro ravi-tulya-rūpas saṃkalpāhaṃkāra-samanvito yaḥ
buddher guṇenātma-guṇena caiva āraṅgra-mātro hy aparō 'pi dr̥ṣṭaḥ. ŚvetUp 5.8

親指の大きさであり、太陽と等しい形態であり、思惟 (saṃkalpa) と自我意識 (ahaṃkāra) を備えているもの (彼) は、しかしながら、実に、ブッディのグナによって、また、アートマンのグナによって、突き錐の先端の大きさであるけれども、認識される。

このように、アハンカーラは、アートマンが備えているものとして、説かれている。“saṃkalpa” は、古典サーンキヤではマナスの機能であり、ブッディも説かれていることから、古典サーンキヤにおける心的作用の器官 (ブッディ・アハンカーラ・マナス) へとつ

²⁵ [Radhakrishnan 1953: p. 732]

²⁶ 第3章 第3.4節を参照。

²⁷ [本多 1980: p. 19]

²⁸ ここで雄山羊が複数なのは、プルシャ複数説を反映したものである。

ながる述語の関連が見られる。

さらに、サーンキヤとヨーガの名称も登場する。

... tat kāraṇaṃ sām̐khya-yogādhigamyam̐ jñātvā devam̐ mucyate sarva-pāsaiḥ. ŚvetUp
6.13

その原因が、サーンキヤとヨーガによって到達されるべきものである神と知って、
一切の束縛から解放される。

このように、サーンキヤとヨーガの名が登場し、サーンキヤとヨーガが解脱へ導く方法
の一つであることがうかがえる。このことから、ŚvetUp の作者がサーンキヤ・ヨーガに
よってこの書を著したとまでは言えないが、サーンキヤと呼ばれる思想がこの書が著され
た時代にある程度広まっていたと考えることができる²⁹。

第 2.5 節 Maitrāyaṇīya Upaniṣad における 3 種のグナと心的器官

MaitUp³⁰は、ウパニシャッド文献の中で、サーンキヤ思想を最も強く反映していると考え
られている³¹。

MaitUp 5.2 では、サットヴァ、ラジャス、タマスについて以下のように明確に述べられて
いる。

tamo vā idam̐ agra āsīd̐ ekam̐, tat̐ pare syāt̐ tat̐ tat̐ pareṇeritam̐ viṣamatvam̐ prayāti,
etad-rūpaṃ vai rajas, tad̐ rajaḥ̐ khalv̐ īritam̐ viṣamatvam̐ prayāti, etad̐ vai sattvasya
rūpaṃ, tat̐ sattvam̐ everitam̐ rasaḥ̐ samprāsavat so 'ṃśo 'yaṃ yas cetāmātraḥ̐
pratipuruṣaḥ̐ kṣetrajñāḥ̐ samkalpādhyavasāyābhimāna-līṅgaḥ̐ prajāpatir̐ viśveti, asya
prāg-uktā etās tanavaḥ̐, atha yo ha khalu vā vāsya tāmaso 'ṃśo 'sau sa brahmacāriṇo
yo 'yaṃ rudro 'tha yo ha khalu vā vāsya rājaso 'ṃśo 'sau sa brahmacāriṇo yo 'yam
brahmātha yo ha khalu vā vāsya sāttviko 'ṃśo 'sau sa brahmacāriṇo yo 'yaṃ viṣuḥ̐;
sa vā eṣa ekas tridhā bhūto 'ṣṭadhaikādaśadhā dvādaśadhā 'parimitadhā vodbhūta,
udbhūtadvād̐ bhūtam̐ bhūteṣu carati praviṣṭaḥ̐, sa bhūtānām̐ adhipatir̐ babhūva ity asā
ātman̐tar-bahiś cāntar-bahiś ca. MaitUp 5.2

実にここ（世界）には最初、タマスのみがあった。それは最高処にあるかもしれな
い。それは最高のものに促されて、不均衡の状態となる。実にこの形態はラジャス
である。まさにそのラジャスは、促されて不均衡の状態となる。これは実にサット

²⁹ [本多 1980: p. 20]

³⁰ MaitUp は、湯田氏によると、成立は紀元後 200 年頃とされ、第 1-5 章が最初に成立し、第 6-7 章が後に
追加された部分と考えられているという [湯田 2000: p. 553]。

³¹ [本多 1980: p. 21]

ヴァの形態である。まさにそのサットヴァが促されて、精髓 (rasa) が流れ出す。その部分は各個人が有する思のみ (cetāmātra) のものであり、クシェートラジュニヤ (kṣetrajña、知田者) であり、意図、決智、自意識、を特徴として持つ、ヴィシュヴァ (一切) と呼ばれるプラジャーパティである。彼の諸々の形態はすでに説かれた。さらに実に彼のタマス性の部分は、梵行の学生達よ、このルドラである。さらに、実に彼のラジャス性の部分は、梵行の学生達よ、このブラフマーである。さらに実にサットヴァ性の部分は、梵行の学生達よ。このヴィシュヌである。実に、この一者は3様になり、8様になり、11様、12様、〔さらには〕無限の様態に生じた。生じた者であるが故に、それは生類であり、生類たちの中に入って動く、彼は生き物たちの支配者となった。それ故、そのものは内部にあると同時に外部にある自己であり、内部と外部とに存在する。

この文章では、サットヴァがヴィシュヌに、ラジャスがブラフマーに、シヴァがタマスに結びつけられ、3種のグナが世界創造に関与し、3種の均衡が破れることによって世界が成立する様子が読み取れる。サーンキヤの思想と直接関わるものとは言えないが、サットヴァ、ラジャス、タマスの3つが1つのセットとして考えられている点に、後期の思想との架け橋になるのではないかと考えられる³²。しかし、この3つのグナの機能に目を向ければ、むしろそれぞれに独立的なものと考えられる。特に、サットヴァは、クシェートラジュニヤやヴィシュヌと同一視され、他の2つのグナよりも高次の存在であることが想起される。

SK 71 に付されたマータラの註釈では、この MaitUp の一文を次のよう解釈する。

‘tama eva khalv idam agra āsīt.’ (MaitUp 5.2) tasmimś tamasi kṣetrajño ’bhivartate prathamam. tama iti ucyate prakṛtiḥ, prusaḥ kṣetrajñaḥ. 実にここ (世界) には、暗黒 (タマス) のみが最初にあった。その暗黒 (タマス) において、始めに、クシェートラジュニヤ (知田) が現れた。暗黒 (タマス) はプラクリティ (根本原質) と言われ、クシェートラジュニヤはプルシャ (精神原理) と言われる。

原初の暗黒としてのタマスは、根本原質プラクリティと同一視され、クシェートラジュニヤもプルシャとされているのである。

そして、心的器官として次のものがあげられる。

athānyatrāpy uktam, svanavaty eṣāsyah tanuḥ yā aum ity strī-pun-napuṃsaketi līngavatī, eṣā ’thāgnir vāyur āditya iti bhāsvatī, eṣā atha brahma rudro viṣṇur ity adhipativatī, eṣā ’tha gārhapatyo dakṣiṇāgnir āhavanīyā iti mukhavatī, eṣā ’tha ṛg

³² [本多 1980: p. 23]

yajussāmeti vijñānavatī, eṣā bhūr bhuvaḥ svar iti lokavatī, eṣātha bhūtam bhavyam bhavisyad iti kālavatī, eṣātha prāṇo 'gniḥ sūrya iti pratāpavatī, eṣā 'thānnam āpas candramā ity āpyāyanavatī, eṣā 'tha buddhir mano 'haṃkāra ity cetanavatī, eṣā 'tha prāṇo 'pāno vyāna iti prāṇavatī, eṣety ata aum ity uktenaitāḥ prastutā arcitā arpitā bhavantīti evaṃ hy āhaitad vai satyakāma parañ cāparañ ca brahma yad aum ity etad akṣaram iti. MaitUp 6.5

さて、他の所でも言われている。「このオームは、これ（アートマン）の音の形態（音を有する身体）であり、女性・男性・中性というものは（アートマンの）性〔の形態〕である。そして、火、風、太陽というこれらは（アートマンの）輝き〔の形態〕である。そして、ブラフマー神、ルドラ神、ヴィシュヌ神というこれらは（アートマンの）支配権〔の形態〕である。そして、ガールハパティヤ、ダクシナーグニ、アーハヴァニーヤというこれら〔の祭火〕は（アートマンの）口〔の形態〕である。そして、リチュ、ヤジュス、サーマンというこれら〔3つのヴェーダ〕は（アートマンの）知識〔の形態〕である。ブル（大地）、ブヴァハ（中空）、スヴァハ（天空）というこれらは（アートマンの）世界〔の形態〕である。そして、過去、現在、未来というこれらは（アートマンの）時間〔の形態〕である。そして、プラーナ、火、太陽というこれらは（アートマンの）熱〔の形態〕である。そして、食物、水、月というこれらは（アートマンの）増加〔の形態〕である。そして、ブッディ、マナス、アハンカーラというこれらは（アートマンの）心〔の形態〕である。そして、プラーナ、アパーナ、ヴィヤーナというこれらは（アートマンの）息〔の形態〕である。」という。それ故、オームと言うことによって、これら〔の形態〕は、賞賛され、尊敬され、言説された³³状態になるという。実に、〔次の〕ように言う。「サティヤカーマよ。実に、このより優れ、さらにより劣っているブラフマンであるものが、オームというこの音声である」と。

ここでは、ブッディ、マナス、アハンカーラが、アートマンの心の形態として現れる。つまり、古典サーンキヤと同じように、心的器官としてあげられているのである。

心的機能と現象世界の創造を関連付けるサーンキヤ思想の変遷において、アハンカーラは、その位置づけが思想史的展開の中で大きく変化していったものである。SK や MBh においては、創造的機能を有し、宇宙論に組み込まれているが、ウパニシャッド文献中に見られるアハンカーラの用例は、いずれも心的機能と関連して説かれているのみである。しかし、アハンカーラという言葉は出てこないが、自己に関連付ける器官が創造説に組み

³³ “arpitā” を、Radhakrishnan は “ascribed” と訳し [Radhakrishnan 1953: p. 819]、湯田氏は「堅固にされる」と訳す [湯田 2000: p. 575]。

込まれているケースは、BrhadUp に遡れる³⁴。

³⁴ Buitenen は、ウパニシャッド文献における自己と世界創造の対応について詳細に検証している。『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』においてはアハンカーラに相当するものが創造者あるいは創造そのものと同一視されているという [van Buitenen 1957a: pp. 20–22]。

第 2 章

Mahābhārata における世界構成 原理

第 1 節 Mokṣadharmā-Parvan 第 187 章および第 239–241 章におけるサーンキヤ古説

第 187 章と第 239–240 章¹は、類似点がいくつも見られ、同じテキストから生まれた別バージョンと考えられている²。そして、「モークシャダルマ編」におけるサーンキヤ思想の最も基本的なテキストとして重要視されてきた³。

第 1.1 節 第 187 章における原理展開

まず、第 187 章における原理展開について見ていく。冒頭に次のように説かれる。

adhyātmaṃ nāma yad idaṃ puruṣasyeha cintyate /

yad adhyātmaṃ yataś caitat tan me brūhi pitāmaha // MBh 12.187.1

内なるアートマン (adhyātma) と呼ばれるもの、これがこの世において人 (puruṣa) のものとして考えられているが、その内なるアートマンとはどのようなもので、それは何から〔生じる〕ものか、それを私に語れ。祖父 (ピターマハ) よ。

内なるアートマンを主題にしているのである。そして、この内なるアートマンは次のように考えられている。

¹ Yudhiṣṭhira と Bhīṣma の対話。「内なるアートマン」 (adhyātma) を説くことを目的としている。

² Frauwallner は「これらのバージョンについて、一方からの差異が大きいため、モークシャダルマのコレクションに取り入れられる前に、長い間分離して存在してきたという明瞭な印象を与える」としている [Frauwallner 1973: p. 227]。

³ [van Buitenen 1956: p. 153]

mahānadīm hi pārājñas tapyate na taran yathā /

evam ye vidur adhyātmaṃ kaivalyam jñānam uttamam // MBh 12.187.53

実に、対岸を知る者が、大河を渡りつつも、苦しめられることはないように、同様に、内なるアートマンを、独存であり、最高の知であると知る者たちは〔苦しめられない〕。

すなわち、内なるアートマンは最高の知であり、SK におけるプルシャのように独立に存在し、これを正しく知ることにより解脱できるというのである。すなわち、ここでは人間の最高の本質として内なるアートマンが考えられているのである。この語はおそらく中性名詞であり、一元論を意図している可能性もある。

一方、現象世界の展開は次のように考えられている。

pr̥thivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /

mahābhūtāni bhūtānām sarveṣāṃ prabhavāpyayau // MBh 12.187.4

地 (pr̥thivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、そして 5 番目の火 (jyotiś)、〔これらの〕粗大元素は全ての存在物 (万物) が生成し帰滅するところである。

mahābhūtāni pañcaiva sarvabhūteṣu bhūtakṛt /

akarot teṣu vaiṣamyam tat tu jīvo 'nupaśyati // MBh 12.187.7

存在物を創造する者はあらゆる存在物 (万物) における 5 粗大元素のみを〔創り〕、〔そして〕それら (創造物) における多様なものを創った。一方、ジーヴァ (個我) はそれを観照する。

以上のように、地、風、虚空、水、火という 5 つの粗大元素に基づき、世界は転変し、万物を創造する源となると考えられている。これらは世界を多様化するものでもあり、ウパニシャッドの説を継承したものと考えられている⁴。全ては 5 粗大元素から成るのであり、帰滅の際に消えて無くなるのではなく、5 粗大元素の状態に戻るのである。

粗大元素とは別の原理が次のように説かれる。

mahābhūtāni pañcaiva ṣaṣṭham tu mana ucyate // MBh 12.187.10cd

粗大元素は〔これら〕5 つのみであり、一方、第 6 がマナスと言われている。

indriyāṇi manaś caiva vijñānāny asya bhārata /

saptamī buddhir ity āhuḥ kṣetrajñah punar aṣṭamaḥ // MBh 12.187.11

インドリヤ (感覚器官) とマナス (思考器官、意) がこの認識するもの (vijñāna = 認識器官) である。バラタ族の者よ。ブッディが第 7、さらにクシェートラジュ

⁴ [中村 1982: p. 159]

ニヤ（知田者）が第8と言われている。

マナスを6番目、ブッディを7番目、クシェートラジュニヤを8番目の原理と考え、アハンカーラが説かれていない。クシェートラジュニヤとは、“kṣetra”（田、土地）＝物質要素を“jñā（知る）者”という意味で、SKでのプルシャに該当するものである。マナス、ブッディ、クシェートラジュニヤと5粗大元素の関係が明確ではないため、原理の順列が明らかではない。

また、これら3つの器官の機能として次のように説かれる。

cakṣur ālokanāyaiva saṁśayaṁ kurute manaḥ /

buddhir adhyavasāyāya kṣetraññāḥ sākṣivat sthitaḥ // MBh 12.187.12

まさに目は見るためにあり、マナスは疑いをなす。ブッディは決定するためにあり、クシェートラジュニヤ（知田者）は証人（確認者）のように存在する。

この中で、ブッディはSKと同じ機能を持ち、クシェートラジュニヤ（知田者）もまた、SKのプルシャと同様の存在であることが分かる。

以上の中で、内なるアートマンとは別に、自己の本質を示す言葉として、ジーヴァ、内なるアートマン、ブータートマン、そしてクシェートラジュニヤが見出せる。おそらく、ジーヴァとクシェートラジュニヤは観照するという性質を持つもので、類似したものと思われる。自己の本質の個人主体がジーヴァで、創造に関連したものがクシェートラジュニヤであるとも考えられるかもしれない。そして、存在物を創造する者とはブータートマンのことと考えられる。それは、次の偈から明らかである。

prasārya ca yathāṅgāni kūrmaḥ saṁharate punaḥ /

tadvad bhūtāni bhūtātmā sṛṣṭvā saṁharate punaḥ // MBh 12.187.6

亀が四肢を伸ばして、再度引っ込めるように、ブータートマン（存在物の本質）⁵は、諸々の存在物（万物）を創造して、再び引っ込める（帰滅させる）⁶。

ブータートマンが存在物を創造し、ジーヴァおよびクシェートラジュニヤが観照するという、二元論を彷彿とさせる機能を有する。おそらくこのことからアートマン（内なるアートマン）には2つの側面があったと思われる。すなわち、活動因としての側面がジーヴァおよびクシェートラジュニヤであり、質量因としての側面がブータートマンであるということである。

この章では、粗大元素と共に、認識器官やその対象などが見られる。それは次の通りである。

⁵ 物質性のアートマンとも考えられる。

⁶ 自動詞と他動詞を区別しておらず、比喩も不明瞭である。

śabdaḥ śrotraṃ tathā khāni trayam ākāśayonijam /

vāyos tvaksparsāceṣṭās ca vāg ity etac catuṣṭayam // MBh 12.187.8

音声、耳（聴覚）、そして（身体の）諸々の穴の3種は、〔粗大元素の〕虚空の胎から生まれたものである。風からは、皮膚（触覚）、接触、運動、そして言葉（発声器官）という4種のものが〔生まれた〕。

rūpaṃ cakṣus tathā paktis trividham teja ucyate /

rasaḥ kleśāś ca jihvā ca trayo jalaguṇāḥ smṛtāḥ // MBh 12.187.9

色、目（視覚）、そして消化器官の3種のものが、火（tejas）〔の性質〕であると言われている。味と湿気と舌（味覚）の3種が、水の性質であると伝承されている。

ghreyaṃ ghrāṇaṃ śarīraṃ ca te tu bhūmiguṇās trayah / MBh 12.187.10ab

香り、鼻（嗅覚）、そして身体、これら3種が地の性質（guṇa）である。

以上のように、地・風・虚空・水・火の5粗大元素が、あらゆる存在を形成する源と考えられている。そして、ジーヴァの機能は、古典サーンキヤのプルシャの機能を想起させる。次に、人間の各器官などが説かれており、それらは、5粗大元素からそれぞれ生みだされる。そして、5粗大元素とは別の原理をあげている。第6がマナスであり、第7がブッディ、そして、8番目として知田者があげられている。それらをまとめると図表3の原理展開が想定できるであろう。

一方、第239–241章での展開は、細かな字句の違いはあるものの第187章と列挙されている原理はほぼ同一である。ただ一箇所だけ、皮膚の代わりに呼吸（prāṇa）があげられている。しかし、第187章との相違点はこれだけではなく、ブッディの展開と感覚器官や対象の関係性が説かれていることである。それは次のように説かれる。

indriyebhyaḥ parā hy arthā arthebhyaḥ paramaṃ manaḥ /

manasas tu parā buddhir buddher ātmā paro mataḥ // MBh 12.240.2

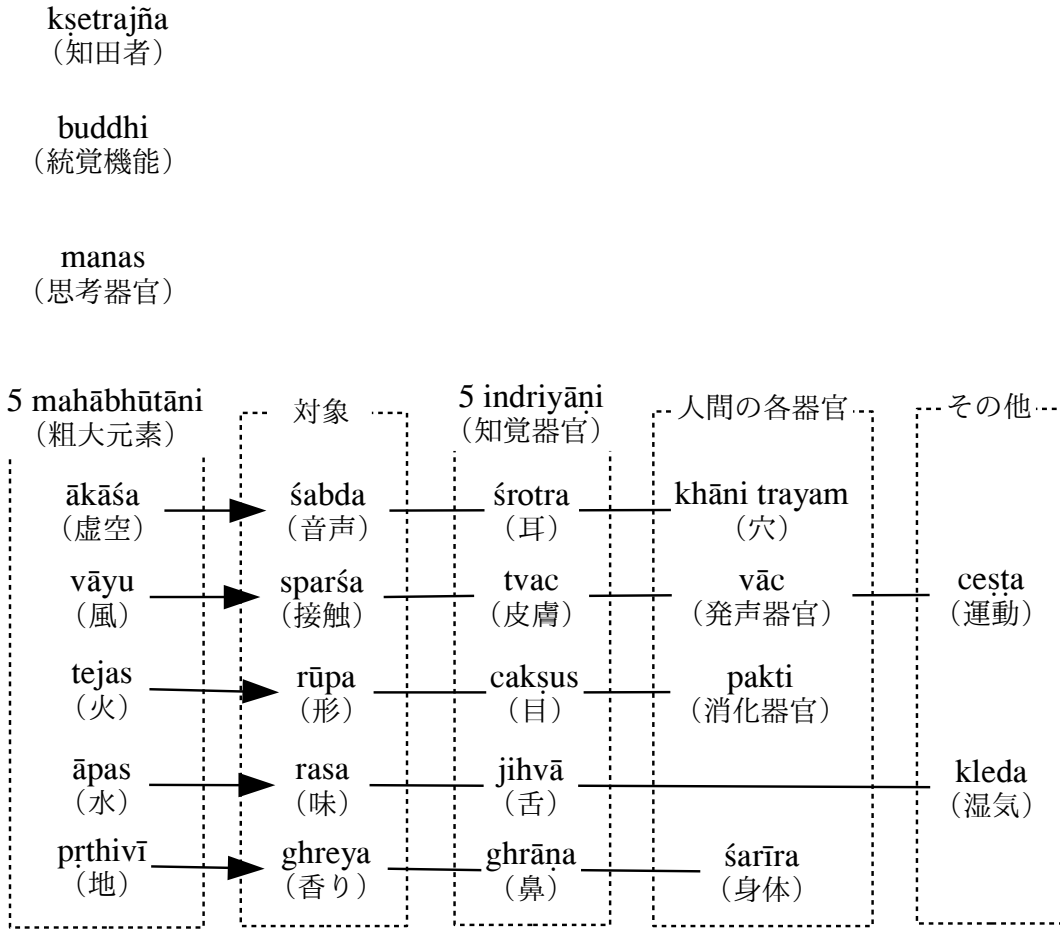
実に、諸々のインドリヤ（感覚器官）よりも対象が上位であり、対象よりもマナスが上位である。さらに、マナスよりもブッディが上位であり、ブッディよりもアートマンが上位であると考えられている。

このように、アートマン→ブッディ→マナス→対象→インドリヤというラインが想定できる。さらに続けて次のように説かれる。

buddhir ātmā manuṣyasya buddhir evātmano ’tmikā /

yadā vikurute bhāvaṃ tadā bhavati sā manaḥ // MBh 12.240.3

人間にとって、ブッディがアートマンである。まさにブッディはアートマンの本質から成るものである。〔ブッディが〕バーヴァ（状態）に変異するとき、そのとき



図表3 MBh 12.187における原理展開

それ（ブッディ）はマナスとなる。

indriyāṇaṃ pṛthag bhāvād buddhir vikriyate hy aṇu /

śṛṇvatī bhavati śrotraṃ sprśatī sparśa ucyate // MBh 12.240.4

諸々のインドリヤ（感覚器官）の個々の状態により、実にブッディは微細なもの（aṇu）に変異する。〔ブッディは〕聞くとき耳になり、触れるとき接触と言われる。

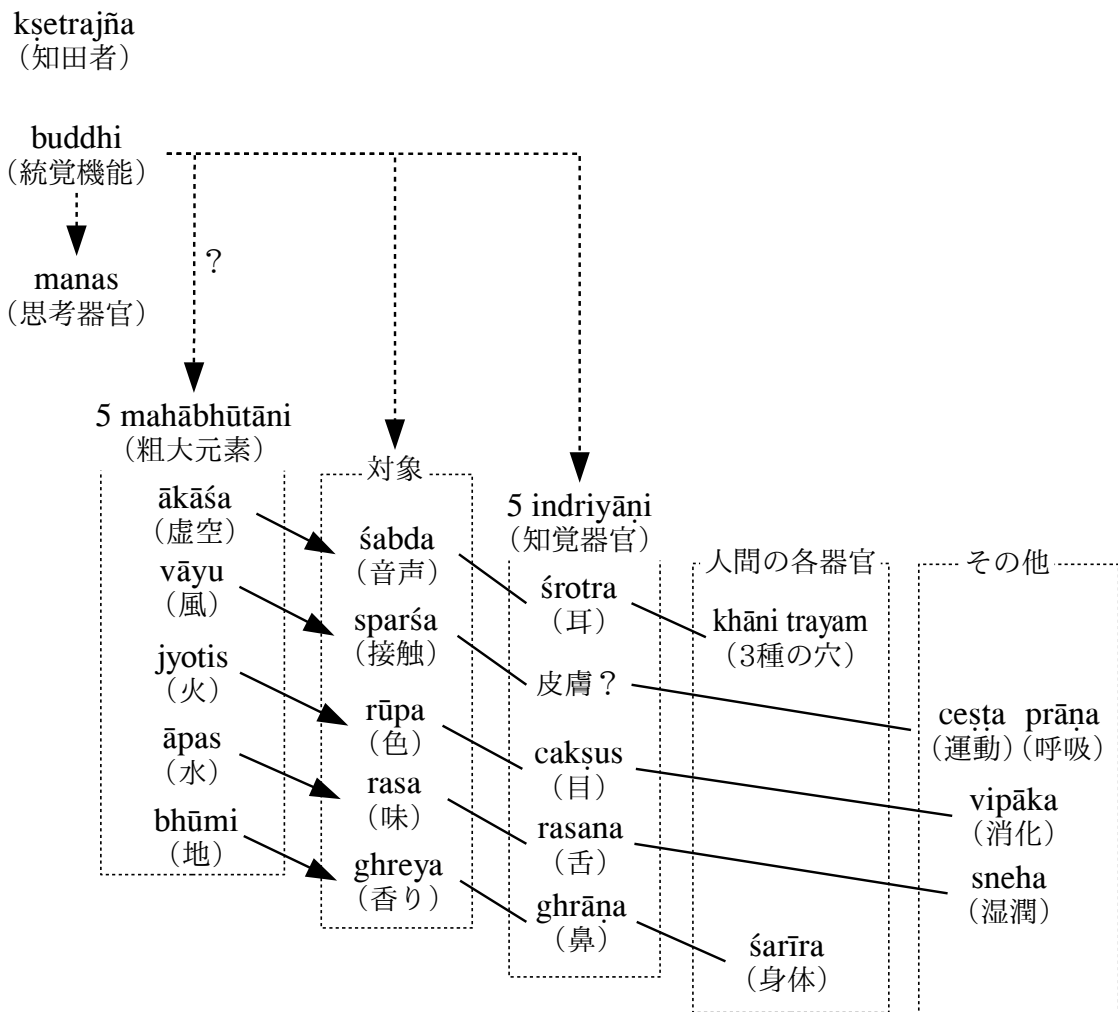
paśyantī bhavate dṛṣṭī rasatī rasanam bhavet /

jighratī bhavati ghrāṇam buddhir vikriyate pṛthag // MBh 12.240.5

〔ブッディは〕見るとき視力を持つもの（目）になり、味わうとき舌になるであろう。嗅ぐとき鼻になる。〔このように〕ブッディは個々に変異する。

このように、ブッディは、それぞれの器官あるいは対象がその機能を発揮するとき、そのものに変異するというのである⁷。

これらを整理してまとめると図表4の通りである。



図表4 MBh 12.239; 240 における原理展開

第1.2節 3種のグナの特徴

MBh 第12巻187章と239章には、3種のグナの特徴が詳細に述べられている。まず以下に当該箇所を記す。

⁷ 第187章でも類似のものが見られるが、わずかに説かれるのみである。

MBh 12.187.29–35 における3種のグナの性質

sukhasparśaḥ sattvaguno duḥkhasparśo rajogunaḥ /

tamogūṇena saṃyuktau bhavato `vyāvahārikau // MBh 12.187.29

サットヴァの性質（属性）は楽に触れ、ラジャスの性質（属性）は苦に触れる。タマスの性質と結びついた両者（楽と苦）は不活動性のものとなる。

tatra yat prītisaṃyuktaṃ kāye manasi vā bhavet /

vartate sātṭviko bhāva ity avekṣeta tat tadā // MBh 12.187.30

それらの中で、身体あるいはマナス（心）において喜びと結びついたものがあるなら、そのときそれはサットヴァ性の状態にあると見なすべきである。

atha yad duḥkhasaṃyuktaṃ atuṣṭikaram ātmanaḥ /

pravṛttaṃ raja ity eva tann asaṃrabhya cintayet // MBh 12.187.31

また、アートマン（自己）にとって、苦と結びついたもの、不満足を生じるものがあるなら、まさにそれを、ラジャスが活動していると、論議せずに、考えるべきである。

atha yan mohasaṃyuktaṃ avyaktam iva yad bhavet /

apratarkyam avijñeyaṃ tamas tad upadhārayet // MBh 12.187.32

さらに、〔自己にとって〕迷妄と結びついたもの、不分明に存在するであろうもの⁸、思議できないもの、認識することができないものがあるなら、それはタマス〔が活動している〕と考えるべきである。

praharṣaḥ prītir ānandaḥ sukhaṃ saṃśāntacittatā /

kathaṃcid abhivartanta ity ete sātṭvikā guṇāḥ // MBh 12.187.33

有頂天、喜び、歓喜、楽、寂靜なる心性が、何らかの仕方で生じるが、これらはサットヴァ性の性質（属性）である。

atuṣṭiḥ paritāpaś ca śoko lobhas tathākṣamā /

liṅgāni rajasas tāni dṛśyante hetvahetubhiḥ // MBh 12.187.34

同様に、不満足、怒り、悲しみ、貪欲、不寛容が、十分な原因があってもなくても現れるが、それらはラジャスの特徴である。

abhimānas tathā mohāḥ pramādaḥ svapnatandritā /

kathaṃcid abhivartante vividhās tāmasā guṇāḥ // MBh 12.187.35

⁸ “avyaktam iva yad bhavet”、茂木氏は「ぼんやりと存在するもの」と訳している [茂木 1995c: p. 107]。

さらに、高慢、迷妄、酩酊、睡眠と怠惰性が、何らかの仕方で生じるが、これらはタマス性の多様な性質（属性）である。

MBh 12.239.20–25 における3種のグナの性質

tatra yat prītisaṃyuktaṃ kimcid ātmani lakṣayet /

praśāntaṃ iva saṃśuddhaṃ sattvaṃ tad upadhārayet // MBh 12.239.20

それらの中で⁹、自己において何か喜びと結びついたものを知覚し、〔それが〕平静となったごとくに清浄であれば、それをサットヴァと把握するべし。

yat tu saṃtāpasāmyuktaṃ kāye manasi vā bhavet /

rajaḥ pravartakaṃ tat syāt satataṃ hāri dehinām // MBh 12.239.21

しかし、身体あるいはマナスにおいて苦しみに結びついたものであり、いつでも身体を持つものたちにとって傷つけるものであるならば、それは活動するラジャスであろう。

yat tu saṃmohasaṃyuktaṃ avyaktaviṣayaṃ bhavet /

apratarkyam avijñeyaṃ tamaḥ tad upadhāryatām // MBh 12.239.22

さらに、迷妄と結びついたものであり、明らかな対象を持たないもの、思議できないもの、認識できないものであるなら、それはタマスであると考えべきである。

prahaṛṣaḥ prītir ānandaḥ sāmyaṃ svasthātmacittatā /

akasmād yadi vā kasmād vartate sāttviko guṇaḥ // MBh 12.239.23

有頂天、喜び、歓喜、平静さ、そして健康を本性とする心性が、偶然にしろそうでないにしろ生じたならば、サットヴァ的属性が作用している。

abhimāno mṛṣāvādo lobho mohas tathākṣamā /

liṅgāni rajasaḥ tāni vartante hetvāhetutaḥ // MBh 12.239.24

高慢¹⁰、虚言、貪欲、迷妄¹¹、不寛容、それらはラジャスの特徴である。〔そして、十分な〕原因があってもなくても存在する。

tathā mohaḥ pramādaś ca tandrī nidrāprabodhitā /

kathaṃcid abhivartante vijñeyās tāmasā guṇaḥ // MBh 12.239.25

⁹ 茂木氏は、個々の vedanā を取り上げる MBh 第12巻187章と比較して、tatra を前後と関係ないとしているが [茂木 2001: p. 129]、これまでに述べてきた自己の話と関連づければ、身体においてと解することができる。

¹⁰ MBh 第12巻187章では、タマス性のものである。

¹¹ 次の25偈のタマスの特徴にも、同じく“moha”が説かれている。

さらに、迷妄、酪酊、そして怠惰、睡眠から目覚めないことが、何らかの仕方で生じるが、それらはタマス性のグナ（性質）と認識されなければならない。

以上をそれぞれのグナごとにまとめると、サットヴァは図表5、ラジャスは6、タマスは7のようになる。具体的な性質で、若干意味の混同が見られるが、おおよそサットヴァは歓喜に結びつき、ラジャスは苦に結びつき、タマスは迷妄に結びつくということが認められる。これらは、SKと同じような用い方である。しかし、3種のグナがそれぞれに本来的に多くの属性を持っているのであり、SKのように、3種のグナの優勢・劣勢により多くの性質が生まれるようなことは説かれていない¹²。

これら3種のグナに関して、第187章では次のように説かれる。

indriyāṇi ca sarvāṇi vijetavyāni dhīmatā /

sattvaṃ rajas tamaś caiva prāṇināṃ saṃśritāḥ sadā // MBh 12.187.27

また、全ての感官は智者によって制御されるべきである。サットヴァとラジャスとタマスはまさに生きているものが常に依存するものである。

trividhā vedanā caiva sarvasattveṣu dr̥śyate /

sāttvikī rājasī caiva tāmasī ca iti bhārata // MBh 12.187.28

そしてまた、3種類の感覚が全てのサットヴァ（あらゆる物質存在）¹³において見られる。すなわち、サットヴァ性のもの、ラジャス性のもの、タマス性のものである。バラタ族の者よ。

3種のグナは、生きとし生けるものが依拠するものである。そして、MBh 12.187.28のため、これら多くの性質は、3種の感覚について、個別的に取り上げていると捉えられる。しかし、このMBh 12.187.28に該当するものが第239章では欠けているので、前後の関係が不明瞭になってしまっている。ただし、やや離れてはいるが、次のように説かれる。

rajastamaś ca sattvaṃ ca traya ete svayonijāḥ /

samāḥ sarveṣu bhūteṣu tad guṇeṣūpalakṣayet // MBh 12.239.16

また、ラジャス、タマス、そしてサットヴァというそれら3種は、自ら生じたものである¹⁴。〔これらは〕あらゆる存在物において、同等である（等しく存在する）。

¹² SKでは3種のグナの性質・機能を簡潔にまとめている。本論文の第5章第2.1節を参照。さらに、SK 46ではグナの配分により、ブッディにおいて50種の区分が生まれる。それは「観念から作り出されたもの」(pratyaya-sarga)と呼ばれる。

¹³ サットヴァは物質性のものを表す。すなわち、生物や無機物なども含む、あらゆる物質要素に属するものである。

¹⁴ もとから存在したものの

そのことをグナ（性質）の中に観察しなければならない¹⁵。

あらゆる存在物に等しく存在することが説かれており、それらを観察することが求められている。その観察により導き出されたものが、MBh 12.239.20–25 で説かれる多くの性質であると考えられる。また、この偈では、3種のグナは自ら生じたものとされる。何かに生み出されたものではなく、あらかじめ備わっているということであろう¹⁶。

	Mbh 12.187	MBh 12.239
身体・マナスにおけるサットヴァ的な状態	喜びと結びついたもの (prītisaṃyukta)	歓喜と結びついたもの (prītisaṃyukta) 平静となったごとくに清浄 (praśāntam iva saṃśuddham)
サットヴァの性質 (guṇa)	楽に触れるもの (sukhasparśa) 有頂天 (praharṣa) 喜び (prīti) 歓喜 (ānanda) 楽 (sukha) 静寂なる心性 (saṃśāntacittatā)	有頂天 (praharṣa) 喜び (prīti) 歓喜 (ānanda) 平静さ (sāmya) 健康を本性とする心性 (svasthātmacittatā)

図表5 MBh 12.187; 239 におけるサットヴァ

第1.3節 世界の構成要素と3種のグナの関係

では、世界の構成要素と3種のグナはどのように関係しているのでしょうか。その箇所について、Buitenen がブッディ説についての再構成したテキストが非常に有益であるため、以下にあげて考察する。この再構成したテキストは、第187章と第240章の詳細な分

¹⁵ 茂木氏の解釈に従った [茂木 2001: p. 128]。

¹⁶ STK ad. SK 12 では、3種のグナが無始無終の存在であることが説かれる。本論文の第5章第2.1節も参照。

	MBh 12.187	MBh 12.239
身体・マナスにおけるラジャスの活動状態	苦と結びついたもの (duḥkhasaṃyukta) 満足しないこと (atuṣṭikara)	苦しみと結びついたもの (saṃtāpasamṃyukta)
ラジャスの特徴 (liṅga)	苦に触れる (duḥkhasparśa) 不満足 (atuṣṭi) 怒り (paritāpa) 悲しみ (śoka) 貪欲 (lobha) 不寛容 (akṣamā)	貪欲 (lobha) 不寛容 (akṣamā) 高慢 (abhimāna) 虚言 (mṛṣāvāda) 迷妄 (moha)

図表6 MBh 12.187; 239 におけるラジャス

析・照合の結果、両者を組み合わせて作り上げたものである。

Buitenen による再構成テキスト

Buitenen は、第187章と第240章の詳細な分析・照合の結果、両者を組み合わせて作り上げた¹⁷。

puruṣādhiṣṭhitā buddhis triṣu bhāveṣu vartate /
seyaṃ bhāvātmikā bhāvāṃs trīn etān ativartate // 1

プルシャにコントロールされたブッディは、3種の状態で存在する。状態を本質とするもの(ブッディ)は、これら3種の状態を超越するのである。

saritāṃ sāgaro bhartā mahāvelām ivormimān /
atibhāvagatā buddhir bhāve manasi vartate // 2

諸々の川の王である海は、波立つ境界を〔乗り越える〕ように。〔3種の状態を〕超

¹⁷ An old text reconstituted [van Buitenen 1956]

	MBh 12.187	MBh 12.239
身体・マナスにおけるタマスの状態	迷妄と結びついたもの (mohasamyukta) 不分明に存在するであろうもの (avyakta iva yad bhavet) 思議できないもの (apratarkya) 認識できないもの (avijñeya)	迷妄と結びついたもの (sam̐mohasamyukta) 明かな対象をもたないもの (avyaktaviṣaya) 思議できないもの (apratarkya) 認識できないもの (avijñeya)
タマスの性質 (guṇa)	快樂・苦を活動させないもの (←sam̐yuktau,avyāvahārikau) 高慢 (abhimāna) 迷妄 (moha) 酪酊 (pramāda) 睡眠 (svapna) 怠惰性 (tandritā)	迷妄 (moha) 酪酊 (pramāda) 睡眠から目覚めないこと (nidrāprabodhitā) 怠惰 (tandrī)

図表7 MBh 12.187; 239 におけるタマス

越したブッディは、マナスというバーヴァ（状態）において存在する（開展する）。

yadā vikurute bhāvaṃ tadā bhavati sā manaḥ /
 pravartamānaṃ tu rajas tad bhāvaṃ anuvartate /
 indriyāṇi hi sarvāṇi pravartayati sā sadā // 3

バーヴァ（状態）に変容する時、ブッディがマナスになる。しかし、活動しているラジャスは、その状態に従う。なぜなら、その時、それ（ブッディ）は、あらゆる感官を活動させるからである。

śṛṅvatī bhavati śrotraṃ spṛśatī sparśa ucyate /
 paśyatī bhavati dr̥ṣṭī rasatī rasanam bhavet // 4

〔ブッディは、〕聞く時に耳となり、触れる時に接触と言われる。〔ブッディは、〕見

る時に目となり、味わう時に舌となる。

jighratī bhavati ghrāṇaṃ buddhir vikriyate pṛthak /
indriyāṇī tāny āhus tesv adṛśyādhitīṣṭhati // 5

〔ブッディは、〕嗅ぐ時に鼻となる。〔このように〕ブッディは別々に変容する。これらが感官と言われ、〔ブッディは、〕それらの中で、見えない形でコントロールしている。

adhiṣṭhānāni buddher hi pṛthagarthāni pañcadhā /
indriyāṇaṃ pṛthagbhāvād buddhir vikurute hy aṇu // 6

さて、ブッディの住処は、5つの別々の対象を持っている。感官の別々の状態から、ブッディはアヌ（微細）に変異する。

ye caiva bhāvā vartante sarva eṣv eva te triṣu /
anvarthāḥ sampravartante rathanemim arā iva // 7

バーヴァ（状態）として存在するものは、まさにこれら3つの中に全てが存在する。〔それらは、〕目的（外的対象）に従って活動する。車の輻（スポーク）が輪ぶち（リム）を〔回す〕ように。

まず、言えることは、ブッディが非常に重要な役割を担っているということである。そして、3種のグナは、ブッディにおける3種の状態である。また、3種の状態を超越したブッディとは、バーヴァに分化しない状態のブッディであり、3種のバーヴァとして存在する場合と併せて、ブッディに2種の様態があることが想定されている¹⁸。ここで Buitenen はテキストを補って、ブッディ→マナス、ブッディ→インドリヤ、ブッディ→要素という並列パターンを想定している。そして、ブッディは、マナス、5感官、aṇu に変異するのである。ここでの、活動因となっているのがラジャスである。

この章全体では、心的機能を中心としていて、3種のグナは、ブッディの状態として説かれている。

また、SK では、12偈のように、サットヴァやタマスにもラジャスのような活動性を有しているように説かれていて、3種のグナを1つのセットとして捉える傾向が強い。一方、これらの章では、ラジャスが単独で用いられること、3種のグナ自体に様々な属性が帰されることから、個々の性格がよりはっきりと分けられているように思われる。

¹⁸ [茂木 2001: p. 130]

第1.4節 小結

187章・239–241章の説は、サーンキヤ学説の古い形と考えられていることは先に述べたとおりである。これらの説は、ウパニシャッド文献、特にヤージュニャヴァルキヤの説から発展し、後世のサーンキヤ学説に導く一つの形態を示していると、Frauwallner は言う¹⁹。また、これらの説を「内なるアートマンの考察者」と呼ばれる一群の学者グループが担っていたと推測され、サーンキヤ説とこの考察者たちとの関係は不可分であると考えられている²⁰。

これらの章では、プラクリティのような根本原質は見られない²¹。あくまでも物質的原理は5粗大元素だからである。SKのような3種のグナの均衡状態や、優勢・劣勢による世界の多様性も説かれていない。5粗大元素に基づき、世界は転変し、万物を創造する源となると考えられている。一方、5つの感覚器官の他に内的器官として、マナスを6番目、ブッディを7番目、クシェートラジュニャを8番目の原理と考え、ここにはアハンカーラが説かれていない。さらに、マナス・ブッディ・クシェートラジュニャと5粗大元素の関係が明確ではないため、原理の順列が明らかではない。

第2節 Mokṣadharmā-Parvan 第203章における8種の根本原因と16種の変異の説

MBh 第12巻203章²²において説かれる、世界創造説は、構成原理を8種の根本原因と16種の変異に分けるものである。この説はMBhの他の箇所や、他の書にも説かれる²³。あげている原理はSKと非常に類似したものであるが、展開の順序やその数など、大きく異なる。本節では、この8種の根本原因と16種の変異の説について、詳細に説かれた第203章を取り上げ、考察する。

第2.1節 8種の根本原因

まず、25abでは、次のように説かれる。

¹⁹ [Frauwallner 1973: p. 235]

²⁰ [中村 1982: pp. 164-166]

²¹ 1箇所プラクリティがあるが、原理の系列として説かれていない。

²² 第203–210章は、BhīṣmaがYudhiṣṭhiraに教示した、弟子と師匠の解脱に関する対話。冒頭で「内なるアートマン」(adhyātma)を説くことを目的としているが、その前の文においてのYudhiṣṭhiraの問いにあるように、全体的な内容は解脱のためのヨーガを説く章とらえた方が良いであろう。

²³ MBh 12.203; 291; 298, CS 4.1, BC 12 などにおいてである。

avyaktakarmajā buddhir ahaṁkāraṁ prasūyate / MBh 12.203.25ab

未顕現 (avyakta) の行為によって生じたブッディがアハンカーラを生み出す。

このように、未顕現からブッディが生み出され、ブッディからアハンカーラを生み出すことが説かれている。

さらに続いて、次のように説かれる。

ākāśaṁ cāpy ahaṁkārād vāyur ākāśasambhavaḥ // MBh 12.203.25cd

そしてまた、アハンカーラから虚空が生じ、風は虚空から生じるものである。

vāyos tejas tataś cāpas tv adbhyo hi vasudhodgatā / MBh 12.203.26ab

風から火が、そしてそれ（火）から水が、また水から地が生じる。

アハンカーラの次に生み出されるのは5粗大元素であるが、それには順序があり、アハンカーラから虚空が生み出され、虚空から風が生み出され、風から火が生み出され、火から水が生み出され、そして、水から地が生み出されるとされる。

mūlaprakṛtayo 'ṣṭau tā jagad etāsv avasthitam // MBh 12.203.26cd

ムーラプラクリティ（根本原因）はそれら8種である。これらの中に世界は存在している。

このように、未顕現 (avyakta)、ブッディ (buddhi)、アハンカーラ (ahaṁkāra)、虚空 (ākāśa)、風 (vāyu)、火 (tejas)、水 (āpas)、地 (vasudhā) の8つを根本原因として想定していた。

第2.2節 16種の変異

次に、16の変異として想定されていたものとして、次のように説かれる。

jñānendriyāṅy ataḥ pañca pañca karmendriyāṅy api /

viśayāḥ pañca caikaṁ ca vikāre ṣoḍaśaṁ manaḥ // MBh 12.203.27

また、知覚器官は5種であり、行為器官も5種である。そして、対象は5種であり、さらに、変異したもの (vikāra) における第16番目に、マナスが1種ある。

つまり、5知覚器官・5行為器官・5つの対象・マナスの合計16をあげる。また、この16種の変異は、アートマンに仕えるものでありながら、神格とも言われる。

vidyāt tu ṣoḍaśaitāni daivatāni vibhāgaśaḥ /

deheṣu jñānakartāram upāsīnam upāsate // MBh 12.203.31

そして、これら 16 の神格は、個々に、諸々の身体に付随する認識する者（認識を司る者、認識主体＝アートマン）に仕えている、と知るべし。

さて、それら 16 種の変異の詳細については、27 偈から 28 偈において説かれる。

śrotraṃ tvak cakṣuṣī jihvā ghrāṇaṃ pañcendriyāṇy api /

pādaṃ pāyur upasthaś ca hastau vāk karmaṇām api // MBh 12.203.28

śabdaḥ sparśo 'tha rūpaṃ ca raso gandhas tathaiva ca / MBh 12.203.29ab

耳、皮膚、目、舌、鼻が 5 種の感覚器官であり、そして、両足、肛門、生殖器、両手、発声器官が行為の〔器官〕である。そして、音声、接触、色、味、そして香り〔が対象〕である。

5 知覚器官は耳・皮膚・目・舌・鼻であり、5 行為器官は両足・肛門・生殖器・両手・発声器官であり、5 つの対象は音声・接触・色・味・香りである。

次の 29cd には、マナスの機能として、次のように説かれる。

vijñeyaṃ vyāpakaṃ cittaṃ teṣu sarvagataṃ manaḥ // MBh 12.203.29cd

それらにおいて、遍在する心（citta）は行き渡るマナスであると理解すべし²⁴。

マナスは、他の 10 に遍在するということであろう。また、次のようにも説かれる。

rasajñāne tu jihveyaṃ vyāhr̥te vāk tathaiva ca /

indriyair vividhair yuktaṃ sarvaṃ vyastaṃ manas tathā // MBh 12.203.30

さて、味の知覚においてこの舌（味覚）になる。そして同様に、話すときには発声器官になる²⁵。そのように、多様なインドリヤ（感覚器官）と結びついたマナスは全てに広がるものである。

何がインドリヤになるのかは分からないが、マナスはインドリヤと結びついて活動することは明らかである。いずれにせよ、マナスは、身体に遍在するものと考えられていたようである。ここだけでは判断できないが、古典サーンキヤ思想でのインドリヤとアハンカーラをつなげるマナスと同じ機能が想定されていたのかもしれない。

マナスは SK においては、サットヴァ性のヴァイクリタ・アハンカーラから開展する²⁶が、ここでも同様にサットヴァ性のものであることが説かれる。それは次の通りである。

²⁴ 対象にまでマナスは行き渡る。さらに、マナス＝チッタと考えられている。

²⁵ 187 章でのバイテネンの説を考えれば、ブッディが舌になり、発生期間になるということか。

²⁶ 『ヴァイクリタ・アハンカーラ』(vaikṛta-ahāṅkāra) から、サットヴァ性の 11 から成るものが開展する。『ブーターディ〔・アハンカーラ〕』(bhūtādi-ahāṅkāra) から、タマス性の微細要素が〔開展する〕。『タイジャサ〔・アハンカーラ〕』(taijasa-ahāṅkāra) から、両者が〔開展する〕。(SK 25)

manaḥ sattvaḥ prāhuḥ sattvam avyaktajam tathā /
sarvabhūtātmabhūtastham tasmād budhyeta buddhimān // MBh 12.203.33

マナスはサットヴァのグナ（属性）であると言われる。さらに、サットヴァは未顕現（avyakta）から生じたものである。それ故に、ブッディを持つ者（buddhimān、理性ある人）は、〔マナスは〕あらゆる存在物（一切生類）の本質として存在している、と理解すべし。

マナスはサットヴァのグナ（属性）であることが言明されている。さらに、あらゆる存在物（一切生類）の本質として存在していることから、先にも見たように、ここでも、マナスの遍在性が説かれている。ここで、サットヴァは未顕現から生じたものとされているのは、興味深い。SK では未顕現すなわちプラクリティは3種のグナの均衡状態とされているが、ここでは、未顕現から生まれるとされ、大きく異なるものである。しかし、その他に説明はなく、ブッディやアハンカーラなど、その他の原理との対応は不明瞭である。

第2.3節 粗大元素と知覚器官・対象の対応

5 粗大元素と知覚器官・対象の対応が説かれている箇所があるが、その対応の仕方には不明な点が多い。

tadvat somaguṇā jīhvā gandhas tu pṛthivīguṇaḥ /
śrotraṃ śabdaguṇaṃ caiva cakṣur agner guṇas tathā /
sparsaṃ vāyuguṇaṃ vidyāt sarvabhūteṣu sarvadā // MBh 12.203.32

同様に、全ての存在物において、舌（味覚）は水〔元素〕のグナ（属性）であり、また、香りは地〔元素〕のグナ（属性）である。耳（聴覚）は音声のグナ（属性）であり、そしてまた、目（視覚）は火〔元素〕のグナ（属性）である。さらに、接触は風〔元素〕のグナ（属性）である、と常に知るべし。

これらの対応関係をまとめると次のようになる。

- 舌（味覚） — 水〔元素〕のグナ（属性）
- 香り — 地〔元素〕のグナ（属性）
- 耳（聴覚） — 音声のグナ（属性）
- 目（視覚） — 火〔元素〕のグナ（属性）
- 接触 — 風〔元素〕のグナ（属性）

粗大元素が根本原因であり、知覚器官およびその対象は変異であるから、粗大元素のそれぞれから知覚器官とその対象が生み出されると考えられる。しかし、語句が統一されてお

らず、順番もばらばらである。“śrotraṃ śabdagaṇam”「耳は音声の性質であり」となっており、虚空の代わりに知覚器官の対象である音声あげられている。また、地と風のグナ（属性）の箇所でも、知覚器官の代わりに香りと接触という知覚器官の対象があげられている。さらに、25 偈と 26 偈であげられた粗大元素と語句が若干異なる。水の粗大元素は“āpas”から“soma”に変わり、“tejas”は“agni”に置き換わっている。これらの対応関係を補い、展開の順序にそって整理すると、図表 8 の通りである。

5 mahābhūtāni (5粗大元素)	5 buddhīndriyāṇi (5知覚器官)	5 viṣāyaḥ (5知覚器官の対象)
<i>ākāśa</i> (虚空の粗大元素)	śrotra (耳、聴覚)	śabda (音声)
vāyu (風の粗大元素)	<i>tvac</i> (皮膚、触覚)	sparsā (接触)
agni (火の粗大元素)	cakṣus (目、視覚)	<i>rūpa</i> (色)
soma (水の粗大元素)	jihvā (舌、味覚)	<i>rasa</i> (味)
pṛthivī (地の粗大元素)	<i>ghrāṇa</i> (鼻、嗅覚)	gandha (香り)

(太字のイタリックおよび斜体は、原文にないもの)

図表 8 MBh 12.203 における粗大元素と知覚器官・対象の対応

第 2.4 節 小結

以上のように、ここでは、8 種の根本原因と 16 種の変異の説が見られる。8 根本原因は、プラクリティ→ブッディ→アハンカーラ→虚空→風→火→水→地という順序を考えることができる。さらに、5 種の知覚器官（耳・皮膚・目・舌・鼻）、5 種の行為器官（両足・肛門・生殖器・両手・発声器官）、5 種の対象（音声、接触、色、味、香り）、マナス、これらが 16 の変異である。つまり、世界の原理を 8 根本原因と 16 変異に分ているのである。しかし、この 2 者の関係は、はっきりしない。根本原質とその変異という関係なので、8 根本原質から 16 変異が展開するということが想定されているのであろうが、何がどこから生み出されるのかまでは分からない。対応関係を補って考えると、水→舌・味、地→鼻・香り、虚空→耳・音声、火→目・色形、風→皮膚・接触となる。おそらくは、5 粗

大元素からそれに対応する、5知覚器官とその対象が生み出されるとも想定できるが、この箇所は不鮮明であり、決定できない。また、5種の行為器官については記述がなく、どこから生み出されるかは分からない。マナスは、サットヴァ性の未展開のものから、生み出されるとされるが、サットヴァと原理の関係は不明である。

以上、まとめると図9のように想定できる。

第3節 Mokṣadharmā-Parvan 第291章における25原理説

この節では「モークシャダルマ篇」第291章²⁷を取り上げ、そこに説かれる諸原理の展開について考察する。ここでは、8種の根本原因と16種の変異の説に基づきつつも、25原理によって世界を説明する独自の理論を展開する。

第3.1節 マハットとアハンカーラの創造

まず、マハットとアハンカーラの創造について見てみたい。それは、次のように説かれる。

avyaktād vyaktam utpannam vidyāsargaṃ vadanti tam /

mahān taṃ cāpy ahaṃkāram avidyāsargaṃ eva ca // MBh 12.291.21

未顕現(avyakta)から顕現(vyakta)が生じる。[人々は]それを知の創造(vidyāsarga)と言う。さらにまた、それをマハットとも[言う]。そして、まさにアハンカーラを無知の創造(avidyāsarga)と[言う]。

このように未顕現(avyakta)から顕現(vyakta)が創造され、それは知の創造(vidyāsarga)と呼ばれる。それはマハットと呼ばれるということから、知の創造(vidyāsarga)とは、未顕現(avyakta)からマハットの創造と考えられる。一方、アハンカーラの創造は無知の創造(avidyāsarga)と呼ばれる²⁸。この未顕現(avyakta)というものはおそらくプラクリティに対応すると思われるが、はっきりと分からない。後述するが、この章では、25番目の原理をヴィシュヌとし、もう一つ、24番目の原理についても取り上げている。この箇所だけ見れば、プラクリティに相当する24番目の原理が、この未顕現(avyakta)であり、その未顕現がマハットを創造するという事に解せよう。

一方、マハットの創造については、次のようにも説かれる。

srjaty anantakarmāṇaṃ mahāntaṃ bhūtaṃ agrajam /

²⁷ ヴァスィシュタ仙とカラーラ・ジャナカ王の対話。

²⁸ 創造説における知(vidyā)と無知(avidyā)の対応はLT3にも見られる。

mūrtim antaṃ amūrtātmā viśvaṃ śambhuḥ svayambhuvaḥ / MBh 12.291.15abcd

〔シャンブは〕 終わりなく行為する最初に生まれた存在物であるマハットを、創造する。〔すなわち〕 無形態のスヴァヤンブーであるシャンブ（シヴァ）は、形あるものすべてを〔創造する〕。

この偈の前後関係から、シャンブがマハットを創造したと考えられる²⁹。この前の段階では、創造の始まりはブラフマーとカルパについて語られ、続いてシャンブについて述べられる。シャンブとブラフマーの関係は明確ではないが、創造神であるブラフマーが思い起こされるため、何らかの形でシャンブをブラフマーの創造説に関連させようとしている意図があるのであろう。また、シャンブと未顕現 (avyakta) の対応関係が想定できるが、これも明確には説かれてはいない。両者の関係性が曖昧のままにこれらを併記しているのである。未顕現 (avyakta) からマハットの出現という原理展開、そしてシヴァとブラフマーの創造神話、これら2つの創造説を融合させようと試みているが、強引に結びつけようとした印象を受ける。

さらに、マハットには多くの異名が説かれる。

hiranyagarbho bhagavān eṣa buddhir iti smṛtaḥ /

mahān iti ca yogeṣu viriñca iti cāpy uta // MBh 12.291.17

sāṃkhye ca paṭhyate śāstre nāmabhir bahudhātmakaḥ /

vicitrarūpo viśvātmā ekākṣara iti smṛtaḥ // MBh 12.291.18

vṛtaṃ naikātmakaṃ yena kṛtsnaṃ trailokyam ātmanā /

tathaiva bahurūpatvād viśvarūpa iti smṛtaḥ // MBh 12.291.19

〔一方〕 この聖なるものは、ヒラニヤガルバであり、ブッディと言われる。また、ヨーガにおいてはマハットと〔言われ〕、さらにヴィリンチャ (viriñca) とも〔言われる〕。

そして、多様な性質を持つもの (bahudhātmaka) 〔すなわちマハット〕 は、サーンキヤの聖典 (śāstra) において、諸々の名前によって言明される。〔それは〕 多様な形を持つもの (vicitrarūpa)、ヴィシュヴァートマン (viśvātman)、一音節のもの (ekākṣara) と言われる。

かのアートマンによって、多数からなるものである三界の全ては、覆われている。まさにそのように、多様なものであるから、〔マハットは〕 ヴィシュヴァールーパと

²⁹ プーナ版では偈の番号がずれる。中村氏はプーナ版に基づいて14偈から15偈について次のように訳している。「1 ユガは12000年であり、1カルパは4ユガであると知られよ。1000カルパを覆う期間が、梵天の1日であるという。(14) 梵天の夜もそれと同じ〔量〕である。王よ。その〔夜の〕終りに〔シャンブ=シヴァ神は〕醒める。そして、初生の存在として、無窮の活動をなすマハーン (mahān) を創造する。(15)」[中村1998a: pp. 717-718]

言われる。

マハットの異名としてあげられているものは、ヒラニヤガルバ、ブッディ、ヴィリンチャ (virīṅca)、多様な性質を持つもの (bahudhātmaka)、多様な形を持つもの (vicitrarūpa)、ヴィシュヴァートマン (viśvātman)、一音節のもの (ekākṣara) である。また、次の偈に示したとおり、ヴィシュヴァールパとも呼ばれる。このように、多くの異名が与えられていることから、その重要性が理解できるであろう。黄金の胎児であるヒラニヤガルバやヴィリンチャすなわちブラフマーに関係するものと同一視することにより、物質を超えたものとしての創造者の性質を有するが、一方では、多様な性質や形を持つことから展開するもの、すなわち物質的根源の性質を有していることが想定できる。

そして次のようにも説かれる。

vṛtaṃ naikātmakam yena kṛtsnaṃ trailokyam ātmanā /
tathaiva bahurūpatvād viśvarūpa iti smṛtaḥ // MBh 12.291.19

かのアートマンによって、多数からなるものである三界の全ては、覆われている。まさにそのように、多様なものであるから、〔マハットは〕ヴィシュヴァールパと言われる。

アートマンによって世界は覆われており、マハットは多様なもの、すなわち、顕現 (vyakta) ということが理解できる。このアートマンは何を指しているのか判然としない。16 偈³⁰において、シャンブは世界全てを覆うことが説かれているので、おそらくアートマンはシャンブのことを示しているのであろうが、後の偈を考慮すればヴィシュヌの可能性も排除できない。いずれにせよ、唯一なるものが、多様な世界を覆っていることだけは確かである。そして、マハットはその唯一なるものに管理されているのである。

さて、上述したように、アハンカーラの創造は無知の創造 (avidyāsarga) と呼ばれる。そのため、マハットからアハンカーラが生じる創造と考えられるが、MBh 12.291.21 の箇所だけで考えれば、未顕現 (avyakta) からアハンカーラが創造されるのかもしれない。アハンカーラの創造は、また、次のようにも説かれる。

eṣa vai vikriyāpannaḥ sṛjaty ātmānam ātmanā /
ahaṃkāraṃ mahātejāḥ prajāpatim ahaṃkṛtam // MBh 12.291.20

まさに転変が始まったこれは、自ら自己を創造する。大いに輝く者は、アハンクリタ (自己の意識) を持ったプラジャーパティであるアハンカーラを〔創造する〕。

³⁰ sarvataḥ pāṇipādāntaṃ sarvatokṣīśiromukham /
sarvataḥ śrutimal loka sarvaṃ āvṛtya tiṣṭhati // MBh 12.291.16

〔シャンブは〕いたるところに四肢があり、いたるところに目、頭、口 (顔) があり、いたるところに耳を有し、世界において、全てを覆い、住する。

この大いに輝くものが何を指すのであろうか。明らかなことは、この大いに輝くものがアハンカーラを創造するということである。さらに、次の偈を見てみたい。

avidhiś ca vidhiś caiva samutpannau tathaikataḥ /
vidyāvidyeti vikhyāte śrutiśāstrārthacintakaiḥ // MBh 12.291.22

非規則 (avidhi) と規則 (vidhi) とは、同様に、唯一なるものから共に生じる。天啓聖典と教典の意味を熟慮する者たちによって、[それは] 知 (vidyā) と無知 (avidyā) と呼ばれる。

非規則と規則の創造を説いた箇所であるが、その cd パダに、それぞれが知と無知と同定されているのが見出される。MBh 12.291.21 に当てはめれば、知の創造とは、未顕現から顕現が生じるマハットの創造であり、知であり、非規則である。一方、無知の創造は、アハンカーラの創造であり、無知であり、規則である。そして、これらはいずれも唯一のものから生じる。すなわち、マハットもアハンカーラもいずれも唯一のもの——ここでは未顕現 (avyakta) のことである——を根源とするのである。

このように、アハンカーラの出現とは、無知の創造と呼ばれ、大いに輝くものによって創造され、そして、共に未顕現 (avyakta) から生じるということである。そこで、アハンカーラの出現において、考え得る可能性は2つである。すなわち、(1) マハットからアハンカーラが生み出される、(2) 未顕現 (avyakta) からアハンカーラが生み出される、ということである。そこで、20 偈 ab パダの「まさに転変が始まったこれは、自ら自己を創造する」(“eṣa vai vikriyāpannaḥ sṛjaty ātmānam ātmanā”) というところに着目したい。転変が始まったということから、顕現 (vyakta) であり、原理の展開の中で最初の段階と考えられる。また、17~19 偈までの中心論題はいずれもマハットであり、その文脈から推測すれば、「転変が始まったこれ」はマハットと考えるのが妥当であろう。そして、自ら自己を創造するということは、自己を自己として認識することであり、まさにアハンカーラの創造である。すなわち、20 偈 ab パダでは、マハットからアハンカーラが展開するということが説かれているのである。また、大いに輝く者がマハットであるならば、マハットからアハンカーラが生じることが容易に想像できる。しかし、この「大いに輝く者がマハット」がシャンブとも考えられる。その場合、シャンブは創造を司る存在として、顕現はしていなく、支配するものである。あえて言うならば、未顕現が質量因として、シャンブが動作因として、それぞれの機能を有しているとも考えられる。すなわち、シャンブは、未顕現を根源としてマハットを、そしてマハットからアハンカーラを創造し、それら支配するということである。

さて、アハンカーラの異名もいくつかあげられていたが、特にプラジャーパティ神に対応させているのは興味深い。このプラジャーパティとの対応は、ABS 7.16 にも見られるもので、古典サーンキヤでは迷妄の原因とも成るであろうアハンカーラが、神格と対応す

ることは、SK などでは見られない説である。

第3.2節 アハンカーラから生み出されるもの

次にアハンカーラからの創造について考察したい。アハンカーラからの創造は次のように説かれる。

bhūtasargam ahaṁkāṛāt tr̥tīyaṁ viddhi pāṛthiva /
ahaṁkāreṣu bhūteṣu caturthaṁ viddhi vaikṛtam // MBh 12.291.23

アハンカーラからの存在物の創造を第3と知れ。プリター夫人の子よ。〔また、〕
諸々のアハンカーラ〔から生まれた〕存在物における変異したもの (vaikṛta) を第
4と知れ。

アハンカーラからの存在物の創造が第3とされ、変異したもの (vaikṛta) が第4の創造と
される。そのため、第1の創造はマハットの創造、第2の創造はアハンカーラであると考
えられる。これら、存在物と変異とは何を示しているのか。そこで、次の偈に注目したい。

vāyur jyotir athākāśam āpo `tha pṛthivī tathā /
śabdaḥ sparśaś ca rūpaṁ ca raso gandhas tathā eva ca // MBh 12.291.24

風、火、虚空、水、地、並びに、音声と接触と色、味、香り、実に〔それらが、そ
れぞれ〕である。

以上のように、風、火、虚空、水、地という5つと、音声、接触、色、味、香り、という
5つ、計10種類が数えられる。これらは、すなわち、粗大元素と知覚器官の対象である
が、それらが存在物と変異であろう。つまり、第3の創造はアハンカーラから5粗大元素
が生まれることであり、第4の創造は5知覚器官それぞれの対象が生まれることである。
そして、これらの10の集まりは、「このように、同時に10からなる集まりが生じたこと
に、疑いない」 (“evaṁ yugapad utpannam daśavargam asaṁśayam” MBh 12.291.25ab) と
される。

さらに、第5の創造として次のように説かれる。

pañcamaṁ viddhi rājendra bhautikaṁ sargam arthavat // MBh 12.291.25cd

大王よ。存在物から作られた創造 (bhautikaṁ sargam) を第5として、その通りに
知れ。

すなわち、第5の創造とは、存在物から作られた創造とされる。この存在物と呼ばれるも
のは、前偈で説かれた5粗大元素のことを指すと考えられる。そして、存在物から作られ
たものは次の通りに説かれる。

śrotraṃ tvak cakṣuṣī jihvā ghrāṇam eva ca pañcamam /

vāk ca hastau ca pāḍau ca pāyur medhram tathā eva ca // MBh 12.291.26

耳、皮膚、両眼、舌、5番目には鼻、同様に、発声器官と両手と両足と肛門および生殖器である。

すなわち、5知覚器官と5行為器官である。これらが5粗大元素から生み出されるのであろう。しかし、疑問も残る。25偈で第5の創造のことをことを“bhautika”と表している。この語だけ見れば、実際に存在する何かを指しているとも解することができるため、感覚器官だけでなく身体そのものかもしれない。以上のように説かれた創造の段階は次の通りである。

- 第1の創造：未顕現 (avyakta) →マハット
- 第2の創造：マハット→アハンカーラ
- 第3の創造：アハンカーラ→5粗大元素
- 第4の創造：アハンカーラ→5つの対象
- 第5の創造：5粗大元素→10器官 (5知覚器官と5行為器官)

マナスはそれに続いて説かれている。

buddhīndriyāṇi caitāni tathā karmendriyāṇi ca /

sambhūtāniha yugapan manasā saha pāṛthiva // MBh 12.291.27

これらの知覚器官と行為器官とは、この世において、マナスと共に同時に生起した。王よ。

知覚器官と行為器官とは同時に生み出されたので、マナスも同時に生起したとされる。知覚・行為器官と同じものであれば、粗大元素から誕生したのであろう。また、同時に生起したということから第5の創造に含まれると考えてよい。しかし、マナスの性格について一切触れられていなく、その扱いは曖昧であり、MBh 第12巻 187章³¹や『バガヴァッド・ギーター』³²にみられるようなマナスの創造的機能は一切見出せない。むしろ、古典サーンキヤに類似するように、感覚器官と同列に扱っているのである。そして、非精神的というべき物質的創造はアハンカーラに付されている。未顕現 (avyakta)、マハット、アハンカーラと続く創造は、精神的な創造であるが、しかし、アハンカーラからの創造は、非精神的、物質的な創造へと移るのである。このようなイメージはSKに見られるアハンカーラの3種類³³にも繋がると考えられる。

³¹ 第2章 第1節を参照。

³² 第2章 第6節を参照。

³³ 『ヴァイクリタ・アハンカーラ』(vaikṛta-ahankāra) から、サットヴァ性の11から成るものが開展する。『ブーターディ〔アハンカーラ〕』(bhūtādi-ahankāra) から、タマス性の微細要素が〔開展する〕。『タイ

第3.3節 25番目の原理と24番目の原理

ここまで、第291章における1から24番目の原理について考察したが、25番目の原理について考察したい。まずは37偈を参照する。

pañcaviṁśatimo viṣṇur nistattvas tattva samjñakaḥ /
tattvasamśrayaṇād etat tattvam āhur manīṣiṇaḥ // MBh 12.291.37

25番目のヴィシュヌは、〔本来は〕原理を超えたものであるが、原理と名づけられる。原理が依拠するものであるから、知者たちはこれを原理と言った。

このように25番目の原理としてヴィシュヌがあげられる。25番目、すなわち、サーンキヤ思想でのプルシャやクシェートラジュニヤに相当するものであるが、ここでは明白にヴィシュヌとされていることは、SKなどの説とは大きく異なるものである。そして、この25番目のヴィシュヌは、他の24原理が依拠するところであるから、原理を超えているにもかかわらず、原理に分類されるという。原理の原語“tattva”は、世界の構成要素であるカテゴリーを意味し、当然ヴィシュヌは本来そのような範疇に含まれないものであるが、ここでは便宜的に原理に列挙されている。言い換えるならば、物質世界を超越しつつも、物質世界に束縛されているということである。さらに、次のようにも説かれる。

yad amūrty asrjad vyaktaṃ tat tan mūrty adhiṣṭhātī /
caturviṁśatimo vyakto hy amūrtaḥ pañcaviṁśakaḥ // MBh 12.291.38

かの形なきもの (amūrty) は顕現 (vyakta) を創造したが、それ故それは形あるもの (mūrty) として存在している。なぜなら、24は顕現 (vyakta) であり、25番目は形なきもの (amūrta) であるから。

このように、形なきもの (amūrty, amūrta) がヴィシュヌであり、それが顕現 (vyakta) すなわち形あるもの (mūrty) を創造したということである。しかし、先の第3.1節と内容が矛盾する。先の箇所によれば、24番目の原理は、未顕現 (avyakta) であるはずである。また、この偈は、「かの形なきもの (amūrty) は顕現 (vyakta) を創造したが、それ故それは形あるもの (mūrty) を支配する」とも訳せるが、その場合、形なきもの (amūrty) が形あるもの (mūrty) を支配すると解せるであろう。中村氏はプーナ版に基づき、「滅するもの (=流出の性質のプラクリティ) が、〔果として〕 顕現を生じたのであるから、これらはすべて形体を持つ。それを未顕現なる第二十四は管理する。第二十五は形を持たない。〔故に世界を管理するということはできない。〕」と訳す³⁴。そして、中村氏は「ここ

ジャサ [・アハンカーラ] (tajasa-ahankāra) から、両者が〔開展する。〕 (SK 25)

³⁴ [中村 1998a: p. 721]

ではプラクリティが宇宙の管理者であって、ヴィシュヌはそうではないことを示す。ヴィシュヌ (=ブラフマ、アクシャラ) は宇宙に遍満する遍充者 (vyāpaka) であるが、管理者ではない、と。」という解釈を示している³⁵。プーナ版は次のように示される。

pañcaviṃśatimo viṣṇur nistattvas tattva saṃjñitah /
tattvasaṃśrayaṇād etat tattvam āhūr manīṣiṇah // MBh 12.291.38 (= 37)

yan martyam asṛjad vyaktaṃ tat tan mūrty adhiṣṭhati /
caturviṃśatimo 'vyakto hy amūrtaḥ pañcaviṃśakaḥ // MBh 12.291.39 (= 38)

プーナ版に基づくならば、まるで解釈が異なり、未顕現 (avyakta) が 24 番目の原理となる。形なきもの (amūrta) がヴィシュヌすなわちプルシャとなり、形あるもの (mūrta) が未顕現 (avyakta)・プラクリティとなり、そして顕現 (vyakta) が 23 の原理となる。しかし、この章では、プラクリティは 1 カ所のみで、原理としては理解しがたい³⁶。ここでは、根本原質と精神原理の解釈が曖昧で、混乱しているように見える。

第 3.4 節 3 種のグナと生まれの 3 段階

SK に類似した 3 種のグナと生まれの 3 段階が結び付けられている説は、この章においても言及される。それは以下のように説かれる。

tamaḥsattvarajoyuktas tāsū tāsū iha yoniṣu /
līyate 'pratibuddhatvād abuddhajanasevanāt // MBh 12.291.42

タマス・サットヴァ・ラジャスを具備した者は、この世において、様々なヨーニ (胎) に帰入する。目覚めない (= 覚らない) が故に、〔また、〕無知なる人々に仕えるから。

サットヴァ、ラジャス、タマス、これら 3 種のグナの影響によって、生まれは様々に変化するという。さらに、その次の偈においても、「タマスによって様々なタマスの状態を獲得し、ラジャスによってラジャス性を、サットヴァによってサットヴァ性を〔獲得する〕」(MBh 12.291.44) と説かれ、かなり冗長な印象を受ける。そして、45 偈では次のように説かれる。

³⁵ [中村 1998a: p. 1092]

³⁶ プラクリティが説かれている偈は次の通りである。

evam eṣa mahān ātmā sargapralayakovidah /
vikurvāṇaḥ prakṛtimān abhimanyaty abuddhimān // MBh 12.291.41

このように、このマハット・アートマン (大なるアートマン、mahān ātmā) は、創造と帰滅を経験し、転変するものであり、プラクリティ (物質性) を持ち、愚者であり、我執する。

śuklalohitakṛṣṇāni rūpāṇy etāni trīṇi tu /
sarvāṇy etāni rūpāṇi jānīhi prakṛtāni vai // MBh 12.291.45

しかるに、これら三種は、白・赤・黒の色を持つ。実に、プラークリタ（プラクリティから生じる一切の被造物、創造物）は、これら全ての色を持つと知るべし。

3種のグナを白、赤、黒という3色に見立て、白はサットヴァ、赤はラジャス、黒はタマスを示していることは明白である³⁷。そして創造物はこの3つの色全てを持つということから、万物は3種のグナを具備していることを説明しているのであろう。しかし、順番がそれぞれ異なる。42偈では、タマス、サットヴァ、ラジャスの順番で、44偈では、タマス、ラジャス、サットヴァ、そして45偈はサットヴァ、ラジャス、タマスの順である。このような近接した偈の中で、順番をそろえないことは不自然で、おそらく、様々な説をそのまま、整理せずに用いているためであろう。そして、生まれの段階については次のように説かれる。

tāmasā nirayaṃ yānti rājasā mānuṣāms tathā /
sāttvikā devalokāya gacchanti sukhabhāginah // MBh 12.291.46

タマス性の人々は地獄（niraya）に行く。また、ラジャス性の人々は人間界に〔行く〕。サットヴァ性の人々は神の世界に行き幸福を享受する。

サットヴァ性の人々は天界に行き、ラジャス性の人々は人間界に行き、そして、タマス性の人々は地獄に行く。すなわち古典サーンキヤでは、タマス性は獣の世界とされるが、ここでは異なり、タマス性により地獄に至る説が見られる。しかしながら、次の偈では以下のように説かれる。

niṣkaivalyaena pāpena tiryagyonim avāpnuyāt /
puṇyapāpena mānuṣyaṃ puṇyenaikena devatāḥ // MBh 12.291.47

純然たる悪によって獣のヨーニ（胎）に、善と悪によって人間の〔ヨーニ（胎）〕に、善のみによって神の〔ヨーニ（胎）〕に至るであろう。

善行により神の胎、善と悪により人間の胎、悪行により獣の胎へと至る。ここでは、獣の説だけでなく地獄の説も見られる。これでは同一章内で矛盾してしまわないだろうか。このことに対する説明はない。

³⁷ この3色の対応は、ŚvetUp 4.5 においも見られるが、そこでは、白、赤、黒の順ではなく、赤、白、黒の順である。3種のグナを指すとも、熱（tejas）・水（āpas）・食物（annam）という3形態（torirūpa）を指すとも考えられている。第1章第2.4節を参照。

第3.5節 小結

第291章は未開展のものからマハット、アハンカーラが発生し、そして、アハンカーラから風・火・虚空・水・地の5粗大元素とその変異である声・触・色・味・香の5対象、計10種が同時に生みだされる。第3の創造が5粗大元素で、第4の創造である変異したものは、5つの対象のことである。そして、第5の創造として、知覚器官（耳・皮膚・両眼・舌・鼻）と行為器官（言葉・両手・両足・肛門・生殖器）とマナスが同時に5粗大元素から生みだされると考えられるが、マナスの性質については説かれていない。いずれにせよ、8つの根本原因と16の変異の説では、5粗大元素から5つの対象が生みだされたと想定できるが、ここでは、それらの10が、アハンカーラから生み出される並列パターンを想起させる。つまり、古典サーンキヤに見られるように、直列パターンが並列パターンに変わるアハンカーラの創造的機能につながるものではないだろうか。

また、第25番目は形なきものとして、第24番目の形あるものから切り離しているのも注目される。形なきものが形あるものに依存し、原理の内に含まれるということは、SKにおけるプルシャ独存につながることも解せられるであろう。また、タマス・サットヴァ・ラジャスはプラークリタ (prākṛta) と関連して説かれ、25番目（ヴィシュヌ）以外のあらゆるものに内在しているという、世界の構成要素でもあるSKの3種のグナにつながるものとも考えられる。また、先の『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』との類似も注目したい。さらに、この291章は、白・赤・黒の色が明確に3種のグナであると説き、ウパニシャッドの伝統を保持しつつ、サーンキヤの思想を展開した箇所となっている。

第4節 Mokṣadharmā-Parvan 第298章における24の原理と9の創造説

この節では「モークシャダルマ篇」第298章³⁸について取り扱う。この章では、8種の根本原因と16種の変異の説に類似した24の原理の説が見られるが、一方で、9の創造の説について説かれている。これら2種類の創造説による原理展開を考察する。

第4.1節 24の原理説：8種の根本原因と16種の変異

ここでの原理展開では、まず始めに、8つの根本と16の変異の説が見られる。それは次のように説かれる。

³⁸ ヤージュニャヴァルキヤ仙とジャナカ王の対話。

aṣṭau prakṛtayaḥ proktā vikārās cāpi ṣoḍaśa /
atha sapta tu vyaktāni prāhur adhyātmacintakāḥ // MBh 12.298.10

プラクリティは8つであり、また、変異 (vikāra) は16であると言われている。さて、内なるアートマンを思慮する者たち (adhyātmacintakāḥ) は、〔それら8つのプラクリティのうち〕顕現 (vyakta) は7つであると言う³⁹。

ここでは、プラクリティすなわち生み出すもの、根本的な原因として8つのものが、そしてその変異として16のものが確認できる⁴⁰。ただし、未顕現 (avyakta) 以外の7つは、顕現したものとされ、未顕現のものから生み出されたものということである。8つの根本原因がそれぞれ何であるかは次の11偈にあげられている。

avyaktaṃ ca mahāś caiva tathāhaṃkāra eva ca /
pṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam // MBh 12.298.11

〔8つのプラクリティとは〕未顕現 (avyakta)、マハット (mahat)、そしてアハンカーラ (ahaṃkāra) であり、さらに、地 (pṛthivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、〔粗大元素の〕5番目としての火 (jyotiś) である。

etāḥ prakṛtayas tv aṣṭau vikārān api me śṛṇu / MBh 12.298.12ab

さて、これら8つがプラクリティ (根本原因) である。また、〔16の〕変異 (vikāra) も私に聞け。

以上のように、8つのプラクリティとして、未顕現 (avyakta)、マハット (mahat)、アハンカーラ (ahaṃkāra)、地 (pṛthivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、火 (jyotiś) があげられている。しかし、未顕現以外の7つのものに関して、ここでは展開の順序は説かれておらず⁴¹、列挙されているだけである。ただし、203章などと列挙されている原理は一致する。第203章では5粗大元素のあげられている順序が異なり、この“pṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam”の一節は第187章とまったく同じである。

さらに続いて16の変異があげられるが、まずは、5つの知覚器官が教示される。

śrotraṃ tvak caiva cakṣuś ca jihvā ghrāṇaṃ ca pañcamam // MBh 12.298.12cd
耳、皮膚、目、舌、そして〔知覚器官の〕5番目としての鼻〔以上が16の変異のうちの5〕である。

³⁹ 中村氏は「内我の考察者たち (adhyātmacintakāḥ) は、〔次のものを〕八プラクリティと言う。」「[中村 1998a: p. 760] と訳している。

⁴⁰ その他、「モークシャダルマ篇」第294章でも確認できる。第298章では、24の原理をあげているだけだが、第294章では、25番目の原理として、古典サーンキヤのプルシャに対応するものがあげられている。

⁴¹ 同章の16偈から展開の順序が説かれているが、内容が一致しない。次節を参照。

次に、感覚器官の対象と行為器官が示される。

śabdasparsāu ca rūpaṃ ca raso gandhas tathaiva ca /

vāc ca hastau ca pādaḥ ca pāyur medhram tathaiva ca // MBh 12.298.13

そして、音声、接触、色、味、香り、さらに、発声器官（口）、両手、両足、肛門、生殖器〔以上が 16 の変異のうちの 10〕である。

以上のように、マナスを除く 15 の変異として、5 知覚器官（耳・皮膚・目・舌・鼻）、5 つの対象（音声・接触・色・味・香り）、5 行為器官（発声器官・両手・両足・肛門・生殖器）があげられている。これらの対応関係は、14 偈において説かれている。

ete viśeṣā rājendra mahābhūteṣu pañcaṣu /

buddhīndriyaṇy athaitāni saviśeṣāṇi maithila // MBh 12.298.14

王の中の王よ。これらは、5 粗大元素における区別（viśeṣa）である。そして、これらの知覚器官（buddhīndriyaṇi）は区別を伴うものである。ミティラーの王⁴²よ。

14ab の“ete”は何を指しているのでしょうか。14cd で、知覚器官は「差別を伴うもの」（saviśeṣāṇi）とされているので、おそらく 5 つの対象を指すと思われる。しかし、直前の 5 つの対象と 5 行為器官の 10 を指すとも考えられ、その場合は、5 行為器官の対応関係も説かれていることになる。そもそも、古典サーンキヤの開展説を鑑みれば、5 知覚器官、5 つの対象、5 行為器官という説明の並び方自体が不自然に思われる。第 203 章のように 5 知覚器官、5 行為器官、5 つの対象という並び方で説かれる方が妥当に思われる。ここでは、それぞれの 5 粗大元素から、知覚器官とそれぞれの対象が生起したという。5 粗大元素に対応してそれぞれの 5 知覚器官とその差別として対象があるということである。しかし、5 粗大元素の順番が対応していないことには注意すべきであろう。つまり、耳・音声は虚空と、皮膚・接触は風と、目・色は火と、舌・味は水と、鼻・香りは地と対応させるのが、順序として自然な流れであるが、この説を採用するに当たって前後関係を整理できていないのである⁴³。

一方、マナスは 16 番目として以下のようにあげられている。

manaḥ ṣoḍaśakaṃ prāhur adhyātmagaticintakāḥ /

tvaṃ caivānye ca vidvāṃsas tattvabuddhiviśāradaḥ // MBh 12.298.15

内なるアートマンの帰趨を思慮する者たち（adhyātmagaticintakāḥ）、すなわち原理の知識に精通した者たちである、あなたやそのほかの知者たちは、マナスが 16 番目であると言う。

⁴² ジャナカ王のこと。

⁴³ MBh 第 12 卷 187 章も同様の対応関係が見られる。

マナスはどこから生まれるのか、全く説かれていない。しかし、同じ章の中では、説かれているため、後に説明する。

つまり、8つの物質原理として、未顕現 (avyakta)、マハット (=ブッディ)、アハンカーラ、地、風、虚空、水、火をあげ、16の変異として、5種の知覚器官 (耳・皮膚・目・舌・鼻)、5種の行為器官 (発声器官・両手・両足・肛門・生殖器)、5種の対象 (音声、接触、色、味、香り)、マナスをあげている。

以上のように、ここでは展開の順序は説かれておらず⁴⁴、列挙されているだけである。しかし、次の第299章⁴⁵には、以下のように説かれる。

srjaty ahaṁkāram ṛṣir bhūtaṁ divyātmakam tathā /
caturaś cāparān putrān dehāt pūrvaṁ mahān ṛṣiḥ /
te vai pitṛbhyaḥ pitarah śrūyante rājasattama // MBh 12.299.7

聖仙は、神聖なる性質を持つ物質的アハンカーラを創造した。大聖仙は、他の4人の息子を、(粗大元素からなる) 身体より以前に、[創造した]。実に、彼等は、父達のための父であると言われている。最上の王よ。

devāḥ pitṛnām ca sutā devair lokāḥ samāvṛtāḥ /
carācarā naraśreṣṭha ity evam anuśūruma // MBh 12.299.8

最上の人よ。神々は、父達の息子であり、その神々によって、動くものと動かないもの [からなる] 諸々の世界は、覆われていると、このように伝え聞いている。

parameṣṭhī tv ahaṁkāro 'srjad bhūtāni pañcadhā /
pṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam // MBh. 12. 299. 9

しかるに、最高存在のアハンカーラは、5種の存在物 (bhūta) を創造した。地、風、虚空、水、[粗大元素の] 5番目の火である。

このように、アハンカーラから5粗大元素が生まれる事が説かれている。

この第298章において、8つの根本原因と16の変異の関係は、はっきりしない。おそらく、5つの知覚器官と5つの対象が5粗大元素からの展開することは想定できるが、文

⁴⁴ 同章の16偈から展開の順序が説かれているが、内容が一致しない。同章の16偈からの9つの創造と15偈までの24の原理との内容が矛盾しているのである。つまり、9の創造ではマナスから5大元素が生まれるのに対し、24の原理ではマナスは変異であって生み出す力は想定されていないのである。むしろ、アハンカーラから5大元素が生まれると考えられるのであって、そうなると、全く異なる原理展開になってしまう。おそらく、前半は「内なるアートマンを熟慮する者達 (adhyātmacintakāḥ)」の説で、後半は「覚者達 (budhāḥ)」の説であると考えられる。次の299章には、アハンカーラから5種の元素を創造する説を内なるアートマンを熟慮する者達に帰していることからこのことが想定されよう。いずれにせよ、この章の作者は、異なるサーンキヤ説を混交して取りいれてしまったのかもしれない。

⁴⁵ 内なるアートマンを熟慮する者達の説である。

脈上、5つの行為器官も5粗大元素から生み出されると考えることもできる。

第4.2節 9の創造説：アハンカーラからマナスが生じる説

16偈から24偈までは、マナスからの展開を説く特殊な箇所、創造の順序がはっきりと説かれている。

avyaktāc ca mahān ātmā samutpadyati pārthiva /

prathamam sargam ity etad āhuḥ prādhānikaṃ budhāḥ // MBh 12.298.16

未顕現 (avyakta) から、マハット・アートマン (mahān ātmā、大なるアートマン) が生じる。王よ。覚者たちは、これを、根本原質に関する第1の創造と言う。

マハット・アートマン (mahān ātmā、大なるアートマン) は、マハットと同義であり、ブッディに相当するものである。第1の創造は、未顕現からマハットすなわちブッディの創造である。

続いて、第2の創造について説かれる。

mahataś cāpy ahaṃkāra utpadyati narādhipa /

dvitīyaṃ sargaṃ ity āhur etad buddhyātmakaṃ smṛtam // MBh 12.298.17

さらに、マハットからアハンカーラが生じる。王よ。〔覚者たちは〕これを第2の創造と言ひ、ブッディを本性とするものと言われている。

第2の創造は、ブッディからアハンカーラの創造である。

ahaṃkāraś ca saṃbhūtaṃ mano bhūtaguṇātmakam /

trītiyaḥ sarga ity eṣa āhaṃkārika ucyaṭe // MBh 12.298.18

また、アハンカーラから、存在物のグナ（性質）を本性とするマナスが生じる。これが、アハンカーラに関する第3の創造と言われる。

これが第3の創造である。第3の創造では、アハンカーラからマナスが生じる。

第4の創造は次のように説かれる。

manasas tu samudbhūtā mahābhūtā narādhipa /

caturthaṃ sargaṃ ity etan mānaśam paricakṣate // MBh 12.298.19

そして、マナスから諸々の粗大元素が生まれる。王よ。〔覚者たちは〕これを、マナスに関する第4の創造と呼ぶ。

第4の創造は、マナスから5粗大元素の創造である。

śabdaḥ sparśaś ca rūpaṃ ca raso gandhas tathaiva ca /
pañcamam sargam ity āhur bhautikaṃ bhūtacintakāḥ // MBh 12.298.20

音声、接触、色、味、香りが〔5粗大元素から〕同様に〔生じる〕。存在物を思慮する者たちは、〔これらを〕粗大元素に関する第5の創造と言う。

第5の創造は、5つの対象である。これらは5粗大元素から生まれると考えられよう。

śrotraṃ tvak caiva cakṣuś ca jihvā ghrāṇam ca pañcamam /
sargam tu ṣaṣṭham ity āhur bahucintātmakam smṛtam // MBh 12.298.21

耳、皮膚、目、舌、〔知覚器官の〕5番目としての鼻〔が生じる〕。つまり、〔覚者たちは、これらを〕第6の創造と言い、多くの思慮を性質とするもの (bahucintātmaka)⁴⁶と知られている。

第6の創造は、5知覚器官である。これらは何から生み出されるのであろうか。ここでの原理展開は直線的な展開を想定しているようであり、5つの対象と考えられる。しかし、“bahucintātmaka”を「マナス性のもの」と考えれば、マナスからの展開も考えられる。

以下の7から9の創造は不明な点が多い。

adhaḥ śrotrendriyagrāma utpadyati narādhipa /
saptamam sargam ity āhur etad aindriyakam smṛtam // MBh 12.298.22

下方へと、聴覚作用〔などの〕一群が生じる。王よ。〔覚者たちは〕これらを、第7の創造と言い、感覚器官を本性とするものと言われている。

第7の創造では、知覚器官の作用が生じることを説いている。5つの知覚器官からそれぞれの作用が生まれることを説いているのであろうが、サーンキヤ思想では、知覚器官とその作用を分けることはあまり見られないように思われる。これに続いて第8と第9の創造が説かれるが、そこから何が生まれるかは明言されていない。本来ならば、行為器官が説かれることが想定されるが、そのことは全く言及されていない。

ūrdhvasrotas tathā tiryag utpadyati narādhipa /
aṣṭamam sargam ity āhur etad ārjavakam budhāḥ // MBh 12.298.23

上方への流れ (ūrdhvasrotas)、および水平 (tiryāñc) 〔の流れ〕が生じる。王よ。覚者たちは、これらを、直線的なものという第8の創造と言う。

⁴⁶ bahucintā から5つの知覚器官が生じるとも考えられるが、この bahucintā がいったい何を指しているのか明確ではない。中村氏は「多くの省察を性質とするもの」[中村 1998a: p. 761]と訳し、ニーラカント註を参照して“bahucintātmakam = mānasam”と解している。すなわち、「心的なもの」という解釈であろう。Ganguli は“... is regarded as having for its essence multiplicity of thought”[Ganguli 1975a: p. 35]と訳している。これも多様な思考を本質とするものであり、精神的なものを想定している。

tiryaksrotas tv adhaḥsrota utpadyati narādhipa /
navamam sargam ity āhur etad ārjavakam budhāḥ // MBh 12.298.24

しかし、水平の流れ (tiryaksrotas) は、下方への流れ (adhaḥsrotas) を生じる。王よ。覚者たちは、これらを、直線的なものという第9の創造と言う。

第8の創造は上方と水平の流れ、第9の創造は下方の流れが生じるとされる。下方の流れは水平の流れより生じるとされるが、上方と水平の流れはどこから生み出されるのであろうか。そもそも、この3つの流れは一体何のことであろうか。上昇、水平、下降、これらの3つの流れによって、創造が遍く広がっていくこと、すなわち、根本原質が遍充するということが説かれていると考えることもできる。第7の創造までは、現象世界を構成する原理の展開であるが、この3つの流れでは、原理にもとづいて実際に目に見える多様な物質の創造を説いているのかもしれない。

以上、9つの創造は、流出論と考える事ができよう。不明な点が多いが、マハットからアハンカーラが生まれ、アハンカーラからマナスが生まれ、そして、マナスから5粗大元素が生まれるということは明らかである。つまり、5粗大元素を生み出すものが、アハンカーラではなく、マナスなのである。

第4.3節 小結

このMBh第12巻298章では、まず、8種の根本物質と16種の変異の説が説かれる。、8つの物質原理として、未顕現 (avyakta)、マハット (=ブッディ)、アハンカーラ、地、風、虚空、水、火をあげ、16の変異として、5種の知覚器官 (耳・皮膚・目・舌・鼻)、5種の行為器官 (発声器官・両手・両足・肛門・生殖器)、5種の対象 (音声、接触、色、味、香り)、マナスをあげている。これらの関係は不明瞭で、創造の展開は明らかではない。

しかし、その直後に、原理の展開が説かれる。流出論と考える事ができる9つの創造である。そこでは、マハットからアハンカーラが生まれ、アハンカーラからマナスが生まれ、そして、マナスから5粗大元素が生まれるということが明らかにされている。すなわち、5粗大元素を生み出すものが、アハンカーラではなく、マナスなのである。

そして、その締めくくりとして次のように説かれる。

etāni nava sargāni tattvāni ca narādhipa /
caturviṃśatir uktāni yathā śrutinidarśanāt // MBh 12.298.25

王よ。これら9の創造と24の原理が、聖典が示している通りに語られた。

同章の16偈から24偈までの9つの創造と、前節で考察した10偈から15偈までの24の原理が同列に扱われているのである。だがしかし、両方の説はその内容において矛盾

点が存在する。つまり、9つの創造説ではマナスから5粗大元素が生まれるのに対し、24の原理ではマナスは変異であって生み出す力は想定されていないのである。むしろ、アハンカーラから5粗大元素が生まれると考えられるのであって、そうなると、全く異なる原理展開になってしまう。おそらく、前半は「内なるアートマンを熟慮する者達」(adhyāmacintakāḥ)の説で、後半は「覚者達」(budhāḥ)の説であると考えられる。次の299章には、アハンカーラから5種の元素を創造する説を内なるアートマンを熟慮する者達に帰していることからこのことが想定されよう。いずれにせよ、この章の作者は、異なるサーンキヤ説を混交して取りいれてしまったのかもしれない。

第5節 Nārāyaṇīya-Parvan における原理展開

ヴィシュヌ派の伝統の中で、早期に成立したものがパーンチャラートラ派であるが、その思想がMBhの中に見られる。それは「ナーラーヤニーヤ章」(Nārāyaṇīya-Parvan)と呼ばれ、MBh第12巻第321–339章が該当する。サーンキヤ思想はパーンチャラートラ派の宇宙論の形成に関して多大なる影響を与えたものであり、「ナーラーヤニーヤ章」の中にもその影響が見られる。本節では、MBh第12巻第327章と第326章に説かれるサーンキヤ思想を取り上げ、検証した。

第5.1節 第327章における8つの原理

まず、最初の原理として、至高のアートマン (paramātman) が言及される。

paramātmēti yaṁ prāhuḥ sām̐khyayogavido janāḥ /
mahāpuruṣasamjñām sa labhate svena karmaṇā // MBh 12.327.24

サーンキヤ・ヨーガを知る人々は、それ(カルパの始めにおいて展開したもの)を至高のアートマンと言った。それは、大なるプルシャ (mahāpuruṣa) という名を、自己の行為によって、獲得している。

それは、大なるプルシャ (mahāpuruṣa) とも呼ばれる。そして、それから展開するものは次の通りである。

tasmāt prasūtam avyaktam pradhānaṁ tad vidur budhāḥ /
avyaktād vyaktam utpannam lokasṛṣṭyartham īśvarāt // MBh 12.327.25

それから生じた未顕現 (avyakta) を覚者達はかのプラダーナ(根本原理、第一のもの)と知る。世界創造のために、主宰神 (īśvara) である未顕現 (avyakta)⁴⁷から顕

⁴⁷ 中村氏は「自在力ある未顕現」と訳す [中村 1998a: p. 949]。

現 (vyakta) が生じた。

すなわち、至高のアートマンから、未顕現 (avyakta) が展開する。そして、その未顕現から顕現 (vyakta) が生じるのである。未顕現から生まれるものは大なるアートマン (マハット・アートマン) である。それは、次のように、説かれる。

aniruddho hi lokeṣu mahān ātmeti kathyate /
 yo 'sau vyaktatvam āpanno nirmame ca pitāmaham /
 so 'haṁkāra iti proktaḥ sarvatejomayo hi saḥ // MBh 12.327.26

実に、〔それは〕世界において、アニルツダ、大なるアートマン (mahān ātmā、マハットというアートマン) と言われる。そして、この顕現性 (vyaktatva) を獲得したものの (アニルツダ) は、祖父を作り出した。それが、アハンカーラであると言われる。実に、それは、あらゆる光からなるもの (tejomaya) である。

この大なるアートマンは、Mokṣadharmā-Parvan の他の箇所や、MS の例から明らかなように、マハットと同義であり、SK ではブディに該当するものである。そして、この大なるアートマンからは、アハンカーラが出現する。

アハンカーラからの展開は次の通りである。

pṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /
 ahaṁkāraprasūtāni mahābhūtāni bhārata // MBh 12.327.27

地 (pṛthivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、〔粗大元素の〕5 番目としての火 (jyotiś)、〔これらの〕粗大元素は、アハンカーラから生み出されたものである、バラタ族の者よ。

アハンカーラからは、地 (pṛthivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、火 (jyotiś) という 5 粗大元素が生み出される。

以上のように、至高のアートマン→未顕現→大なるアートマン (マハット) →アハンカーラ→5 粗大元素というパターンが考えられる。至高のアートマンは、未顕現を生み出すこと、そして、大なるプルシャと呼ばれることから、SK で見られるような個々人の究極的主体としてのプルシャというより、原人としてのプルシャとしてのイメージを彷彿とさせる。そして、それ以外の 8 つの原理が、実際に世界を構成し、生み出すものとして考えられているのであろう。

第5.2節 第327章における原理と神格の対応

上述した原理展開において、3つの原理には、それぞれ神格が対応していることが見いだせる。すなわち、未顕現 (avyakta) には主宰神 (īśvara) が、大なるアートマンにはアニルツダが、アハンカーラには祖父 (pitāmaha) が対応している。この祖父はブラフマーのことである。それは次の偈から明らかである。

vedān vedāṅgasamyuktān yajñān yajñāṅgasamyutān /
nirmame lokasiddhyartham brahmā lokapitāmahaḥ / MBh 12.327.30abcd

諸々のヴェーダ補助学を含むヴェーダと、諸々のヤジュニャ補助学を含むヤジュニャを、世界の祖父であるブラフマー (=アハンカーラ) は、世界の完成のために創造した。

また、大なるアートマンに対応するアニルツダはヴェーハ神の一柱である。ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、アニルツダ、プラディユムナから成る、パーンチャラートラ派に特徴的なこの創造説は、すでに MBh においても言及される⁴⁸。しかし、この第327章の説では、他の3神は見いだせず、アニルツダのみが言及されている。

この章では、8種の根本原因と16変異の説に類似した原理展開が想定されるが、16変異は見いだせない。5粗大元素の展開以降は、不明な点が多い。まず、次のように説かれる。

mahābhūtāni sṛṣṭvātha tad guṇān nirmame punaḥ /
bhūtebhyaś caiva niṣpannā mūrtimanto 'ṣṭa tāñ śṛṇu // MBh 12.327.28

それ (アハンカーラ) は、諸々の粗大元素を創造し、次に、諸々のグナを作り出した。そしてまさに、諸々の存在物 (bhūta) から (のために?)、8つの物質形態を持つものが生じた。それらをあなたは聞け。

粗大元素の創造の後に、アハンカーラからグナが創造される。そして、次に8つの物質形態が生じる。8つの物質形態が如何なるものかは、次の偈に示される。

marīcir aṅgirās cātriḥ pulastyah pulahaḥ kratuḥ /
vasiṣṭhaś ca mahātmā vai manuḥ svāyambhuvas tathā /
jñeyāḥ prakṛtayo 'stau tā yāsu lokāḥ pratiṣṭhitāḥ // MBh 12.327.29

実に、[その8とは] マリーチ、アングラス、アトリ、プラスチック、プラハ、クラトゥ、そして偉大なる魂を持つものであるヴァスィシュタ、さらにマヌ・スヴァー

⁴⁸ 次節、第5.3節を参照

ヤンブヴァである。それらが、そこにおいて世界が安定しているところの8つのプラクリティであると知るべきである。

以上のように、8つの物質形態は8つのプラクリティと呼ばれ、それぞれ、マリーチ、アングラス、アトリ、プラスティヤ、プラハ、クラトゥ、ヴァスイシュタ、マヌ・スヴァーヤンブヴァという、聖仙たちの名が与えられている。聖仙たちが創造説に関与することは、『マヌ法典』を想起させるが、その説と一致するものではない。

8つの物質形態は何から生まれるのか。“bhūtebhyaḥ”を「存在物 (bhūta) から」と考えれば、5粗大元素から8つの物質形態が生じると考えることができるであろう。しかし、次のようにも説かれることも考慮したい。

āṣṭābhyāḥ prakṛtibhyaś ca jātaṃ viśvam idaṃ jagat // MBh 12.327.30ef

そして、8つのプラクリティから、このあらゆる世界は生まれた。

すなわち、8プラクリティということから、現象世界を生み出す原理として想定されているのであろう。8種の根本原因と16変異の説では、この8プラクリティは、未顕現、マハット、アハンカーラ、5粗大元素を示すものである⁴⁹。そのため、MBh 12.327.28での“bhūtebhyaḥ”が、「5粗大元素から」ではなく、「存在物のために」8つの物質形態が生まれたと解することもできる。そうすると、この8つの物質形態は、未顕現、大なるアートマン（マハット）、アハンカーラ、5粗大元素を示しているとも考えることもできる。いずれにせよ、これらの記述だけでは、確定することはできない。

変異については次のように説かれる。

rudro roṣātmako jāto daśānyān so 'srjat svayam /

ekādaśaite rudrās tu vikārāḥ puruṣāḥ smṛtāḥ // MBh 12.327.31

怒りの性質を持つルドラが生まれ、彼は、自ら他の10のものを生んだ。これら11のルドラは、変異したプルシャと言われる。

ルドラから、10のルドラが生まれ、合計11となったルドラは、変異したプルシャと呼ばれる。変異と呼ばれること、そして、1 + 10ということから、マナス、5知覚器官、5行為器官を示しているのかも知れない。

そして、次のように説かれる。

te rudrāḥ prakṛtiś caiva sarve caiva surarṣayah /

utpannā lokasiddhyartham brahmāṇaṃ samupasthitāḥ // MBh 12.327.32

まさにこれらのルドラたちとプラクリティとあらゆる神仙たちは、世界の完成のため

⁴⁹ MBh 12.203; 291; 298などで説かれる。その他、CS 4.1、BC 12などにおいも説かれる。

めに生まれたものであり、ブラフマーに近づいたものである。

11 のルドラたち、プラクリティ、聖仙たちが世界を完成させるために生まれたと言うことが説かれる。聖仙たちというのは先に挙げた8人のことであろうか。しかし、同定されているはずのプラクリティが単数で示され、判然としない。そして、これら世界を構成するものたちは、ブラフマーに近づいたということから、ブラフマーと同じく創造者としての機能を持つものと考えることができる。

以上のように、サーンキヤの原理展開と類似しながらも、神話的要素が混ざり、より一層複雑な展開を示している。

第5.3節 第326章における原理展開とヴェーハ説

ヴェーハ（配置）とは、パーンチャラートラ派の創造説の中で最も特徴的なものであり、4柱の神々の顕現である。その神々は、ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラディユムナ、ア Nil ッダである。サンカルシャナは別名 Balabhadra と呼ばれ、ヴァースデーヴァの兄である。また、プラディユムナとア Nil ッダはそれぞれヴァースデーヴァの息子と孫である。ヴェーハの神格は、上記の4名に Sāmba を足した、ヴリシュニ族の5人の英雄が元になっているとされるが、いつのころからか Sāmba は除外され、ヴァースデーヴァを頂点とするヴェーハが形成されたという⁵⁰。LT 第2章などで説かれる説では、これらの神が6つの属性の配分によりそれぞれ顕現する。「知識」(jñāna) と「力」(bala) の組み合わせはサンカルシャナ、「自在力」(aiśvarya) と「勇猛さ」(vīrya) の組み合わせがプラディユムナ、「潜在力」(śakti) と「光輝」(tejas) の組み合わせはア Nil ッダ、ヴァースデーヴァは6つの属性全てを備えるのである。

まず、第326章では、25の原理が想定されている。

*dvir dvādaśebhyas tattvebhyaḥ khyāto yaḥ pañcaviṁśakaḥ /
puruṣo niṣkriyaś caiva jñānadṛśyaś ca kathyate // MBh 12.326.23*

25番目と呼ばれるものが、24番目の原理より「超えて存在する」。それは、まさにプルシャ、無活動のものであり、知によって見ることができると言われる。

*yaṁ praviśya bhavantiha muktā vai dvijasattama /
sa vāsudevo vijñeyaḥ paramātmā sanātanaḥ // MBh 12.326.24*

再生族の最上者よ。彼に入ってまさにあなたたちに解脱があるところのその者がヴァースデーヴァであり、至高のアートマンであり、永遠なるものであると知るべきである。

⁵⁰ [Rastelli 2009: p. 444]

この25番目の原理がヴァースデーヴァである。そして、それはプルシャであり、至高のアートマンとされる。このような最高存在の特徴は次のようにも説かれる。

paśya devasya māhātmyaṃ mahimānaṃ ca nārada /
śubhāsubhaiḥ karmabhir yo na lipyati kadācana // MBh 12.326.25

神の威光と偉大さを見よ。ナーラダよ。善と悪の行為によって、その者はいかなる時も汚されない。

sattvaṃ rajasaṃ tamaś caiva guṇān etān pracakṣate /
ete sarvaśarīreṣu tiṣṭhanti vicaranti ca // MBh 12.326.26

まさにこれらのグナを、サットヴァ、ラジャス、タマスと呼ぶ。それら（グナ）はあらゆる身体において存在し、活動する。

etān guṇāṃs tu kṣetrajño bhūṅkte naibhiḥ sa bhujyate /
nirguṇo guṇabhuk ca eva guṇasraṣṭā guṇādhikaḥ // MBh 12.326.27

しかし、これら諸々のグナをクシェートラジュニヤは享受するが、それはこれらによっては享受されない。まさに〔その者〕は、グナがないもの、グナを享受するもの、グナの創造者、グナの超越者である。

このように、グナを越えたものであるのが、ヴァースデーヴァであり、ここではクシェートラジュニヤと呼ばれている。それは何によっても汚されず、純粹で清浄であり、グナを享受することから、SKのプルシャのごとく観照する存在としても示されている。

次にこのような最高存在への帰滅の様子が説かれる。

jagatpratiṣṭhā devarṣe pṛthivy apsu pralīyate /
jyotiṣy āpas pralīyante jyotir vāyau pralīyate // MBh 12.326.28

世界の基盤である地は水に帰滅する。神仙よ。水は火に帰滅し、火は風に帰滅する。

khe vāyuhḥ pralayaṃ yāti manasy ākāśaṃ eva ca /
mano hi paramaṃ bhūtaṃ tad avyakte pralīyate // MBh 12.326.29

風は虚空に帰滅する。そしてまさに虚空はマナスに〔帰滅する〕。実に最高の存在物であるマナスは未顕現に帰滅する。

avyaktaṃ puruṣe brahman niṣkriye saṃpralīyate /
na asti tasmāt parataraṃ puruṣād vai sanātanāt // MBh 12.326.30

未顕現は無活動のプルシャに帰滅する。バラモンよ。その永遠なるプルシャより高次なるものは存在しない。

ここでの帰滅のラインは次の通りである。

地→水→火→風→虚空→マナス→未顕現→プルシャ

ここでは、アハンカーラやブッディに相当するものが見られない。また、プルシャとヴァースデーヴァは、同一のものと考えられている。23 偈でもすでに説かれており、またここでも、それよりも高次のものが存在しないと明言していることから明らかであろう。そして、そのヴァースデーヴァであるプルシャへと世界が帰滅していくことから、一元論的な創造説を読み取ることができる。

また、粗大元素については次のようにも説かれる。

pr̥thivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /
te sametā mahātmānaḥ śarīram iti saṃjñitam // MBh 12.326.32

地、風、虚空、水、そして〔粗大元素の〕5 番目としての火がある。それら大なる原理 (mahātman) の集合したものが、身体と呼ばれる。

原理の展開については、言及されていないが、帰滅の逆をたどるのであれば、虚空→風→火→水→地という展開が想定できるであろう。そしてこの5粗大元素が身体を構成するものとして説かれている。

一方、身体を活動させるものとして、ジーヴァが説かれる。

na vinā dhātusaṃghātaṃ śarīraṃ bhavati kvacit /
na ca jīvaṃ vinā brahman dhātavaś ceṣṭayanty uta // MBh 12.326.34

どこにおいても、要素 (=粗大元素) の集合なしに、身体は存在しない。バラモンよ。そして、ジーヴァなしに、諸々の要素は、〔身体を〕活動させることさえできない⁵¹。

粗大元素の集合なしには身体は存在できず、また、ジーヴァなしには身体は活動することができないのである。また、身体には、「見られることのできない、速い足取りのもの」が入るとされる。

tad āviśati yo brahmann adṛśyo laghuvikramaḥ /
utpanna eva bhavati śarīraṃ ceṣṭayan prabhuh // MBh 12.326.33

バラモンよ。見られることのできない、速い足取りのもの⁵²が、それ (身体)⁵³に

⁵¹ プーナ版では、“dhātavaś”ではなく“vāyavaś”[Nīlakaṇṭha et al. 1988: p. 246]となっており、中村氏は「〔五〕風は〔身体を〕活動させることができない。」と訳している。[中村 1998a: p. 932]

⁵² “laghuvikrama”は、「軽く、素早いステップ」という意味であるが、Ganguli は“the puissant Vasudeva”[Ganguli 1975a: p. 135]と訳す。中村氏は「足の速いもの」と訳し、ヴァースデーヴァと解するGanguli 訳を参照している [中村 1998a: p. 932]。

⁵³ Ganguli は“that combination of the five primal elements, called body”[Ganguli 1975a: p. 135]と訳しており、著者もそれに従い身体と解した。

入ってくる。まさに〔それが〕生起したものであり、身体を活動させる力強いものである。

この「見られることのできない、速い足取りのもの」は Ganguli に従えば、ヴァースデーヴァを意味すると考えられるかもしれないが、生起したものであり、身体を活動させる力強いものであることから、ジーヴァと考える方が妥当であろう。それはまた、次のようにも説かれるからである。

sa jīvaḥ parisamkhyātaḥ śeṣaḥ samkarṣaṇaḥ prabhuḥ / MBh 12.326.35

そのジーヴァは、シェーシャ（韃）、サンカルシャナ、プラブ（力強きもの）が〔異名として〕列挙される。

このように、ジーヴァはサンカルシャナと見なされる。

tasmāt sanatkumāratvaṃ yo labheta svakarmanā // MBh 12.326.35cd

yasmimś ca sarvabhūtāni pralayaṃ yānti samkṣaye /

sa manaḥ sarvabhūtānāṃ pradyumnaḥ paripaṭhyate // MBh 12.326.36

それ（ジーヴァ）より自らの行為によってサナトクマーラ性を把握するもの、そして、そこにおいてあらゆる存在物が消滅のときに還滅にいたるところのもの、それが、あらゆる存在物にとってのマナスであり、プラディユムナと言及される。

後に明言されるが、ジーヴァすなわちサンカルシャナからプラディユムナが生起することが想定されている。そして、そのプラディユムナはマナスと同一視されている。さらに、万物が帰滅するところともされる。

次にア Niludda も登場する。

tasmāt prasūto yaḥ kartā kāryaṃ kāraṇaṃ eva ca /

yasmāt sarvaṃ prabhavati jagatsthāvarajaṅgamam /

so 'niruddhaḥ sa īśāno vyaktiḥ sā sarvakarmasu // MBh 12.326.37

それより生じた、まさに、作者、結果、原因であるもの、それより世界の動かないものと動くものの全てが生じるところのもの、それがア Niludda であり、それが支配者であり、それはあらゆる行為における顕現である。

プラディユムナからア Niludda が現れるのである。そしてそのア Niludda は、すべてが生じるところであり、顕現とも言われる。

このように、4 ヴューハ神について説かれたが、また次のようにも説かれる。

yo vāsudevo bhagavān kṣetrajñō nirguṇātmakaḥ /

jñeyaḥ sa eva bhagavāñ jīvaḥ samkarṣaṇaḥ prabhuḥ // MBh 12.326.38

聖なるヴァースデーヴァはクシェートラジュニヤ（知田）であり、グナを持たないことを本質とするものであり、まさにそれこそが、聖なるジーヴァであり、サンカルシャナであり、プラブ（力強きもの）であると知るべきである。

ここは非常に疑問が残る箇所である。ヴァースデーヴァとクシェートラジュニヤが、そして、サンカルシャナとジーヴァが同一であることがすでに説かれたものである。だが、ここでは、ヴァースデーヴァとサンカルシャナが同一であるとみなすことができる。これでは、矛盾が生じてしまう。ここでは、ヴァースデーヴァからサンカルシャナが生起すると捉えるべきところである。あるいは、ヴァースデーヴァとサンカルシャナは、その本質は変わらず、単なる現れの違いにすぎないということが想定されているのかもしれない。

これらビューハ神が、諸原理と対応することが次の偈に説かれる。

saṅkarṣaṇāc ca pradyumno manobhūtaḥ sa ucyate /

pradyumnād yo 'niruddhas tu so 'hamkāro maheśvaraḥ // MBh 12.326.39

そして、サンカルシャナからプラディユムナが〔現れる〕。それ（プラディユムナ）はマナス原理と言われる。一方、プラディユムナからア Niludda が〔現れる〕。それ（ア Niludda）はアハンカーラであり、マヘーシュヴァラである。

サンカルシャナからプラディユムナが現れ、プラディユムナからア Niludda が現れる。すなわち、次のような展開となる。

サンカルシャナ→プラディユムナ→ア Niludda

そして、プラディユムナはマナスに、ア Niludda はアハンカーラと同定される。サンカルシャナはジーヴァであることはすでに説かれているため、次のことが想定できる。

ジーヴァ→マナス→アハンカーラ

ジーヴァとクシェートラジュニヤ別に見る説は MS 12 に見られるが、ここでは同一に見た方が矛盾が生じない。マナスからアハンカーラが生起する説は、MS 1 に見られ、ここでは、マハット・アートマン→マナス→アハンカーラのライン想定されている。ここと同じく、本来のサーンキヤ説との逆転が起きているのである。

つづいて、またすでに説かれたものと同様に、最高神の万能性、清浄性が繰り返し説かれる。

mattaḥ sarvaṃ sambhavati jagatsthāvaraṅgamam /

aḁsaraṃ ca ḁsaraṃ caiva sac cāsac caiva nārada // MBh 12.326.40

私から世界の動かないものと動くものの全てが生じる。そしてまさに、不滅と消滅が、そしてまた、存在と非存在が〔生じる〕。ナーラダよ。

māṃ praviśya bhavantīha muktā bhaktās tu ye mama /
 ahaṃ hi puruṣo jñeyo niṣkriyaḥ pañcaviṃśakaḥ // MBh 12.326.41

さて、私を信愛する者たちは、私に入り、この世界において、解放された者となる。実に、私は、プルシャであり、活動から離れたものであり、25番目のものと知るべきである。

nirguṇo niṣkalaś caiva nirdvaṃdvo niṣparigrahaḥ /
 etat tvayā na vijñeyaṃ rūpavān iti dṛśyate /
 icchan muhūrtān naśyeyam īśo 'haṃ jagato guruḥ // MBh 12.326.42

そしてまさに、〔私は〕グナから離れたものであり、部分から離れたもの（分割されないもの）であり、対立から離れたものであり、所有から離れたものである。あなたによって、このことは理解されていなく、〔私は〕形あるものとして見られている。望めばすぐに私は滅することができる。〔なぜなら〕私は世界の支配者であり、師である〔から〕。

このように、最高神の性質が説かれた。

そして、次のように説かれる。

māyā hy eṣā mayā sṛṣṭā yan māṃ paśyasi nārada /
 sarvabhūtaguṇair yuktaṃ naivaṃ tvaṃ jñātum arhasi /
 mayaitat kathitaṃ samyak tava mūrticatuṣṭayam // MBh 12.326.43

あなたが私に見ているもの、実に、これが私によって創造されたマーヤーである。ナーラダよ。あらゆる存在物のグナによって結びつけられたものを、あなたは決して理解することができない。私によって、この4種の顕現は、あなたに対して正しく語られた。

このように、4 ヴューハ神の顕現が説かれるが、マーヤーであることが明かされる。

以上のように、ヴューハ神と原理を同定した説が見られる。その展開は次のパターンが見いだされる。

1. プルシャ→未顕現→マナス→虚空→風→火→水→地
2. (ヴァースデーヴァ) →サンカルシャナ→プラディコムナ→アニルツダ
3. (プルシャ) →ジーヴァ→マナス→アハンカーラ

1 は帰滅のラインを逆にしたものである。プラディコムナとマナスが、サンカルシャナとジーヴァが同一にみなされていることは明らかであり、そのことから、サンカルシャナと未顕現を同一とみなすことができるかもしれないが、そうなると、虚空、アニルツダ、アハンカーラの関係に矛盾が生じる。あるいは、創造と帰滅のラインは異なるのかもしれない。

い。プラディユムナは万物が帰滅するところとされ、ア Nil ッダは生じるところされるからである。すなわち、創造に際してはアハンカーラであるア Nil ッダから虚空が生じ、帰滅に際してはマナスであるプラディユムナに虚空が帰滅するのである。先に先に取り上げた第327章の説⁵⁴ではアハンカーラから粗大元素が生まれる説が見られるが、ア Nil ッダはマハット・アートマンと同定されている。このように、ヴェーハ神と原理の対応は一定していないようである。引田氏によると、ヴェーハ神と原理を同定する説は、かなり混乱が見られるようであり、例えば、LT第6章ではサンカルシャナをアハンカーラなどに、プラディユムナをブッディに、ア Nil ッダをマナスに、当てはめる説があると指摘している。また、後代になると同定ではなく、管轄者とみなす傾向も認められるという。初期にはパーチャラートラの内部ではあまり重要視されていなかったが、シャンカラが取り上げて以来、問題が顕在化したとされる⁵⁵。

第6節 *Bhagavadgītā* における世界構成原理

本節では、『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavadgītā*) における構成原理と3種のグナについて説かれた箇所をいくつか取り上げ考察する。サーンキヤ思想に関連した創造説の記述は少ないが、特徴的な思想が見られる。

第6.1節 マナスからの創造

『バガヴァッド・ギーター』第7章(= MBh 第6巻29章)には、マナスが根本原因の一つとして挙げられている。

bhūmir āpo analo vāyuḥ khaṃ mano buddhir eva ca /
ahaṃkāretīyaṃ me bhinnā prakṛtir aṣṭadhā // MBh 6.29.4

実に、地、水、火、風、空、マナス、ブッディ、アハンカーラというこの私のプラクリティは、8種に分かれている。

プラクリティ(根本原因)として、地(bhūmi)、水(āpas)、火(anala)、風(vāyu)、虚空(kha)⁵⁶、マナス(manasa)、ブッディ(buddhir)、アハンカーラ(ahaṃkāra)の8つがあげられている。

根本原因として8種のをあげる説は随所で見られる⁵⁷。それらは、いずれも8種の根本原因として、未顕現、ブッディ、アハンカーラ、5粗大元素をあげている。一方、

⁵⁴ 第2章第5.1節を参照。

⁵⁵ [引田1997: p. 61]

⁵⁶ 虚空の原語として“kha”を用いる例はCSに見られる。第4章第1節を参照。

⁵⁷ MBh 12.203; 291; 298、CS 4.1、BC 12 などにおいてである。

『バガヴァッド・ギーター』の説では、未顕現に相当するものがなく、代わりにマナスがあげられている。マナスが創造的機能を有する説は、MBh 第12巻298章で見られる⁵⁸。ここではその直前に8種の根本原因の説があげられた矛盾した展開が見られるところでもある。また、MS 第1章ではマナス→マハット→ブッディという創造のラインが想定され⁵⁹、MBh 第12巻326章ではマナスからアハンカーラが生み出されることが想定されている⁶⁰。マナスが創造説に関与することは、『リグ・ヴェーダ』に遡ることも可能であるが、SK などでは全く見られないものである。その代わりに、アハンカーラの創造的機能の重要性が増している。これらのマナスの創造的機能は、サーンキヤ説がいまだ未整理であることを物語っている。

ところで、プラクリティに関しては次のようにも説かれる。

apareyam itas tv anyāṃ prakṛtiṃ viddhi me parām /
jīvabhūtāṃ mahābāho yayedam dhāryate jagat // MBh 6.29.5

しかしこれは低次のものであって、それとは別の、私の高次のプラクリティを知れ。
〔それは〕生命をかたちづくるもの、それによりこの世界は維持されている。長い手を持つものよ。

8つのプラクリティはあくまでも低次であり、それとは別に高次のプラクリティをたてているのである。これが未顕現に相当するののか、あるいは、プルシャに相当するののか、このような簡潔な説明の中では分からない。

いずれにせよ、『バガヴァッド・ギーター』においては、マナスに何らかの生み出す機能が想定され、サーンキヤ説に類似した原理があげられているのである。

第6.2節 *Bhagavadgītā* における3種のグナと生まれの3段階

3種のグナと生まれの3段階は、この『バガヴァッド・ギーター』においても説かれる。以下では、『バガヴァッド・ギーター』第14章(= MBh 第6巻第36章)における3種のグナ説をいくつか取り上げ考察する。

まずは、サットヴァについて次のように説かれる。

yadā sattve pravṛddhe tu pralayaṃ yāti dehabhṛt /
tadottamavidāṃ lokān amalān pratipadyate // MBh 6.36.14

さて、生類は、サットヴァが増大して死ぬとき、最上を知るもの達の汚れなき世界に到達する。

⁵⁸ 第2章第4.2節を参照。

⁵⁹ 第3章第3節を参照。

⁶⁰ 第2章第5.3節を参照。

サットヴァは清浄な世界へ導くものとして説かれる。一方、ラジャスとタマスは次のように説かれる。

rajasi pralayam gatvā karmasaṅgiṣu jāyate /
tathā pralīnas tamasi mūḍhayonisu jāyate // MBh 6.36.15

ラジャス〔が増大して〕死に向かうと、行為に執着するものたちのもとに生まれる。
また、タマス〔が増大して〕消滅すると、愚かなものたちの胎の中に生まれる。

ラジャスは行為に執着するものに、タマスは愚かなものに生まれる。サットヴァは清浄な「世界」へと至るといふのだが、ラジャスとタマスは再び「人のもとあるいは胎」へと生まれるという相違がある。サットヴァは、神の世界や祖霊の世界へと至るイメージで、ラジャスとタマスは輪廻するイメージであろう。どちらも、人のみについて言及されているようである。

また、行為に関連して次のように説かれる。

karmaṇaḥ sukṛtasyāhuḥ sāttvikam nirmalam phalam /
rajasas tu phalam dukkham ajñānam tamaṣaḥ phalam // MBh 6.36.16

善なる行為からサットヴァ性の汚れがない結果となると言われる。しかしながら、ラジャスの結果は苦であり、タマスの結果は無知である。

sattvāt samjāyate jñānam rajaso lobha eva ca /
pramādamohau tamaso bhavato 'jñānam eva ca // MBh 6.36.17

サットヴァから知識が生まれ、また、まさにラジャスから貪欲が〔生まれる〕。タマスから怠慢と迷妄が、そして無知が生じる。

サットヴァは、善行、それによる汚れ無い結果、知識と関係する。ラジャスは、苦、貪欲に関係し、タマスは怠慢、迷妄、無知と関係する。善行はサットヴァと関連するが、悪行は何と関連するか説かれていなく、語句の統一がとれていないようである。

そして、3段階に関して、次のように説かれる。

ūrdhvaṃ gacchanti sattvasthā madhye tiṣṭhanti rājasāḥ /
jaghanyaguṇavṛttasthādho gacchanti tāmasāḥ // MBh 6.36.18

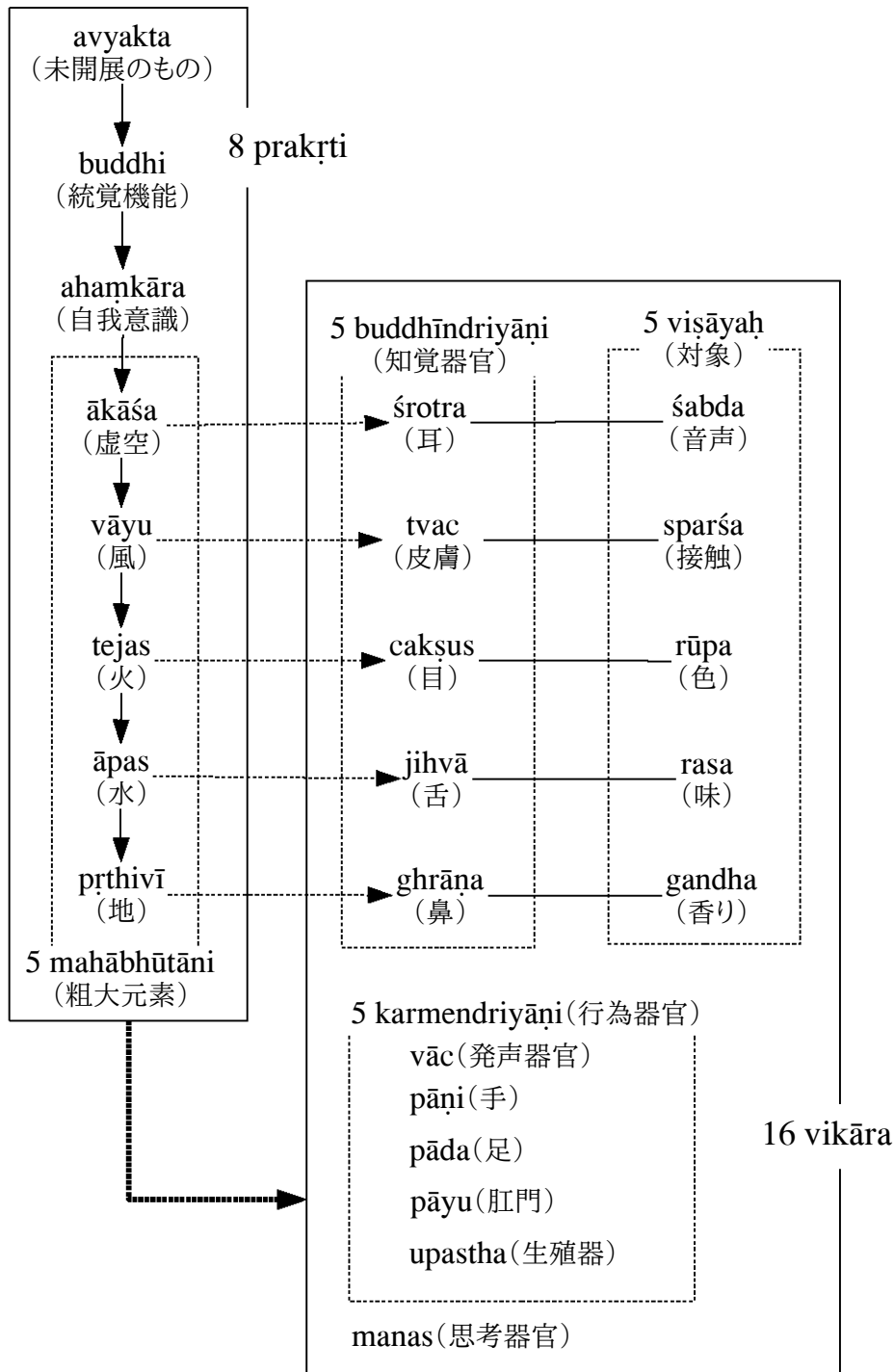
サットヴァに依存するものは上方に行き、ラジャス性のものは中間に止まり、最低のグナ（要素）の活動に依存するタマス性のものは下方に行く。

このように、サットヴァは上方、ラジャスは中間、タマスは下方に行くことが説かれる。

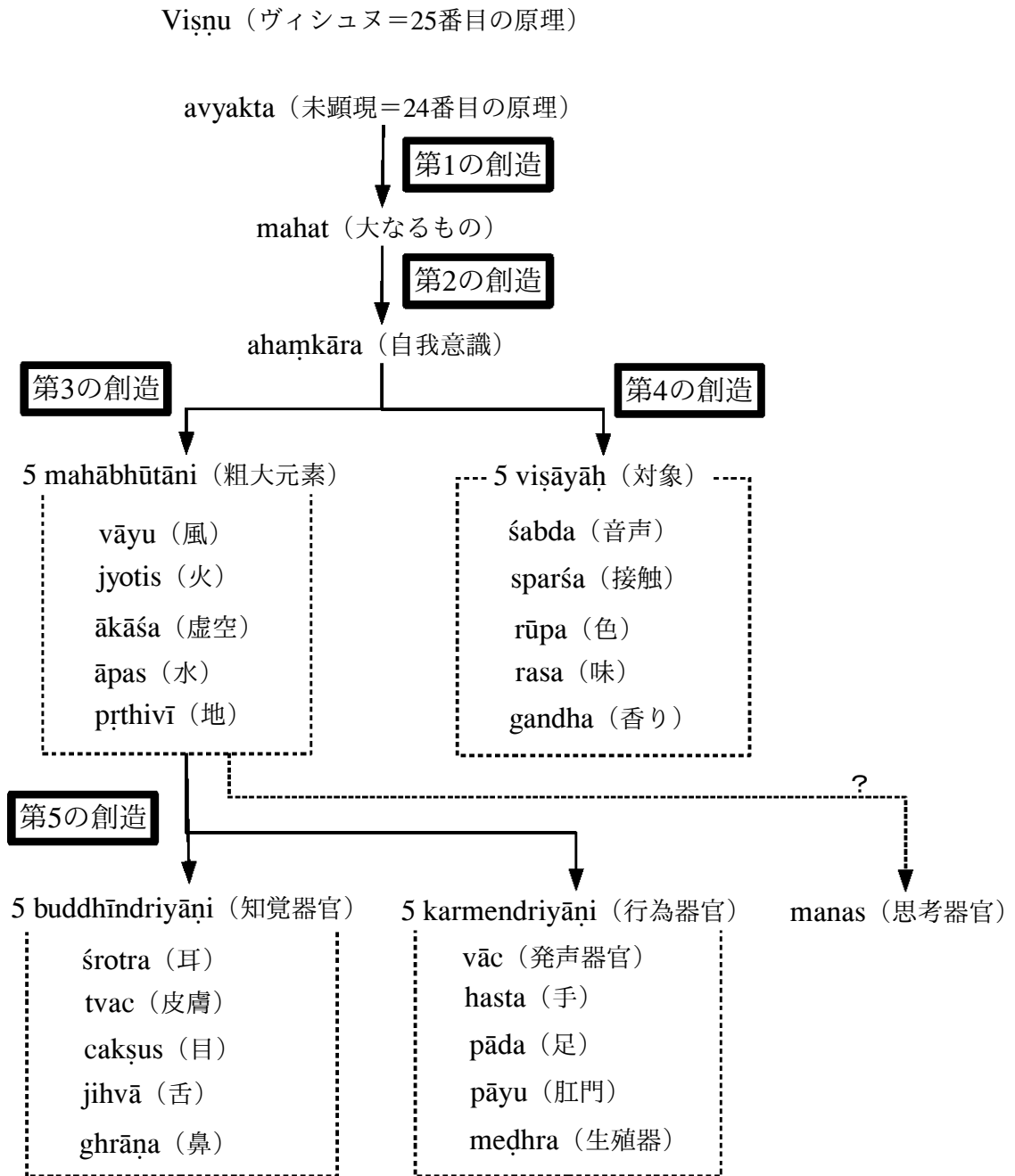
サットヴァ性は上方と汚れなき世界への到達、ラジャス性は中間と行為に執着するものたちへの輪廻、そして、タマス性は下方と愚かなものたちへの輪廻に関係する。3種のグ

ナと生まれの3段階について説かれて入るが、SK などのように、神・人・獣とは、はっきりと書かれていない⁶¹。タマス性が向かう愚かなものたちへの輪廻が獣のこととも考えられるが、先にも述べたように、人に関してのみ言われているように思われる。いずれにせよ、サットヴァは良いもの、ラジャスとタマスは良くないものであり、3種のグナを越えていくのではなく、サットヴァ性を増大させることが重要視されているようである。

⁶¹ 上村氏は、「シャンカラ（8世紀頃）の註によれば、「上方」は天界を、「中間」は人間界を、「下方」は獣などを指すという。ラーマヌジャ（11～12世紀頃）の註によれば、「上方に行く」とは、次第に輪廻の束縛から解放されること、「中間に止まる」とは、天界などの下方を求め、それを享受してからこの世に再生すること、「下方に行く」とは、最低の状態から動物、虫、・・・・・・石、木、土塊、草などの状態に行くこと。『マハーバーラタ』および『マヌ法典』を考慮すると、シャンカラの説が良い」と説明している [上村 1992: p. 205]。



図表9 MBh 12.203 における8種の根本原質と16種の変異の展開



図表 10 MBh 12.291 における原理展開

第3章

Manusmṛti における世界構成原理

第1節 Manusmṛti 第12章におけるアートマン

MS 第12章は輪廻を主題としており、「この思想がダルマ文献の中に積極的に取り入れられたのは、『マヌ法典』において始めて」と考えられている¹。輪廻についてだけでなく、心のあり方やアートマンなどについても説かれ、そこにはサーンキヤ思想の述語も登場する。本節では、MS 第12章におけるアートマンに類似した概念を持つ原理をいくつか取り上げ、考察を行った。

第1.1節 心の機能

古典サーンキヤにおいて、心の機能は3つの器官が担う。すなわち、ブッディ、アハンカーラ、マナスである。マナスが5知覚器官や5行為器官からの情報をアハンカーラに運び、アハンカーラが自己に関連づけ、そして、ブッディが決定の作用をなすという、それぞれの機能が3つの器官に配分されている。

古典サーンキヤにおけるマナス (manas、思考器官) は、思惟する性質を有し3つの内的器官の一つに過ぎないのであるが、しかし、MS でのマナスの機能はこの古典サーンキヤのものとは異なる。それは、以下のように説かれる。

śubhāśubhaphalaṃ karma manovāgdehasaṃbhavam /

karmajā gatayo nṛṇām uttamādhamamadhyamāḥ // MS 12.3

行為は心²と言葉と身体により生じ、善悪の結果を有する。人間の帰着点は行為によって生じ、上、中、下に分かれる³。

¹ [渡瀬 2013: p. 516]

² 原文は“manas”である。

³ 3種のグナに基づく、生まれの3段階のことである。第3章第2節を参照。

行為が生じる場所あるいは原因は、心、言葉、身体の3つに分類され、それにより善悪の結果が生じることが説かれる。この心というものがマナス (*manas*) として説かれている。

心 (マナス) には、さらに3つの分類があり、それは次のように説かれる。

paradravyeṣv abhidhyānaṃ manasāniṣṭacintanam /
vitathābhiniveśāś ca trividhaṃ karma mānasam // MS 12.5

他人の財産をむやみに欲しがると、良くないことを心に思う、誤った考え方に夢中になる——これらの三種は心⁴による行為である。

他人の財産を欲しがること、良くないことを思うこと、誤った考えに夢中になること、これらが心の3種として説かれている。

また、次のようにも説かれる。

mānasam manasaivāyam upabhuṅkte śubhāśubham /
vācā vācā kṛtaṃ karma kāyenaiva tu kāyikam // MS 12.8

人は心⁵でなされた行為の善悪〔の果実 (結果)〕を心で味わい⁶、言葉でなされた行為〔の果実〕を言葉で、身体でなされた行為〔の果実〕を身体で〔味わう〕。

心 (マナス) でなされた行為の結果を心 (マナス) によって享受するということである。

以上のように、ここでは、心 (マナス)、言葉、身体からなる3つの行為が、輪廻の原因を為すということが説かれている。また、心 (マナス) でなされた行為の善悪は心 (マナス) で享受され、言葉や身体と3つのセットと見なされていることから、ここでのマナスは、一般的な「心」全体を指すと考えた方が良いであろう。

しかし、マナスについては次のようにも説かれる。

tasyeha trividhasyāpi tryadhiṣṭhānasya dehinaḥ /
daśalakṣaṇayuktasya mano vidyāt pravartakam // MS 12.4

この世における身体を有する者にとって、意 (マナス) は、三種 (心、言葉、身体) からなり、三種の住処 (上、中、下の帰着点) を有し、十の特相を持つもの (すなわち行為) の発動者⁷であると知るべきである。

マナスについての性質が説かれる箇所であるが、そのマナスに活動因としての性質が見られる。渡瀬氏に従えば、“trividha” は心・言葉・身体であり、“tryadhiṣṭhāna” は上・中・下の

⁴ マナス性のもの (*mānasa*)

⁵ “*mānasa*”、すなわち「マナス性のもの」。

⁶ すなわち、「マナスによって享受する」ということ。

⁷ 「行動を引き起こすもの」 (*pravartaka*) である。

帰着点を意味する⁸。一方、Olivelle は、“trividha” (three kinds) を “highest”、“middling”、“lowest” とし、“tryadhiṣṭhāna” (three bases) を “mind”、“speech”、“body” とする⁹。両者の解釈は相違するが、内容的には齟齬するものではない¹⁰。さらに、渡瀬氏は、このマナス（意）を、クシェートラジュニヤと同一に見ている¹¹。そのため、ここでのマナスは、「心」ではなく、「意」と翻訳しているのであろう。渡瀬氏の解釈に従えば、MS 12.4 のマナスを個々人の主体として考えることができ、先に述べた心としてのマナスとは異なるものと解釈できるであろうが、やや強引のようにも思える。この箇所だけでの判断は難しく、むしろ MS が様々な思想を折衷していく上で、統一性を欠いてしまったとみなすべきであろう。

以上のように、心を意味するものとしてマナスが説かれるが、続く 10、11 偈においては、ブッディが登場する。

vāgdaṇḍo 'tha manodaṇḍaḥ karmadaṇḍas tathaiva ca /
yasyaite niyatā buddhau tridaṇḍīti sa ucyate // MS 12.10

言葉の抑制、心¹²の抑制、身体の抑制——これらが意識（ブッディ）において確立している者は「三種の抑制を有する者」（トリダンディン）と呼ばれる。

tridaṇḍam etan nikṣīpya sarvabhūteṣu mānavaḥ /
kāmakrodhau ca saṃyamya tataḥ siddhiṃ niyacchati // MS 12.11

人はすべての生き物に対してこの三種の抑制を保持し、欲望と怒りを抑えるならば、その後、成就を手中にする。

言葉の抑制、心の抑制、身体の抑制がブッディにおいて確立されるという。そしてその抑制状態を維持させることが重要であると考えられている。つまり、ブッディにコントロールの機能（統覚機能）が与えられているのであり、それにより言葉・心・身体を抑制するのである。以上のように、MS 第12章では、古典サーンキヤにおいて説かれている3つの内的器官のうちマナスとブッディが説かれているが、アハンカーラについては何も説かれていない。そして、3つの内的器官に機能を分けるのではなく、マナスのみで心一般を表し、ブッディは、上位概念として、コントロールする機能を有している。

⁸ [渡瀬 2013: p. 428]

⁹ [Olivelle 2005: p. 347]

¹⁰ MS 12.40 で「三種の帰着点」として“trividhā gatih” という文が使用されているので、ここでは、Olivelle の解釈がより正確である考える。

¹¹ [渡瀬 2013: p. 496]

¹² 原文は“manas”である。

第1.2節 アートマンとクシェートラジュニヤ

MS 第12章には、自己の主体に関して言及している箇所があり、そこにおいて、エピク・サーンキヤ説の述語が見られる。

yo 'syātmanah kārāyitā taṃ kṣetrajñam pracakṣate /
yaḥ karoti tu karmāṇi sa bhūtātmocyate budhaiḥ // MS 12.12

この〔生き物の〕本体（アートマン）を作動させる主体¹³をクシェートラジュニヤ（身体を知るもの。すなわち意識）と賢者たちは呼ぶ。一方、行為を行う主体はブータートマン（生き物の本体）と呼ばれる。

まず、ここでは、アートマン (*ātman*)、クシェートラジュニヤ (*kṣetrajña*)¹⁴、ブータートマン (*bhūtātman*) という3つの概念が示される。渡瀬氏はアートマンを「本体」とし、クシェートラジュニヤを「身体を知るもの、すなわち意識」、ブータートマンを「生き物の本体」と説明する¹⁵。一方、Olivelle はアートマンを“body”とし、クシェートラジュニヤを「身体とその活動を観察するものとしての精神」、ブータートマンをあまり明確ではないとしながらも「物質的要素から成る自己」と説明する¹⁶。また、中野氏は、様々な注釈書に依りつつ、アートマンを「肉体、または三座を含む粗大可見の肉身」とし、クシェートラジュニヤを「ジーヴァ、または最高我 (*paramātman*)」、ブータートマンを「元素すなわち地水等から成る、またはその変容たる肉身、非感性の形すなわち元素等を有する自我、またはジーヴァ」と説明する¹⁷。ここでは、ブータートマンを活動する本体とし、同偈に説かれるアートマンと同義と考えられる。それに対し、クシェートラジュニヤは、主体として、ブータートマンより高次の存在として想定されている。

さらに、もう一つの別の主体的存在が説かれる。

jīvasaṃjño 'ntarātmānyaḥ sahaḥ sarvadehinām /
yena vedayate sarvaṃ sukhaṃ duḥkhaṃ ca janmasu // MS 12.13

ジーヴァ（生命体）と呼ばれる別の内部のアートマン（アンタラートマン）がある

¹³ 行為を起こさせるもの (*kārāyitā*)

¹⁴ クシェートラジュニヤとは、土地（クシェートラ）を知るもの（ジュニヤ）という意味で知田者と言われる。この土地というのが物質原理のことであり、古典サーンキヤでのプラクリティに該当する。そして、クシェートラジュニヤはブルシャに該当する。

¹⁵ [渡瀬 2013: pp. 429–430]

¹⁶ [Olivelle 2005: p. 230]

¹⁷ [中野 1951: p. 465]

が¹⁸それは身体を有するすべてのものとともに生まれる¹⁹。それによって〔身体を有するすべてのものは〕諸々の生においていっさいの苦楽を感知する。

このように、クシェートラジュニャとブータートマンとは別に、ジーヴァと呼ばれるものが存在するという。Johnston も、ここでのジーヴァを、「クシェートラジュニャやブータートマンと反対のもの」とし、「全体的に身体を活動的にさせる機能は失われている」と説明する²⁰また、Olivelle は、このジーヴァについて、「一般的には、身体の中にある自己自身で、クシェートラジュニャと同一視される」ものとするが、「ここでは2つを区別しているようである」と説明する²¹。さらに、中野氏は、注釈書に説かれている様々な説を紹介している。おおよそ次のような説が見られる。(1) 大（マハット）に覆われている微細な身体、通例はジーヴァと呼ばれる個人我は前偈でクシェートラジュニャと表されている。(2) ジーヴァをマナス・ブッディ・アハンカーラの形を持つ内部機関とする。(3) ジーヴァ＝マナス、(4) ジーヴァ＝マハットとする²²。

さらに、もう一つ、マハットと呼ばれる原理も登場する。それは次の通りである。

tāv ubhau bhūtasamprktau mahān kṣetrajña eva ca /
uccāvaceṣu bhūteṣu sthitam taṃ vyāpya tiṣṭhataḥ // MS 12.14

生き物と結合するこれらの両者、すなわちマハーン（偉大なるもの——一二・一二で述べられる行為する主体アートマンないしはブータートマン）とクシェートラジュニャ（意識・行為させる主体）は、上位下位の生き物の中に存在するそれ（ジーヴァ。生命体）に染みわたって存在している²³。

マハーンすなわちマハットがクシェートラジュニャとは別に存在する。渡瀬氏は、活動する本体としてのアートマンであるブータートマンとマハットを同一視している²⁴。さらに、上記の通り、d パダの“tam”をジーヴァと見なし、クシェートラジュニャとマハットはジーヴァの中に遍在するものとみなされている。

以上のように、MS 12.12–14 の短い文の中に、主体としての機能を有すると考え得る原理が複数現れる。すなわち、アートマン (ātman)、クシェートラジュニャ (kṣetrajña)、ブータートマン (bhūtātman)、ジーヴァ (jīva)、マハット (mahat) である。クシェートラジュニャとは、行為を起こさせるもの (kārayitā) であり、その字義が示す通り、究極的

¹⁸ 「ジーヴァと呼ばれるものが、内部のアートマンとは別にあり」とも訳せる。

¹⁹ すなわち、生まれつきにあるということである。

²⁰ [Johnston 1974: p. 46]

²¹ [Olivelle 2005: p. 230]

²² [中野 1951: p. 465]

²³ 「遍在している」ということである。

²⁴ [渡瀬 2013: p. 496]

な主体を表すものである。そしてこれとは別にもう一つのアートマン、ブータートマンがある。このブータートマンは、諸々の行為を為すもの、身体の主体として機能するものであり、そして、マハットと同一のものを示していることは明らかである。

ところで、マハットとアートマンに関する興味深い記述が、MBh 第12巻において見られる。第298章の創造説が説かれている箇所²⁵で、未顕現 (avyakta) からマハット・アートマン (mahān ātmā) が生じ、さらに、マハットからアハンカーラが生じることが説かれる²⁶。また、第327章²⁷では、プルシャ→未顕現→マハット・アートマン→アハンカーラ→5粗大元素というパターンのサーンキヤ説が想定され、未顕現以下、8つのプラクリティが生み出すものとして考えられている²⁸。これら第298章と第327章の2つの章は、いずれも創造説に関連してマハット・アートマン (mahān ātmā) という語が見いだせる。そして、第298章では、このマハット・アートマンをマハットと考えている。おそらく、MSでも同様に、マハット・アートマンが意識されている²⁹ため、アートマンとマハットが同一とみなされていると考えることができる。これらはいずれも賢者達 (budhāḥ) の説として説かれていることにも注目されるが、それぞれのサーンキヤ説が異なることに注意しなければならない。MBh 第298章では、アハンカーラからマナスが創造されるが、MBh 第327章ではアハンカーラから5大元素が創造され、一方、MSではアハンカーラは登場しないのである。

MS 第12章では、ブッディも説かれるが、マハットとの関係は不明瞭である。SKなどでは、すでにマハットはブッディの単なる異名とされ、MBh 第12巻291章³⁰でも、ブッディがマハットの異名であることが説かれる³¹。MSでは、ブッディはコントロールするものとして単なる心よりも上位概念であることが伺える。そのため、活動する主体として

²⁵ 流出論と考える事ができる9の創造について扱われている。詳しくは第2章第4.2節を参照。

²⁶ 「未顕現 (avyakta) から、マハット・アートマン (mahān ātmā、大なるアートマン) が生じる。王よ。覚者たちは、これを、根本原質に関する第1の創造と言う。」(MBh 12.298.16)

「さらに、マハットからアハンカーラが生じる。王よ。[覚者たちは] これを第2の創造と言い、ブッディを本性とするものと言われている。」(MBh 12.298.17)

²⁷ 内的器官と神格とを対応させる説が説かれる。詳しくは第2章第5.1節を参照。

²⁸ 「それから生じた未顕現 (avyakta) を覚者達はかのブラダーナ (根本原理、第一のもの) と知る。世界創造のために、主宰神 (īśvara) である未顕現 (avyakta) から顕現 (vyakta) が生じた。」(MBh 12.327.25)
「実に、[それは] 世界において、ア Nilgga、大なるアートマン (mahān ātmā、マハットというアートマン) と言われる。そして、この顕現性 (vyaktatva) を獲得したもの (ア Nilgga) は、祖父を作り出した。それが、アハンカーラであると言われる。実に、それは、あらゆる光からなるもの (tejomaya) である。」(MBh 12.327.26)

²⁹ MS 1.15において、マハット・アートマンが説かれる。第3章第3節を参照。

³⁰ 25原理によって世界を説明しつつも、シャンブによる創造が説かれるなど、神話的要素が融合している。詳しくは第2章第3.1節を参照。

³¹ 「[シャンブは] 終わりなく行為する最初に生まれた存在物であるマハットを、創造する。[すなわち] 無形態のスヴァヤンブーであるシャンブ (シヴァ) は、形あるものすべてを[創造する]。』(MBh 12.291.15abcd)
「[一方] この聖なるものは、ヒラニヤガルバであり、ブッディと言われる。また、ヨーガにおいてはマハットと[言われ]、さらにヴィリンチャ (virīñca) とも[言われる]。』(MBh 12.291.17)

のマハットと同一視することは不可能ではない。

これらの説に明白な引用関係は見られないが、その概念は類似しているため、次のことを考えてみたい。以上にあげた原理をまとめると、マハット・アートマン＝マハット＝ブータートマン＝ブッディということが成り立つであろう。これは低次のアートマンと高次のアートマンという2種類のアートマンを想定していると考えられる。低次のアートマンという概念から考えれば、マハット・アートマンは粗大なるアートマン、ブータートマンは物質性のアートマンとも考えられる。一方、高次のアートマンとはクシェートラジュニヤであり、クシェートラジュニヤはプルシャに該当するものである。古典サーンキヤにおいて、プルシャは、その純粋性がことさらに強調されている。ウパニシャッド文献において確立された自己の主体としてのアートマンよりさらに上の概念を想定するため、アートマンからその純粋な部分として享受する機能だけを取り出したものがプルシャなのかもしれない。さらにアートマンと区別して、プルシャという名称を用いたとも考えられる。おそらくそれは、一元論の矛盾を解決する試みであったのだろう。

そして、これらのアートマンとは別に、ジーヴァが存在するのである。先に述べたように、ジーヴァが何を指すかは注釈書においても解釈が分かれ不明であるが、ここでは、クシェートラジュニヤやブータートマンとは別ものであることは明白である。本来、ジーヴァは、「精神ではなく、プラーナ (*prāṇa*) の性質を帯びた活動的にさせる原理であり、輪廻において身体から身体へ移動するもの」³²である。MS ではジーヴァについて以下のようにも説かれる。

pañcabhya eva mātṛābhyaḥ pretya duṣkṛtīnāṃ nṛṇām /

śarīraṃ yātanārthīyam anyad utpadyate dṛḍham // MS 12.16

悪行をなす人間ちのために、死後の激しい苦しみに対応する別の丈夫な身体が、五物質要素（地、水、火、風、空）から造り出される。

yady ācarati dharmam sa prāyaśo 'dharmam alpaśaḥ /

tair eva cāvṛto bhūtaiḥ svarge sukham upāśnute // MS 12.20

彼³³は、主として正しい生き方（ダルマ）に従事し、不正な生き方（アダルマ）は僅かであるとき、それらの〔五〕物質要素（ブータ）にくるまれて³⁴天界において幸せを得る。

yadi tu prāyaśo 'dharmam sevate dharmam alpaśaḥ /

³² [Johnston 1974: p. 44]

³³ 渡瀬氏は「前文および一・二・二二からすれば、『彼』はジーヴァを意味する。しかしほとんど『人』と重なり合う」と説明する [渡瀬 2013: p. 496]。

³⁴ すなわち、「存在物 (*bhūta*) によって覆われて」。

tair bhūtaiḥ sa parityakto yāmīḥ prāpnoti yātanāḥ // MS 12. 21

しかしもし主として不正な生き方に従事し、正しい生き方が僅かであるときは、その者はそれらの〔五〕物質要素（ブータ）に見捨てられ、ヤマの責め苦を受ける。

yāmīs tā yātanāḥ prāpya sa jīvo vītakalmaṣaḥ /

tāny eva pañca bhūtāni punar abhyeti bhāgaśaḥ // MS 12. 22

かのジーヴァは、ヤマの責め苦を受けた後、汚れから開放され、それぞれの部分に従って³⁵再びそれらの五物質要素（パンチャブータ）の中に入る。

このように、正しい生き方をすれば天界にいけるが、不正な生き方をするとジーヴァが5元素=肉体を離れ、ヤマの責め苦を受けた後、再び肉体に戻ると考えられている。すなわち、ジーヴァは輪廻するものと考えられているのである。また、MS 12.14 で見たように、クシェートラジュニヤとマハットはジーヴァの中に遍在するとみなされているので、これら2つの原理を包含しつつも輪廻の主体として機能していると考えられる。SK で説かれるところの微細な身体のイメージと重なる³⁶。

さて、アートマンと3種のグナ³⁷の関係について、以下のように説かれる。

sattvaṃ rajas tamaś caiva trīn vidyād ātmano guṇān /

yair vyāpyemān sthito bhāvān mahān sarvān aśeṣataḥ // MS 12.24

サットヴァ（純質）、ラジャス（激質）、タマス（暗質）はアートマン（生き物の本体）³⁸の三種のグナ（構成要素）であると知るべし。これらを通して偉大なる者（アートマン）³⁹はこのいっさい⁴⁰に遍在する。

3種のグナがアートマンに帰されているのであるが、ここでもまた、マハットとアートマンは同一のものである。つまりここでのアートマンもまた、クシェートラジュニヤではなく、低次のアートマンであり、活動する主体である。また、このマハットがブッディと同一であるならば、3種のグナはブッディと結びついていることにもなるであろう。

³⁵ “bhāgaśaḥ” は「代わる代わる」とも訳せる。

³⁶ ここでは、ジャイナ教の靈魂（jīva）との関連も考えられる。ジャイナ教では、靈魂の本質は意志を含めた知と生命性と考えられている。そして、靈魂は、宿る身体に依るだけの大きさを有し、上昇性をもっているという。さらに、輪廻の中にある靈魂の行く末は4つの道（gati）、すなわち人間、天人（神）、動物（畜生）、地獄の住人の道であるという。[渡辺 2005: 166–168]

³⁷ MS における3種のグナについては第3章第2.1節を参照。

³⁸ Olivelle は次のように説明する。“I take ātman here to mean body, the same way as it did in verse 12. in the very next verse (25), deha (“body”) appears to be used as a synonym.”[Olivelle 2005: p. 348]

³⁹ 原語では“mahān”である。マハットは単に「大なるもの」と解すべきであろう。

⁴⁰ 「あらゆる存在」（bhāva）ということ。

第1.3節 「モークシャダルマ篇」との対応

以上のように、MS 第12章におけるサーンキヤ説の特徴は、「マナスは心一般を指す」、「アハンカーラがない」、「ブッディはコントロールする機能でありマナスより上位概念である」、「マハットに3種のグナが帰せられる」、「マハットより高次の概念としてクシェートラジュニヤがある」、「アートマンとは別にジーヴァという輪廻の主体がある」ということが挙げられる。

このような説と類似したものが、MBh 第12巻187章・239–241章に説かれるサーンキヤの古説に見いだせる。これらの章で、世界の原理について説かれた箇所が参考となろう⁴¹。

この説では、原理の順列がはっきりとはしないが、5大元素に基づき、世界は転変し、万物を創造する源となると考えられていて、ブータートマンについても説かれる⁴²。その万物を観照するものとしてジーヴァが説かれる⁴³。観照するものであるため主体として機能を持つとも考えられる。そして、内的器官として、5つのインドリヤ（感覚器官）、マナスを6番目、ブッディを7番目、クシェートラジュニヤを8番目の原理と考えている⁴⁴。さらにここではアハンカーラが説かれていない。しかし、クシェートラジュニヤにも観照する機能が認められる⁴⁵ため、クシェートラジュニヤとジーヴァが同一のものと考えられている可能性がある。そして、ブッディはコントロールする機能を有し、グナが関連しており⁴⁶、マナスより上位概念である⁴⁷。さらに、アートマンはブッディより上位概念である⁴⁸。しかし、ブッディ＝アートマン⁴⁹とも言われているので、2種類のアートマンが考

⁴¹ この説の詳細は第2章第1節を参照

⁴² 「亀が四肢を伸ばして、再度引っ込めるように、ブータートマン（存在物の本質）は、諸々の存在物（万物）を創造して、再び引っ込める（帰滅させる）。」（MBh 12.187.6）

⁴³ 「存在物を創造する者はあらゆる存在物（万物）における5粗大元素のみを〔創り〕、〔そして〕それら（創造物）における多様なものを創った。一方、ジーヴァ（個我）はそれを観照する。」（MBh 12.187.7）

⁴⁴ 「粗大元素は〔これら〕5つのみであり、一方、第6がマナスと言われている。」（MBh 12.187.10cd）
「インドリヤ（感覚器官）とマナス（思考器官、意）がこの認識するもの（vijñāna = 認識器官）である。バラタ族の者よ。ブッディが第7、さらにクシェートラジュニヤ（知田者）が第8と言われている。」（MBh 12.187.11）

⁴⁵ 「ブッディは決定するためにあり、クシェートラジュニヤ（知田者）は証人（確認者）のように存在する。」（MBh 12.187.12cd）

⁴⁶ 「ブッディは、諸々のグナ（性質）を制御する。また、ブッディのみが感覚器官を、〔そして〕マナスを6番目とする全てを〔制御する〕。ブッディが存在しないならば、いかにして諸々のグナは存在しようか。」（MBh 12.187.16）

⁴⁷ 「実に、諸々のインドリヤ（感覚器官）よりも対象が上位であり、対象よりもマナスが上位である。」（MBh 12.240.2ab）

⁴⁸ 「さらに、マナスよりもブッディが上位であり、ブッディよりもアートマンが上位であると考えられている。」（MBh 12.240.2cd）

⁴⁹ 「人間にとって、ブッディがアートマンである。まさにブッディはアートマンの本質から成るものであ

えられる。

以上のことから、MS 第 12 章において、ある程度サーンキヤ的要素は認められる。直接的な影響はないと思われるが、MS の作者はサーンキヤの古説を知っていたと思われる。

第2節 *Manusmṛti* 第 12 章における 3 種のグナ説

MS 第 12 章では、輪廻に関する分類を 3 種のグナにより規定し、さらにサーンキヤ説と同様の説も説かれる。3 種のグナとは、サットヴァ (*sattva*、純質)、ラジャス (*rajas*、激質)、タマス (*tamas*、翳質) の 3 種である。本節では、MS における 3 種のグナについて取り上げ、考察する。

第 2.1 節 3 種のグナの機能

まず、MS 第 12 章において言及されている 3 種のグナの機能を見ていきたい。

yo yadaiṣāṃ guṇo dehe sākalyenātiricyate /
sa tadā tad guṇaprāyaṃ taṃ karoti śārīriṇaṃ // MS 12.25

これらのうちのいずれかのグナが身体の中で圧倒的に優勢となると⁵⁰、かの〔偉大なる者〕は、身体を持つものをして、そのグナを主要素とするものにする。

sattvaṃ jñānaṃ tamo 'jñānaṃ rāga-dveṣau rajaḥ smṛtaṃ /
etaḥ vyāptimad eteṣāṃ sarvabhūtaśritaṃ vapoḥ // MS 12.26

サットヴァは知、タマスは無知、ラジャスは愛と憎悪であると言われる。これが〔いっさいに〕遍在し、いっさいの存在の中に宿るそれらの姿である。

3 種のグナはあらゆる存在に宿るものであることが分かる。3 つのうちのいずれかが優勢になるとき、優勢になったグナの性質が現れる。そして、サットヴァは知、タマスは無知、ラジャスは愛と憎悪とも言われる。

さらに、以下のように続く。

tatra yat prīti-samyuktaṃ kiṃcid ātmani lakṣayet /
praśāntam iva śuddhābhaṃ sattvaṃ tad upadhārayet // MS 12.27

そのうち、自らの中に、喜びを伴い、静けさと清らかにも似た何かを認めるとき、それはサットヴァであるとみなすべし。

る。」(MBh 12.240.3ab)

⁵⁰ すなわち「完全に優勢になるとき」。

yat tu duḥkhasamāyuktam aprītikaram ātmanaḥ /

tad rajo 'pratidham vidyāt satataṃ hāri dehinām // MS 12.28

しかし、苦痛を伴い、自らを不快にするものは反抗的なラジャスであると知るべし。〔それは〕常に身体を持つものたちを魅惑する。

yat tu syān mohasaṃyuktam avyaktaviṣayātmakam /

apratarkyam avijñeyaṃ tamas tad upadhārayet // MS 12.29

迷いと結ばれ、見分けがつかず⁵¹、感官の対象を本質とし、推測され得ず⁵²、識別され得ないもの、それをタマスであると知るべし。

このように、おおよそ、サットヴァは歓喜、ラジャスは苦、タマスは迷妄と結びつくことが分かる。MS 第12章と関係が深いと考えられる MBh 第12巻第187章・第239–241章には、3種のグナに関する詳細な記述が見られる。このサーンキヤの古説では、おおよそサットヴァは歓喜に結びつき、ラジャスは苦に結びつき、タマスは迷妄に結びつくということが認められる⁵³。これらは、MS と同じような使い方である。

しかし、MS 12.26 において説かれる、サットヴァは知、タマスは無知、ラジャスは愛と憎悪という説は、187章など見られるサーンキヤの古説では見られない。知、無知、愛と憎悪という概念は、3種のグナの性質からすれば導き出されるものであるが、はっきりとは説かれていない。その説と類似したものが見られるのは『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavadgītā*) においてである。そこでは、サットヴァが知に、ラジャスが貪欲に、タマスが無知に対応している⁵⁴。

MS では、3種のグナについてかなり詳細に述べられ、細かくその性質をあげている。しかし、いずれも属性、あるいは心的状態としての機能であり、SK や MBh などのサーンキヤ説に見られるような宇宙論的機能はほとんど想定されていないようである。ただし、MBh においても想定されているにすぎず、古典サーンキヤのような構成要素としての機能はほとんど見られないことに注意すべきである。さらに、SK のように、3種のグナの優勢・劣勢により多くの性質が生まれる⁵⁵ ようなことは説かれていなく、あくまでも3種のグナそれぞれが本来的に多くの性質を有し、属性として機能しているのである。

⁵¹ すなわち「顕れず」ということ。

⁵² すなわち「分析できず」ということ。

⁵³ この説の詳細は第2章第1節を参照

⁵⁴ 「善なる行為からサットヴァ性の汚れがない結果となると言われる。しかしながら、ラジャスの結果は苦であり、タマスの結果は無知である。」(MBh 6.36.16)

「サットヴァから知識が生まれ、また、まさにラジャスから貪欲が〔生まれる〕。タマスから怠慢と迷妄が、そして無知が生じる。」(MBh 6.36.17) 詳しくは第2章第6.2節を参照。

⁵⁵ 例えば、50種の「観念から作り出されたもの」(pratyaya-sarga) など。

第2.2節 3種のグナと生まれの3段階

MS 第12章の主題である輪廻をめぐる説に関連して、そこには SK や MBh のサーンキヤ説で見られる、3種のグナに基づく生まれの3段階の説が説かれる。

yena yāms tu guṇenaiṣāṃ saṃsārān pratipadyate /
tān samāsenā vakṣyāmi sarvasyāsyā yathākramam // MS 12.39

いっさいが⁵⁶、それらのうちのいかなるグナによっていかなる輪廻（サンサーラ）を得るかについて、私は正しい順序で簡潔に語るであろう。

devatvaṃ sātṭvikā yānti manuṣyatvaṃ tu rājasāḥ /
tiryaktvaṃ tāmasā nityam ity eṣā trividhā gatiḥ // MS 12.40

サットヴァ性のもものは神となり、ラジャス性のもものは人間となる。タマス性のもものは常に畜生となる。これは三種の帰着点である。

3種のグナにより、行く着く先が上・中・下の3種類に分かれる。さらにそれが輪廻と関係して、サットヴァが神、ラジャスが人、タマスが畜生となる。これは SK に見られる説と全く同じである⁵⁷。

さらに、MS では、これらの分類について詳細に述べている。

trividhā trividhaiṣā tu vijñeyā gauṇikī gatiḥ /
adhamā madhyamāgryā ca karmavidyāviśeṣataḥ // MS 12.41

グナに基づく〔輪廻の〕三種の帰着点〔のそれぞれ〕は、行為と学問の違いによって上、中、下の三種に分かれる。

3種のグナによって分かれた3分類をさらにそれぞれ3分割している。つまり合計で9の段階に分類にしているのである。

それは、次のように説かれている。

sthāvarāḥ kṛmīkīṭās ca matsyāḥ sarpāḥ sarīsrpāḥ /
paśavaś ca sṛgālās ca jaghanyā tāmasī gatiḥ // MS 12.42

植物⁵⁸、虫類、魚、蛇⁵⁹、亀⁶⁰、家畜、獣⁶¹は、タマス性に基づく最低の帰着点で

⁵⁶ すなわち「この全てに関して」。

⁵⁷ 第5章第2節を参照。

⁵⁸ “sthāvara”の本来の意味は「動かないもの」であり、そのため植物も含まれる。

⁵⁹ “sarpa”ヘビなどを含む「蛇行するもの」である。

⁶⁰ “sarīsrpa”は「這うもの」であり、ヘビなども表す。

⁶¹ “sṛgāla”は「ジャッカル」を意味する。

ある。

*hastināś ca turamṅgāś ca sūdrā mlecchāś ca garhitāḥ /
siṃhā vyāghrā varāhāś ca madhyamā tāmasī gatiḥ // MS 12.43*

象、馬、シユードラ、軽視される蛮族（ムレッチャ）⁶²、ライオン、虎、猪は、タマス性に基づく中位の帰着点である。

*cāraṇāś ca suparṇāś ca puruṣāś caiva dāmbhikāḥ /
rakṣāṃsi ca piśācāś ca tāmasīṣūttamā gatiḥ // MS 12.44*

旅芸人、スパルナ鳥、偽善者⁶³ラクシャス、悪鬼（ピシャーチャ）は、タマス性に基づく最高の帰着点である。

*jhallā mallā naṭāś caiva puruṣāś ca kuvṛttayah /
dyūtapānaprasaktāś ca prathamā rājasī gatiḥ // MS 12.45*

棒術使い⁶⁴、レスラー⁶⁵、俳優、武器で生計を立てている者⁶⁶、賭博や飲酒に耽る者はラジャス性に基づく最低⁶⁷の帰着点である。

*rājānaḥ kṣatriyāś caiva rājñāṃ caiva purohitāḥ /
vādayuddhapradhānāś ca madhyamā rājasī gatiḥ // MS 12.46*

王、クシャトリヤ、王付き祭官（プローヒタ）、論争好き、戦闘好き⁶⁸はラジャス性の中位の帰趨である。

*gandharvā guhyakā yakṣā vibudhānucarāśca ye /
tathaiṅsaprasarasaḥ sarvā rājasīṣūttamā gatiḥ // MS 12.47*

ガンダルヴァ、グヒヤカ、ヤクシャ、神々の従者全てのアップサラスは、ラジャス性に基づく最高の帰着点である。

*tāpasā yatayo viprā ye ca vaimānikā gaṇāḥ /
nakṣatrāṇi ca daityāś ca prathamā sāttvikī gatiḥ // MS 12.48*

苦行者、遍歴者⁶⁹、ブラーフマナ⁷⁰、ヴァイマーニカの集団、星宿、ダイティヤは

⁶² 正しくは「ムレッチャ」である。

⁶³ 詐欺師とも訳す。

⁶⁴ ジャッラ。拳闘士とも訳せる。

⁶⁵ マッラ

⁶⁶ 悪い仕事で生活している者とも訳せる。Olivelle は“men who live by vile occupations”と訳し、variant reading として、“men who live by the use of arms”としている。

⁶⁷ 本来の意味は「最初」である。

⁶⁸ “vādayuddhapradhānāḥ” は「論争の巧みなものたち」と訳す方が妥当で在ろう。

⁶⁹ 遊行者

⁷⁰ “vira” すなわちバラモンのこと。

サットヴァ性に基づく最初の帰着点である。

yajvāna ṛṣayo devā vedā jyotīṃṣi vatsarāḥ /

pitarāś caiva sādhyāś ca dvitīyā sāttvikī gatiḥ // MS 12.49

祭儀を行う者、リシ⁷¹神々、ヴェーダ、天体⁷²年月、祖霊、サーディヤ⁷³は、サットヴァ性に基づく第二番目の帰着点である。

brahmā viśvasṛjo dharmo mahān avyaktam eva ca /

uttamāṃ sāttvikīm etāṃ gatim āhur manīṣiṇaḥ // MS 12.50

ブラフマン⁷⁴、創造主たちのすべて、神ダルマ、偉大なる者（マハーンすなわちアートマン）、非顕現の者（スヴァヤンブー）は、サットヴァ性に基づく最高の帰着点であると賢者たちは言う。

eṣa sarvaḥ samuddiṣṭas triprakārasya karmaṇaḥ /

trividhas trividhaḥ kṛtsnaḥ saṃsāraḥ sāvabhautikaḥ // MS 12.51

〔心・言葉・身体から生まれる〕三種の行為の、それぞれに〔上・中・下の〕三種に分かれ、すべての生き物を巻き込む輪廻（サンサーラ）について⁷⁵、すべてが語られた。

これらをまとめると、表 11 のようになる。

MS の上記の分類と SK の註釈書とを比較すると、異なる分類がいくつか見られる。SK ではサットヴァ性にあげられているガンダルヴァとヤクシャがラジャス性に、ラクシャスとピシャーチャがタマス性に列挙されている。プラジャーパティ、インドラ、ソーマ、アスラ、ナーガ、太陽は登場せず、ブラフマーと祖先は同じである。さらに、おおよそ生類とはかけ離れた抽象的なものまでサットヴァ性に分類されている。また、MS の分類では、人はラジャス性と説きながら、バラモン階級はサットヴァ性に、旅芸人、詐欺師、シュードラ、蛮族などをタマス性に配置している。このように細かく分類しているのは、MS が各階級の規定を目的としているからと考えられる。

一方、MS では地獄についても説かれる。

bahūn varṣagaṇān ghorān narakān prāpya tatṣayāt /

saṃsārān pratipadyante mahāpātakinas tv imān // MS 12. 54

⁷¹ すなわち「聖仙」。

⁷² 天空の光のこと。

⁷³ 下位の神格、あるいは半神的存在のグループの名である。

⁷⁴ ここでは、おそらく、創造神ブラフマーのことである。

⁷⁵ 「この全ての、3種類の行為に対するそれぞれの3分類である、あらゆる生類に関する輪廻が」とも訳せるであろう。

サットヴァ性	上	ブラフマー、創造主、ダルマ、マハット、未顕現のもの
	中	供犠を行う者、聖仙、神々、ヴェーダ、天空の光（天体）、年、祖先、サーディヤ
	下	苦行者、遊行者、バラモン、ヴァイマーニカの集団、星座（星宿）、ダイティヤ
ラジャス性	上	ガンダルヴァ、グヒヤカ、ヤクシャ、神々の従者、アプサラス
	中	王、クシャトリヤ、王付きの祭官（プローヒタ）、論争の巧みなもの
	下	ジャッラ（拳闘士、棒術使い）、マッラ（力士）、俳優、悪い仕事で生活している者、賭博や飲酒に没頭する者
タマス性	上	旅芸人、スパルナ鳥、詐欺師、ラクシャス、ピシャーチャ
	中	象、馬、シュードラ、軽蔑される蛮族（ムレーツチャ）、獅子、虎、猪
	下	動かないもの、虫類、魚、蛇行するもの、這うもの、家畜、ジャッカル

図表 11 MS における 3 種のグナの 9 分類

大罪を有する者⁷⁶は、何年もの間恐ろしい地獄を経過して、それ（罪過）が消滅してから、以下の転生に到達する。

3 種のグナ（要素）とは別に地獄が説かれるが、3 段階の生まれ中では説かれていない。ここでは、地獄とは、大罪すなわち悪行により至る所である。

第3節 Manusmṛti 第1章における原理展開

MS の冒頭の第1章⁷⁷では、創造説について説かれる。そこには、わずかながらサーンキヤ説の影響が見られる。

まず、黄金の卵（ヒラニヤガルバ）の創造説が説かれる。そこで見られる創造のラインは、暗黒→スヴァンブー→精子→水→黄金の卵（ヒラニヤガルバ）→ブラフマーである。そして、さらにこのブラフマーから創造が始まる。ブラフマーは、黄金の卵の中にまる一年住んだ後、その卵を二分し、天と地を造り、さらにその中間に空と 8 つの方角および水

⁷⁶ すなわち「大罪を犯した者」ということ。

⁷⁷ ヴァルナ体制を、創造主による世界創造の一環に組み込んでいる。これは、ヴァルナ体制に先験的な権威を付与することを意図し、以降のダルマ文献においても見られない。もはや繰り返される必要がないほど決定的だったと考えられている [渡瀬 2013: pp. 513–514]。

の永遠の居処（海）を造る。

ここでのブラフマーは以下のように考えられている。

yat tatkāraṇam avyaktaṃ nityaṃ sadasadātmakam /
tadvisr̥ṣṭaḥ sa puruṣo loke brahmeti kīrtyate // MS 1.11

姿が見えず⁷⁸、常住で、有と非有を本質としている原因—それから生まれたかの者（プルシャ）はこの世でブラフマン⁷⁹と呼ばれている。

つまり、ブラフマーは、未顕現（avyakta）、有と非有、そしてプルシャと同一視されているのである。

さらに、創造は次のように続く。

udbabarhātmanaś caiva manaḥ sadasadātmakam /
manasaś cāpy ahaṃkāram abhimantāram īśvaraṃ // MS 1.14

次いで〔ブラフマン⁸⁰は〕彼自身から有と非有からなるマナス（思考力）を、そしてマナスから自意識者であり支配者⁸¹であるアハンカーラ（我欲）を取り出した。

mahāntam eva cātmānaṃ sarvāṇi triguṇāni ca /
viśayāṇām grahītṛṇi śanaīḥ pañcendriyāṇi ca // MS 1.15

さらに、偉大なアートマン（マハーン・アートマン）⁸²、三グナを有するいっさいのもの、対象の認識者である五感官を順次〔取り出した〕。

ここでは、MS 第12章に見られないアハンカーラが登場する。このアハンカーラは主宰神（īśvara）と同義である。アハンカーラが神格と対応する説は MBh 第12巻第291章⁸³や第327章⁸⁴でも見られる。しかし、対応する神格が異なり、第291章ではプラジャーパティ神と対応させている。第327章ではアハンカーラとブラフマーとを対応させているが、未顕現（avyakta）には主宰神（īśvara）を対応させている。古典サーンキヤでは迷妄の原因とも成るであろうアハンカーラが、神格と対応しているのはエピック・サーンキヤの特徴ともいえる。

また、この MS 第1章での原理展開は、マナス→アハンカーラ→マハット・アートマンとなり、このマハット・アートマンとはマハットすなわちブッディに該当するものであ

⁷⁸ “avyakta” すなわち「未顕現」である。

⁷⁹ ここでは創造神ブラフマーのことである。

⁸⁰ 創造神ブラフマーのことである。

⁸¹ “īśvara” すなわち「主宰神」のこと。

⁸² あるいは「マハット・アートマン」。ここでのマハットは「偉大な」ではなく、単に、「大なるアートマン」と解した方が妥当であろう。

⁸³ 本論の第2章第3.1節を参照。

⁸⁴ 本論の第2章第5.2節を参照。

る。こうなると SK などのサーンキヤ説で見られるブッディ→アハンカーラ→マナスの説と逆転してしまう。このような逆転したものは古典サーンキヤでもエピック・サーンキヤでもあまり見いだせないが、MBh 第12巻第326章では類似したものが見出せる⁸⁵。

この第1章は世界創造を説く箇所であるが、黄金の卵ヒラニヤガルバによる古い創造説と新しいサーンキヤ的創造説に従って述べられる創造物一般とを区別し、2つの矛盾する説が折衷されていることが指摘されている⁸⁶。そのため、サーンキヤ説を取り込む際に、誤って逆転させてしまった可能性もある。あるいは、独自のサーンキヤ学派の説が説かれているとも、当時このような思想が流布していたとも考えられる。

これ以降の偈は不明な点が多い。6種のもの（の微細な分子とブラフマー自らの分子とを結合させることによって万物を作ったとされ、さらに、7種のプルシャの微細な身体分子からこの世界が生じるとされる。この6種のもの（と7種のプルシャとは一体何を指すのであろうか。そもそもこの章自体が、当時独立して流布していたいくつかの創造説の断片をつなぎ合わせたものと考えられている⁸⁷。

このように、第1章は矛盾が多い箇所である。第12章で説かれるサーンキヤ説との矛盾だけでなく、第1章の中でも矛盾が見られる。しかし、ここでの主題は、世界の創造について語ることを目的としているのではない。この世界のすべてはブラフマーによって創造されたのであり、それはヴァルナ制も同じである。そして、この世界の繁栄のためには、各階級の人々に課せられたカルマを正しく行われなければならない⁸⁸。あくまでも、ダルマによる世界の秩序の構築とその理論付け、さらに言えば、4ヴァルナ制への神的権威の付与を目的としているのである。

⁸⁵ そこではマナスからアハンカーラが生み出される。詳しくは本論の第2章第5.3節を参照。

⁸⁶ [渡瀬 1978: p. 561]

⁸⁷ [渡瀬 1978: p. 559]

⁸⁸ [渡瀬 1978: p. 572]

第 4 章

Carakasamhitā および *Buddhacarita* における世界構成 原理

第 1 節 *Carakasamhitā* における 8 種の根本原因と 16 種の変異の説

CS は様々な説を折衷し、特にサーンキヤやヴァイシェーシカの説の影響が見られる。その第 4 卷 *Śārīrasthāna*. 1 では、世界創造について説かれる箇所があり、マナスについての詳細な論述も見られるが、ここでは立ち入らないことにする。本節では、8 種の根本原因と 16 種の変異の説に注目し、それを確認するに留めたい。

8 種の根本原因の原理展開は以下のように説かれる。

khādīni buddhir avyaktam ahaṅkāras tathā 'ṣṭamaḥ /
bhūtaprakṛtir uddiṣṭā vikārās caiva ṣoḍaśa // CS 4.1.63

空 (kha) など [の 5 粗大元素]、ブッディ、未顕現 (avyakta)、および 8 番目のアハンカーラが、[8 つの] 物質的根源 (bhūtaprakṛti) であり、変異は 16 であると説かれる。

根本原因は、未顕現、ブッディ、アハンカーラの 3 つと空などがあげられる。また、アハンカーラを 8 番目に据えていることから、根本原因は 8 つであることが分かる。そのため、空などとは 5 粗大元素のことであるのは明白であろう。しかし、アハンカーラを 8 番目に据えていることに、何か意図があるのだろうか。66 偈を考慮すれば、展開の順序にそって、未顕現、ブッディ、アハンカーラ、5 粗大元素の順で置かれるか、あるいは、逆

順としてアハンカーラがブッディの前に置かれて、5 粗大元素、ブッディ、アハンカーラ、未顕現の順で説かれる方が自然に思われるが、ここではそのようになってはいない。サーンキヤの説に、多少の混乱が見られるようである。

一方、変異としては 16 のものがあげられる。内容については、次のように説かれる。

buddhīndriyāṇi pañcaiva pañca karmendriyāṇi ca /
samanaskāś ca pañcārthā vikārā iti samjñitāḥ // CS 4.1.64

知覚器官は 5 種のみであり、また行為器官も 5 種である。そしてマナスを含むもの (11 種) と、5 つの対象が変異と呼ばれる。

16 変異は、5 知覚器官、5 行為器官、5 つの対象、そしてマナスである。“samanaskāś” というのは、マナスだけでなく、5 知覚器官と 5 行為器官も含めた言い方であり、それと共に 5 つの対象があるということである。

jāyate buddhir avyaktād buddhyā ’ham iti manyate /
paraṃ khādīny ahaṅkārād utpadyante yathākramam // CS 4.1.66

未顕現 (avyakta) からブッディが生まれる。ブッディによって、〈わたし〉と考えられる¹。さらに、アハンカーラから、空などが順次に生ずる。

「ブッディによって、〈わたし〉と考えられる」とは、ブッディからアハンカーラが生まれることと考えられる。MBh 第 12 卷 203 章を参照すれば²、プラクリティ→ブッディ→アハンカーラ→虚空→風→火→水→地という順序を考えることができる。

一方、65 偈では未顕現が定義されている。

iti kṣetraṃ samuddiṣṭaṃ sarvam avyaktavarjitam /
avyaktam asya kṣetrasya kṣetrajñam ṛṣayo viduḥ // CS 4.1.65

以上、未顕現 (avyakta) を除いた、全てのクシェートラ (kṣetra) が説かれた。未顕現 (avyakta) は、このクシェートラ (kṣetra) にとってのクシェートラジュニヤ (kṣetrajña) であると、聖仙は知る。

すなわち、未顕現 (avyakta) をクシェートラジュニヤと同一視しているのである。クシェートラジュニヤとは土地を知るものを意味し、SK ではプルシャを示す。それが、CS では、プラクリティに相当する未顕現とみなされている。このような、未顕現と 25 番目の原理の混乱は MBh 第 12 卷 291 章にも見られる³。

¹ すなわちアハンカーラが生まれること。金倉氏は「覚によって人は〈吾あり〉と考える」と訳している [金倉 1976: p. 1070]。

² 本論文の第 2 章 第 2 節を参照。

³ 本論文の第 2 章 第 3.3 節を参照。

以上のように、CSにおいては、8種の根本原因と16種の変異の説が確認できる。いくらかは体系立っているが、8種の根本原因と16種の変異の関係は不明瞭と言わざるを得ない。5粗大元素、5対象、5知覚器官の対応は、想定できるが、5行為器官の対応は不明であり、何がどこから出てくるのか分からない。MBh 第12巻203章などに見られる説⁴を参照すれば、5粗大元素と5行為器官との対応も想定できなくはないが、そうとれなくもない程度である。また、マナスに関しては、位置付けがはっきりとしていない。文脈からはマナスがかなりの重要性を持ってることが分かるが、マナスを説いている偈は不明瞭である。おそらく、サーンキヤ思想以外の様々な思想を折衷的に取り入れているため、細かい箇所に矛盾が生じているのであろう。

第2節 *Buddhacarita* における8種の根本原因と16種の変異の説

BCにおいても、8種の根本原因と16種の変異の説が見られる⁵。ここでは深く立ち入らず、内容を紹介するに留めたい。

根本原因として次のものをあげている。

tatra tu prakṛtiṃ nāma viddhi prakṛtikovida /
pañca bhūtāny ahaṃkāraṃ buddhim avyaktam eva ca // BC 12.18

さて、それらの中で、根本原因というのは、5〔粗大〕元素、アハンカーラ、ブッディ、未顕現と知れ。根本原因を知るものよ。

根本原因は、未顕現 (avyakta)、ブッディ、アハンカーラ、5大元素の8つをあげ、続いて、変異については、次のように説かれる。

vikāra itī budhyasva viṣayān indriyāṇi ca /
pāṇipādaṃ ca vādaṃ ca pāyūpasthaṃ tathā manaḥ // BC. 12. 19

変異とは、諸々の対象と知覚器官、手、足、言葉、肛門、生殖器、およびマナスであると理解せよ。

この中で、手・足・言葉・肛門・生殖器とは、すなわち行為器官である。このように、変異は、5つの対象、5知覚器官、5行為器官、マナスという、計16である。

ここは、サーンキヤの学説を紹介している個所であり、当時のサーンキヤ説において、この8種の根本原因と16種の変異の説が、あるいは、この説をあげるグループが有力で

⁴ その他、MBh 12.291; 298、BC 12 などにおいてである。

⁵ MBh 12.203; 291; 298、CS 4.1、BC 12 などにおいてである。

あった事が窺える。

第 5 章

古典サーンキヤにおける世界構成原理

第 1 節 *Sāṃkhyakārikā* における 25 原理説

本節では、SK で説かれる開展説¹を中心に扱う。SK での開展説は、25 原理により世界を説明するものであり、そこには主宰神を立てない。機械論的に世界の成り立ちを説明するそこには、一元論に対する批判的な発展があった。絶対的な主宰神がなぜ、この苦しみの世界をどうして作ったのか、その矛盾の克服のためにこの説を唱えた。SK と STK に基づき、その説を取り上げたい。

第 1.1 節 二元論

SK における世界構成原理は究極的にはプルシャとプラクリティという 2 つの原理によって説明するものである。永久に実在するのはこの二元のみであり、創造神や主宰神といったものを立てない。

プルシャ (*puruṣa*) は、精神原理であり、「純粹精神」、「靈我」などとも訳される。活動もなく、ただプラクリティを觀照するだけであり、本来清浄で、独存している。そして、多数存在する。

プラクリティ (*prakṛti*) は、根本原質であり、根本的な質料因、つまり物質的なものの根源である。プラダーナ (*pradhāna*、第一のもの＝根本原理) や未顕現 (*avyakta*) などと

¹ サーンキヤ思想の述語では、“*pariṇāma*” など、諸原理の展開を意味する語を開展と訳するのが通例となっている。このテクニカルタームは明確に SK やその注釈書で説かれる古典サーンキヤの説についてのみ用いた。古典サーンキヤでは開展に際し因中有果論が前提となっているためであるが、それ以外の例えばエピック・サーンキヤなどでは、どこまでそのようなサーンキヤ思想を反映しているか分からないので、この述語の使用を避けた。

も呼ばれる。活動し、単一であり、3種のグナは均衡状態にある。

プルシャは享受のため、プラクリティはプルシャの解脱のため、両者は結合するとされる。この2者の関係は「享受するもの」と「享受されるもの」である。「享受する」とは享受させられている、「享受される」とは享受させているとも言える。インド思想では一般的に、享受者と享受される対象を想定している。例えば、見たり聞いたり、あるいは楽や苦などを感じたり、これらを最終的に受け取る存在、つまり究極的な主体がいると考える。これがアートマンであり、サーンキヤではプルシャと呼ばれるものである。現象世界のあらゆる活動—突き詰めていけば、それはつまり根本原質プラクリティの活動である—が為されるためには、それを享受する主体が必要である。それがプルシャであり、観照するということである。プルシャが観照するというのは対象としてプラクリティを享受するということである。つまり、プルシャとプラクリティは最も根源的な享受関係といえよう。

第1.2節 25原理 (tattva) と開展説 (pariṇāma-vāda)

開展(転変)は、プルシャの観照を受け、ラジャスの活動が始まり、3種のグナの均衡が崩れることにより起こる。そして、世界が展開し、プラクリティから23の原理が現れる。未顕現であるプラクリティに対し、開展したものを変異(vikāra)や顕現(vyakta)と言う。

まず、SKに次のように説かれる。

prakṛter mahāṃś tato 'haṅkāras tasmād gaṇaś ca ṣoḍaśakah /
tasmād api ṣoḍaśakāt pañcabhyaḥ pañca bhūtāni // SK 22

プラクリティ(根本原質)からマハットが、それからアハンカーラが、またそれから16の一群が[生じる]。さらにその16[の中]の5つのものから5粗大元素が[生じる]。

プラクリティから、マハットが生じる。マハットはブッディの異名である。そして、ブッディからはアハンカーラが生じる。アハンカーラからは16のものが、さらに16の中の5つから5粗大元素が生じる。

アハンカーラから創造される16のものは次のように説かれる。

abhimāno 'haṅkāras tasmād dvidvidhaḥ pravartate sargaḥ /
ekādaśakaś ca gaṇas tānmātraḥ pañcakaś caiva // SK 24

アハンカーラとは自己の意識(abhimāna)である。それから2種の創造が起こる。そして[それは]11種の一群と5種の微細要素に関するもののみである。

このように、アハンカーラからの創造は2つのパターンがある。一方は、11種の一群、も

う一方は 5 つの微細要素 (tānmātra) で、これが 16 のものである。

そして、アハンカーラの創造は次のように詳細に述べられる。

sāttvika ekādaśakaḥ pravartate vaikṛtād ahaṅkāraṭ /

bhūtādes tānmātraḥ sa tāmasas taijasād ubhayam // SK 25

「ヴァイクリタ・アハンカーラ」(vaikṛta-ahaṅkāra) から、サットヴァ性の 11 から成るものが開展する。「ブーターディ〔・アハンカーラ〕」(bhūtādi-ahaṅkāra) から、タマス性の微細要素が〔開展する〕。「タイジャサ〔・アハンカーラ〕」(taijasa-ahaṅkāra) から、両者が〔開展する〕。

すなわち、3 種のグナに応じて、3 種類のアハンカーラが現れ、それぞれに開展していくのである。このアハンカーラで、開展説のラインに分岐が起こるのである。また、ラジャス性のアハンカーラは、両者に展開するということから、活動因としての性質が認められる。

これら 3 種のアハンカーラは次の通りである。

- サットヴァ性：ヴァイクリタ・アハンカーラ (vaikṛta-ahaṅkāra) → 11 のインドリヤ
- タマス性：ブーターディ・アハンカーラ (bhūtādi-ahaṅkāra) → 5 微細要素
- ラジャス性：タイジャサ・アハンカーラ (taijasa-ahaṅkāra) → 両者の開展＝活動因

Jha は Gaudapāda に基づいて次のように説明している。「(a)“vaikṛta”、(b)“bhūtādi”、(c)“taijasa” は、純粋に、アハンカーラ (I-principle) の 3 つの形態、あるいは状態にあてはめられたテクニカルタームとしての名前である。アハンカーラが、サットヴァの属性によって支配されたとき “vaikṛta” と呼ばれ、タマスの属性によって支配されたとき “bhūtādi” と呼ばれ、ラジャスの属性によって支配されたとき “taijasa” と呼ばれる。これらは、単なる専門用語にすぎず、何も意味していない²という。金倉氏は “vaikṛta” を「変異した我慢」、 “bhūtādi” を「元素の初めと称する我慢」、 “taijasa” を「炎熾と称する我慢」と訳し³、服部氏はそれぞれ「変化した自我意識」、「元素のもととなった自我意識」、「激質的な自我意識」と訳している⁴。

また、ヴァイクリタ・アハンカーラから開展する 11 種のうち 10 種については次のように説かれる。

buddhīndriyāṇi cakṣuḥśrotraghrāṇarasanatvagākhyāni /

vākpāṇipādapāyūpasthān karmendriyāṇy āhuḥ // SK 26

² [Jha 2004: p. 98]

³ [金倉 1984: p. 157]

⁴ [服部 1979: p. 198]

知覚器官 (buddhīndriyāṇi) とは、目 (cakṣus)、耳 (śrotra)、鼻 (ghrāṇa)、舌 (rasana)、皮膚 (tvac) と名づけられるものである。発声器官 (vāc)、手 (pāṇi)、足 (pāda)、肛門 (pāyu)、生殖器 (upastha) を、行為器官 (karmendriyāṇi) と言う。

5 知覚器官と、5 行為器官である。そして残りのもうひとつがマナスである。

ブーターディ・アハンカーラから開展した微細要素は、次に 5 粗大元素へと開展する。SK においてはどの微細要素からどの粗大元素が現れるかは明らかにされてはいない。ここでは STK の説を紹介する。

tatra śabdatanmātrād ākāśaṃ śabdaguṇam; śabdatanmātrasahitāt sparśatanmātrād vāyuḥ śabdasparsaguṇaḥ, śabdasparsatanmātrasahitād rūpatanmātrāt tejaḥ śabdasparsaguṇam; śabdasparsārūpatanmātrasahitād rasatanmātrād āpaḥ śabdasparsārūparasaguṇāḥ; śabdasparsārūparasatanmātrasahitād gandhatanmātrāc chabdasparsārūparasagandhaguṇā pṛthivī jāyata ity arthaḥ. STK (4) ad. SK 22

それらの中で、音声の微細要素から音声を性質 (guṇa) とする虚空 [の粗大元素が生じ]、音声の微細要素を伴った接触の微細要素から音声と接触を性質 (guṇa) とする風 [の粗大元素が生じ]、音声と接触の微細要素を伴った色の微細要素から音声と接触と色を性質 (guṇa) とする火 [の粗大元素が生じ]、音声と接触と色の微細要素を伴った味の微細要素から音声と接触と色と味を性質 (guṇa) とする水 [の粗大元素が生じ]、音声と接触と色と味の微細要素を伴った香りの微細要素から音声と接触と色と味と香りを性質 (guṇa) とする地 [の粗大元素] が生じる、という意味である。

まとめると次の通りである。

1. 微細要素：音声 → 粗大元素：虚空
2. 微細要素：音声＋接触 → 粗大元素：風
3. 微細要素：音声＋接触＋色 → 粗大元素：火
4. 微細要素：音声＋接触＋色＋味 → 粗大元素：水
5. 微細要素：音声＋接触＋色＋味＋香り → 粗大元素：地

これらは、注釈書により解釈も異なり、例えば、M や J などは STK と同一であるが、G の註では、「香り→地」、「味→水」、「色→火」、「接触→風」、「音声→虚空」とそれぞれ単独で働く⁵。

さらに、次のようにも説かれる。

⁵ [Larson and Bhattacharya 1987: p. 51]

“adhyavasāyo buddhiḥ” kriyā-kriyāvator abhedavivakṣayā. sarvo vyavahartā ”locya matvā ’ham atrādhikṛta ity abhimatya karttavyam etan mayety adhyavasyati tataś ca pravartata iti lokasiddham. STK (2) ad. SK 23

〈ブッディとは決知である〉。機能と機能を持つもの（機能の主体）との間に、区別がないということを意図している。あらゆる行為者は、〔ある対象を、まず目で〕知覚し、〔次にマナスで〕思惟し⁶、〔そしてアハンカーラで〕「私はこれに權威を与えられている」と固執し、〔最後に、ブッディで〕「これは私によってなされるべきである」と決定する。そしてそれから、〔行為を〕始める。以上は世間の定説である。

すなわち、マナスは、思惟する性質も有し、5知覚器官・5行為器官からの情報をアハンカーラに運ぶ。アハンカーラは、自己に関連づけ (I or not I / mine or not mine)、そして、ブッディが決断の作用をなす。それらが5知覚器官・5行為器官にもどり、実際の行動を起こすのである。

以上が、心の作用と行為である。このような心の作用は物質的なものに属するものである。サーンキヤ思想の開展説は、この心の作用に、現象世界の創造を組み込んだものである。それは図表12のようにまとめられる。

また、25原理の分類については次のように説かれる。

mūlaprakṛtir avikṛtir mahadādyāḥ prakṛtīvikṛtayaḥ sapta /
śoḍaśakas tu vikāro na prakṛtir na vikṛtiḥ puruṣaḥ // SK 3

根本原質 (mūlaprakṛti) は変化したもの (vikṛti) ではない。マハットなどのものは根源 (prakṛti) で変化したものであり、7ある。一方、16のものは変異 (vikāra) である。プルシャは、根本原因でもなく、変化したものでもない。

これらをまとめると図表13の通りである。

第2節 Sāṃkhyakārikā における3種のグナ説

本節では、SKにおける3種のグナについて扱う。SKにおける3種のグナは、宇宙論にあっては構成要素として働き、人間存在にあっては心の状態や属性として働く。このような曖昧な機能を有しているにもかかわらず、その重要性は極めて高い。内容の理解にあたって、主にSTKで補いつつ、概観していく。

⁶ 対象をそのままに思い描くこと。すなわち、感覚器官で受け取った対象の情報をアハンカーラに運ぶ働きである。

第2.1節 世界を構成する3種のグナ

まず、3種のグナ (tri-guṇa) とはいかなるものであろうか。SK12-13 に次のように説かれる。

prītyaprītiviśādātmakāḥ prakāśapravṛttinīyamārthāḥ /

anyonyābhibhavāśrayajananamithunavṛttayaś ca guṇāḥ // SK 12

[3種の] グナは、喜び・嫌悪・落胆を本質とし、照らすこと・活動させること・抑制することを目的とする。また、相互に、制圧し、依存し、生産し、協力する(相伴う)作用である。

sattvaṃ laghu prakāśakam iṣṭam upaṣṭambhakaṃ calaṃ ca rajaḥ /

guru varaṇakam eva tamaḥ pradīpavac cārthato vṛttiḥ // SK 13

サットヴァは軽快なもの・輝くものであり、そして、ラジャスは刺激するもの・活動するもの、まさにタマスは鈍重なもの・覆い隠すものであると認められている。[これらは、灯芯・油・火の3種から成る] 灯火のごとく [一つの] 目的のために作用する。

3種のグナは、サットヴァ (sattva、純質)、ラジャス (rajas、激質)、タマス (tamas、翳質) という3つより成る。これらの性質をまとめると図表14のようになる。

3種のグナは、SK 13において目的のために働くとされる。それはSTKによると次のように説明される。

“arthataḥ” iti puruṣārthata iti yāvat; yathā vakṣyati — “puruṣārtha eva hetur na kenacit kāryate karaṇam” iti. (kārikā 31). STK (10) ad SK 13

〈目的のために〉とは、プルシャの目的のために、という意味である。次のごとく説かれる、「プルシャの目的こそが原因である。[他の] 何ものによっても器官は働かされない」(SK 31) という。

プルシャのために働くのである。それは、単独で、自ら働くということができず、常に他のために働くということである。

SK 12 で示された作用は、STK によると以下のように説明される。まず、「相互に制圧する作用」とは次の通りである。

eṣām anyatamenārthavaśād udbhūtenānyadabhibhūyate. tathāhi — sattvaṃ rajastamasī abhibhūya śāntām ātmano vṛttiṃ pratilabhate; evaṃ rajaḥ sattvatamasī abhibhūya ghorām; evaṃ tamaḥ sattvarajasī abhibhūya mūḍhām iti. STK (9) ad SK 12

目的に従って、これら（3種のグナ）のうちのいずれかが増大することによって、他〔のグナ〕が制圧される。例えば、サットヴァはラジャスとタマスを制圧して、平安さという自身の作用を獲得する。同様に、ラジャスはサットヴァとタマスを制圧して、激しさを〔獲得する〕。同じく、タマスはサットヴァとラジャスを制圧して、鈍さを〔獲得する〕ということである。

すなわち、サットヴァは、ラジャスとタマスを制圧して優勢になり、自らの性質である平安さを発揮する。同様に、ラジャスはサットヴァとタマスを制圧して優勢になり、激しさを発揮し、タマスはサットヴァとラジャスを制圧して優勢になり、鈍さを獲得するということである。

続いて、「相互に依存する作用」とは次のように説かれる。

yady apy ādhārādheyabhāvena nāśrayārtho ghaṭate, tathāpi yad apekṣayā yasya kriyā sa tasyāśrayaḥ. tathāhi — sattvaṃ pravṛttiniyamāv āśritya rajastamasoḥ prakāśenopakaroti, rajaḥ prakāśaniyamāv āśritya pravṛtṭyetaṣoḥ; tamaḥ prakāśapravṛtṭi āśritya niyamenetarayor iti. STK (10) ad SK 12

たとえ、保持するものと保持されるべきものの関係として、依存の意味が成立しないとしても、それにもかかわらず、あるもの（A）に依拠することによってあるもの（B）に機能があるならば、それ（B）はそれ（A）に依存している。例えば、サットヴァは活動と抑制に依存して、ラジャスとタマスを照明によって助ける。ラジャスは照明と抑制に依存して、活動によって他の2つを〔助ける〕。タマスは照明と活動に依存して、抑制によって他の2つを〔助ける〕ということである。

すなわち、サットヴァは、ラジャス性の活動とタマス性の抑制に依存して、ラジャスとタマスを照明によって助ける。同様に、ラジャスは照明と抑制に依存して、活動によって他の2つを助け、タマスは照明と活動に依存して、抑制によって他の2つを助けるということである。

「相互に生産する作用」とは次の通りである。

anyatamo 'nyatamaṃ janayati. jananaṃ ca pariṇāmaḥ, sa ca guṇānāṃ sadṛśarūpaḥ. ata eva na hetumattvam, tattvāntarasya hetor asambhavāt; nāpy anityatvam, tattvāntare layābhāvāt. STK (11) ad SK 12

〔3種のグナの〕いずれかが〔それ以外の〕いずれかを生み出す〔ことである〕。そして、生産（janana）とは転変（pariṇāma）であり、またそれ（転変）は〔3種の〕グナと類似したものである。まさにそれ故、他の原理という原因が存在しないから、原因を持つものではない。さらに、他の原理の中に還滅することがないから、無常なものではない（＝無始無終の存在である）。

生産とは転変であり、他のグナに基づいて転変するということである。そして、3種のグナは、無始無終の存在である。

「相互に協力する（相伴う）作用」とは次の通りである。

anyonyasahacarāḥ, avinābhāvavṛttaya iti yāvat. STK (12) ad SK 12

相互に伴って働くことであり、すなわち、分離させることができない作用（avinābhāvavṛtti、あるものともう一方のものに必要な関係の作用）という意味である。

3種のグナは分離することできないということである。3種のグナは、いずれかが欠けることはなく、優勢・劣勢の関係である。

このような作用をなすのではあるが、SK 12の“anyonyābhibhavāśrayajananamithunavṛttayaḥ”という一文について、SSは「相互に起こる」、MとGは「相互に作用する」⁷とし、いずれも“vṛtti”の語を3種のグナにおける機能の一つとみなしているが、STKではその他の機能それぞれに“vṛtti”の語を結びつけ、3種のグナにおける機能の一つとみなしていない。

相互に生産する作用とは、STKの解釈によると「[3種のグナの] いずれかが [それ以外の] いずれかを生み出す」ということである。翻訳に用いた Bhaṭṭācārya のテキストでは“anyatamo 'nyatamam janayati.”となっており、別のテキストでは“apekṣya”や“āśritya”が記述されている⁸。それに基づけば、「[3種のグナの] いずれかが [それ以外の] いずれかに基づいて [何かを] を生み出す」ということと解することができる。そして、「[何かを] を生み出す」というその「何か」がいかなるものかは、金倉氏の指摘する通り⁹、SK 16を参照すれば理解できると思われる¹⁰。すなわち、3種のグナのいずれかは、それ以外のいずれかに基づいて、自身の性質のものに転変する、例えば、サットヴァはラジャスとタマスに基づいてサットヴァ性のもものに転変するということである。一方、本多氏は、「anyonya-jananaをMはjanayati = bodhayatiと解しているが、M独特のものである。併し、例えば、sattvaがrajasやtamasを生ずるとか、tamasがsattvaやrajasを生ずるとするのは、因中有果論に反するわけであるから、Mの解釈の方がサーンキヤ体系に合うとも

⁷ [本多 1980: p. 420]

⁸ B.2 (11) の註を参照。

⁹ [金倉 1984: p. 112]

¹⁰ 「諸々の個物 (bheda、区別されたもの) とは、(1) 制限されているから、(2) 共通性を持つから、そして、(3) 力により活動するから、(4) 原因と結果の区別があるから、[一方] (5) すべての形を持つもの (vaiśvarūpya、万物) とは区別がないから、原因である未顕現 (avyakta) は存在する。[そしてそれは] 3種のグナにより、また、[3種のグナの] 集合により、水の如くに転変し、それぞれに対応したグナ (属性) に依拠する差別に従って、開展する。」(SK 15-16) 本論文の B.5 を参照。

云えるだろう。」¹¹と説明する。しかし、SSでは、「有る時は喜が憂と痴とを生じ、有る時は憂悩が能く喜と痴とを生じ、有る時は能く痴が憂と喜とを生ず。」¹²と説かれている。つまり、相互に生じるとは、一つのグナが別のグナの性質の原因となるということである。さらに、G註には次のように説かれる。

anyo'nyavṛttayaś ca. prasparam vartante. 'guṇā guṇeṣu vartante'iti vacanāt (*Bhagavadgītā* 3.28). yathā surūpā suśīlā strī sarvasukhahetuḥ, sapatnīnām saiva duḥkhaḥetuḥ, saiva rāginām moham janayati, evaṃ sattvaṃ rajastamasor vṛttihetuḥ. yathā rājā sadodyuktaḥ prajāpālāne duṣṭanigrahe, śiṣṭānām sukham utpādayati duṣṭānām duḥkham moham ca, evaṃ rajaḥ sattvatamasor vṛttiṃ janayati. tathā tamaḥ svarūpeṇātmakena sattvarajasor vṛttiṃ janayati. yathā meghāḥ kham āvṛtya jagataḥ sukham utpādayanti, te vṛṣṭyā karṣakāṇām karṣaṇodyogaṃ janayanti, virahīnām moham. evaṃ anyo'nyavṛttayo guṇāḥ. [Mainkar 2004: p. 75]

そして、〈相互に作用する〉〔とは〕。〔それは〕互いに働く〔とすることである〕。「諸々のグナは諸々のグナにおいて働く」(*Bhagavadgītā* 3.28)と説かれているからである。美しく気立てのよい女は〔全ての人にとって〕あらゆる楽の原因であり、彼女こそが（夫を同じくする）別の妻たちにとって苦しみの原因であり、彼女こそが情熱的な人々にとって迷妄を生み出す。このように、サットヴァはラジャスとタマスの作用の原因である。例えば、常に臣民の守護に対し熱心な王が、悪人を罰するとき、礼儀正しい者たちに楽を生じさせ、悪人たちに苦しみと迷妄を〔生じさせる〕。このように、ラジャスはサットヴァとタマスの作用を生み出す。同様に、タマスは、自己の本性としての性質によって、サットヴァとラジャスの作用を生み出す。例えば、雲が、空を覆って〔太陽を遮ることにより〕、生きるものに楽を生じさせ、〔また〕それら（雲）が、雨によって、農夫たちに精力的な農作業を生じさせ、〔さらに〕（愛する人）と離れた者たちに迷妄を〔生じさせる〕。このように、諸々のグナは、相互に作用する。

以上のように、サットヴァはラジャスとタマスの作用を生み出す、すなわち作用の原因となり、同様に、ラジャスはサットヴァとタマスの作用を、タマスはサットヴァとラジャスの作用を生み出すことが説かれている。注意すべきは、ここでは、“anyonyajanavṛttayaḥ”の解釈ではなく、“anyonyavṛttayaḥ”の解釈ということである。しかし、SSでの「相互に生み出す」ということについての解釈と非常に似通っていて、これらもいずれかのグナを原因として、それ以外のグナの性質が表れることを説いている。

¹¹ [本多 1980: p. 555]

¹² 本多氏による訳 [本多 1980: p. 419]。

以上のように、「相互に生み出す作用」とは、大きく分けて3つの解釈が可能である。

1. 3種のグナのいずれかは、それ以外のグナに基づいて、自身の性質を転変させる。
2. janayati = bodhayati であり、3種のグナは相互に知覚させる。
3. 3種のグナのいずれかのグナを原因として、それ以外のグナの性質が表れる。

おそらく、「相互に生み出す」ということを字義通りに捉えると、因中有果論と矛盾してしまうため、様々な解釈が生まれたのであろう¹³。また、STKでは、おそらく、「相互に作用する」という機能が「相互に生み出す」と似通っていたために、省いたのではないかと推察できる。

そして、あらゆるものは3種のグナからなることが説かれる。

triguṇam aviveki viṣayaḥ sāmānyam acetanam prasavadharmi /
vyaktaṃ tathā pradhānaṃ tadviparītaṃ tathā ca pumān // SK 11

顕現 (vyakta) は、3種のグナ〔から成るもの〕であり、〔3種のグナと〕別のものでなく、〔プルシャが享受する〕対象であり、〔多数のプルシャにとって〕共通のものであり、非精神的であり、生産性を持つ。プラダーナ (第1のもの=根本原質) も同様である。純粹精神 (pums = puruṣa) はそれ (根本原質) と反対でもあり同様でもある。

顕現とプラクリティ・プルシャの特徴を述べている箇所、顕現は3種のグナから成るものであり、別ものではないと説明される。これは、次のように説明される。

aavivekyādeḥ siddhis traiguṇyāt tadviparyayābhāvāt /
kāraṇaguṇātmakatvāt kāryasyāvyaktam api siddham // SK 14

「〔顕現 (vyakta) は3種のグナと〕別ものではない」¹⁴などとは、(1) 3種のグナから成ることから、(2) それと反対のものには〔3種のグナが〕存在しないことから、確立する。結果 (= 顕現) は原因であるグナを本質としているということから、未顕現 (avyakta) 〔の存在〕もまた、確立する。

bhedānāṃ parimāṇāt samanvayāt śaktiḥ pravṛtteś ca /
kāraṇakāryavibhāgād avibhāgād vaiśvarūpyasya // SK 15
kāraṇam asty avyaktam pravartate triguṇataḥ samudayāc ca /
pariṇāmataḥ salilavat pratipratiguṇāśrayaviśeṣāt // SK 16

諸々の個物 (bheda、区別されたもの) とは、(1) 制限されているから、(2) 共通性を

¹³ Y はこの偈に関する註釈が欠落している。

¹⁴ SK 11. B.1 を参照。

持つから、そして、(3) 力により活動するから、(4) 原因と結果の区別があるから、〔一方〕(5) すべての形を持つもの (*vaiśvarūpya*、万物) とは区別がないから、原因である未顕現 (*avyakta*) は存在する。〔そしてそれは〕3種のグナにより、また、〔3種のグナの〕集合により、水の如くに転変し、それぞれに対応したグナ (属性) に依拠する差別に従って、開展する。

以上のようにプラクリティの存在証明の箇所、3種のグナは未顕現と顕現の両者の構成要素であることが説かれる¹⁵。つまり、あらゆる物質はこの3種のグナを有しているであり、両者の違いは、3種のグナが均衡状態であるか、不均衡状態であるかである。プラクリティにおいて3種のグナは均衡状態にあり、ラジャスが動力因となって3種のグナは不均衡な状態になり、世界が開展していく。不均衡状態になった3種のグナは、諸々の個物ごとに異なり、多様な世界を形作るといっているのである。例えば、ブッディでは3種のグナによって8種のバーヴァ (状態、*bhāva*)¹⁶が現れる。功德、知識、離欲、自在はサットヴァとラジャスが結びついたときで、罪過、無知、貪欲、不自在が現れるのはタマスとラジャスが結びついたときである¹⁷。グナは、一般的に属性・性質を表すが、SKにおけるグナとは単なる属性としてだけではなく、プラクリティと関係して、多様な世界を形作る構成要素とも言える。さらに、開展に際してどれか1つが優勢になるのであり、3つのうちどれか1つが欠けるといえることはない。

一方、プルシャにはグナは認められておらず、一切の属性、物質的要素も有さないものである。また、人の性質面では、サットヴァが優勢だと誠実や知が生じ、ラジャスが優勢だと憎悪や破壊が生じ、タマスが優勢だと無知や眠りが生じる。このように、3種のグナのいずれかが優勢かで単一の根源からなる物質も、多様になるのである。

第2.2節 3種のグナと生まれの3段階 (位)

苦の究極的な除去方法—すなわち解脱—を教示するのがサーンキヤ思想であるが、一方で解脱できなければ輪廻すると考えられていて、輪廻がいかなるものかについても説かれている。そこにはサーンキヤ思想において重要な概念である3種のグナが関連している。本節では、3種のグナが輪廻と関連してどのように説かれているのかを考察する。

¹⁵ サーンキヤ学派はこのような存在証明に際し、因中有果論を前提として論を進める。

¹⁶ この8種のうち、知識のみが解脱に導くもので、他は自己を束縛するものである。

¹⁷ SK23 及び SK43 で説かれている。功德 (*dharma*)、知識 (*jñāna*)、離欲 (*virāga*)、自在 (*aiśvarya*) が純質的状态で、その反対が翳質的状态である。さらに、これらは、先天的に備わっているものと、自然に備わるものと、後天的に備わるものがある。この8種の状態は、内的器官 (=ブッディ) を拠る所としている。

3 段階（位）におけるそれぞれの分類

SK では生まれに関して次のように説かれる。

aṣṭavikalpo daivas¹⁸tairyagyonaś ca pañcadhā bhavati /
mānuṣyakaś caikavidhaḥ samāsato bhautikaḥ sargaḥ // SK 53

神の位は 8 種、また獣の位は 5 種である。そして、人間の位は 1 種である。〔これらは〕まとめて物質の創造（現象世界の創造）〔といわれる〕。

ūrdhvaṃ sattvaviśālas tamoviśālaś ca mūlataḥ sargaḥ /
madhye rajoviśālo brahmādistambaparyantaḥ // SK 54

ブラフマーから始まって草木に終わる創造は、上にあってはサットヴァが多い。また下にあってはタマスが多い。中間においてはラジャスが多い。

SK において、図表 15 のように、上・中・下と神・人・獣がサットヴァ・ラジャス・タマスに対応していることが分かる。神の位は 8 種、人の位は 1 種であり、獣の位は 5 種である。サットヴァが多いと上の段階に、ラジャスが多いと中間の段階に、タマスが多いと下の段階に至る。ブラフマー神から始まって草木に終わる創造とは、つまり、輪廻において、3 種のグナの結果により、合計 14 種のどれかに生まれるのである。

それでは、14 種はいったいどういったものか。SK では何も触れられていないが、註釈書¹⁹によって 14 種の説明が少しずつ異なっているので、それぞれをあげて考察したい。

考察は後に譲り、まずはそれぞれの注釈書の該当箇所をあげていく。

SS には次のように説かれている。

天道有八分者一梵王生二世主生三天帝生四乾闥婆生五阿修羅生六夜叉生七羅刹生八沙神生獸道有五分者一四足生二飛行生三胸行生四傍形生五不行生人道唯一生者人道唯一類故説含識有三種謂天獸人三及相有為三（SS 53）

「天道に八分有り」とは、一には梵王生、二には世主生、三には天帝生、四には乾闥婆生、五には阿修羅生、六には夜叉生、七には羅刹生、八には沙神生なり。「獸道に五分有り」とは、一には四足生、二には飛行生、三には胸行生、四には傍形生、五には不行なり。「人道は唯一生なり」とは、人道は唯一類なるが故なり。含識に三種有りと説く。謂く、天と獸と人との三及相と有とを三と為す。（本多恵訳 [本多 1980: p. 517]）

¹⁸ 底本では“devas”であるが [Bhaṭṭācārya 1967: p. 301]、Srinivasan[Srinivasan 1967: p. 160] と Jha に基づき [Jha 2004: p. 149]、“daivas”に訂正。

¹⁹ それぞれの注釈書の概要については序論 第 3.4 節 を参照。

Gには次のように説かれている。

tatra daivam aṣṭaprakāram — brāhmaṇam, prājāpatyaṇam, saumyaṇam, aindraṇam, gāndharvaṇam, yākṣaṇam, rākṣasaṇam, paiśācam iti. paśumṛgapakṣisarīsrpsthāvarāṇi bhūtāni, evaṇ pañcavidhas tairaścaḥ. mānuṣayonir ekaiva. iti caturdaśa bhūtāni. (G 53)

その(SK 53)中で、神に関係するものは8種に〔分けられる〕、すなわち、ブラフマーに関係するもの、プラジャーパティに関係するもの、ソーマに関係するもの、インドラに関係するもの、ガンダルヴァに関係するもの、ヤクシャに関係するもの、ラクシャスに関係するもの、ピシャーチャに関係するものという。家畜、野生動物、鳥類、這うもの(=ヘビなど)、動かないもの(=植物など)が存在物(被造物、bhūta)である。このように、5種が獣である。人間の胎は一種のみである。以上が14種の存在物である。

ūrdhvam iti. aṣṭasu devasthāneṣu sattvaviśālah, sattvavistārah, sattvotkaṭa ūrdhvasattva iti. tatrāpi rajastamasī staḥ. tamoviśālo mūlataḥ. paśvādiṣu sthāvarānteṣu sarvaḥ sargas tamasādhikyena vyāptaḥ. tatrāpi sattvarajasī staḥ. madhye, mānuṣe raja utkaṭam. tatrāpi sattvatamasī vidyete. tasmād duḥkhaprāyā manuṣyāḥ. evaṇ brahmādistambaparyantaḥ, brahmādisthāvarānta ity arthaḥ. abhautikaḥ sargaḥ, liṅgasargaḥ, bhāvasargaḥ, bhūtasargaḥ, daivamānuṣatairyagyonāḥ, ity eṣa pradhānakṛtaḥ ṣoḍaśavidhaḥ sargaḥ. (G 54)

〈上にあっては〉〔云々〕とは、8種の神の位においては〈サットヴァが多い〉、すなわちサットヴァが増大していて、サットヴァが優勢であり、上方はサットヴァであるという〔意味である〕。(そこにおいてもラジャスとタマスは存在している。)〈下にあってはタマスが多い〉とは、獣から始まり草木に終わるものにおけるあらゆる創造は、多量のタマスによって遍充している。そこにおいても、サットヴァとラジャスは存在している。中間において、すなわち人に関係するものにおいては、ラジャスが増大している。そこにおいても、サットヴァとタマスは存在している。それ故、人間は苦に満ちている。このように、〈ブラフマーから始まって草木に終わる〉とは、ブラフマーから始まって動かないものに終わるという意味である。非物質的創造、微細な表徴(liṅga)の創造、状態の創造、存在物の創造、神・人・獣の創造、以上がそのプラダーナから作られる(=開展する)16種の創造である。

Yにおいては次のように説かれている。

aṣṭau vikalpā asya so 'yam aṣṭavikalpaḥ. aṣṭaprākāro 'ṣṭabheda ity arthaḥ. tadyathā brahmaprajāpatīndrapitṛgandharvanāgarakṣaḥpiśācāḥ. tairyagyonāś ca pañcadhā bha-

vati. paśumṛgapakṣisarīsrpsthāvarāḥ mānuṣyaś caikavidho jātyantarānupapatteḥ. (Y 53abc)

これには8つの種類がある、それがこの8種である。8とは8種の区別があるという意味である。すなわち、ブラフマー、プラジャーパティ、インドラ、祖先、ガンダルヴァ、ナーガ、ラクシャス、ピシャーチャである。また、獣の位の分類は5種となる。家畜、野生動物、鳥類、這うもの（＝ヘビなど）、動かないもの（＝植物など）である。そして、ジャーティ（生まれ）の違いは認められないが故に、人間の位は1種である。

Jにおいては次のように説かれている。

aṣṭavikalpa ityādi. devānām ayaṃ daivaḥ. so 'ṣṭavidhaḥ. tad yathā brāhmaḥ, prājāpatyaḥ, sauraḥ, āsuraḥ, gāndharvaḥ, yākṣaḥ, rākṣasaḥ, paiśācaś ceti. tairyagyonyaś ca pañcadhā bhavatīti. tiryagyonīnām ayaṃ tairyagyonyaḥ. paśumṛgapakṣisarīsrpsthāvarabhedāt pañcavidhaḥ. tatra gavādya rāsabhāntāḥ paśavaḥ. siṃhādya viḍālāntā mṛgāḥ. haṃsādya maśakāntāḥ pakṣiṇaḥ. sarpādyaḥ kṛmyantāḥ sarīsrpāḥ. vṛkṣādyaḥ sthūnāntāḥ sthāvarā itī. mānuṣyaś caikavidha itī. manuṣyānām ayaṃ mānuṣyaḥ. evaṃvidhasaṃsthānasyaikavidhatvāt. (J 53)

〈8種〉云々とは。神々にとっては、この神の位（daiva）がある。それが8種である。すなわち、ブラフマーに関係するもの、プラジャーパティに関係するもの、太陽に関係するもの、アスラに関係するもの、ガンダルヴァに関係するもの、ヤクシャに関係するもの、ラクシャスに関係するもの、ピシャーチャに関係するものであるという。〈また獣の位は5種である〉とは。獣に生まれたものたちにとっては、この獣の位（tairyagyonya）がある。家畜、野生動物、鳥類、這うもの（＝ヘビなど）、動かないもの（＝植物など）の区別により5種となる。その中で、牛からロバまでが家畜たちであり、ライオンから猫までが野生動物であり、ハンサ鳥から蚊までが鳥類であり、ヘビから蠕虫（ぜんちゅう）までが這うものであり、木から柱までが動かないものである。〈そして、人間の位は1種である〉とは。人間たちにとっては、この人の位（mānuṣya）がある。このような種類の存在は1種〔で十分〕であるから。

ūrdhvaṃ ityādi. brahmā ādir yasya sargasya stambaś ca tṛṇaviṭapaparyantaḥ, sa brahmādistambaparyantaḥ sargaḥ. sa ūrdhvaḥ sattvaviśālah. ūrdhvaṃ devalokas tasyotkrṣṭatvāt tatra sātṭvika ity arthaḥ. devalokasya sattvabahulatvāt. tamoviśālaś ca mūlataḥ sarga itī. tairya(gyono) mūlam; tasyādhamatvāt. tasmin mūle tamodhikaṃ tamobahulatvāt. madhye rajoviśāla itī. manuṣyaloke madhye. uttarādharabhāvāt tatra

duḥkhabahulatvāt. (J 54)

〈上にあっては〉などとは。ブラフマーから始まるその創造とは、草木 (*stamba*) すなわち草 (*trṇa*) や低木 (*vitapa*) に終わる、それが〈ブラフマーから始まって草木に終わる創造〉である。それが、上では〈サットヴァが多い〉[ということである]。〈上にあっては〉とは神の世界であり、それは高位であるということから、そこはサットヴァ性であるという意味である。神の世界とはサットヴァが多いから。〈また下にあってはタマスが多い〉とは。〈下にあっては〉とは獣(の胎)である。最下位であるから。その下というところにおいては、タマスが優位であり、タマスが多いから。〈中間においてはラジャスが多い〉とは。〈中間において〉とは人間の世界において[という意味である]。高次と低次の[両方が]存在する故に、そこにおいて苦しみが多いということから。

M においては次のように説かれている。

aṣṭavikalpo daiva iti. tad yathā — brāhmaṇaṃ prājāpatyam aindraṃ paitraṃ gāndharvaṃ yākṣaṃ rākṣasaṃ paisācam ity evam aṣṭavidho devasargaḥ. tairyagyonaś ca pañcadhā bhavati. atra tulyaliṅgatvād bhavati paśupakṣimrgasarīṣpsthāvarāntaś ceti. mānuṣya ekavidhas tulyaliṅgatvād brāhmaṇādicāṇḍālāntaḥ. (M 53)

〈神の位は8種〉とは。すなわち、ブラフマーに関係するもの、ブラジャーパティに関係するもの、インドラに関係するもの、祖先に関係するもの、ガンダルヴァに関係するもの、ヤクシャに関係するもの、ラクシャスに関係するもの、ピシャーチャに関係するものというこのような8種が神の創造である。〈また獣の位は5種〉となる。ここでは、表徴が等しいということから、家畜、野生動物、鳥類、這うもの(=ヘビなど)、動かないもの(=植物など)にと終わるものがある。バラモンからチャンダーラまで、表徴が等しいということから、人の位は1種である。

ūrdhvaṃ sattvaviśāla iti. brahmādipiśācānto yo 'ṣṭavidhaḥ sargaḥ. asau sattvabahulaḥ. yasmāt teṣu sattvam utkaṭatvena vartate. tatrāpi rajastamasī staḥ kiṃ tu sattvasyodriktatā. tasmāt sukhaḥprāyā devāḥ. tamoviśālaś ca mūlataḥ. paśvādiṣu tamasa udrekāt paśvādīsthāvaraparyanto yasmāt teṣu tama utkaṭatvena vartate tatrāpi gaṇatayā sattvarajasī staḥ. tasmāt te tamobahulāḥ. madhye rajoviśālaḥ. tatrāpi sattvatamasī staḥ. kiṃ tu raja utkaṭatvena vartate. tasmāt te duḥkhaḥprāyā manuṣyāḥ. brahmādistambaparyantaḥ. caturvidha eṣa svedajāṇḍajādinā bhūtasargaḥ. (M 54)

〈上にあってはサットヴァが多い〉とは。ブラフマーからピシャーチャまでが8種の創造であり、それはサットヴァが多い。なぜなら、そこにおいて、サットヴァが優勢的に存在しているから、そこにおいてもラジャスとタマスは存在する。しかし

ながら、サットヴァが多い。それ故、神々はおおよそ楽〔の性質〕である。〈また下
にあってはタマスが多い〉とは。家畜等においてはタマスが優勢であるから。そこ
においてはタマスが優勢的に存在し、そこにおいても第二義的なものとしてサット
ヴァとラジャスが存在するが、それ故、家畜より植物までのものはタマスが多い。
〈中間においてはラジャスが多い〉とは。そこにおいても、サットヴァとタマスが
存在する。しかしながら、ラジャスが優勢的に存在する。故にこれら人間たちは、
おおよそ苦〔の性質〕である。〈ブラフマーから始まって草木に終わる創造〉は、湿
生、卵生などによって4種である。

STK においては次のように説かれる。

vibhaktaḥ pratyayasargaḥ; bhūtādisargaḥ vibhajate — “aṣṭavikalpaḥ” iti. brāhmaḥ,
prājāpatyaḥ, aindraḥ, paitryaḥ, gāndharvaḥ, yākṣaḥ, paiśācaḥ, rākṣasaḥ ity aṣṭavidho
daivaḥ sargaḥ. “tairyagyonaś ca pañcadhā bhavati” paśumrgapakṣisarīsrpsthāvarāḥ.
“mānuṣyaś caikavidhaḥ” iti, brāhmaṇatvādyavāntarajātibhedāvivakṣayā; samsthānasya
caturṣv api varṇeṣv aviśeṣāt. iti samāsataḥ saṃkṣepataḥ. bhautikaḥ sargaḥ. ghaṭādayas
tv aśarīratve ’pi sthāvarā eveti. (STK 53)

観念の創造は〔前の偈で〕分類された。〔この偈では〕存在物（被造物、bhūta）な
どの創造を分類する。〈8種である〉云々とは。ブラフマーに関係するもの、プラ
ジャーパティに関係するもの、インドラに関係するもの、祖先に関係するもの、ガ
ンダルヴァに関係するもの、ヤクシャに関係するもの、ラクシャスに関係するもの、
ピシャーチャに関係するものという8種の神に関係するもの（＝神の位）の
創造である。〈また獣の位は5種である〉とは、家畜、野生動物、鳥類、這うもの
（＝ヘビなど）、動かないもの（＝植物など）である。〈そして、人間の位は1種
である〉とは、姿かたちに関して4種のヴァルナも異なるものではないから、ブラ
フマー族（バラモン階級）など副次的な生まれの区別は意味がない故に〔人間の位
は1種なのである〕。〈まとめれば〉つまり要約すれば、〔それらが〕物質の創造で
ある。しかし、水瓶などは肉体を持たないもの（aśarīratva）であっても、実に動か
ないものである（動かないものに含まれる）という。

bhautikasyāśya sargasya caitanyotkarṣanikarṣatāratamyābhyām
ūrdhvā’dhmadhyabhāvena traividhyam āha — “ūrdhvaḥ sattvaviśālaḥ” iti.
dyuprabhṛtiḥ satyānto lokaḥ sattvabahulaḥ. “tamoviśālaś ca mūlataḥ sargaḥ”
paśvādiḥ sthāvarāntaḥ so ’yaḥ mohamayativāt tamobahulaḥ. bhūrlōkas tu sap-
tadvīpasamudrasanniveśo madhye rajoviśālo dharmādharmaṇuṣṭhānaparatvād
duḥkhabahulatvāc ca. tām imāḥ lokasamsthitiḥ saṃkṣīpati — brahmādistambaparyantaḥ.

stambagrahaṇena vṛkṣādayaḥ samgrhītaḥ. (STK 54)

この物質の創造にとって、精神性の増減の差異による上・中・下の状態によって3種があると言う。〈上にあってはサットヴァが多い〉とは。天空に始まりサティヤ界に終わる世界は、サットヴァが多い〔という意味である〕。〈また下の創造にあってはタマスが多い〉とは、家畜に始まり動かないものに終わる〔獣の位の創造〕であり、それは迷妄に満ちているから、タマスが多い。一方、7州と7海〔によって構成される〕地であるブル世界（地界）は、ダルマとアダルマの行いの区別があるから、また苦に満ちているということから、中間においてラジャスが多い。〔イーシュヴァラクリシュナは〕それら世界の全存在を要約し、〈ブラフマーから始まって草木に終わる〉〔と言ったのである〕。“stamba”という言葉の使用によって木などが包含されている。

以上のように、合計14種の一つ一つを明示している。それでは、次項で3つの段階ごとにそれぞれの註釈書の説をまとめてみたい。

神の位

神の位は8種であり、まとめると図表16のようになる。

まず、これら註釈書の中で、MとSTKは同一で、ブラフマー、プラジャーパティ、インドラ、祖先、ガンダルヴァ、ヤクシャ、ピシャーチャ、ラクシャスが考えられている。SSでは、祖先がなくアスラが見られる。Gでも祖先はないが、代わりにソーマが説かれている。Yでは、ヤクシャは見られず、ナーガが見られる。Jはインドラと祖先が説かれておらず、代わりに太陽（太陽神）とアスラが説かれている。時代順に考えると、比較的后代であるMとSTKが収録数の多いものを採用している。

ブラフマー、プラジャーパティ、インドラ、祖先、ソーマ、太陽（太陽神）は神格に相当する存在であり、ガンダルヴァとヤクシャは精霊や半神といった存在であるので、神の位に置かれるのは当然である。しかし、アスラとナーガは悪魔に近い存在、ピシャーチャとラクシャスは鬼や妖怪に相当するものであり、このような存在が神の位に列挙されているのは興味深い。ただし、アスラとナーガに関しては、ヴェーダ神話などのように神に近い存在かあるいは同存在のものもいるので、神の位に名を連ねても不自然ではないと考えられる。一方、ピシャーチャ、ラクシャスは、悪い意味合いが強い存在なので、サットヴァ性のもとは一見すると考えにくい。おそらく、神の位には、超自然的存在が置かれていると考えるのが妥当であろう。また、サットヴァがただ増大すれば良いとは考えておらず、3種のグナを超えた先に解脱を想定しているから、このような分類になると考えられる。

人の位

人の位は1種であるとの註釈書でも説かれており、バラモン（ブラーフマナ）、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラというヴァルナの4階級に否定的であったといえる。さらにMではチャンダーラという4ヴァルナ制の枠外の人も人間の位にあげている。このように、サーンキヤ説ではヴァルナやジャーティなどの階級差別を否定し、いずれも人間として同等であることを説いているのである。この説は、インド思想の中でも非常に特異な考え方と言っても差し支えなからう。例えば、MSでは²⁰、このサーンキヤ思想に基づき人の位は1種としながらも、細かな区分では、バラモンをサットヴァ性に、シュードラやヴァルナ外の者をタマス性に分類しているのである。

獣の位

獣の位は5種である。図表17の通り、獣の位に関しては、SS以外は全く同じである。家畜、野生動物、鳥類、蛇など、植物などの計5種が考えられており、植物も含まれるということは、人間と同様に植物にも輪廻を認めていたと考えられる。

一方、SSに関して、本多氏は次のように説明している。

四足と傍形とが *paśu, mrga* の訳であるかどうかは疑問である。四足は *catuṣpad*、飛行は *khaga*、胸行は *uraga*、傍形は *tiryāñc* の訳と考えた方が一層よいだろう。²¹

用語は他の註釈書とは異なるが、おそらく同一の内容を説いているのであろう。

第2.3節 ダルマ（法）とアダルマ（非法）による上昇と下降

他方、SK 44には以下のように説かれる。

dharmeṇa gamanam ūrdhvaṃ gamanam adhastād bhavaty adharmeṇa // SK44ab

ダルマ（法）によって上昇があり、アダルマ（非法）によって下降がある。

このダルマ（法）とアダルマ（非法）とはブッディの8種の状態のことである。それは次のように説かれている。

adhyavasāyo buddhir dharmo jñānaṃ virāga aiśvāryam /

sāttvikam etad rūpaṃ tāmasam asmād viparyastam // SK 23

ブッディとは決知である。ダルマ（法）と知恵と離欲と自在力、それは、サット

²⁰ 第3章第2.2節

²¹ [本多 1980: p. 573]

ヴァ性の形態であり、タマス性はその反対のものである。

ダルマすなわち善い行いとはサットヴァ性のものであり、アダルマすなわち悪い行いはタマス性のものである。サットヴァが優勢となりダルマ（法）が生じれば上昇し、タマスが優勢となればアダルマ（非法）が生じ下降するというのである。

註釈書ではどのように説明されているのであろうか。

SS では次のように説かれている。

世間中若人能作夜摩尼夜摩等法因此法臨受生微細身向上生八処一梵二世主三天四乾闥婆五夜叉六羅刹七閻摩羅八鬼神是八処由法故得生若翻此十法而作非法者臨受生時向下五処生一四足二飛行三胸行四傍形五不行是五処非法所生 (SS 44)

世間の中、若し人能く夜摩・尼夜摩の法を作さば、此の法に因り生を受くるに臨んで、微細身向上し、八処に生ず。一には梵、二には世主、三には天、四には乾闥婆、五には夜叉、六には羅刹、七には閻摩羅、八には鬼神なり²²。是の八処は法に由るが故に、生ずる得。若し此の十法を翻じて非法を作さば、生を受くる時に臨んえ、向下の五処に生ず。一には四足、二には飛行、三には胸行、四には傍形、五には不行なり。是の五処は非法の生ずる所なり。(本多恵訳 [本多 1980: p. 495])

G では次のように説かれている。

dharmeṇa gamanam ūrdhvam. dharmam nimittam kṛtvā ūrdhvam upayāti. ūrdhvam ity aṣṭau sthānāni gr̥hyante. tad yathā — brāhmaṇam, prājāpatyaṇam, saumyaṇam, aindraṇam, gāndharvaṇam, rākṣasaṇam, paśīcam iti. tat sūkṣmaśarīraṇam gacchati. paśuṃrgapakṣisarīrpaśthāvarānteṣv adharmo nimittam. (G 44)

〈ダルマ（法）によって上昇があり〉、ダルマを原因として上へ導く。「上へ」[という語によって]、8つの場所が把握されている。すなわち、ブラフマー、プラジャーパティ、ソーマ、インドラ、ガンダルヴァ、ヤクシャ、ピシャーチャ、ラクシャスである。そこへ微細な表徴は行く。家畜、野生動物、鳥類、這うもの、動かないものを終わりとするものの中へ行くには、アダルマ（非法）を原因とする。

Y においては次のように説明されている。

ukto dharmah. tadanuṣṭhānād aṣṭavikalpāyām devabhūmāv utpattir bhavati. ad-

²² 梵、世主、天、乾闥婆、夜叉、羅刹、閻摩羅、鬼神があげられる。それぞれ、ブラフマー、プラジャーパティ、インドラ、ガンダルヴァ、ヤクシャ、ラクシャス、ヤマ王 (Yamarāja)、ピシャーチャに該当するものと思われる。SS 54 の説と異なり、阿修羅生と沙神生の代わりに閻摩羅と鬼神があげられている。なぜ2つの異なった説が混在しているのであろうか。不明な点が多いため、本稿では53偈の説を検証の対象とした。

harmo 'py uktaḥ. tadanuṣṭhānāt pañcavikalpāyām tiryagbhūmāv utpattir bhavati. ūrdhvaśabda utkr̥ṣṭavacanaḥ. dharmeṇa deveṣu mānuṣeṣu tiryakṣu cordhvagamanam utkr̥ṣṭam janma bhavati. tathādharmād adhogamanam apakr̥ṣṭam janma bhavatīti. (Y 44ab)

ダルマが説かれる。その行為により、8種類の神の場所が生起するのである。また、アダルマも説かれる。その行為により、5種類の獣の場所が生起するのである。向上(ūrdhva)という語は、すなわち上昇(utkr̥ṣṭa)という言葉である。ダルマによって、神のところに、人のところに、獣のところに、向上すなわち上昇して、生まれるのである。同様に、アダルマにより、降下すなわち下降し、〔位の低い神のところに、人のところに、獣のところに〕生まれるのである。

Jには次のように説かれている。

dharmenetyādi. dharmādinimittam ūrdhvagamanādi naimittikam. tatra dharmeṇa yamaniyamalakṣaṇena gamanam ūrdhvam iti sūkṣmaśarīrasya devādib(v?)yavasthitir ity arthaḥ. gamanam adhastād bhavaty adharmeṇeti. tiryagyonīṣu sthitiḥ. miśrān manuṣyaloke sthitir ity arthoktam. ... (J 44)

〈ダルマ(法)によって〉などとは。ダルマなどが原因であり、上昇などが結果である。その中で、〈ダルマ(法)によって〉すなわち禁戒(ヤマ)と勸戒(ニヤマ)の表徴によって、上昇という、微細な身体(sūkṣmaśarīra)が神など〔の位〕に留まることという意味である。〈アダルマ(非法)によって下降がある〉とは。獣の胎に留まることである。〔両方の〕混在によって、人の世界に留まるという意味であると言われる。(以下省略)

Mには次のように説かれている。

tatra dharmo nimittam. iha loke dharmam yaḥ kurute tan nimittam kṛtvā sūkṣmaśarīram ūrdhvaṃ gacchati. ūrdhvam ity aṣṭānām devayonīnām grahaṇam. tatra ādyam brāhmanam. prajāpatyam, aindraṃ, pitryam, gāndharvaṃ, yākṣam, rākṣasam, paisācam ity etāny aṣṭau sthānāni sūkṣmaśarīram gacchati. tatra dharmo nimittam, ūrdhvagamanam naimittikam. kiṃ cānyat — gamanam adhastād bhavaty adharmeṇa. iha loke yamaniyamalakṣaṇo dharmas tadviparīto hy adharmaḥ, tenādharmeṇa sūkṣmaśarīram adhastād gacchati paśvādi. paśumṛgapakṣisarīrṣpsthāvaram iti pañcadhā tiryak sthāvarāntam. atrā'dharmo nimittam, adhogamanam naimittikam. (M 44)

この中で、ダルマが原因である。この世界において、善を行うものは、それを原因として、微細な身体は上昇する。上昇という言葉によって、8種の神格が説かれ

ている。この中で、最初のものがブラフマーに関するものである。〔次に、〕プラジャーパティに関するもの、インドラに関するもの、祖先に関するもの、ガンダルヴァに関するもの、ヤクシャに関するもの、ラクシャスに関するもの、ピシャーチャに関するものである。以上、これら8つの場所に、微細な身体は行く。この中で、ダルマが原因で、上昇がその結果である。さらに、アダルマによって下降する。この世において、禁戒 (yama)、勸戒 (niyama) と定義されるダルマがあるが、実に、それと正反対のものがアダルマである。このアダルマによって、微細な身体が獣等へ降下する。家畜、野生動物、鳥類、這うもの、動かないものという5種が、獣すなわち「草木に終わるもの」である。この中で、アダルマが原因で、降下がその結果である。

これらの註釈書はいずれも、SK 53 の説と整合させ、上昇とは神の位に生まれ、下降とは獣の位に生まれることと説明される。しかし、Y は若干異なり、ダルマによる神の場所の生起とアダルマによる獣の場所の生起が説かれるのであるが、一方では、ダルマによる上昇が神、人、獣の3つのところの上位に生まれ、また、アダルマによる下降が3つの位の中でも低いところに生まれるとされる。

これに対して、STK では次のように解釈されている。

“dharmeṇa gamanam ūrdhvam”, dyuprabhr̥tiṣu lokeṣu gamanam. “gamanam adhastād bhavaty adharmeṇa”, sutalādiṣu lokeṣu. (STK. 44 (2)–(3))

〈ダルマ（法）によって上昇があり〉とは、天上をはじめとする世界に行くことである。〈アダルマ（非法）によって下降がある〉とは、スタラなどの世界に〔行くこと〕である。

上昇に関しては、サットヴァ（純質）性の輪廻である神の位に生まれることと対応させ、天上世界に至るとするが、下降することは獣の位ではなく、地下世界に至るとしている²³。

これに関して、金倉氏は、次のように説明している。

非法によって地下界に墮ちるとするのは、本典特有の説である。Ca (『サーンクヤ・チャンドリカー』) は地獄 (naraka) に墮ちるとする。しかし他は畜生位 (家畜、野獣、鳥、爬虫類、植物) に生まれる、とする。また第五三偈には畜生位に五種ある、というから、本典や Ca の説は整合性を欠く²⁴。

²³ インド思想においては世界を基本的に大地・空間・天空の3つに分ける。一説には、プラーナ聖典などによると、bhūr (地界)、bhuvā (中空間)、svar (天空) という3つの世界があり、さらにその上に、maharjanar, tapas, satya という天界が順次あり、合わせて7つの世界が存在するという。地上世界の下には、atala, vitala, sutala, rasātala, talātala, mahātala, pātāla という7つの地下世界があり、それとは別に naraka (地獄) があるという [橋本他 2005: p. 72–73]

²⁴ [金倉 1984: p. 209]

はたして、整合性を欠くとして結論づけてしまって良いのであろうか²⁵。

第2.4節 小結

サーンキヤ思想において、3種のグナは現象世界のあらゆるものの中に存在し、いずれかが優勢・劣勢となり様々に変化する。そして、人間の心の状態を左右する属性としての機能と全ての物質の構成要素としての機能という2つの機能を持つものでもある。

さらに、サーンキヤ説では、3種のグナ（要素）により輪廻を3つの段階に分けて考えていた。そこには次のような2つのパターンが見出せる。

パターン1：生まれや位による区別

サットヴァ／善行	：	神の胎・位
ラジャス／善行と悪行	：	人の胎・位
タマス／悪行	：	獣の胎・位

パターン2：世界による区別

サットヴァ／善行	：	神の世界・天界
ラジャス／善行と悪行	：	人の世界
タマス／悪行	：	地獄・地下世界

パターン1では、3種のグナ（要素）や善行・悪行が、「生まれ」や「位」に関係して、神・人・獣に生まれる。一方、パターン2では、3種のグナ（要素）や善行・悪行が、「世界」に関係して、神の世界・人の世界・地獄や地下世界に至るのである。いわば、パターン1では、上昇・下降を観念的に捉え、パターン2では、上昇・下降を現象的に捉えていると考えられる。さらに、パターン2は現象世界の創造にも関連していると想定できる。そして、サーンキヤ思想における創造説は現象世界と観念が密接な関係を持つため、このような2つのパターンが入り交じっているのである。

SKの註釈書では、おおよそ44偈の上昇と下降を観念的に捉え、アダルマ（悪い行い）により下降することによって、獣の位に生まれると説くが、STKでは、上昇と降下を現象的に捉え、アダルマ（悪い行い）により、地下世界に落ちると考えていたのである。このように別の観点から説かれているので、矛盾はないと考える。

なお、MBh第12巻291章の説²⁶では、タマス（翳質）による降下を現象的に捉え地獄に落ちると考え、悪行による降下を観念的に捉え、獣の胎に生まれると考えている。MS

²⁵ なお、これらの説に関して、*Sāṃkhyavṛtti* では、該当箇所が欠落し [Solomon 1973b]、*Sāṃkhyasaptatvṛtti* ではMと同じである [Solomon 1973a]。

²⁶ 第2章第3.4節を参照。

も同様に²⁷、9つの分類と悪行によって地獄に落ちるという観念的と現象的の2つのパターンが考えられている。また、『バガヴァッド・ギーター』²⁸や MBh 第12巻第302章の説²⁹では、同じ偈で、世界に至ることと、胎に生まれることが両方説かれていて、はっきりと区別されてはいない。エピック・サーンキヤの段階ではまだはっきりと整理されておらず、様々な解釈がなされていたのであろう。

²⁷ 第3章第2.2節を参照。

²⁸ 第2章第6.2節を参照。

²⁹ *sāttvikasyottamaṃ sthānaṃ rājasasyeḥa madhyamaṃ /*

tāmasasyādhamam sthānaṃ prāhur adhyātmacintakāḥ // MBh 12.302.3

この世において、サットヴァ性のもは最上の状態であり、ラジャス性のもは中間〔の状態〕、タマス性のもは最低の状態であると、内なるアートマンを熟慮する者達は言う。

kevaleneḥa puṇyena gatim ūrdhvām avāpnuyāt /

puṇyapāpena mānuṣyam adharmeṇāpy adhogatim // MBh 12.302.4

この世において、〔人は〕純粋な善行によって上昇するであろう。善行と悪行によって人間の〔世界〕に〔至り〕、また、アダルマ（不徳）によって下降する〔であろう〕。

avyaktasattvasaṃyukto devalokam avāpnuyāt /

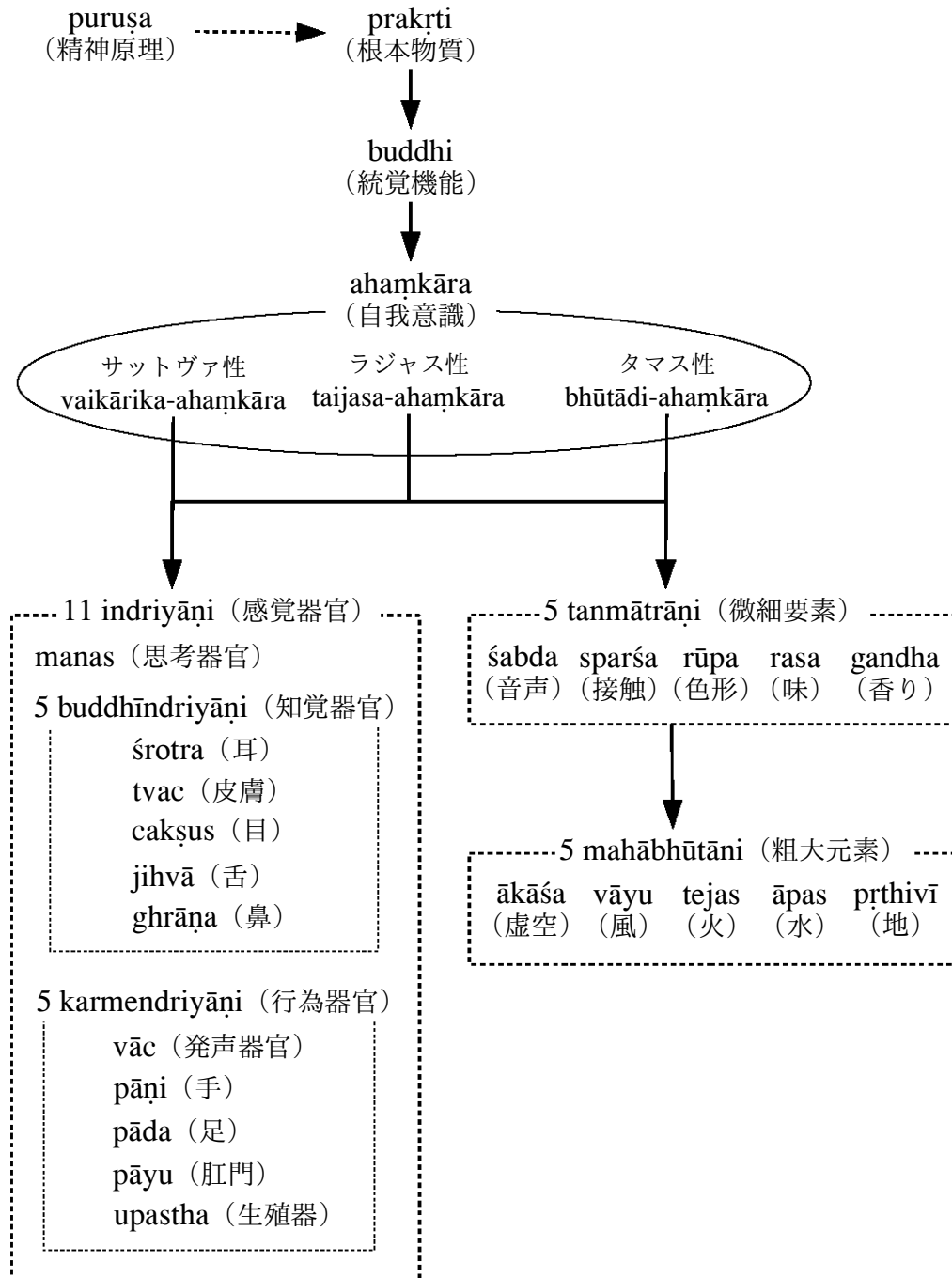
rajaḥsattvasamāyukto manuṣyeṣūpapadyate // MBh 12.302.7

未顕現のもの（avyakta）とサットヴァの結合は神の世界に至るであろう。ラジャスとサットヴァの結合は人間〔の世界〕に到達する。

rajastamobhyāṃ saṃyuktas tiryagyonīṣu jāyate /

rajastāmasasattvaiś ca yukto mānuṣyam āpnuyāt // MBh 12.302.8

ラジャスとタマスの2つによる結合は獣のヨーニ（胎）に生まれる。そして、ラジャスとタマス性の（？）サットヴァによる結合は、人間の性質を得る。



図表 12 SK における開展説

『金七十論』	<i>Gauḍapāda</i>	<i>Yuktidīpikā</i>	<i>Jayamaṅgalā</i>	<i>Māṭhara</i>	<i>Tattvakaumudī</i>
梵王生	brāhmam	brahman	brāhmaḥ	brāhmam	brāhmaḥ
世主生	prājāpatyam	prajāpati	prājāpatyaḥ	prājāpatyam	prājāpatyaḥ
天帝	aindram	indra	sauraḥ	aindram	aindraḥ
阿修羅生	saumyam	pitṛ	āsuraḥ	paitrām	paityaḥ
乾闥婆生	gāndharvam	gandharva	gāndharvaḥ	gāndharvam	gāndharvaḥ
夜叉生	yākṣam	nāga	yākṣaḥ	yākṣam	yākṣaḥ
沙神生	paiśācam	piśāca	paiśācaḥ	paiśācam	paiśācaḥ
羅刹生	rākṣasam	rakṣas	rākṣasaḥ	rākṣasam	rākṣasaḥ

図表 16 8種の神の位

<i>Tattvakaumudī</i>	<i>Gauḍapāda</i>	<i>Yuktidīpikā</i>	<i>Jayamaṅgalā</i>	<i>Māṭhara</i>	『金七十論』
	paśu	(家畜)			四足生
	mṛga	(野生動物)			傍形生
	pakṣi	(鳥類)			飛行生
	sarīrpa	(這うもの=へびなど)			胸行生
	sthāvara	(動かないもの=植物など)			不行生

図表 17 5種の獣の位

第 6 章

パーンチャラートラ派における世界構成原理

第 1 節 *Ahīrbudhnyasamhitā* における世界構成原理

本節では、AhS 第 7 章における *śuddhetarasṛṣṭi* 説（「不浄なる創造」説）を取り上げる。ここでは、サーンキヤ思想の理論である 25 原理説が用いられており、一見するとそのまま採用したかに見えるが、その根幹部分にエピック・サーンキヤの影響が見られる。Shrader や松原氏の解釈に拠りつつも、その思想内容と影響関係の検証を行う。

第 1.1 節 創造説の 3 段階

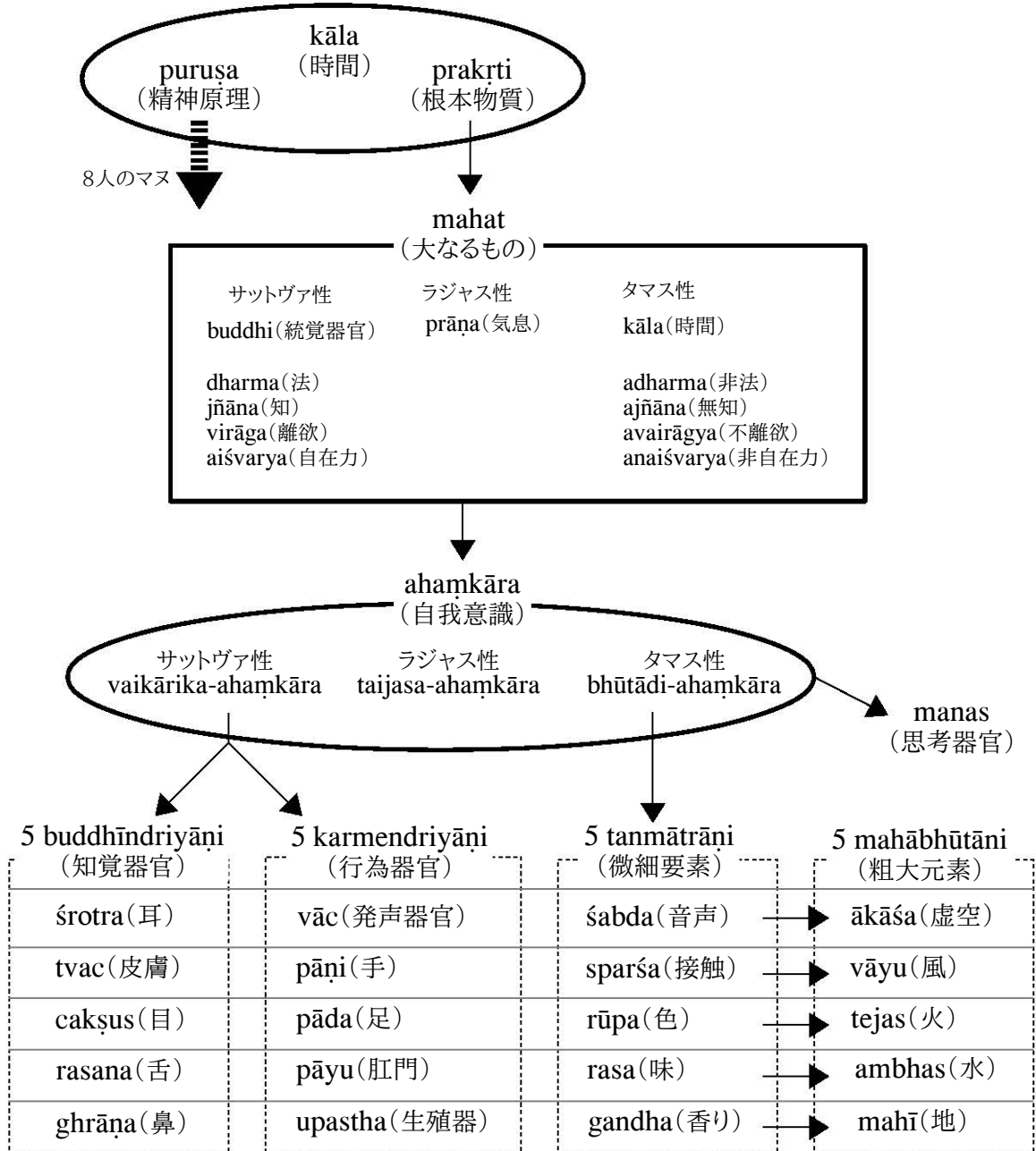
AhS では、世界創造¹を「清浄なる創造」(*śuddhaṣṛṣṭi*)と「不浄なる創造」(*śuddhetarasṛṣṭi*)の 2 種類に分類するが、内容にしたがって「不浄なる創造」を 2 種に分け、全部で 3 段階、すなわち、第 1 段階：「高次」または「清浄」、第 2 段階：「中間」または「清浄かつ不浄」、第 3 段階：「低次」または「不浄」に分けて解釈する²。

その第 1 段階では、ヴィシュヌのシャクティが目覚めて世界創造が始まり、ラクシュミーの顕現やヴューハ説が説かれる。次の第 2 段階では神話的でかつ個我の集合体が扱われ、神的エネルギーすなわちシャクティの展開が説かれる。そして、第 3 段階にいたって実際の現象世界の出現に至る。この第 3 段階の現象世界の創造説においてサーンキヤ思想の理論が用いられている。その原理展開は図 18 のようになる。一見すると、サーンキヤ哲学における 25 原理と同じに見えるが、異なる箇所がいくつも存在する。それをこれか

¹ AhS 第 4 章から第 7 章。

² 引田氏を参照 [引田 1997: p. 56]。Shrader は、Higher or 'Pure' Creation、Intermediate Creation、Lower Primary Creation と説明している Schrader [1916]。

ら検証しよう。



図表 18 AhS 7 における原理の展開

第 1.2 節 3 つの根源

AhS の宇宙論において現象世界の創造説の始まりは 3 つの原理からなる。すなわち、次の 3 つである。

3つの根源

- プルシャ (puruṣa、精神原理)
- プラクリティ (prakṛti、根本原質)
- カーラ (kāla、時間)

これらは、次のように説かれる。

anyūnānatiriktaṃ yad guṇasāmyaṃ tamomayaṃ /
tat sām̐khyair jagato mūlaṃ prakṛtiś ceti kathyate // AhS 7.1

過不足のないグナの均衡は、タマスで覆われた（タマスから成る）ものである。それは、サーンキヤの論師たちによって、世界の根本すなわちプラクリティと呼ばれる。

kramāvatīrṇo yas tatra caturmanuyugaḥ pumān /
samaṣṭiḥ puruṣo yoniḥ sa kūṣastha itīryate // AhS 7.2

プンス（精神原理）は、4組のマヌ（＝8人のマヌたち）として、そこにおいて段階的に降下する。それは、総体（集合体）³、プルシャ、ヨーニ⁴、頂点に存在するものと言われる。

yat tat kālamayaṃ tattvaṃ jagataḥ samprakālanam/
sa tayoh kār̐yam āsthāya samyojakavibhājakah // AhS 7.3

世界の作動者であるかのカーラ（時間）から成る原理は、2者（プルシャとプラクリティ）に結果をもたらし、結合させたり分断させたりするものである⁵。

プルシャとプラクリティという2つの原理は、古典サーンキヤと同じく、前者は展開しないが、後者は展開する。古典サーンキヤと大きく異なる点は、カーラを原理にあげることである。普通、SK などでは時間は原理にあげられない。さらにカーラについて AhS では次のようにも説かれる。

kālaḥ pacati tattve dve prakṛtiṃ puruṣaṃ ca ha // AhS 7.6cd

カーラ（時間）は、プラクリティとプルシャという2つの原理を料理する（食べる、消化する）⁶。

³ “the aggregate [of the manus]” [Matsubara 1994: p. 229]

⁴ ジーヴァのヨーニである。 [Matsubara 1994: p. 236]

⁵ 松原氏は “The principle Time, the great impeller of the world, is the agent uniting and separating the two (i.e., Puruṣa and Prakṛti, in the evolution and dissolution, respectively), influencing their effects” と訳している。 [Matsubara 1994: p. 229]

⁶ “pacati” は「料理する」と「食べる」両方の意味がある。「料理する」という意味で取った場合、時間は展開へと導く原理と考えることができる。しかし、時間の性質を考えれば「食べる」という表現も妥当であ

AhS 7.3cd や AhS 7.6cd で説明されているように、カーラは、結合しているプルシャとプラクリティを分離させ、分離しているプルシャとプラクリティを結合させる原理である。すなわち、2者の分離により世界は創造され、世界が還滅して2者は結合するのである。このことから、カーラは他の2者を司る原理とも考えられる。

これら3つの原理は、始め、「土塊」になっていると説かれている。

mr̥ṭpiṅḍībhūtam etat tu kālādītritayaṃ mune /

viṣṇoḥ sudarśanaenaiva svasvakāryapracoditam // AhS 7.4

聖者よ。しかしながら、この時間などの3組（プルシャ、プラクリティ、カーラ）は、土塊の〔ような〕状態であって、ヴィシュヌの円盤（sudarśana）によってのみ、それぞれの結果に向かわせられる。

ここでの3つから成る組み合わせは、あらゆる要素が混在している状態すなわち未顕現の状態を指していると思われる。それらがヴィシュヌの円盤（sudarśana）によってのみ、それぞれの結果に向かわせられるとされる。すなわち最高神の意欲を表すヴィシュヌの円盤により時間原理が始動して、プルシャとプラクリティの分離が起こり世界が創造されると考えられる。古典サーンキヤの二元論の上に、それらを統合する存在としてヴィシュヌを立て、一元論に捉え直していることは明らかである。

さらに、因中有果論は古典サーンキヤにおいてプラクリティのみに帰されるが、AhS では、プルシャも含む3組すべてに対し、現象世界が創造される以前の段階において原因のなかに結果がすでに内包されていることが想定できる。

また、プルシャに関して、Schrader は古典サーンキヤのように複数のプルシャがあるのではなく、この創造の段階においては、「頂点に存在するもの」や「総体（集合体）」というように唯一のものであると説明している⁷。松原氏はこの「総体（集合体）」をマヌたちの集合と考えている⁸。

第1.3節 マハットと個々人の主体

AhS では、未顕現（avyakta、すなわちプラクリティ）から生み出されるものがマハットである。それは次のように説かれる。

puruṣādhiṣṭhitāt tasmād viṣṇusaṃkalpacoditāt /

ろう。あるいは、展開のときには2つの原理を料理し、還滅のときにはその2つを食べるという両義を表しているのかもしれない。この“kāraḥ pacati”は『マハーバーラタ』でよく見られる表現である（Mbh. 1.1.188; 12.217.39; 12.220.84; 12.231.25; 12.309.90; 17.1.3. など）。

⁷ [Schrader 1916: p. 80]

⁸ [Matsubara 1994: 229]

kālena kalitāc caiva guṇasāmyān mahāmune // AhS 7.7

mahān nāma mahattattvam avyaktād uditam mune / AhS 7.8ab

偉大なる聖者よ。かのプルシャの支配により、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、そして、実に、カーラによって強いられることにより、グナが均衡している未顕現 (avyakta) から、マハットという名前の大なる原理が、生まれた。聖者よ。

SK と異なる点は、プルシャではなく、ヴィシュヌの意欲が作動因となっていることである。そして、その意欲に駆り立てられたカーラによってグナの均衡が崩れ、マハットが生まれるのである。このカーラがプラクリティに対する直接的な作動因となっていることも、SK とは異なる点である。本来、因中有果論の立場に立つサーンキヤにとって、時間は原理には数えられていない。原因の中に結果が内包されているため、両者は本来的に同性質のものであり、結果として顕れているかどうかで両者を分けるものである。そのため、SK における時間は、万物が成立するための条件にすぎないのである。

さらに、AhS におけるマハット (mahat) は、3種のグナに応じて異なる形をとるが、それには2つのパターンがある。まず、1つ目のパターンは、次のように説かれる。

kālo buddhis tathā prāṇa iti tredhā sa gīyate // AhS 7.9cd

カーラ (時間)、ブッディ (統覚器官) およびプラーナ (氣息) がその3種類であると説明される。

tamaḥsattvarajobhedāt tattadunmeṣasamjñayā /

kālas truṭilavādyātmā buddhir adhyavasāyinī // AhS 7.10

prāṇaḥ prayatanākāra ity etā mahato bhidāḥ / AhS 7.11ab

タマス、サットヴァ、ラジャスの区別により、それぞれ開眼 (= 覚醒) の〔仕方の〕名称として、カーラはトルティヤラヴァなど〔の時間単位〕を本質とするものとなり、ブッディは決定するものとなる。〔また、〕プラーナは活動という形態となる。以上、これらがマハットの分類である。

3種のグナのそれぞれに応じて、マハットは3つの形をとる。すなわち、タマス性はカーラ (時間)、サットヴァ性はブッディ (統覚器官)、ラジャス性はプラーナ (氣息)⁹である。すでに3つの根源の一つとしてカーラが現れているが、ここで説かれているカーラは、それとは別ものである。Schrader が指摘している通り¹⁰、3つの根源で説かれているものの方が高次であり、創造原理で、展開しないものであるが、マハットのカーラは、それより

⁹ SK. 29 に5つのプラーナについて説かれている。そこにおいては各器官に共通な機能とされている。

¹⁰ [Schrader 1916: p. 81]

も低次で、具体的な時間である。すなわち、3つの根源としてのカーラは、直接的な作動因として物質世界を成立させるための抽象的な時間であるが、マハットとしてのカーラは展開したものとして実際の時間—例えば、時間の単位など—である。

もう一つのパターンは次のように説かれる。

dharmo jñānaṃ virāgaś cāpy aiśvaryaṃ iti saṃjñāyā // AhS 7.11cd

mahataḥ sāttvikaṃ rūpaṃ caturdhā pravibhajyate / AhS 7.12ab

そしてまた、ダルマ（法）、知、離欲、自在力という名称として、マハットのサットヴァ性の形態は、4種に分けられる。

adharmājñānāvairāgyaṃ anaiśvaryaṃ ca tāmasaṃ // AhS 7.12cd

〔それとは反対に〕アダルマ（非法）、無知、不離欲、そして非自在力がタマス性のものである。

サットヴァ性はダルマ（法）、知、離欲、自在力として、そしてタマス性はアダルマ（非法）、無知、不離欲、非自在力として、2つに分類される。これらは、古典サーンキヤにおけるブッディの8種の状態¹¹と同じである¹²。しかし、古典サーンキヤと異なり、8種の状態はブッディではなくマハットに帰せられる。

これら2つのパターンをまとめると次の通りである。

パターン1

- タマス性：カーラ（時間）
- サットヴァ性：ブッディ（統覚器官）
- ラジャス性：プラーナ（氣息）

パターン2

- サットヴァ性：ダルマ（法）、知、離欲、自在力
- タマス性：アダルマ（非法）、無知、不離欲、非自在力

このように、古典サーンキヤにおいて、ブッディに帰せられていた機能、25原理との関係性が不明瞭であったプラーナ、全く考慮されていなかったカーラ、これらのものが AhS においてマハットに集約されているのである。また、パターン1の分類は古典サーンキヤには見出せず、パターン2と全く異なるものである。Schraderによると、矛盾した2つの

¹¹ 「ブッディとは決知（統覚機能）である。ダルマ（法）と知恵と離欲と自在力、それは、サットヴァ性の形態であり、タマス性はその反対のものである。」（SK 23）

¹² ブッディの8種の状態に関して、SK においても、AhS においても、ラジャスについては説かれていない。

主張が並記されているが、前者はより古いものを示しているという¹³。

さて、AhS でのマハットとブッディの関係は上記の通りであるが、古典サーンキヤではブッディとマハットは同義語であることに注意しなければならない。この AhS でのマハットとブッディの関係は古代の名残りであるということは、すでに Schrader によって KāthUp を参照して指摘されている¹⁴。その KāthUp においてマハット・アートマンとブッディは別の原理としてあげられているのである¹⁵。その原理展開は、プルシャ→アヴィヤクタ（未顕現）→マハット・アートマン（大なるアートマン）＝マハット→ブッディ→マナス→アルタ（対象）→インドリヤ（器官）ということが考えられる。すなわち、ブッディの上位概念として、マハット・アートマンがあげられているのである。

このマハット・アートマンについて、MBh、MS などにおいても説かれている。その一例として、MBh 第 12 巻 298 章¹⁶においては、マハットはすなわちマハット・アートマンであり、ブッディを本性とすることが説かれる¹⁷。また、MBh 第 12 巻 327 章¹⁸では、未顕現 (*avyakta*) 以下、8つのプラクリティが生み出すものとして考えられ、マハット・アートマンは未顕現から生じアハンカーラを生み出すものとして想定されている¹⁹。さらに、MS 12.12-14 においては、アートマンと別のものとしてブータ・アートマン (*bhūtātman*) がマハットと同義で説かれている²⁰。

このように、MBh や MS の説では、それぞれの原理展開に差異はあるが、マハット・アートマン、マハット、ブータ・アートマン、ブッディは、違う用語ではあるが、類似した概

¹³ [Schrader 1916: p. 80]

¹⁴ KāthUp 1.3.10-13 においてブッディとマハットはまったく同一ではなく、ブッディはジュニャーニャ・アートマンと呼ばれ、大なる自己より低次の原理であると論じている [Schrader 1916: p. 83-84]。

¹⁵ 「実に、諸々のインドリヤを超えて諸々の対象があり、そして、諸々の対象を超えてマナスがある。また、マナスを超えてブッディがあり、さらに、ブッディを超えてマハット・アートマンがある。」(KāthUp 1.3.10)

「マハットを超えてアヴィヤクタ（未展開のもの）があり、アヴィヤクタ（未展開のもの）を超えてプルシャがある。プルシャを超えるものは何もない。それは到達点であり、それは最高の帰趨である。」(KāthUp 1.3.11) 本論文の第 1 章 第 2.3 節 も参照。

¹⁶ 本論文の第 2 章 第 4.2 節 を参照。

¹⁷ 「未顕現 (*avyakta*) から、マハット・アートマン (*mahān ātmā*、大なるアートマン) が生じる。王よ。覚者たちは、これを、根本原質に関する第 1 の創造と言う。」(MBh 12.298.16)

「さらに、マハットからアハンカーラが生じる。王よ。[覚者たちは] これを第 2 の創造と言ひ、ブッディを本性とするものと言われている。」(MBh 12.298.17)

¹⁸ 本論文の第 2 章 第 5.1 節

¹⁹ 「それから生じた未顕現 (*avyakta*) を覚者達はかのプラダーナ（根本原理、第一のもの）と知る。世界創造のために、主宰神 (*īśvara*) である未顕現 (*avyakta*) から顕現 (*vyakta*) が生起した。」(MBh 12.327.25) 「実に、[それは] 世界において、ア Niludda、大なるアートマン (*mahān ātmā*、マハットというアートマン) と言われる。そして、この顕現性 (*vyaktatva*) を獲得したもの (ア Niludda) は、祖父 (=ブラフマー) を作り出した。それが、アハンカーラであると言われる。実に、それは、あらゆる光からなるもの (*tejomaya*) である。」(MBh 12.327.26)

²⁰ 本論文の第 3 章 第 1.2 節 を参照。マハット・アートマンは MS 第 1 章にみられる。それについては、本論文の第 3 章 第 3 節を参照。

念であることが想定できよう。KāthUp において、マハット・アートマンはブッディの上位概念として考えられていたが、MBh や MS においてはアハンカーラを生み出すもので、ブッディと同性質の機能を持つようになるのである。そして、さらに古典サーンキヤになると、マハットはブッディの単なる異名として扱われるようになる。古典サーンキヤにおけるマハットの形成に関して今西氏は次のように説明している。永遠なる解脱を求める立場から、究極的存在に運動や変化が内在していることへの批判がある。プルシャをアヴィヤクタから切り離すとマハット・アートマンはプルシャとの本来的な連絡を失い、アートマンと呼ぶに相応しくなくなる。また、アートマンの現実的な主体としての機能はブッディにより果たされ、そのためその位置も失い、単にマハットと呼ばれる同義語になってしまった、という²¹。AhS におけるマハットの問題は、まず第一に KāthUp におけるブッディの上位概念としてのマハットを継承しつつ、MBh などの説と矛盾しないように、ブッディをマハットのサットヴァ性の形態と位置づけている。そして、古典サーンキヤのブッディやプラーナなどの機能をマハットに集約させ、さらに新しい要素としてカーラを加えているのである。

どうして、ブッディではなくマハットという概念を採用したのであるだろうか。そこで一つの仮説を立てて考えてみたいと思う。まず、プルシャは、AhS において単一である²²。そのことをふまえば、プルシャに古典サーンキヤにおけるような個々人の究極的主体としての機能は想定されていないと考えられる。そのため、個々人の主体としての役割を担うものが必要であるが、ブッディは器官の一つであるので、アートマンにおけるような主体としての機能が想定されるとは考えにくく、その機能を果たしにくい。そこで、究極性を除いた低次のアートマン（粗大なるアートマン、物質的アートマン）という意味で、マハット・アートマンの機能が復活し、マハットがその個々人の主体としての役割を担ったと思われる。そして、古典サーンキヤの説と矛盾しないように、様々な機能をマハットに集約させたのである。

ところで、マハットには多数の異名が充てられている。それは次のように説かれる。

vidyā gaury avanī brāhmī vadhūr vṛddhir matir madhuḥ // AhS 7.8cd

akhyātīr īśvaraḥ prājñety ete tadvācakā mune / AhS 7.9ab

ヴィディヤー（知識）、ガウリー（色白の女性＝パールヴァティー）、アヴァニー（大地）、ブラーフミー（ブラフマーの神妃）、ヴァドゥー（花嫁）、ヴリッディ（生起）、マティ（思考力）、マドゥ（蜜）、アキヤーティ（不定のもの）、イーシュヴァ

²¹ [今西 1998: pp. 229–230]

²² プルシャに関して、Schrader は古典サーンキヤのように複数のプルシャがあるのではなく、この創造の段階においては、「頂点に存在するもの」や「総体（集合体）」というように唯一のものであると説明している [Schrader 1916: p. 80]。松原氏はこの「総体（集合体）」をマヌたちの集合と考えている [Matsubara 1994: p. 229]

ラ（主宰神）、プラージュニャー（聡明なるもの）というこれらがそれ（マハット）を示す言葉である。聖者よ。

ここで、マハットの異名の中に、ガウリー、ブラーフミー、イーシュヴァラといった明らかに神格を示しているものが見出される。このような同置は、当然 SK には見出せないものである。しかし、MBh の中では、全く異なる神格ではあるが、例えば、ヴィシュヴァルーパー (MBh 12.291.19)、ヒラニヤガルバ (MBh 12.291.17)、ア Niludda (MBh 12.327.26) などの対応が見られる。一方、イーシュヴァラ（主宰神）に関しては、MBh 12.241.1 ではクシェートラジュニャ（知田者）に、MBh 12.327.25 では未顕現 (avyakta) に対応している。SK では神話的要素から引き離し、完全に個々人の器官としてブッディを扱っているのであるが、しかし、AhS では、先にも述べたように、様々な要素を集約しているために、このような神話的要素を想起させる神格と個々人の器官の同置を行っているのである。

第 1.4 節 アハンカーラとその展開

AhS において、アハンカーラはマハットから展開する。

vidyāyā udare tatrāhaṁkṛtir nāma jāyate / AhS 7.15ab

そのヴィディヤー（＝マハット）の内部に、自己の概念 (ahaṁkṛti) というものが生まれる。

自己の概念 (ahaṁkṛti) は、アハンカーラのことである。それについては後で述べる。そして、アハンカーラは 3 種のグナに応じて、3 つの形態になる。

tasya vaikārikaṁ nāma rūpaṁ sāttvikam ucyate /

taijasam rājasam rūpaṁ bhūtādir nāma tāmasam // AhS 7.17

それ（アハンクリティ）にとって、ヴァイカーリカという形態が、サットヴァ性と言われる。タイジャサがラジャス性の形態であり、ブーターディという〔形態〕がタマス性と言われている。

このように、アハンカーラは 3 種のグナに応じて、3 つの形態を取るのであり、まとめると次の通りである。

アハンカーラの 3 形態

- サットヴァ性：ヴァイカーリカ形態のアハンカーラ
- ラジャス性：タイジャサ形態のアハンカーラ
- タマス性：ブーターディ形態のアハンカーラ

アハンカーラからの展開は3形態のアハンカーラが関係する。まず、サットヴァ性のヴァイカーリカ形態のアハンカーラ、それは次のように説かれる。

tadā vaikārikāt punaḥ // AhS 7.23d

śrotraṃ vāg iti vijñānakarmendriyayugaṃ mune /

samīkṣayaiva devasya manuṣu pratijāyate // AhS 7.24

その次に、ヴァイカーリカ〔・アハンカーラ〕から、耳（聴覚器官）と発声器官という、一組の知覚および行為器官が、神の熟慮（＝ヴィシュヌの意欲）によってのみ、マヌたちの中に生まれる。聖者よ。

vaikārikād ahaṃkārāt tvakpāṇidvitayaṃ mune // AhS 7.27cd

ヴァイカーリカ・アハンカーラから、皮膚（触覚器官）と手の2つが〔生まれる〕。聖者よ。

jāyante taijasā bhedā bhedād vaikārikāt tathā // AhS 7.31cd

sudarśaneritāj jātaṃ cakṣuḥpādayugaṃ mune / AhS 7.32ab

〔そして〕ヴァイカーリカに区別される〔アハンカーラ〕から、次のように、〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、一組の目（視覚器官）と足が生まれる。聖者よ。

atha vaikārikāt tasmād viṣṇusaṃkalpacoditāt // AhS 7.35cd

rasanopastham ity etaj jāyate dṛkkriyātmakam / AhS 7.36ab

次に、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、そのヴァイカーリカ〔・アハンカーラ〕から、舌（味覚器官）と生殖器官というこの認識と作用の性質が生まれる。

vaikārikād ahaṃkārāt sudarśanasamīritāt /

ghrāṇaṃ pāyur iti dvandvaṃ jñānakarmātmakam mune // AhS 7.40

〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、ヴァイカーリカ・アハンカーラから、鼻（嗅覚器官）と肛門（排泄器官）という一組の知覚および行為を本質とする〔器官〕が〔生まれる〕。聖者よ。

このように、ヴァイカーリカ・アハンカーラからの展開として、5知覚器官と5行為器官の併せて10の器官が想定されている。5知覚器官は、耳（聴覚器官）、皮膚（触覚器官）、目（視覚器官）、舌（味覚器官）、鼻（嗅覚器官）であり、5行為器官は、発声器官、手、足、生殖器官、肛門（排泄器官）である。すなわち次の通りである。

ヴァイカーリカ・アハンカーラから展開する5知覚器官、5行為器官

- 耳（聴覚器官） / 発声器官
- 皮膚（触覚器官） / 手
- 目（視覚器官） / 足
- 舌（味覚器官） / 生殖器官
- 鼻（嗅覚器官） / 肛門（排泄器官）

これらは、いずれも微細要素と粗大元素の展開と同じくして説かれている。おそらく、知覚対象との対応を意識してまとめられているのであろう。それは、すなわち、耳（聴覚器官）・発声器官は音声の微細要素と虚空の粗大元素の展開の中で、皮膚（触覚器官）・手は接触の微細要素と風の粗大元素の展開の中で、目（視覚器官）・足は色の微細要素と火の粗大元素の展開の中で、舌（味覚器官）・生殖器官は味の微細要素と水の粗大元素の展開の中で、鼻（嗅覚器官）・肛門（排泄器官）は香りの微細要素と地の粗大元素の展開の中で、それぞれ語られている。

それでは次にタマス性のブーターディ形態のアハンカーラについて取り上げる。それらは次のように説かれる。

bhūtādeḥ śabdatanmātram tāmasād atha jāyate / AhS 7.21cd

次に、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、音声の微細要素が生まれる。

sudarśaneritād viṣṇor bhūtādeḥ sparśamātrakam // AhS 7.25cd

ヴィシュヌの円盤（*sudarśana*）に促されることにより、ブーターディ〔・アハンカーラ〕から、接触の〔微細〕要素を持つものが〔生まれる〕。

tāmasād atha bhūtādeḥ sudarśanasamīritāt / AhS 7.30ab

次に、〔ヴィシュヌの〕円盤（*sudarśana*）に促されることにより、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、色の〔微細〕要素が生まれる。

tāmasād atha bhūtāder viṣṇor īkṣāniyojitāt /

jāyate rasamātram tu / AhS 7.34abc

次に、ヴィシュヌの熟慮（＝意欲）に促されることにより、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、味の〔微細〕要素が生まれる。

sudarśaneritāt tasmād bhūtādes tadanantaram // AhS 7.38cd

jāyate gandhatanmātram / AhS 7.39a

かの〔ヴィシュヌの〕円盤（*sudarśana*）に促されることにより、すぐ後に、ブーターディ〔・アハンカーラ〕から香りの微細要素が生まれる。

このように、ブーターディ・アハンカーラからは5粗大元素が生まれる。

ブーターディ・アハンカーラから展開する5微細要素

- 音声
- 接触
- 色
- 味
- 香り

以上のように、サットヴァ性のヴァイカーリカ・アハンカーラとタマス性のブーターディ・アハンカーラの展開は明らかにされているが、ラジャス性のタイジャサ・アハンカーラの働きが明確ではない。さらに、マナスがこの3形態のいずれかに関係するのか不明である。マナスについては次のように説かれる。

sudarśaneritaṃ viṣṇor āhaṃkārikam indriyam /
mano nāma manūnāṃ taj jāyate cintanātmakam // AhS 7.20

ヴィシュヌの円盤 (sudarśana) に促されて、アハンカーラに属するインドリヤであり、思考を本質とする、マナスと呼ばれるものが、マヌたちに生まれる。

アハンカーラから生み出されるのであろうことは、想定されているようである。

このような、アハンカーラの3分類は、古典サーンキヤの説と類似するものであり、SK 25 に説かれている名称と3種のグナの性質が一致する²³。しかし、SK では、AhS と異なり、マナスがサットヴァ性のアハンカーラから展開することは明らかであり、また、インドリヤと微細要素の両者に展開するというタイジャサ・アハンカーラの働きについても明白である。AhS ではラジャス性のタイジャサ・アハンカーラの働きについては説かれていないが、SK に従えば、両者に展開するものと考えられるかもしれない。SK おいて、ラジャスは活動因としての性質を有しているので、両者に展開するのである。だが、AhS において、活動因はヴィシュヌの意欲である。そのため、ラジャスに活動因の性質が認められると矛盾が生じてしまうことから、ここではラジャスが意図的に省かれている可能性も考えられる。

さて、AhS では、アハンカーラについていくつかの異名があり、それは次の通りである。

ahaṃkāro 'bhimānaś ca prajāpatir ahaṃkṛtiḥ /
abhimantā ca boddhā cety asyāḥ paryāyavācakāḥ // AhS 7.16

²³ 「[ヴァイクリタ・アハンカーラ] (vaikṛta-ahaṅkāra) から、サットヴァ性の11から成るものが展開する。[ブーターディ [・アハンカーラ]] (bhūtādi-ahaṅkāra) から、タマス性の微細要素が [展開する]。[タイジャサ [・アハンカーラ]] (taijasa-ahaṅkāra) から、両者が [展開する]。」 (SK 25)

自己の概念 (ahaṁkṛti) は、アハンカーラ (ahaṁkāra、自我意識) であり、自己の意識 (abhimāna) であり、プラジャーパティ (prajāpati) である。また、あらゆる事を自己に帰するもの (abhimanṛ) であり、認識するもの (boddhṛ) である。以上、この〔アハंकリティ〕の異名である。

ここでは最初にあげられているものは、自己の概念 (ahaṁkṛti) であるが、その呼び名として、アハンカーラ (ahaṁkāra、自我意識)、自己の意識 (abhimāna)、プラジャーパティ (prajāpati)、あらゆる事を自己に帰するもの (abhimanṛ)、認識するもの (boddhṛ) があげられている。その中でプラジャーパティと対応させているのは注目に値する。このようなアハンカーラと創造神との対応は、エピック・サーンキヤにおいてもみられる。MBh 12.291.20 では、AhS と同じくプラジャーパティに対応させている²⁴。しかし一方で、「モークシャダルマ篇ナーラーヤニーヤ章」内の MBh 12.327.26 ではブラフマー (父祖) との対応が見られる²⁵。ともすれば迷妄の原因とも成るであろうアハンカーラが創造神と対応する有神論的サーンキヤ説は初期のサーンキヤ思想の特徴であり、古典サーンキヤではこのような神格との対応は見られない。

第 1.5 節 微細要素から粗大元素への展開

AhS において、微細要素から粗大元素への展開は、次のように考えられている。

viyac ca śabdatanmātrāj jāyate śabdalakṣanam / AhS 7.22ab

音声の微細要素から、音声の表徴である〔粗大元素の一つ〕虚空 (viyat = ākāśa) が生まれる。

音声の微細要素から粗大元素が生まれる。また、上記の AhS 7.25cd で接触の微細要素の展開が語られた直後に、次のように説かれる。

jāyate sparśavān vāyus tasmād api ca jāyate / AhS 7.26ab

〔接触の微細要素が〕生まれ、そして、また、それ (接触の微細要素) から、接触〔の性質〕を持つ〔粗大元素である〕風が生まれる。

²⁴ 本論文の第2章第3.1節を参照。

「まさに転変が始まった彼は、自ら自己を創造する。大いに輝く者は、アハंकリタ (自己の意識) を持ったプラジャーパティであるアハンカーラを〔創造する〕。」(MBh 12.291.20)

²⁵ 本論文の第2章第5節を参照。

「そして、この顕現性 (vyaktatva) を獲得したもの (アニルツダ) は、祖父 (=ブラフマー) を作り出した。それが、アハンカーラであると言われる。実に、それは、あらゆる光からなるもの (tejomaya) である。」(MBh 12.327.26cdef)

「諸々のヴェーダ補助学を含むヴェーダと、諸々のヤジュニャ補助学を含むヤジュニャを、世界の祖父であるブラフマー神 (=アハンカーラ) は、世界の完成のために創造した。」(MBh 12.327.30)

このように、接触の微細要素から風の粗大元素が生まれる。さらに、色の微細要素については次の通りである。

tāmasād atha bhūtādeḥ sudarśanasamīritāt /

jāyate rūpamātraṃ tu jyotis tasmāc ca rūpavat // AhS 7.30

次に、〔ヴィシュヌの〕円盤 (sudarśana) に促されることにより、タマス性のブータディ〔・アハンカーラ〕から、色の〔微細〕要素が生まれ、そして、それ（色の微細要素）から色〔の性質〕を所有する〔粗大元素である〕火 (jyotis = tejas) が〔生まれる〕。

このように、色の微細要素からは火の粗大元素が生まれる。また、次のように説かれる。

jāyate rasamātraṃ tu jāyante 'mbhāṃsi vai tataḥ // AhS 7.34cd

味の〔微細〕要素が生まれ、さらにそれ（味の微細要素）から、まさに〔粗大元素である〕水が生まれる。

味の微細要素からは水の粗大元素が生まれるのである。そして、最後に、次の通り、香りの微細要素から地の粗大元素が生まれる。

jāyate gandhatanmātraṃ tasmād gandhavatī mahī / AhS 7.39ab

香りの微細要素が生まれ、それ（香りの微細要素）から香り〔の性質〕を持つ地〔の粗大元素〕が〔生まれる〕。

以上のように、AhS では微細要素と粗大元素の関係が述べられる。それらをまとめると、次の通りである。

各微細要素から展開する粗大元素

- 音声 → 虚空
- 接触 → 風
- 色 → 火
- 味 → 水
- 香り → 地

この微細要素から粗大元素への展開は、古典サーンキヤもこれに類似しているが、SK においてはどの微細要素からどの粗大元素が現れるかは明らかにされておらず、注釈書により解釈も異なる²⁶。

²⁶ *Gauḍapāda-bhāṣya* では、「香り→地」、「味→水」、「色→火」、「接触→風」、「音声→虚空」とされるが、*Sāṃkhyatattvakaumudī*、*Māthara-vṛtti*、*Jayamaṅgalā* などでは、「音声→虚空」、「接触・音声→風」、「色・

第1.6節 マヌたちの降下

3つの根源から始まる展開は上から段階的に行われる。そしてそれに合わせ、8人のマヌたちが登場する。

kramāvātīrṇo yas tatra caturmanuyugaḥ pumān / AhS 7.2ab

プンス（精神原理）は、4組のマヌ（＝8人のマヌたち）として、そこにおいて段階的に降下する。

これはプルシャが降下するときの姿と考えられる。プルシャは8人のマヌとして降下し、胎児（*garbha*）の状態になるとされる。それは器官や性質などを獲得することを意味している。マハットの段階では次のように説かれる。

vidyāyā udare 'ṣtau te sudarśanasamīritāḥ /

manavo garbhatām yānti sarvajñāḥ sarvadarśinaḥ // AhS 7.13

ヴィディヤー（＝マハット）の内部において、〔ヴィシュヌの〕円盤（*sudarśana*）に促されて、全てを知り、全てを理解する8人のマヌたちが、〔ヴィディヤーの〕胎児の状態になる。

bodhanaṃ nāma vaidyaṃ tad indriyaṃ teṣu jāyate /

yenārthān adhyavasyeyuḥ sadasatpravibhāgīnaḥ // AhS 7.14

彼ら（マヌたち）の中に、ボーダナ（覚）²⁷と呼ばれるヴィディヤー（＝マハット）に属するもの、すなわちインドリヤ（器官）が生まれる。それ（知識）によって、良い悪いの分類をする人たち（＝マヌたち）は、諸々の対象を決定する。

このように、マヌ達は、マハットの段階において、その胎児となることにより、その器官と性質を備えるようになるのである。アハンカーラ、マナスについても同様に、次の通りに説かれる。

nānāvibhavayuktāyām utpannāyām ahaṃkṛtau /

tadantargarbham āyāti manūnāṃ taccaturyugam // AhS 7.19

アハンクリティ（自己の概念）がそれぞれに遍在するものに結びつき生み出された時、4組のマヌたち（＝8人のマヌたち）は、その（アハンクリティの）胎児になる。

manasvī buddhimāṃś cāpi garbho manumayas tathā / AhS 7.21ab

接触・音声→火」、「味・色・接触・音声→水」、「香り・味・色・接触・音声→地」である。[Larson and Bhattacharya 1987: p. 51]

²⁷ 個人にそなわる器官としてのブッディである [Matsubara 1994: p. 236]。

そして、マヌから成る胎児は、ブッディ同様に、マナスを所有する〔ようになる〕。アハンカーラについては胎児になることのみ説かれているが、その機能を備えることは、マハットやマナスの例から明らかである。

次に、粗大元素の胎児となることにより、それらに対応する知覚器官と行為器官を備える。すなわち、虚空の胎児となり虚空の性質と耳（聴覚器官）と発声器官を、風の胎児となり風の性質と皮膚（触覚器官）と手を、火の胎児となり火の性質と目（視覚器官）と足を、水の胎児となり水の性質と舌（味覚器官）と生殖器官を、地の胎児となり地の性質と鼻（嗅覚器官）と肛門（排泄器官）を、順次備えるのである。そのことは次のように説かれる。

tadantargarbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ / AhS 7.23ab

8人のマヌたちは、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、その（虚空の）胎児の状態になる。

śrotravān atha vāgmī ca garbho manumayas tathā / AhS 7.25ab

さらに、マヌから成る胎児は、〔今までと〕同様に、耳（聴覚器官）を持ち、発声器官を所有する。

tadantargarbhatām yāti tadā manumayaḥ pumān // AhS 7.28cd

その時、マヌ〔たち〕から成るプンス（精神原理）は、その（風の）胎児となる。

ceṣṭamānas tadā garbho viṣṇusaṃkalpacoditāḥ /

tvakpāṇidvayavān āsīt sparśādānādisiddhye // AhS 7.29

その時、活動している胎児は、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、触れたり〔手に〕取ることなどを成就するために、皮膚（触覚器官）と手の2つを所有するものとなった。

tadantargarbhatām yānti te sudarśanacoditāḥ // AhS 7.32cd

〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されて、彼ら（マヌたち）はその〔火の〕²⁸胎児となる。

manavo rūpavantas te kāntidīptyādisālināḥ /

cakṣuṣmantaḥ pādavanto vīkṣaṇātanayogināḥ // AhS 7.33

彼ら〔8人の〕マヌたちは、色〔の性質〕を持ち、光沢、光輝など〔の性質〕を所持し、目（視覚器官）を所有し、足を持ち、見ることと歩き回ること〔の性質〕を備

²⁸ AhS 7.30 で火の粗大元素の展開が説かれ、AhS 7.31 では火の性質が、そして、AhS 7.32ab では目（視覚器官）と足の発生が説かれる。そのためここでは火の胎児について説いていることは明白である。

えている。

tadantargarbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ // AhS 7.36cd

manavas te mahābuddhe viṣṇukarmādhikāriṇaḥ / AhS 7.37ab

ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、ヴィシュヌのカルマ（業）の所有者である彼ら〔8人の〕マヌたちは、その（水の）胎児となる。偉大なる覚者よ。

sarasāḥ snehavantaś ca rudhirādīdravānvitāḥ // AhS 7.37cd

jāyante rasanāvantaḥ puṃstrīvyāñjanabheditāḥ / AhS 7.38ab

味性を伴うもの、粘着性を持つもの、そして血などの流動性を所持するもの、舌（味覚器官）を持つもの、男女を分けるもの²⁹が生まれる。

bhuvas te garbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ / AhS 7.41ab

ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、彼ら〔8人のマヌたち〕は、地の胎児となる。

guravaḥ sthiraśamghātā asthidantādisaṃyutāḥ // AhS 7.41cd

ghrāṇavantaḥ pāyumantaḥ saṃpūrṇāvayavā mune / AhS 7.42ab

グルたち（＝8人のマヌたち）は、骨や歯などに備わる不動なものの集合であり、鼻（嗅覚器官）を持ち、肛門（排泄器官）を所持し、〔それぞれの〕部分を完全に備える。聖者よ。

これらをまとめる次の通りである。

マヌたちの降下

- ブッディの胎児 → ブッディの器官と性質を備える。
- アハンカーラの胎児 → アハンカーラの器官と性質を備える。
- マナスの胎児 → マナスの器官と性質を備える。
- 虚空の胎児 → 虚空の性質と耳（聴覚器官）と発声器官を備える。
- 風の胎児 → 風の性質と皮膚（触覚器官）と手を備える。
- 火の胎児 → 火の性質と目（視覚器官）と足を備える。
- 水の胎児 → 水の性質と舌（味覚器官）と生殖器官を備える。
- 地の胎児 → 地の性質と鼻（嗅覚器官）と肛門（排泄器官）を備える。

このように、いろいろなものを順次に備えていくのである。そして、次のように言われる。

²⁹ すなわち生殖器官のこと。

evam sampūrṇasarvāṅgāḥ prāṇāpānādisamyutāḥ // AhS 7.43cd

sarvendriyayutās tatra dehino manavo mune / AhS 7.44ab

このように、〔8人の〕マヌたちは、ここにおいて、あらゆる肢部が完全であり、プラーナやアパーナなどを備え、あらゆるインドリヤ（器官）を備えた身体となる。聖者よ。

最終的に各器官や部分を完全に備えた身体となるというのである。

このように、マヌたちの降下は、胎児になることにより、その機能と器官を備え、完全な身体を備えるようになる。それは、世界創造の中に身体の組成を取り込んでいるのであり、また同時に、マヌたちの降下という神話的要素も入っている。これらはすべて、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることによりおこるのであり、そのため、ラジャスの活動因としての機能は深く考慮されていないとも考えられる。

第1.7節 小結

AhS で説かれている「不浄なる創造」説は、古典サーンキヤと類似して見えるのは確かであるが、細部が異なる。その特徴として、まず、プルシャは単一であり個々人の主体としての機能はマハットが担い、ブッディはマハットの同義語ではなく機能の一部としての役割を果たすのみという根幹的な部分が異なるということである。そして、宇宙論の中に身体論を組み込むサーンキヤ思想の特徴を示しつつ、マヌたちの降下と彼らがそれぞれの段階で胎児になることにより器官や性質を備えた完全な身体になるという神話的要素も含まれているのである。さらに、古典サーンキヤの25原理を踏襲しつつ、それを超越する存在としてヴィシュヌを立て、一元論に再解釈している。そしてその最高神の意欲によりすべては展開するので、ラジャスの活動因として機能はあまり考慮されていないようである。

AhS での諸原理の展開は、一見すると古典サーンキヤの理論を採用しているようであるが、MBh などの影響を残しつつ、様々な要素を取り入れ、パンチャラートラ派の教義へと融合させているのである。

第2節 *Lakṣmītantra* における最高神の顕現

MBh でとかれたビューハ説は、LT では、複雑な様相を帯びる。本節では、LT 2章で説かれる最高神の顕現を取り上げ、考察する。

LT はインドラに請われたラクシュミーがその最高の教えを説くというものである³⁰。

³⁰ LT 第1章では、(1) インドラに願われラクシュミーが LT を明らかにする、(2) 聖仙たちがナーラダに頼

創造の最初の状態は至高のアートマン (*paramātman*) から始まる、ということが示されている。

asti nirduḥkhaṇiḥsīmasukhānubhavalakṣaṇaḥ /
paramātmā paraṃ yasya padaṃ paśyanti sūrayaḥ // LT 2.1

聖仙 (*sūri*) たちが認める至高のアートマン (*paramātman*) の最高の境地 (*pada*) は、苦しみを離れ、計り知れなく、至福の経験という特徴を持つものである。

そして、至高のアートマンは次のように説かれる。

adhvanām adhvanaḥ pāraṃ paramātmānam ūcire /
ahaṃ nāma smṛto yo 'rthaḥ sa ātmā samudīryate // LT 2.3

至高のアートマンをあらゆる道にとっての道の彼岸と言い、わたし (*aham*) として意味が想起されるもの、それがアートマンであると語られる。

anavacchinnarūpo 'haṃ paramātmēti śabdyate /
kroḍīkṛtam idaṃ sarvaṃ cetanācetanātmakam //LT 2.4

束縛から離れたものとしてのわたし (*aham*) が至高のアートマンと呼ばれる。〔その至高のアートマンは〕このあらゆる知覚できる性質のものとはできない性質のものを包含する。

至高のアートマンとアートマンは別ものである。最高処において、活動せず、彼岸であるのが、至高のアートマンであるが、自身をわたし (*aham*) として想起するときアートマンになるのである。わたしには2つの段階があり、〈「わたし」〉として意味が想起されるものがアートマンであり、〈束縛から離れた「わたし」〉が至高のアートマンである。しかも、この第2章の語り部はラクシュミーであるので、ラクシュミーと最高存在を同一視することを意図していると思われる。

次にナーラーヤナの顕現がある。

yena so 'haṃ smṛto bhāvaḥ paramātmā sanātanaḥ /
sa vāsudevo bhagavān kṣetrajñāḥ paramo mataḥ // LT 2.5

永遠なる至高のアートマンの状態であるそれはわたし (*aham*) であると想起することによって、彼はヴァースデーヴァ、バガヴァット、クシェートラジュニヤ、最高存在 (*parama*) とみなされる。

み彼が(1)の神話を語る、(3)それら(1)と(2)の物語をアナスーヤーに乞われアトリが教示する、という三重の構造になっている。ナーラダとアトリというヴェーダに登場する偉大な聖仙に語らせることによって、このLTの権威付けを行っているのである。

至高のアートマンから始まる創造の次の段階であり、無活動であった至高のアートマンが、「わたしである」と自己を認識することによって、自己を最高神として顕現させるのである。これが創造の2番目の段階である。次にラクシュミーが生起する。

ahamarthasamutthā ca sāhaṃtā parikīrtitā /
anyonyenāvinābhāvād anyonyena samanvayāt // LT 2.17

彼女（ラクシュミー）は、「わたしという実在」（ahamartha）から生起するものであり、「わたし性」（ahaṃtā）と言われる。互いに離れていないから、互いに結合しているから。

ナーラーヤナである「わたしという実在」（ahamartha）から、ラクシュミーである「わたし性」（ahaṃtā）が生起するのである。この二者の関係は次のように言われる。

ahamarthaṃ vināhaṃtā nirādhārā na sidhyati /
bhavadbhāvātmakaṃ rūpaṃ samastavyastagocaram // LT 2.19

「わたしという実在」（ahamartha）なしには、「わたし性」（ahaṃtā）は支えがなく、完成しない。存在するもの（ナーラーヤナ）と状態（ラクシュミー）から成る形態は、全体として、また個々のものとして認識される。

至高のアートマンではなく、アートマンとしての「わたし」には2つの側面がある。すなわち「本体としてのわたし」と「機能ないし属性としてのわたし」である。「本体としてのわたし」は、「わたしという実在」（ahamartha）であり、ナーラーヤナである。「機能ないし属性としてのわたし」とは、「わたし性」（ahaṃtā）であり、ラクシュミーである。両者は同一であるが別ものであり、片方が欠けることは想定されていなく、両者は互いに一方がなくては存在できない、すなわち両者は互いに限定し合っているのである。

他方、次のようにも言われる。

ātmā sa sarvabhūtānām ahaṃbhūto hariḥ smṛtaḥ /
ahaṃtā sarvabhūtānām aham asmi sanātani // LT 2.13

彼（ナーラーヤナ）はアートマンであり、あらゆる存在物にとっての「わたしという存在」（ahaṃbhūta）であり、ハリであると認められている。あらゆる存在物にとっての「わたし性」（ahaṃtā）は、永遠なるわたし（aham）なのである。

この永遠なるわたし（aham）は至高のアートマンのこととも考えられ、その場合、「わたし」（aham）は、「わたしという存在」（ahaṃbhūta）＝「わたしという実在」（ahamartha）と「わたし性」（ahaṃtā）という2側面があるが、シャクティである「わたし性」（ahaṃtā）を、属性でありながら永遠なる「わたし」（aham）という最高処と同置しているのである。

「わたしという実在」（ahamartha）と「わたし性」（ahaṃtā）はブラフマンとも言われる。

それは次の通りである。

bhavadbhāvātmakaṃ brahma tatas tac chāśvataṃ padam /
bhavan nārāyaṇo devo bhāvo lakṣmīr ahaṃ parā // LT 2.15

存在するものと状態という〔2つの〕本質がブラフマンであり、それ故にそれは永遠の境地である。存在がナーラーヤナ神であり、状態がラクシュミーであり、わたし (aham) であり、最高処 (parā) である。

lakṣmīnārāyaṇākhyātam ato brahma sanātanam /
ahamtayā samākṛānto hy ahamarthaḥ prasidhyati // LT 2.16

それ故、永遠なるブラフマンをラクシュミー・ナーラーヤナと呼ぶ。なぜなら、「わたし性」 (ahamtā) によって遍満され、「わたしという実在」 (ahamartha) が完成するから。

ラクシュミー・ナーラーヤナ、すなわちアートマンであるところの「わたし」 (aham) は、ブラフマンと同一視されている。一方、次のようにも言われる。

mahāvibhūtir ity ukto vyāptiḥ sā mahatī yataḥ /
tad brahma paramaṃ dhāma nirālambanabhāvanam // LT 2.9

偉大なる彼女 (ラクシュミー) は遍充である故に、「大いなる力の顕現」 (mahāvibhūti) と呼ばれる。それがブラフマンであり、最高の居処、独立した本質である。

ここでは、ラクシュミーとブラフマンを同一視している。

6つのグナについて、次のように説かれる。

śeṣam aiśvaryaṃ vīryādi jñānadharmaḥ sanātanaḥ /
aham ity āntaraṃ rūpaṃ jñānarūpaṃ udīryate // LT 2.26

他の「自在力」 (aiśvarya) や「勇猛さ」 (vīrya) などは「知識」 (jñāna) の特質 (属性、dharma) であり、永遠である。「知識」 (jñāna) の形態は、わたし (aham) という固有の形態であると言われている。

6つのグナ (属性) とは、すなわち、(1) 知識 (jñāna)、(2) 自在力 (aiśvarya)、(3) 潜在力 (śakti)、(4) 力 (bala)、(5) 勇猛さ (vīrya)、(6) 光輝 (tejas) である。その6つのグナ (属性) のうち、「知識」 (jñāna) が本質であり、それ以外の5つは付随するものである。

ここでいう「わたし」とは、ラクシュミーであり、ブラフマンである。それは次の通りに説かれる。

jñānātmikā tathāhamtā sarvajñā sarvadarśinī /
jñānātmakaṃ paraṃ rūpaṃ brahmaṇo mama cobhayoḥ // LT 2.25

同様に、「わたし性」(aham̐tā)の「知識」(jñāna)の本質は、全てを知るものであり、全てを見るものである。ブラフマンとわたしの両者の「知識」(jñāna)の本質は最高の形態である。

すなわち、6つのグナはラクシュミー・ナーラーヤナに帰せられものでもある。ラクシュミー・ナーラーヤナ、ブラフマン、アートマン、「わたし」(aham)、「わたし性」(aham̐tā)、ラクシュミー、「わたしという実在」(ahamr̐tha)、ナーラーヤナ、これらは全て、本質的に同じものである。その現れ方の違いで分けられているにすぎないのである。ラクシュミーとナーラーヤナは「わたし」の2つの側面であるから、不可分の存在なのである。それと同時に、ラクシュミーを最高存在すなわち至高のアートマンと同一に見なそうとする意図が端々に見える。おそらく、シャクティ崇拜の流布の影響を受けたものと思われる。

ところで、ラクシュミーはまた、シャクティとも呼ばれる。しかしながら、6つの属性の中にも、シャクティが見られる。そのため、シャクティにはおそらく2つの側面があると考えられる。ラクシュミーそのものとしてのシャクティ(宇宙の根源力)と6つのグナ(属性)の一つとしてのシャクティ(「潜在力」)である。

では、6つのグナとヴェーハ神の展開を見ていきたい。

abhivyaktānabhivyaktaṣāḍguṇyakramam ujjvalam /

ālambitacātūrūpaṃ rūpaṃ tatpārameśvaram // LT 2.38

その最高の主宰神の形態は、顕現しあるいは顕現していない6つのグナ(属性)から成る階梯に基づくものであり、輝きであり、4つの形態である。

この4つの形態とは、ヴェーハ(配置)と呼ばれる4柱の神の顕現である。その神々は、ヴァースデーヴァ、サンカルシャナ、プラディユムナ、アニルッダである³¹。

その4神は、次の通りに顕現する。

śāntātīśāntād unmeṣo mama rūpād yugatraye /

kramavyaktaṃ tadādyam me cātūrātmyam amūrtimat // LT 2.43

寂静と完璧な寂静の形態から、3つの組み合わせ(という状態)で、わたしの開眼(顕現)がある。段階的に顕現するわたしの4つの本質のその最初のもので、形象を有さないものである。

³¹ 第2章第5.3節を参照。Guptaはヴェーハについて次のように説明している。「清浄なる創造と不浄なる創造の間の違いは、3つの現象の属性、サットヴァ、ラジャス、タマスが、清浄なる創造において存在していないのであり、その清浄なる創造は時折 nityavibhūti と呼ばれ、反対に不浄なる創造は līlavibhūti と名付けられる。前者は4つの顕現(caturmūrtiあるいはcaturvyūha)から成る。これら4つの顕現(ヴェーハ)の最初(すなわちヴァースデーヴァ)において、属性は休止状態であり、それ故、うっすらと顕現しているのみである。顕現が進行するにつれ、それらはより輝き、深淵となる。」[Gupta 2000: p. 11]

4つのヴェーハ神の中で最初のもは、未だはっきりと現れていないため、形象を有していないのである。ここでは、ヴェーハ神としてヴァースデーヴァは明言されていないが、ナーラーヤナの異名としては説かれているため、ラクシュミー・ナーラーヤナと不可分の存在と思われる。それは、次のことから考えられる。

ādyas tv abhinnaṣādguṇyo brahmatattvāpṛthaksthītau // LT 2.54cd

しかし、最初の分化していない6つのグナに関するものは、ブラフマンという原理と不可分な状態として〔存在する〕。

すなわち、ヴェーハ神の中で、最初に現れるものは、6つのグナを全て有しており、ブラフマンと不可分であるということである。

次にサンカルシャナの顕現がある。

vyaktajñānabalākhyāyāṃ pūrvam saṃkarṣaṇātmani /

tilakālakavat sarvo vikāro mayi tiṣṭhati // LT 2.45

tan māṃ saṃkarṣaṇātmānam vidur jñānabale budhāḥ // LT 2.46ab

まずはじめに、わたしの「知識」(jñāna)と「力」(bala)の顕現と呼ばれるサンカルシャナの本質(アートマン)の中に、(皮膚の下の)ほくろのごとくに、すべての変異(vikāra)が存在する。かのわたしであるサンカルシャナの本質を、「知識」(jñāna)と「力」(bala)であると、知者たちは認識する。

このようにサンカルシャナは、「知識」(jñāna)と「力」(bala)を備えたものである。

次に、プラディユムナが現れる。

svayaṃ gr̥hṇāmi kartṛtvam unmiṣantī tataḥ param // LT 2.46cd

pradyumna iti mām āhuḥ sarvārthadyotanīm tadā // LT 2.47ab

yugaṃ prasphuritaṃ rūpaṃ tasminn aiśvaryavīryayoḥ // LT 2.47

その時、すべての対象を輝かせるわたしをプラディユムナと言う。それから、〔わたしは〕開眼(顕現)しつつ、作者性を自らに獲得する。そこにおいて、「自在力」(aiśvarya)と「勇猛さ」(vīrya)の組み合わせの形態が現れる。

プラディユムナは「自在力」(aiśvarya)と「勇猛さ」(vīrya)を備えているのである。

次に、ア Niludda が現れる。

tatas tayā kriyāśaktyā labdhāveśā cikīrṣayā /

yujyamānāniruddhākhyāṃ lambhitā tattvakovidaiḥ // LT 2.48

それから、その活動力(kriyāśakti)によって浸透され、〔また〕活動の意欲と結びついたものがア Niludda という名称で真理を体得した者たちによって呼ばれる。

ここでは、活動力 (kriyāśakti) は自在力 (aiśvarya)、活動の意欲は光輝 (tejas) を表すと思われる。以上のように、ここでのヴェーハの神々の展開は、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラディユムナ→アニルツダの順で行われる。

また、6つの属性は組み合わせられて、次のように説かれる。

tatra tadguṇayugmaṃ tu mama rūpatayocyate /
ato jñānabale devaḥ saṃkarṣaṇa udīryate // LT 2.53
aiśvaryaṅvīrye pradyumno 'niruddha śaktitejasī / LT 2.54ab

さて、そこにおいて、そのグナの一対 (組み合わせ) が、わたしにとって形態性 (形あるもの) として、語られる。それ故、「知識」 (jñāna) と「力」 (bala) [の組み合わせ] である神は、サンカルシャナと述べられる。「自在力」 (aiśvarya) と「勇猛さ」 (vīrya) [の組み合わせ] がプラディユムナであり、「潜在力」 (śakti) と「光輝」 (tejas) [の組み合わせ] はアニルツダである。

さて、4 ヴェーハ神は次のようにも説かれる。

avasthāḥ kramaśo me tāḥ suṣuptisvapnajāgarāḥ / LT 2.49ab

わたしにとって、その諸々の状態は、段階的に、熟睡状態 (suṣpti)、夢眠状態 (svapna)、覚醒状態 (jāgara) である。

daśās turyasuṣuptyādyāś caturvyūhe 'pi lakṣayet / LT 2.58ab

第4状態 (turya) や熟睡状態 (suṣpti) などの状態 (daśā) を、4つのヴェーハ (配置) においても、見るべし。

覚醒状態 (jāgara = jagāt)、夢眠状態 (svapna)、熟睡状態 (suṣpti)、そして3つの状態を超越した第4状態 (caturtha, turya, turīya) というアートマンの4つの状態³²に、ヴェーハ神を当てはめているのである。すなわち、ここでは、熟睡状態 (suṣpti) にサンカルシャナを、夢眠状態 (svapna) にプラディユムナを、そして覚醒状態 (jāgara) にアニルツダを同定している。そして、第4状態 (turya) はヴァースデーヴァに対応すると考えられる。ヴァースデーヴァからアニルツダまでの4ヴェーハ神の顕現は、徐々に明確になっていくことであり、それはアートマンが覚醒に向かうことである。

³² ヴェーダーンタ学派を中心に、覚醒状態 (jagāt)、夢眠状態 (svapna)、熟睡状態 (suṣpti)、そして3つの状態を超越した第4状態 (caturtha, turya, turīya) というアートマンの4つの状態は古代から思索されてきた。これら「四つの状態に関する哲学的思索はウパニシャッドに始まり、その最も体系的な説明は、シャンカラの註釈をもつ『マンドウーキヤ・ウパニシャッド』に見られる」という。アートマンの覚醒状態においては5感覚器官と内的器官が機能し、夢眠状態のときは感覚器官は停止して、内的器官のみが働き、さらに、熟睡状態では、内的器官さえも停止する。そして、第4状態はいかなる語によっても表現されることができず、清浄なものである [前田 1980: pp. 188–192]。

6つの属性には、分類があり、それは次のように説かれる。

tisro mama svabhāvākhyā vijñānaiśvaryaśaktayaḥ // LT 2.49cd

3つのわたしの自性 (svabhāva) と呼ばれるものは、「知識」 (vijñāna = jñāna)、「自在力」 (aiśvarya)、「潜在力」 (śakti) である。

śramādyavadyābhāvākhyam jñānāder upasarjanam /

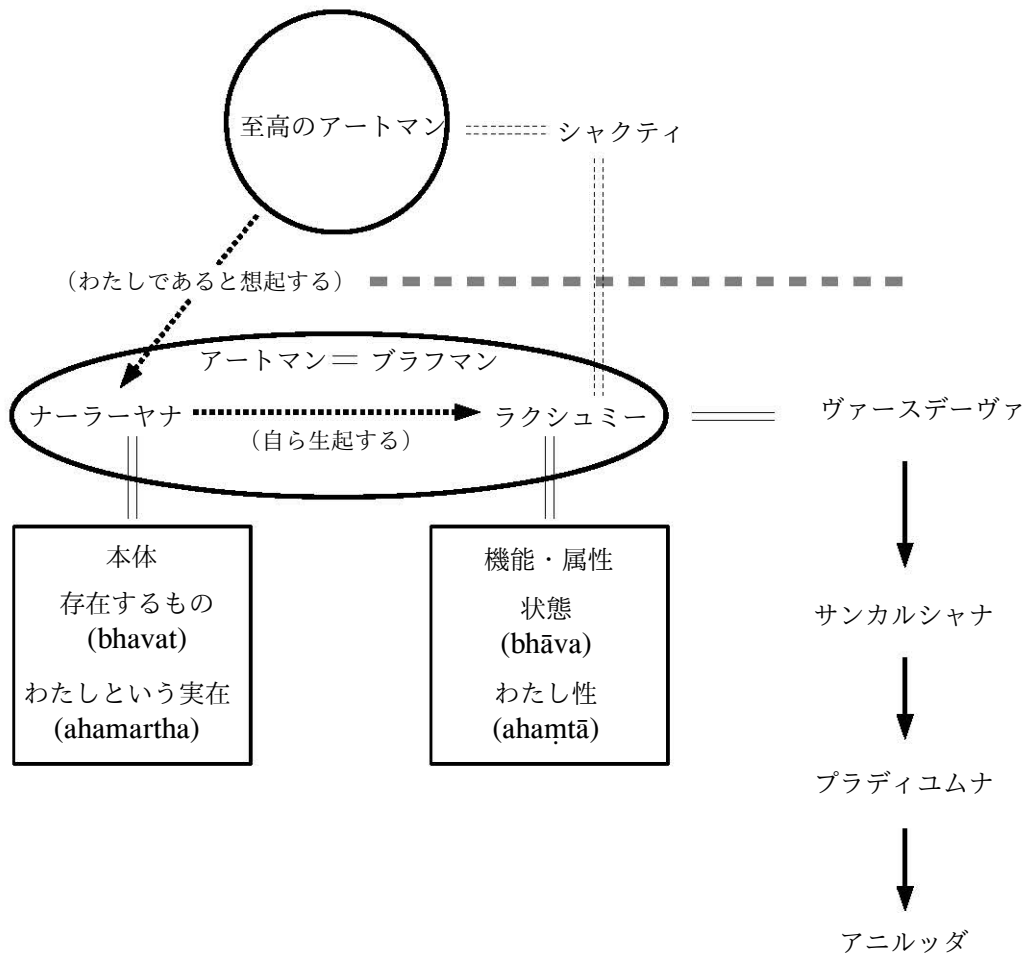
ittham śāntoditāvasthādvayabhedajuṣo mama // LT 2.51

〔それら3つのグナ (属性) は〕 疲労などの不完全さは存在せず、知識 (jñāna) などの流出 (upasarjana) である。このように、わたしにとって、平安なるものから生起した状態は2種の区別を持つものである。

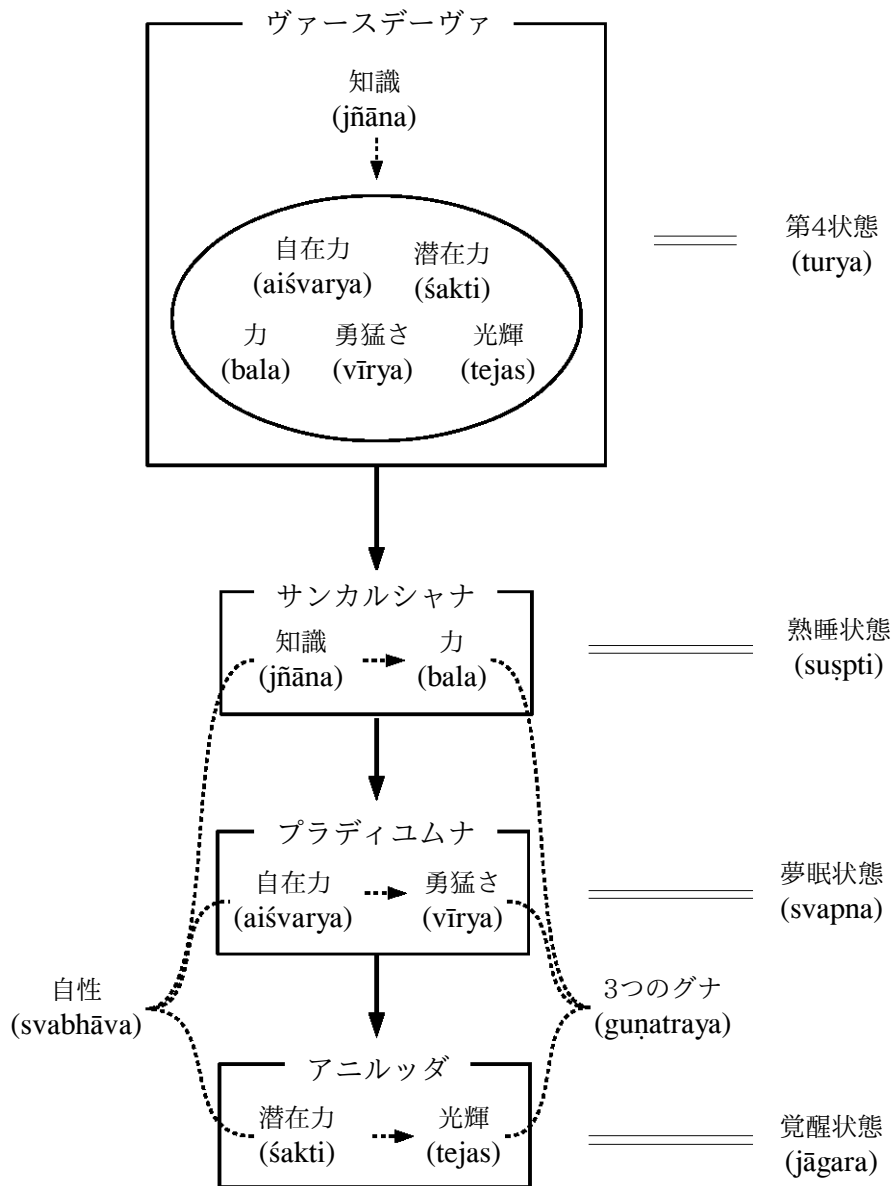
LT 2.28–35 では「知識」 (jñāna) を除く5つのグナ (属性) の特徴が述べられる。6つのグナ (属性) には2種の分類があり、一方は自性 (svabhāva) と呼ばれる。もう一方は3つのグナ (guṇatraya) と呼ばれ、それぞれが自性 (svabhāva) から流出 (upasarjana) する。サンカルシャナなどの3神は、両者から1つずつを有し、一対の組み合わせを形成する。すなわち、「知識」 (jñāna) から「力」 (bala) が、「自在力」 (aiśvarya) から「勇猛さ」 (vīrya)、「潜在力」 (śakti) から「光輝」 (tejas) が流出 (upasarjana) し、それぞれ組となるのである。

以上が、LT における最高神の顕現である。至高のアートマンから始まり、わたしと想起することにより、ナーラーヤナが生起し、そのナーラーヤナからラクシュミーが生起する。その二者は不可分の存在で、「わたしという実在」 (ahamartha) と「わたし性」 (ahamtā) という、実在と状態という、アートマン、あるいは「わたし」 (aham) の異なる側面に過ぎない。その展開は図表 19 の通りである。

そして、ヴェーハ神の展開は6つの属性を2つずつに配分し、ヴァースデーヴァから3神が展開する。さらに、それは段階的な顕現であり、アートマンの覚醒とも結びつけられる。それらの展開は図表 20 の通りである。



図表 19 LT2 における最高神の顕現



図表 20 LT 2 におけるヴェーハ神の顕現

第 7 章

結論

宇宙論の展開の中で、アハンカーラとマハット、そしてマナスはその機能を大きく変えたものである。結論として、これらの原理の変遷について、考察したい。

サーンキヤ学説の古い形と考えられている MBh 第 12 卷 187 章・239–241 章の説では、アハンカーラは登場せず、物質的原理は粗大元素が担っている。そこでは、アートマン（内なるアートマン）には 2 つの側面があったと思われる。すなわち、活動因としての側面がジーヴァおよびクシェートラジュニャであり、質量因としての側面がブータートマンである。このブータートマンはマハット・アートマンと同様の機能を有したものと思われる。

これに類似する MS 第 12 章の説などを考慮すれば、マハット・アートマン＝マハット＝ブータートマン＝ブッディということが成り立つであろう。これは低次のアートマンと高次のアートマンという 2 種類のアートマンを想定していると考えられる。

おそらくそれは、一元論の矛盾を解決する試みであったのかもしれない。純粹なる精神と物質的要素と対応関係が想定される中で、物質的側面を担うアートマンの存在が必要不可欠であったのである。あるいは、すでに物質的アートマンから粗大元素が生まれるということが考えられていたのかも知れない。

MBh の時代ではマハットとブッディは同一と見なされていたが、KathUp では違ったことに注意する必要がある。そして、アートマンを純粹な存在として強調して行くにつれ、物質的側面のアートマンとしての機能が失われていったのである。ブッディという心の器官と同一視されるようになると、決定やコントロールの機能をするブッディが物質要素との直接関連するには不都合が生じるのではないかと思う。そこで新たな物質的要素との連絡口となるアハンカーラが登場する。アハンカーラに創造的機能が賦与されるようになると、ますます精神と物質の繋がりが遠くなっていくのである。

アハンカーラが物質要素を生み出す説は、MBh 第 12 卷 203 章で見られるとおりである。ここで説かれた 8 種の根本原因と 16 種の変異の説が見られるようになると、先にあ

げた第 187 章などの古説ではおおよそ想定されているに過ぎなかった、心的作用から物質原理が展開することが明確に打ち出されるようになる。ここにおいて、プラクリティ→マハット（ブッディ）→アハンカーラ→粗大元素の創造のラインは確定的となった。この説はその他に MBh 第 12 巻 291 章や 298 章、CS 第 4 章や BC などにおいて見られるようになる。

しかし、一方で、マナスに創造的機能が見られる説もある。MS 第 1 章での原理展開は、マナス→アハンカーラ→マハット・アートマンとなり、先の説と逆転してしまう。このような逆転したものは古典サーンキヤでもエピック・サーンキヤでもあまり見いだせないが、MBh 第 12 巻第 326 章でも、マナスからアハンカーラ生み出される説が見られし、*Bhagavadgītā* においてもマナスの創造機能は見出される。

一方で、矛盾した説も見られる。第 298 章の説では、24 原理と 9 つの創造の説が見られ、前半ではアハンカーラが根本物質の一つでマナスは変異の側であるが、すぐ後の 9 つの創造説ではマナスから粗大元素が生まれることが説かれるのである。

このように様々な説が見られるのであるが、アハンカーラ→粗大元素のパターンが比較的多く見られるようである。その説においては、マナスの創造的機能はほとんど見られない。むしろマナスの位置づけが不明瞭でさえある。

このアハンカーラ→粗大元素のパターンは、古典サーンキヤではさらに変わって、アハンカーラ→タンマトラ→粗大元素のパターンとなる。本来は知覚器官の対象として粗大元素から生み出されるものであったが、タンマトラという特別な原理となり、粗大元素を生み出すものとして想定されるようになる。この古典サーンキヤの創造では、アハンカーラの 3 形態が見られるが、タンマトラを生み出すのはタマス性のブーターディ・アハンカーラである。このブーターディ・アハンカーラが古代の名残りとされるのもおおよそは納得のいくものであろう。すなわち、アハンカーラ→粗大元素→知覚器官の対象というラインとアハンカーラ→ブーターディ・アハンカーラ→タンマトラというラインが対応し、このブーターディ・アハンカーラが粗大元素の機能を引き継いでいるということである。

また、MBh 第 12 巻 291 章の説ではアハンカーラから粗大元素と 5 つの対象が同時に生みだされることが想定される。アハンカーラからタンマトラへの変遷への途中段階とも考えられる。

このような逆転現象はなぜ起こったのであろうか。おそらく、時代が下るにつれ精神の純粹性がことさらに強調されていくなかで、その純粹性を明瞭に示すために、精神と物質の連絡がさらに離されていくことになったからであろう。

さらに、精神と物質が離れていくことは、パーンチャラートラ派などのヒンドゥー教の宇宙論では、非常に顕著なものとなる。AhS では、その創造の 3 段階にいたってはじめて物質要素との連絡が見え始める。そこで説かれている 25 原理は古典サーンキヤと類似し

て見えるのは確かであるが、大きく異なる。その特徴として、まず、プルシャが単一ということである。プルシャにはすでに、SKのような純粹精神の特徴は見られず、むしろ原人プルシャを想起させる。一方、個々人の主体としての機能はマハットが担い、ブッディはマハットの同義語ではなく機能の一部としての役割を果たすようになる。ここにおいて、KathUpで見られた概念が形を変えて踏襲されているのである。

そして、LT第2章で見た「清浄な創造」には、一切の物質性が見られない。MBhで見られるようなアートマンの二側面の在り方を示しながらも、物質性から遙か遠くの清浄で純粹な世界での創造である。

このように、サーンキヤ思想に基づく諸原理の展開では、自己の心の在り方に現象世界の創造説を組み込む理論が構築された。しかし、後代になるにつれ、精神の純粹性が増していき—あるいは、原理の上にまたさらに原理を上乗せしていくというのが正しいのかもしれないが—精神と物質の連絡は徐々に離れていくのである。それは、おそらく、様々な説を取り入れ融合された結果でもある。古代からのアイデアを踏襲しつつ、様々な思想を取り入れ、構築していった宇宙論は、時代が下るにつれ一層に複雑さを増していくものとなっていったのである。しかし、純粹精神と物質の連絡は決して分断されることはない。それは輪廻と解脱を前提とした、インド思想の特色の一つでもある。

おわりに

本論文では、サーンキヤ思想の史的展開にそってそれぞれの世界構成原理を考察した。エピック・サーンキヤに始まり、パーンチャラートラ派の文献に至るまで扱うことにより、サーンキヤ思想に基づく宇宙論について、その特徴を示すことができたであろう。しかし、検証もまだ不十分であり、今後さらに網羅的かつ精査な研究が必要不可欠である。

甚だ大きなテーマ故に、著書の手之余のものであった。宮本久義教授には、難航する研究に対し最後まで、熱心にご指導いただいた。先生のご指導がなければ、書き上げることは不可能であったと存じます。この場を借りて、感謝申し上げます。また、*Lakṣmītantra*の翻訳に際して、丁寧にご指導いただいた橋本泰元教授にも感謝申し上げます。

文献一覽

- Abhyankar, Kashinath Vasudev and Jayadeva Mo. Shukla (1977) *A dictionary of Sanskrit grammar*, Baroda: Oriental Institute, 2nd edition.
- Belvalkar, Shripad Krishna ed. (1947) *The Bhīshmaparvan : being the sixth book of the Mahābhārata : the great epic of India for the first time critically edited*, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- (1954) *The Śāntiparvan : being the twelfth book of the Mahābhārata : the great epic of India for the first time critically edited*, Vol. Part 3. Mokṣadharmā, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Bhaṭṭācārya, Rāmaśaṅkara (1967) *Sāṃkhyatattvakaumudī*, Vārāṇasī: Motīlāla Banālasīdāsa.
- van Buitenen, J. A. B. (1956) “Studies in Sāṃkhya (I),” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. Vol. 76, pp. 88–107.
- (1957a) “Studies in Sāṃkhya (II),” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. Vol. 77, pp. 15–25.
- (1957b) “Studies in Sāṃkhya (III),” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. Vol. 77, pp. 88–107.
- Śarmā, Viśṇu Prasād and Satārīśarmā Vaṅgīya (1970) *Sāṃkhya-kārikā of Śrīmad Īśvarakṛṣṇa with the Māṭharavṛtti of Māṭharācārya and the Jayamaṅgalā of Śrī Śaṅkara*, Vārāṇasī: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- Chakravarti, Pulinbihari (1975) *Origin and development of the Samkhya system of thought*, New Delhi: Oriental Books Reprint Corporation, 2nd edition.
- Frauwallner, Erich (1973) *History of Indian Philosophy*, Vol. I, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Ganguli, Kisari Mohan (1975a) *The Mahabharata of Krishna-Dwaipayana Vyasa*, Vol. Vol. X, Santi Parva part III, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- (1975b) *The Mahabharata of Krishna-Dwaipayana Vyasa*, Vol. Vol. IX, Santi Parva part II, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Gupta, Sanjukta (2000) *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text*, Delhi: Motilal Banarsidass.

- Hulin, Michel (1973) *Sāṃkhya Literature*, Vol. VI of A History of Indian Literature, Wiesbaden: Otto Harrassowitz,
- Jha, Ganganath (2004) *The Sāṃkhya-Tattva-Kaumudī : Vācaspati Miśra's Commentary on the Sāṃkhya-Kārikā*, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 2nd edition.
- Johnston, E. H. (1972) *The Buddhacarita of Acts of the Buddha*, Delhi: Motilal Banarsidass, reprint edition.
- (1974) *Early Sāṃkhya: An Essay on its Historical Development according to the Texts*, Delhi: Motilal Banarsidass, reprinted edition.
- Keith, A. Berriedale (1975) *A History of the Sāṃkhya Philosophy: the Sāṃkhya system*, Delhi: Nag Publishers.
- Krishnamacharya, V. (1959) *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama*, Chennai: The Adyar Library and Research centre.
- Larson, Gerald James (1979) *Classical Sāṃkhya, an Interpretation of its History and Meaning*, Delhi: Motilal Banarsidass, 2nd edition.
- Larson, Gerald James and Ram Shankar Bhattacharya (1987) *Sāṃkhya : A Dualist Tradition in Indian Philosophy*, Encyclopedia of Indian Philosophies Vol. IV: Motilal Banarsidass.
- Limaye, V. P. and R. D. Vadekar (1958) *Eighteen Principal Upaniṣads*, Vol. 1, Poona: Vaidika Samsodhana Mandala.
- Mainkar, T.G. (2004) *Sāṃkhyakārikā of Īśvarakṛṣṇa: with the commentary of Gauḍapāda*, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan.
- Malaviya, Sudhakar (2007) *Ahīrbudhnya-Saṃhitā of the Pāñcarātrāgama: with the Sarala Hindi Translation*, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan.
- Mani, Vettam (1975) *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Matsubara, Mitsunori (1994) *Pāñcarātra Saṃhitās & Early Vaiṣṇava Theology*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Nārāyaṇamiśra (1971) *Pātañjalayogadarśanam : Vācaspatimiśraviracita-Tattvavaiśārādī-Vijñānabhikṣukṛta-Yogavārttikavibhūṣita-Vyāsabhāṣyasametam*, Vārāṇasī: Bhāratīya Vidyā Prakāśana.
- Nīlakaṇṭha, 17th cent., Maṇḍana Miśra, and Nag Sharan Singh (1988) *Śrīmanmahābhāratam : Caturdharavaṃśāvataṃsaśrīmannīlakaṇṭhaviracitabhāratabhāvadīpākhyāṭikayāsametam*, Vol. 6: nag prakāśaka.
- Olivelle, Patrick (2005) *Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānava-Dharmasāstra*: Oxford University Press.
- Radhakrishnan, S. (1953) *The Principal Upaniṣads*, London: George Allen and Unwin.
- Rastelli, Marion (2009) "Pāñcarātra," in Jacobsen, Knut A. ed. *Brill's Encyclopedia of Hin-*

- duism*, Vol. Vol. 3, Leiden: BRILL, pp. 444–457.
- Rāmānujācārya, M.D., Friedrich Otto Schrader, and V. Krishnamacharya (1966) *Ahīrbudhnya-Saṃhitā of the Pāñcarātrāgama*, Vol. 2 vols. of ALS 4, Adyar? : The Adyar Library and Research Centre, 2nd edition.
- Schrader, F. Otto (1916) *Introduction to the Pāñcarātra and the Ahīrbudhnya Saṃhitā*, Madras: The Adyar Library and Research Centre.
- Sharma, Ram Karan and Vaidya Bhagwan Dash (1977) 『Agniveśa's Caraka Saṃhitā: Text with English Translation & Critical Exposition: Based on Cakrapāṇi Datta's Āyurveda Dīpikā』, 第 vol. 2 卷, Chowkhamba Sanskrit Series Office, Varanasi.
- Solomon, Esther Abraham (1973a) *Sāṃkhya-Saptati-Vṛtti (VI)*: Gujarat University, 1st edition.
- (1973b) *Sāṃkhya-Vṛtti (V2)*: Gujarat University, 1st edition.
- Srinivasan, S. A. (1967) *Vācaspatimiśras Tattvakaumudī : ein Beitrag zur Textkritik bei kontaminierter Überlieferung* in , Alt- und Neu-Indische Studien, No. 12, Hamburg: de Gruyter.
- Wezler, Albrecht, Shujun Motegi, and Stuttgart F. Steiner (1998) *Yuktidīpikā: the most significant commentary on the Sāṃkhyakārikā*: F. Steiner.
- 今西順吉 (1998) 「サーンキヤ (哲学) とヨーガ (実修)」, 服部正明他 (編) 『インド思想 1』, 岩波講座・東洋思想, 第 5 卷, (第 3 次発行), 岩波書店, pp. 224–258.
- 金倉圓照 (1949) 『印度中世精神史 上』, 岩波書店.
- (1962) 『インド哲学史』, 平楽寺書店.
- (1976) 『奥田慈応先生喜寿記念: 仏教思想論集』, 第チャラカ医典の数論説章, pp. 1061–1074, 平楽寺書店.
- (1984) 『真理の月光』, 講談社.
- 上村勝彦 (1992) 『バガヴァッド・ギーター』, 岩波書店.
- (2003) 『インド神話—マハーバーラタの神々』, 筑摩書房.
- 辻直四郎 (1970) 『リグ・ヴェーダ賛歌』, 岩波書店.
- (1979) 『アタルヴァ・ヴェーダ賛歌—古代インドの呪法—』, 岩波書店.
- 徳永宗雄 (2002) 「平安の巻と水供養 (udakakriyā)—マハーバーラタ第 12 巻の形成過程を 探る—」, 『東方學』, 第 140 卷, pp. 155–169.
- 中野義照 (1951) 『マヌ法典』, 日本印度學會.
- 中村元 (1996) 『ヒンドゥー教と叙事詩』, 中村元選集: 決定版 第 30 卷, 春秋社.
- 中村了昭 (1982) 『サーンキヤ哲学の研究: インドの二元論』, 第上巻, 大東出版社.
- 中村元 (1996) 『ヨーガとサーンキヤの思想』, 中村元選集: 決定版 第 24 卷, 春秋社.
- 中村了昭 (1998a) 『マハーバーラタの哲学: 解脱法品原典解明 下』, 平楽寺書店.

- (1998b) 『マハーバーラタの哲学：解脱法品原典解明 上』, 平楽寺書店。
- 西岡直樹 (2002) 『定本 インド花綴り』, 木犀者。
- 橋本泰元・宮本久義・山下博司 (2005) 『ヒンドゥー教の事典』, 東京堂出版。
- 服部正明 (1979) 「古典サーンキヤ体系概説：サーンキヤ・カーリカー」, 『バラモン教典原
始仏典』, 世界の名著 1, 中央公論社, pp. 189–244。
- (1998) 「ヴァイシェーシカ学派の自然哲学」, 服部正明他 (編) 『インド思想 1』,
岩波講座・東洋思想, 第 5 卷, (第 3 次発行), 岩波書店, pp. 260–284。
- 早島鏡正他 (1982) 『インド思想史』, 東京大学出版会。
- 原実 (2004) 『ブッダ・チャリタ (仏陀の生涯)』, 大乘経典 13, 中公文庫, 中央公論社。
- バンドルカルラマクリシュナ・G・島岩・池田健太郎 (1984) 『ヒンドゥー教：ヴィシュ
ヌとシヴァの宗教』, せりか書房。
- 引田弘道 (1997) 『ヒンドゥータントリズムの研究』, 山喜房佛書林。
- 本多恵 (1978) 『ヨーガ書註解：試訳と研究』, 平楽寺書店。
- (1980) 『サーンキヤ哲学研究 上』, 春秋社。
- (1981) 『サーンキヤ哲学研究 下』, 春秋社。
- 前田専學 (1980) 『ヴェーダーンタの哲学：シャンカラを中心として』, サラ叢書, 第 24
号, 平楽寺書店。
- 村上真完 (1978) 『サーンキヤ哲学研究：インド哲学における自我観』, 春秋社。
- 茂木秀淳 (1993a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (I)—」, 『信州大学
教育学部紀要』, 第 78 号, pp. 59–70。
- (1993b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (II)—」, 『信州大学
教育学部紀要』, 第 79 号, pp. 117–130。
- (1994) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (III)—」, 『信州大学
教育学部紀要』, 第 81 号, pp. 85–98。
- (1995a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (V)—」, 『密教文
化』, 第 189 号, pp. 79–91。
- (1995b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (IV)—」, 『信州大
学教育学部紀要』, 第 84 号, pp. 69–81。
- (1995c) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VI)—」, 『信州大
学教育学部紀要』, 第 85 号, pp. 103–116。
- (1995d) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VII)—」, 『密教文
化』, 第 192 号, pp. 76–98。
- (1995e) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (VIII)—」, 『信州
大学教育学部紀要』, 第 86 号, pp. 109–124。
- (1996) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (IX)—」, 『信州大学

- 教育学部紀要』, 第 89 号, pp. 75–85.
- (1998a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (X)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 93 号, pp. 67–78.
- (1998b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XI)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 94 号, pp. 35–46.
- (1999a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XII)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 96 号, pp. 23–34.
- (1999b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIII)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 97 号, pp. 31–40.
- (1999c) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIV)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 98 号, pp. 31–40.
- (2000a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XV)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 99 号, pp. 57–68.
- (2000b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVI)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 100 号, pp. 57–68.
- (2000c) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XIX)—」, 『密教文化』, 第 205 号, pp. 50–73.
- (2000d) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVII)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 101 号, pp. 21–32.
- (2000e) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XVIII)—101」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 101 号, pp. 33–44.
- (2001) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XX)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 103 号, pp. 125–136.
- (2002) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXI)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 105 号, pp. 97–108.
- (2005a) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXII)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 114 号, pp. 89–100, 251–254.
- (2005b) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIII)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 115 号, pp. 69–80, 255–257.
- (2005c) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIV)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 116 号, pp. 135–146, 258–261(35).
- (2006) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXV)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 117 号, pp. 73–84.
- (2007) 「叙事詩の宗教哲学—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXVI)—」, 『信州大学教育学部紀要』, 第 119 号, pp. 113–124.

- 矢野道雄 (1988) 『インド医学概論』, 第 II 期 1 卷, 科学の名著, 朝日出版.
- 山口恵照 (1974) 『サーンキヤ哲学体系の展開: 究極的な転迷開悟の道』, あぼろん社.
- 湯田豊 (2000) 『ウパニシャッド: 翻訳および解説』, 大東出版社.
- 渡瀬信之 (1978) 「世界創造説とマヌ・スムリティ—第一章の意義について」, 『オリエン
ト学 インド学論集』, 国書刊行会.
- (2013) 『マヌ法典』, 東洋文庫, 平凡社.
- 渡辺研二 (2005) 『ジャイナ教: 非所有・非暴力・非殺生: その教義と実生活』, 論創社.
- ヴィンテルニッツ・中野義照 [訳] (1965) 『叙事詩とプラーナ』, インド文献史第 2 卷, 日
本印度学会.

補遺：訳註

補遺 A

Mahābhārata, Mokṣadharmā-Parvan 抄訳

A.1 Mokṣadharmā-Parvan 第 187 章

Yudhiṣṭhira uvāca —

ユディシュティラ¹は語った。

1

adhyātmaṃ nāma yad idaṃ puruṣasyeha cintyate /
yad adhyātmaṃ yataś caitat tan me brūhi pitāmaha // MBh 12.187.1

内なるアートマン (adhyātma)²と呼ばれるもの、これがこの世において人 (puruṣa) のものとして考えられている³が、その内なるアートマンとはどのようなもので、それは何から〔生じる〕ものか、それを私に語れ。祖父 (ピターマハ)⁴よ。

Bhīṣma uvāca —

ビーシュマは語った。

2

¹ パーンドヴァ 5 王子の長男。

² 茂木氏は「大我」[茂木 1993a: p. 103]、中村氏は「内我」[中村 1998b: p. 87] と訳している。

³ ここでは人間の本质として内なるアートマンが考えられている。この語はおそらく中性名詞であり、一元論を意図しているのかもしれない。

⁴ 祖父や祖先という意味であるが、ここではビーシュマのことを指す。MBh の戦争においては、彼はパーンドヴァの王子たちに敵対し、ドリタラーシュトラ王の息子たちに味方した。

adhyātmam iti mām pārtha yad etad anupr̥cchasi /
tad vyākhyāsyāmi te tāta śreyaskarataram sukham // MBh 12.187.2

あなたは「内なるアートマンとは [どのようなものであるか]」と、私にこれを尋ねる。プリターの子よ。それをあなたに説明しよう。〔それは〕より優れた状態をもたらす⁵幸福である。愛しき者よ。

3

yaj jñātvā puruṣo loka pr̥tiṃ saukhyaṃ ca vindati /
phalalābhaś ca sadyaḥ syāt sarvabhūtahitaṃ ca tat // MBh 12.187.3

それを知ることによって⁶、人 (puruṣa) は世界において喜びと幸せを獲得する。そして、その (理解した) ことは、すぐに結果 (果報) の獲得になるであろう。また、〔それは〕あらゆる存在物 (万物) に益するものである。

4

pr̥thivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam /
mahābhūtāni bhūtānām sarveṣām prabhavāpyayau // MBh 12.187.4

地 (pr̥thivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、そして 5 番目の火 (jyotiś)、〔これらの〕粗大元素は全ての存在物 (万物) が生成し帰滅するところである⁷。

5

tataḥ sṛṣṭāni tatraiva tāni yānti punaḥ punaḥ /
mahābhūtāni bhūteṣu sāgarasyormayo yathā // MBh 12.187.5

それから⁸創造されたものは、まさにそこ (粗大元素) に繰り返して [戻って] 行く⁹。諸々の存在物 (万物) における粗大元素は、大海にとっての波のごとくである。

6

prasārya ca yathāṅgāni kūrmaḥ saṃharate punaḥ /
tadvad bhūtāni bhūtātmā sṛṣṭvā saṃharate punaḥ // MBh 12.187.6

⁵ “śreyaskaratara” は「より優れた状態をもたらすもの」と解した。より優れた状態とは天界や解脱のことであろうか。

⁶ すなわち、内なるアートマンが如何なるものかを知ることによって、という意味である。

⁷ 全ては 5 粗大元素から成るのであり、帰滅の際に消えて無くなるのではなく、5 粗大元素の状態に戻るのである。

⁸ 「それ故」とも訳せる。

⁹ すなわち、存在物は、5 つの粗大元素から生み出され、またその粗大元素に還滅する、それを繰り返すのである。

亀が四肢を伸ばして、再度引っ込めるように、ブータートマン（存在物の本質）¹⁰は、諸々の存在物（万物）を創造して、再び引っ込める（帰滅させる）¹¹。

7

mahābhūtāni pañcaiva sarvabhūteṣu bhūtakṛt /
akarot teṣu vaiṣamyam tat tu jīvo 'nupaśyati // MBh 12.187.7

存在物を創造する者¹²はあらゆる存在物（万物）における 5 粗大元素のみを〔創り〕、〔そして〕それら（創造物）における多様なものを創った。一方、ジーヴァ（個我）はそれを観照する¹³。

8

śabdaḥ śrotraṃ tathā khāni trayam ākāśayonijam /
vāyos tvaksparsaceṣṭās ca vāg ity etac catuṣṭayam // MBh 12.187.8

音声、耳（聴覚）、そして（身体の）諸々の穴の 3 種は、〔粗大元素の〕虚空の胎から生まれたものである。風からは、皮膚（触覚）、接触、運動、そして言葉（発声器官）という 4 種のもものが〔生まれた〕。

9

rūpaṃ cakṣus tathā paktis trividham teja ucyate /
rasaḥ kleśā ca jihvā ca trayo jalaguṇāḥ smṛtāḥ // MBh 12.187.9

色、目（視覚）、そして消化器官の 3 種のもものが、火（tejas）〔の性質〕であると言われている。味と湿気と舌（味覚）の 3 種が、水の性質であると伝承されている。

10

ghreyaṃ ghrāṇaṃ śarīraṃ ca te tu bhūmiguṇās trayah /
mahābhūtāni pañcaiva ṣaṣṭhaṃ tu mana ucyate // MBh 12.187.10

¹⁰ 物質性のアートマンとも考えられる。

¹¹ 自動詞と他動詞を区別していなく、比喩も不明瞭である。

¹² ブータートマンのことと考えられる。

¹³ 自己の本質を示す言葉は、ジーヴァ、内なるアートマン、ブータートマン、そして後に説かれるクシェートラジュニヤである。おそらく、ジーヴァとクシェートラジュニヤは観照するという性質を持つもので、類似したものと思われる。自己の本質の個人主体がジーヴァで、創造に関連したものがクシェートラジュニヤであろうか。おそらくアートマンには 2 つの側面があったと思われる。すなわち、内なるアートマンにとって、作用因としての側面がクシェートラジュニヤ（ジーヴァ）であり、質量因としての側面がブータートマンであろう。

香り、鼻（嗅覚）、そして身体、これら3種が地の性質（*guṇa*）である。粗大元素は〔これら〕5つのみであり、一方、第6がマナスと言われている。

11

indriyāṇi manaś caiva vijñānāny asya bhārata /
saptamī buddhir ity āhuḥ kṣetrajñāḥ punar aṣṭamaḥ // MBh 12.187.11

インドリヤ（感覚器官）とマナス（思考器官、意）がこの¹⁴認識するもの（*vijñāna* = 認識器官）である。バラタ族の者よ。ブッディが第7、さらにクシェートラジュニヤ（知田者）¹⁵が第8と言われている。

12

cakṣur ālokanāyaiva saṁśayaṁ kurute manaḥ /
buddhir adhyavasāyāya kṣetrajñāḥ sākṣivat sthitaḥ // MBh 12.187.12

まさに目は見るためにあり、マナスは疑いをなす。ブッディは決定するためにあり、クシェートラジュニヤ（知田者）は証人（確認者）のように存在する。

13

ūrdhvaṁ pādatalābhyāṁ yad arvāgūrdhvaṁ ca paśyati /
etena sarvam evedam vidhyabhivyāptam antaram // MBh 12.187.13

〔クシェートラジュニヤは〕両足の裏から上を、そして下方と上方とを見渡している。それ（クシェートラジュニヤ）によって、まさにこのすべての〔世界の〕内部は満たされていると知れ¹⁶。

14

puruṣe cendriyāṇīha veditavyāni kṛtsnaśaḥ /
tamo rajaś ca sattvaṁ ca viddhi bhāvāṁs tad āśrayān // MBh 12.187.14

また、プルシャにおけるインドリヤ（感覚器官）¹⁷は、ここであますことなく知られるべきである。タマスとラジャスとサットヴァは、それら（インドリヤ）に密接に関係している状態（*bhāva*）であると知れ。

¹⁴ MBh 12.187.1; 3 のプルシャを指していると思われる。

¹⁵ *kṣetra*（田、土地）すなわち物質要素を *jña*（知る）者。プルシャのことを示す。

¹⁶ クシェートラジュニヤは、裏から上全体を支配しているということであろう。人間存在とプルシャスークタの原人を関連づけているようにも見える。

¹⁷ 後に説かれるように、ここでは、5つの知覚器官、マナス、ブッディを表していると考えられる。

15

etāṃ buddhvā naro buddhyā bhūtānām āgatiṃ gatim /
samavekṣya śanaiś caiva labhate śamam uttamam // MBh 12.187.15

上記のことを理解し、人（nara）はブッディによって、存在物の来し方行く末を熟慮して、そしてまさに、徐々に最高の寂靜を獲得する。

16

guṇān nenīyate buddhir buddhir evendriyāṇy api /
manaḥ ṣaṣṭhāni sarvāni buddhyabhāve kuto guṇāḥ // MBh 12.187.16

ブッディは、諸々のグナ（性質）を制御する。また、ブッディのみが感覚器官を、〔そして〕マナスを 6 番目とする全てを〔制御する〕。ブッディが存在しないならば、いかにして諸々のグナは存在しようか。

17

iti tanmayam evaitat sarvam sthāvarajaṅgamam /
pralīyate codbhavati tasmān nirdiśyate tathā // MBh 12.187.17

以上、このあらゆる不動なものと動くものは、まさにそれ（ブッディ）からなっている¹⁸。そして、〔あらゆるものはブッディが滅すれば〕帰滅し、〔ブッディが生じれば〕生起する。それ故そのように示されたのである¹⁹。

18

yena paśyati tac cakṣuḥ śṛṇoti śrotram ucyate /
jighrati ghrānam ity āha rasam jānāti jihvayā // MBh 12.187.18

それによって見るものが目である。〔それによって〕聞くものが耳と言われる。〔それによって〕嗅ぐものが鼻と言われ、味を認識するのは舌によってである。

19

tvacā sprśati ca sparśān buddhir vikriyate asakṛt /
yena samkalpayaty artham kimcid bhavati tan manaḥ // MBh 12.187.19

そして触れられるものに触れるのは皮膚によってである。〔このように〕ブッディは度々に変異する。〔ブッディは〕何らかの対象を思惟する時には、それはマナスになる。

¹⁸ ブッディを本質としているということか。

¹⁹ あらゆるものは生成と帰滅を繰り返すとも考えられる。

20

adhiṣṭhānāni buddher hi pṛthak arthāni pañcadhā /
 pañca indriyāṇi yāny āhus tāny adṛśyo adhiṣṭhāti // MBh 12.187.20

なぜなら、異なる5種の対象〔を有する〕5つの感覚器官（インドリヤ）はブッディの居処であり、見えないものがそれらに住すると言われる。

21

puruṣādhiṣṭhitā buddhis triṣu bhāveṣu vartate /
 kadācil labhate pṛītim kadācid anuśocati // MBh 12.187.21

ブッディはプルシャによって支配され、3種の状態において存する。〔ブッディは〕あるときには喜びを獲得し、あるときには悲しむ。

22

na sukhena na duḥkhena kadācid api vartate /
 evam narāṇām manasi triṣu bhāveṣv avasthitā // MBh 12.187.22

またあるときには、〔ブッディは〕楽を伴っても、苦を伴っても〔存在し〕ないし、また、苦によっても存在しない。このように、人々のマナスにおいて、〔ブッディは〕3種の状態で存続する。

23

seyam bhāvātmikā bhāvāṃs trīn etān nātivartate /
 saritām sāgaro bhartā mahāvelām ivormimān // MBh 12.187.23

まさに、それ（ブッディ）は、〔この〕状態を本質とし、これらの3つ（3種のグナ）を越えない（越える？）。川の主である波立つ大海が広大な境界を〔越えるように？〕²⁰。

24

atibhāvagatā buddhir bhāve manasi vartate /
 pravartamānaṃ hi rajas tadbhāvam anuvartate // MBh 12.187.24

状態を超えたブッディは、〔変異した〕状態のマナスに存在する。なぜなら、活動しつつあるラジャスがその状態に従うから。

25

²⁰ “trīn etān nātivartate” は、MBh 12.240.8 では “trīn etān ativartate” となっている。Buitenen は2つのテキストを詳細に比較し、“nātivartate” は誤りであるとしている [van Buitenen 1956: p. 154]。茂木氏は「あたかも川の王である海は、波を伴って大きな境界を（越えるように）。」と訳している [茂木 1995c: p. 106]。

indriyāṇi hi sarvāṇi pradarśayati sā sadā /
prītiḥ sattvaṃ rājaḥ śokas tamo mohaś ca te trayah // MBh 12.187.25

なぜなら、それ（ブッディ）は、常に、あらゆる感官を活動させる見させる²¹。サットヴァは歓喜であり、ラジャスは悲嘆、そしてタマスは迷妄である。それらが3〔種の状態〕である。

26

ye ye ca bhāvā loke 'smin sarveṣv eteṣu te triṣu /
iti buddhigatiḥ sarvā vyākhyātā tava bhārata // MBh 12.187.26

この世における諸々の状態は何であっても全てこれらの3種の中に〔存在する〕。以上、あらゆるブッディの帰趨（道）があなたに説かれた。バラタ族の者よ。

27

indriyāṇi ca sarvāṇi vijetavyāni dhīmatā /
sattvaṃ rajas tamaś caiva prāṇināṃ saṃśritāḥ sadā // MBh 12.187.27

また、全ての感官は智者によって制御されるべきである。サットヴァとラジャスとタマスはまさに生類が常に依拠するものである。

28

trividhā vedanā caiva sarvasattveṣu dr̥śyate /
sāttvikī rājasī caiva tāmasī ca iti bhārata // MBh 12.187.28

そしてまた、3種類の感覚が全てのサットヴァ（あらゆる物質存在）²²において見られる。すなわち、サットヴァ性のもの、ラジャス性のもの、タマス性のものである。バラタ族の者よ。

29

sukhasparśaḥ sattvaguṇo duḥkhasparśo rajoguṇaḥ /
tamoguṇena saṃyuktau bhavato 'vyāvahārikau // MBh 12.187.29

サットヴァの性質（属性）は楽に触れ、ラジャスの性質（属性）は苦に触れる。タマスの性質と結びついた両者（楽と苦）は不活動性のものとなる。

²¹ 茂木氏は「活動させる」と訳している [茂木 1995c: p. 106]。

²² サットヴァは物質性のものを表す。すなわち、生物や無機物なども含む、あらゆる物質要素に属するものである。

30

tatra yat prītisaṃyuktaṃ kāye manasi vā bhavet /
 vartate sātṭviko bhāva ity avekṣeta tat tadā // MBh 12.187.30

それらの中で、身体あるいはマナス（心）において喜びと結びついたものがあるなら、そのときそれはサットヴァ性の状態にあると見なすべきである。

31

atha yad duḥkhasaṃyuktaṃ atuṣṭikaram ātmanaḥ /
 pravṛttaṃ raja ity eva tann asaṃrabhya cintayet // MBh 12.187.31

また、アートマン（自己）にとって、苦と結びついたもの、不満足を生じるものがあるなら、まさにそれを、ラジャスが活動していると、論議せずに、考えるべきである。

32

atha yan mohasaṃyuktaṃ avyaktam iva yad bhavet /
 apratarkyam avijñeyaṃ tamas tad upadhārayet // MBh 12.187.32

さらに、〔自己にとって〕迷妄と結びついたもの、不分明に存在するであろうもの²³、思議できないもの、認識することができないものがあるなら、それはタマス〔が活動している〕と考えるべきである。

33

praharṣaḥ prītir ānandaḥ sukhaṃ saṃśāntacittatā /
 kathaṃcid abhivartanta ity ete sātṭvikā guṇāḥ // MBh 12.187.33

有頂天、喜び、歡喜、樂、寂靜なる心性が、何らかの仕方で生じるが、これらはサットヴァ性の性質（属性）である。

34

atuṣṭiḥ paritāpaś ca śoko lobhas tathākṣamā /
 liṅgāni rajasas tāni dr̥śyante hetvahetubhiḥ // MBh 12.187.34

同様に、不満足、怒り、悲しみ、貪欲、不寛容が、十分な原因があってもなくても現れるが、それらはラジャスの特徴である。

35

abhimānas tathā mohaḥ pramādaḥ svapnatandritā /

²³ “avyaktam iva yad bhavet”、茂木氏は「ぼんやりと存在するもの」と訳している [茂木 1995c: p. 107]。

kathamcid abhivartante vividhās tāmasā guṇāḥ // MBh 12.187.35

さらに、高慢、迷妄、酩酊、睡眠と怠惰性が、何らかの仕方で生じるが、これらはタマス性の多様な性質（属性）である。

36

dūragam bahudhāgāmi prārthanāsaṃśayātmakam /
manaḥ suniyataṃ yasya sa sukhī pretya ceḥ ca // MBh 12.187.36

離れていくもの（遠くまで行くもの）であり、様々なところに到達するものであり、願望と疑いを本質とするものであるマナスがよく制御されるなら、その人は、現世においても、死後においても、安楽（幸福）を持つ者である。

37

sattvaḥ setrajñayor etadantaram paśya sūkṣmayoḥ /
srjate tu guṇān eka eko na srjate guṇān // MBh 12.187.37

2つの微細なものであるサットヴァ（物質要素）とクシェートラジュニヤ（知田者）とのこの違いということを理解せよ。〔すなわち〕一方はグナを創造し、もう一方はグナを創造しない。

38

maśakodumbarau cāpi saṃprayuktau yathā sadā /
anyonyam anyau ca yathā saṃprayogas tathā tayoḥ // MBh 12.187.38

そしてまた、ブヨ²⁴とイチジクの木が常に結びついているように、そして〔その二者は〕互いに別物であるけれども〔結びついているように〕、そのように、その二者（サットヴァ（物質要素）とクシェートラジュニヤ）は結びついているのである。

39

prthagbhūtau prakṛtyā tau saṃprayuktau ca sarvadā /
yathā matsyo jalaṃ caiva saṃprayuktau tathaiva tau // MBh 12.187.39

本性的に別々の存在物であるが、その二者はどんなときでも結びついているのである。まさに魚と水が結びついているように、両者は〔結びついているのである〕。

40

na guṇā vidur ātmānam sa guṇān vetti sarvaśaḥ /

²⁴ “maśaka” は「ブヨ」の他に「蚊」の意味もある。

paridraṣṭā guṇānām ca samsraṣṭā manyate sadā // MBh 12.187.40

諸々のグナ（属性）²⁵はアートマンを知らない。〔しかし〕それ（アートマン）は諸々のグナを完璧に知っている。〔アートマンは自身のことを〕諸々のグナの観照者であり、そして、〔諸々のグナの〕創造者であると考えている²⁶。

41

indriyais tu pradīpārtham kurute buddhisaptamaiḥ /
nirviceṣṭair ajānadbhiḥ paramātmā pradīpavat // MBh 12.187.41

一方、照明のために、ブッディを7番目とする動かないもの²⁷であり、認識しないものである諸々のインドリヤによって、最高のアートマンは（自身を）灯明のごとく（輝くもの）にする。

42

srjate hi guṇān sattvaṃ kṣetrajñāḥ paripaśyati /
saṃprayogas tayor eṣa sattvakṣetrajñayor dhruvaḥ // MBh 12.187.42

なぜなら、サットヴァ（物質要素）は諸々のグナ（性質）を創造し、クシェートラジュニヤ（知田者）は〔それらを〕観照するからである。それらサットヴァ（物質要素）とクシェートラジュニヤ（知田者）の二者の結合は堅固である。

43

āśrayo nāsti sattvasya kṣetrajñāsya ca kaścana /
sattvaṃ manaḥ samsrjati na guṇān vai kadācana // MBh 12.187.43

サットヴァ（物質要素）にとっても、クシェートラジュニヤ（知田者）にとっても、何らかの依拠するものは存在しない、〔クシェートラジュニヤは〕どんな時でも、サットヴァ（物質要素）も、マナスも、諸々のグナ（性質）も生み出さない。

44

²⁵ グナを有するもの、すなわち精神的なもの（アートマン）とは別の物質的なものである。

²⁶ 中村氏はニーラカンタの“abhimāṇam karoti”という註釈を参照して“manyate”を「誤認する」と考え、「〔アートマンは〕グナの見者であるにもかかわらず、それと一体であると〔誤って〕考える」と訳している [中村 1998b: p. 92]。英訳は“The Soul is the spectator of the qualities and regard them all as proceeding from itself.”と訳している [Ganguli 1975b: p. 48]。“abhimāṇa”は「自己の考え」や「自負心」といった意味である。サーンキヤ思想ではアハンカーラの機能で「自己の意識」と考えられている。すなわち、ここでは「誤って考えている」のではなく、「自己と結びつけて考えている」とする方が妥当であろう。茂木氏は「そしてアートマンは諸性質の観察者であるが、常に（諸性質の）創造者であると思っているのである。」と訳している [茂木 1995c: pp. 107–108]。

²⁷ MBh 12.187.11 を参照。つまり、自ら動かず、自ら認識しないものである。

raśmīṃs teṣāṃ sa manasā yadā samyaḍniyacchati /
tadā prakāśate 'syātmā ghaṭe dīpo jvalann iva // MBh 12.187.44

それ（人）が、マナスによって、それら（諸々のグナ）の光線（手綱）を正しく制御する時、その時、この彼のアートマンは〔サットヴァの中で〕輝く。水瓶（＝サットヴァ）の中で灯明（＝アートマン）が燃えている（輝いている）ように。

45

tyaktvā yaḥ prākṛtaṃ karma nityam ātmaratir muniḥ /
sarvabhūtātmbhūtaḥ syāt sa gacchet paramāṃ gatim // MBh 12.187.45

本来的な行為を捨て去って、絶えず自ら喜んでいる聖者は、全てがブーアートマン（存在物の本質）と同一になるであろう（?）、〔そして〕最高の帰趨に行くであろう。

46

yathā vāricaraḥ pakṣī lipyamāno na lipyate /
evam eva kṛtaprajño bhūteṣu parivartate // MBh 12.187.46

水鳥は、汚されつつも、汚されないように、まさに同様に、知恵を獲得した者は、存在物²⁸の中において、〔汚されなく〕ふるまう。

47

evaṃ svabhāvam evaitatsvabuddhyā viharet naraḥ /
āśocann aprahr̥ṣyaṃś ca cared vīgatamatsaraḥ // MBh 12.187.47

そのように、人は、彼自身のブッディによって、まさに自己の性質を捨てなければならない。そして、嫉妬をなくした者は、悲しみもせず喜びもせずに行動しなければならない。

48

svabhāvasiddhyā saṃsiddhān sa nityam sṛjate guṇān /
ūrṇanābhir yathā sraṣṭā vijñeyās tantuvad guṇāḥ // MBh 12.187.48

自己の性質が完成することによって、それ（サットヴァ）は常に完了した諸々のグナ（性質）を創造する。蜘蛛は創造者のごとくであり、諸々のグナ（性質）は糸のごとくであると知るべきである。

49

pradhvastā na nivartante nivṛttir na upalabhyate /

²⁸ 特に生類のことを指している。

pratyakṣeṇa parokṣaṃ tad anumānena sidhyati // MBh 12.187.49

滅した者たちは（再び）消滅しない²⁹。消滅は直接知覚によって把握されない。その目に見えないものは推論によって照明される。

50

evam eke vyavasyanti nivṛttir iti cāpare /

ubhayam sampradhārya etad adhyavasyed yathāmati // MBh 12.187.50

一方の者たちはこのように断定し、もう一方の者たちは消滅という。両者を熟慮して、正しい見解に従ってこれを判断しなければならない。

51

itīmaṃ hṛdayagranthiṃ buddhibhedamayam dṛḍham /

vimucya sukham āsīta na śocec chinnaśāyāḥ // MBh 12.187.51

以上、分裂ブッディ（誤った認識）から成る、心（hṛdaya）の堅固な束縛を解放して、安楽にあるべきである。疑いを断ち切った者は悲しむべきではない。

52

malināḥ prāpnuyuḥ śuddhiṃ yathā pūrṇaṃ nadīm narāḥ /

avagāhya suvidvāṃso viddhi jñānam idaṃ tathā // MBh 12.187.52

汚れた人々は清浄さを獲得するべきである。ちょうど人々が水が満ちた川に浸かって〔汚れを落とす〕ように、〔汚れた人々さえも清浄さを獲得すれば〕良き知者となる。そのようにこの知識を知れ。

53

mahānadīm hi pārājñas tapyate na taran yathā /

evam ye vidur adhyātmaṃ kaivalyam jñānam uttamam // MBh 12.187.53

実に、対岸を知る者が、大河を渡りつつも、苦しめられることはないように、同様に、内なるアートマンを、独存であり、最高の知であると知る者たちは〔苦しめられない〕。

54

etāṃ buddhvā naraḥ sarvāṃ bhūtānāṃ āgatiṃ gatim /

avekṣya ca śanair buddhyā labhate śamparam tataḥ // MBh 12.187.54

²⁹ 目に見えないだけであろうか。

人は〔このように〕理解し、そして諸々の存在物のこれら全ての来し方行く末をブッディによって熟慮して、それから、徐々に、至福を得る³⁰。

55

trivargo yasya viditaḥ prāgjyotiḥ sa vimucyate /
anviṣya manasā yuktaḥ tattvadarśī nirutsukaḥ // MBh 12.187.55

トリヴァルガ（3つの目的）を知り、マナスによって探求して、専心し、真理を見る者であり、前方に光があり、心配ない者にとって、そういう彼は開放される。

56

na cātmā śakyate draṣṭum indriyeṣu vibhāgaśaḥ /
tatra tatra viśṛṣṭeṣu durjayeṣv akṛtātmabhiḥ // MBh 12.187.56

インドリヤがあらゆるところ（対象）に分散し、本性が確立していない者によって統御されていないとき、アートマンは見出すことはできない。

57

etad buddhvā bhaved buddhaḥ kim anyad buddhalakṣaṇam /
vijñāya tadd hi manyante kṛtakṛtyā manīṣiṇaḥ // MBh 12.187.57

これを理解したならば悟った者となるであろう。他に悟った者の相は何かあろうか。実に、それを認識して、賢者たちは為すべきことは為されたと考える。

58

na bhavati viduṣāṃ tato bhayaṃ yad aviduṣāṃ sumahad bhayaṃ bhavet /
na hi gatiḥ adhikāsti kasyacit sati hi guṇe pravadyantī atulyatām // MBh 12.187.58

知恵のない者にとってはとても大きな恐れが存在するであろうが、それからの恐れは、知者たちにとっては存在しない。なぜなら、どんな者にとっても、それより優れた帰趨はないから。実に、〔何らかの〕グナ（性質）が存在していたら、〔その帰趨とは〕同等ではないと〔人々は〕語って³¹。

59

yat karoty anabhisamdhīpūrvakam tac ca nirṇudati yat purā kṛtam /

³⁰ MBh 12.187.15 では、「上記のことを理解し、人（nara）はブッディによって、存在物の来し方行く末を熟慮して、そしてまさに、徐々に最高の寂静を獲得する。」と説かれる。

³¹ 58–59 偈は突然に韻律が変わる。茂木氏は「この章の最後の3詩節（jagatī, triṣṭubh）は前の詩節からのつながりが見られず、意味も明瞭ではない」と指摘している [茂木 1995c: p. 110]。

nāpriyaṃ tad ubhayaṃ kutaḥ priyaṃ tasya taj janayatīha kurvataḥ // MBh 12.187.59

無意識に行われたこと、そしてかつて行われたこと、それらを排除している、その彼にとっては、この世で行為しつつも、それらの2つの好ましくないことをそれは生じさせない。〔ましてや〕 どうして好ましいこと³²を〔生じさせようか〕。

60

loka āturaṅgān virāviṅṅas tat tad eva bahu paśya śocataḥ /

tatra paśya kuśalān aśocato ye vidus tad ubhayaṃ padaṃ sadā // MBh 12.187.60

その2つの側面（好ましいことと好ましくないこと）を常に知っている者たちは、世間において、病気を患い、いろいろと深く悲しみながら嘆く人々を見るべし。〔同様に〕そこ（世間）において健康で悲しんでいない人々を見るべし³³。

A.2 Mokṣadharmā-Parvan 第203章

Yudhiṣṭhira uvāca —

ユディシュティラは語った。

1

yogaṃ me paramaṃ tāta mokṣasya vada bhārata /

tam ahaṃ tattvato jñātum icchāmi vadatāṃ vara // MBh 12.203.1

敬愛する人よ。解脱に関しての最高のヨーガを私に語れ。バラタ族の者よ。それを私は正しく知りたと思う。語って下さい。優れた者よ。

Bīṣma uvāca —

ビーシュマは語った。

2

atrāpy udāharantīmam itihāsaṃ purātanam /

saṃvādaṃ mokṣasaṃyuktaṃ śiṣyasya guruṅā saha // MBh 12.203.2

³² この世に留めるような好ましいこと、すなわち束縛。

³³ ここは文法的に齟齬が見られる。主語は“ye”だが、述語の動詞は2人称である。内容的にも、世間を正しく見ることができる人が、世間を正しく見なければならないということであり、矛盾している。それらを鑑みれば、“ye”を両数の対格ととり、「それら2つのこと（内容）を知る者、その2つの側面を常に〔知っている〕。」とも訳せるかもしれない。

ここにおいても、この古の伝承 (itihāsa) を〔人々は〕語る。弟子と師匠との解脱に関連した問答を。

3

kaścīd brāhmaṇam āsīnam ācāryam ṛṣisattamam /
śiṣyaḥ paramamedhāvī śreyorthī susamāhitaḥ /
caraṇāv upasaṃgr̥hya sthitaḥ prāñjalir abravīt // MBh 12.203.3

師匠であり、最上の聖仙である座しているバラモンに、極めて聡明で、幸福を求め、とても熱心なある弟子は、両足に触れ、立ち上がり合掌して語った。

4

upāsanāt prasanno 'si yadi vai bhagavan mama /
samśayo me mahān kaścīd tan me vyākhyātum arhasi // MBh 12.203.4

尊者よ。もし、私の敬礼により喜んだならば、私にはある大きな疑問があるが、〔あなたは〕それを私のために詳細に語って欲しい。

5

kutaś cāhaṃ kutaś ca tvaṃ tat samyag brūhi yat param /
kathaṃ ca sarvabhūteṣu sameṣu dvijasattama /
samyagvṛttā nivartante viparītāḥ kṣayodayāḥ // MBh 12.203.5

私はどこから〔生じ〕、そしてあなたはどこから〔生じるのか〕、最高であるところのそれを正しく語れ。再生族の最上の者よ。そして、あらゆる存在物は等しいのに、正しく生起する消滅（死）と誕生が相反して生じる³⁴のはなぜか³⁵。

6

vedeṣu cāpi yad vākyaṃ laukikaṃ vyāpakaṃ ca yat /
etaḍ vidvan yathātattvaṃ sarvaṃ vyākhyātum arhasi // MBh 12.203.6

そしてまた、諸々のヴェーダにおいて説かれた文句、そして世間的に広まった文句、この全てを、真実の通りに、〔あなたは〕語って欲しい。知者よ。

³⁴ 茂木氏に従い [茂木 1998a: p. 67]、"nivartante" を「生じる」と解した。中村氏 [中村 1998b: p. 169]、Gunguli [Ganguli 1975b: p. 88] も同様に考えている。ニーラカンタの註には、"nivartante nitarāṃ vartante" とある。

³⁵ すなわち、全ての存在物は等しいはずがなぜ不平等なのか、という意味である。

Gurur uvāca—

師は語った。

7

śṛṇu śiṣya mahāprājña brahmaguhyam idaṃ param /
adhyātmaṃ sarvabhūtānām āgamānām ca yad vasu // MBh 12.203.7

弟子よ。偉大な知者よ。この最高のブラフマンの秘密、〔すなわち〕あらゆる存在物と諸々の聖典（アーガマ）にとつての内なるアートマンを聞け。優れた者よ。

8

vāsudevaḥ sarvam idaṃ viśvasya brahmaṇo mukham /
satyaṃ dānam atho yajñas titikṣā dama ārjavam // MBh 12.203.8

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は、この一切であり、すべてのヴェーダの口（brahmaṇo mukham）³⁶であり、真実、布施、そして、供犠であり、忍耐、抑制、誠実さである。

9

puruṣaṃ sanātanaṃ viṣṇuṃ yat tad vedavido viduḥ /
sargapralayakartāram avyaktaṃ brahma śāśvatam /
tad idaṃ brahma vārṣṇeyam itihāsaṃ śṛṇuṣva me // MBh 12.203.9

ヴェーダを知るものたちは、彼を、プルシャであり、永遠なるものであり、ヴィシュヌ、創造と帰滅を行う者、未顕現（avyakta）、永遠のブラフマンであると知っている。このブラフマンがヴリシュニ族の者（ヴァースデーヴァ）であるという私の〔語る〕伝承を聞け。

10

brāhmaṇo brāhmaṇaiḥ śrāvya rājanyaḥ kṣatriyais tathā /
māhātmyaṃ devadevasya viṣṇor amitatejasaḥ /
arhas tvam asi kalyāṇa vārṣṇeyam śṛṇu yat param // MBh 12.203.10

バラモンはバラモンたちによって聞くことができ、同様に王族はクシャトリアたちによって〔聞くことができる〕。神のなかの神であり、無量の光であるヴィシュヌの偉大さを、あなたは〔聞くに〕値する。幸福なる者よ。最高であるところのヴリシュニ族の者〔の伝承〕を聞け。

³⁶ 中村氏は、ニーラカント註の“brahmaṇo mukhaṃ vedādiḥ praṇavaḥ”を参照し、「ヴェーダの冒頭〔の聖音オーム〕」と訳している [中村 1998b: p. 170]。

11

kālacakram anādyantaṃ bhāvābhāvasvalakṣaṇam /
trailokyam sarvabhūteṣu cakravat parivartate // MBh 12.203.11

〔それは〕時間の輪（カーラチャクラ）であり、始まりも終わりもなく、存在（形・状態のあるもの）と非存在（形・状態のないもの）を自己の相とする三界である。あらゆる存在物において、チャクラ（車輪）のごとくに回転する³⁷。

12

yat tad akṣaram avyaktam amṛtaṃ brahma śāśvatam /
vadanti puruṣavyāghraṃ keśavaṃ puruṣarṣabham // MBh 12.203.12

不滅のもの、未顕現（avyakta）、不死のもの、永遠のブラフマンであるものを、〔人々は〕人中の虎、ケーシャヴァ（豊かな髪を持つ者）、人中の雄牛と言う。

13

pitṛn devān ṛṣiṃś caiva tathā vai yakṣadānavān /
nāgāsūramanuṣyāṃś ca sṛjate paramo 'vyayaḥ // MBh 12.203.13

最高である不変のものは、祖先たち、神々、聖仙たち、そしてさらに、ヤクシャとダーナヴァたち、また、ナーガとアスラと人間たちを創造する。

14

tathaiva vedaśāstrāṇi lokadharmāṃś ca śāśvatān /
pralaye prakṛtiṃ prāpya yugādau sṛjate prabhuh // MBh 12.203.14

同様に、威光あるもの（神）は、〔世界の〕還滅のときにプラクリティを得て、ユガの始まりにヴェーダ聖典と永遠である世間のダルマを創造する³⁸。

15

yathārtuṣv ṛtuliṅgāni nānārūpāni paryaye /
dṛśyante tāni tāny eva tathā brahmāharātriṣu // MBh 12.203.15

季節に従って、様々な姿の季節の特徴が変化の中で見られる。同様に、まさにそのすべて³⁹は、ブラフマンの昼と夜〔の変化〕の中に〔見られる〕。

³⁷ すなわち、あらゆるものの中に存在するということである。

³⁸ 世界がプラクリティへと還滅し、そのプラクリティが最高神へと帰することにより現象世界が終わり、そして新たな世界の始まりに、ヴェーダとダルマを創造するのである。

³⁹ 前掲などで説かれている創造のことと考えられる。

16

atha yad yad yadā bhāvi kālayogād yugādiṣu /
tat tad utpadyate jñānaṃ lokayātrāvidhānaṃ // MBh 12.203.16

さて、それぞれのユガの始まるときに、時間と結びつくことにより存在するすべての慣習的規範から生まれた認識が、生起する。

17

yugānte 'ntarhitān vedān setihāsān maharṣayaḥ /
lebhire tapasā pūrvam anujñātāḥ svayambhuvā // MBh 12.203.17

スヴァヤンブーによって認められた偉大な聖仙たちは、ユガの終わりにおいて隠れた諸々のヴェーダを、古事 (itihāsa) と共に、タパス (熱力) によって最初に獲得した。

18

vedavid veda bhagavān vedāṅgāni bṛhaspatiḥ /
bhārgavo nītiśāstraṃ ca jagāda jagato hitam // MBh 12.203.18

ヴェーダを知る尊者ブリハスパティは、諸々のヴェーダーンガ (ヴェーダ補助学) を知った。そして、ブリグの息子は、世間の利益のために、ニーティシャーストラ (処世の論書) を語った。

19

gāndharvaṃ nārado vedaṃ bharadvājo dhanurgraham /
devarṣicaritam gārgyaḥ kṛṣṇātreyaś cikitsitam // MBh 12.203.19

ナーラダ⁴⁰はガンダルヴァの知識 (音楽) を、バラドヴァージャ⁴¹は弓術を、ガールギヤ⁴²は神仙の行為を、クリシュナートレーヤ⁴³は医術を [語った]。

20

⁴⁰ 偉大な聖者で、ブラフマーの息子とされ、彼の膝から生まれたとされる。他の伝説では、ブラフマーによって Upabarhaṇa というガンダルヴァに生まれ変わるという呪いをかけられたという [Mani 1975: p. 526]。

⁴¹ 有名な聖仙で多くの箇所その名が現れる。アトリ仙の息子とされ、数千年間生きたとされる [Mani 1975: p. 117]。

⁴² ヴィシュヴァーミトラの息子の一人。『ガルガ・スムリティ』の著者といわれる。MBh Anuśāsana 篇には彼によって規定されたダルマが見られる。それは、(1) 客人をもてなすために常に注意を払わなければならない、(2) 肉を食べてはならない、(3) 牛とバラモンを傷つけてはならない、(4) 清らかな心と体で祭祀 (yajña) を行わなければならない、というものである [Mani 1975: p. 280]。

⁴³ 古代インドの偉大な聖者とされる。この聖者はアーユルヴェーダの全てを理解し、苦行に勤しんだという [Mani 1975: p. 430]。

nyāyatantrāṇy anekāni tais tair uktāni vādibhiḥ /
 hetvāgamasadācāir yad uktam tad upāsyate // MBh 12.203.20

数多くの論理の聖典は、それぞれの論者によって、語られた。議論 (hetu)、伝承 (āgama)、善行 (sadācāra) として語られたもの (聖典) は尊ばれている。

21

anādyam yat param brahma na devā narṣayo viduḥ /
 ekas tad veda bhagavān dhātā nārāyaṇaḥ prabhuḥ // MBh 12.203.21

無始であり、最高のものであるブラフマンを神々も聖仙たちも知らない。そのもの (ブラフマン) を、唯一であり、尊者であり、創造者 (保持する者) であり、支配者であるナーラーヤナは知った。

22

nārāyaṇād ṛṣigaṇās tathā mukhyāḥ surāsurāḥ /
 rājarṣayaḥ purāṇās ca paramaṁ duḥkhabheṣajam // MBh 12.203.22

ナーラーヤナから、聖仙の一群、および主要な神々とアスラたち、古の王仙たち、そして苦の治療の最高のものが [生じた]。

23

puruṣādhiṣṭhitam bhāvam prakṛtiḥ sūyate sadā /
 hetuyuktam ataḥ sarvaṁ jagat saṃparivartate // MBh 12.203.23

プラクリティは、常に、プルシヤに依拠した状態を生み出す。それ故、原因と結びついているあらゆる世界は展開する。

24

dīpād anye yathā dīpāḥ pravartante sahasraśaḥ /
 prakṛtiḥ sṛjate tadvad ānantyān nāpacīyate // MBh 12.203.24

[一つの] 灯明から、他の灯明が何千と生じるように、[唯一の] プラクリティはそのように [世界を] 創造し、永遠である故に減少しない。

25

avyaktakarmajā buddhir ahaṃkāraṁ prasūyate /
 ākāśaṁ cāpy ahaṃkārad vāyur ākāśasambhavaḥ // MBh 12.203.25

未顕現 (avyakta) の行為によって生じたブッディがアハンカーラを生み出す。そしてまた、アハンカーラから虚空が生じ、風は虚空から生じるものである。

26

vāyos tejas tataś cāpas tv adbhyo hi vasudhodgatā /
mūlaprakṛtayo 'ṣṭau tā jagad etāsv avasthitam // MBh 12.203.26

風から火が、そしてそれ（火）から水が、また水から地が生じる。ムーラプラクリティ（根本原因）はそれら 8 種⁴⁴である。これらの中に世界は存在している。

27

jñānendriyāṅy ataḥ pañca pañca karmendriyāṅy api /
viśayāḥ pañca caikaṃ ca vikāre ṣoḍaśaṃ manaḥ // MBh 12.203.27

また、知覚器官は 5 種であり、行為器官も 5 種である。そして、対象は 5 種であり、さらに、変異したもの (vikāra) における第 16 番目に、マナスが 1 種ある。

28

śrotraṃ tvak cakṣuṣī jihvā ghrāṇaṃ pañcendriyāṅy api /
pādaḥ pāyur upasthaś ca hastau vāk karmanām api // MBh 12.203.28

耳、皮膚、目、舌、鼻が 5 種の感覚器官であり、そして、両足、肛門、生殖器、両手、発声器官が行為の〔器官〕である。

29

śabdaḥ sparśo 'tha rūpaṃ ca raso gandhas tathaiva ca /
vijñeyaṃ vyāpakaṃ cittaṃ teṣu sarvagataṃ manaḥ // MBh 12.203.29

そして、音声、接触、色、味、そして香り〔が対象〕である。それらにおいて、遍在する心 (citta) は行き渡るマナスであると理解すべし⁴⁵。

30

rasajñāne tu jihveyaṃ vyāhṛte vāk tathaiva ca /
indriyair vividhair yuktam sarvaṃ vyastaṃ manas tathā // MBh 12.203.30

⁴⁴ 未顕現 (avyakta)、ブッディ (buddhi)、アハンカーラ (ahaṅkāra)、虚空 (ākāśa)、風 (vāyu)、火 (tejas)、水 (āpas)、地 (vasudhā) である。

⁴⁵ 対象にまでマナスは行き渡る。さらに、マナス=チッタと考えられている。

さて、味の知覚においてこの舌（味覚）になる。そして同様に、話すときには発声器官になる⁴⁶。そのように、多様なインドリヤ（感覚器官）と結びついたマナスは全てに広がるものである⁴⁷。

31

vidyāt tu ṣoḍaśaitāni daivatāni vibhāgaśaḥ /
deheṣu jñānakartāram upāsīnam upāsate // MBh 12.203.31

そして、これら 16 の神格は、個々に、諸々の身体に付随する認識する者（認識を司る者、認識主体＝アートマン）に仕えている、と知るべし。

32

tadvat somaguṇā jihvā gandhas tu pṛthivīguṇaḥ /
śrotraṃ śabdaguṇaṃ caiva cakṣur agner guṇas tathā /
sparśaṃ vāyuguṇaṃ vidyāt sarvabhūteṣu sarvadā // MBh 12.203.32

同様に、全ての存在物において、舌（味覚）は水〔元素〕のグナ（属性）であり、また、香りは地〔元素〕のグナ（属性）である。耳（聴覚）は音声のグナ（属性）であり、そしてまた、目（視覚）は火〔元素〕のグナ（属性）である。さらに、接触は風〔元素〕のグナ（属性）である、と常に知るべし。

33

manaḥ sattvaguṇaṃ prāhuḥ sattvam avyaktajaṃ tathā /
sarvabhūtātambhūtasthaṃ tasmād budhyeta buddhimān // MBh 12.203.33

マナスはサットヴァのグナ（属性）であると言われる。さらに、サットヴァは未顕現（avyakta）から生じたものである。それ故に、ブッディを持つ者（buddhimān、理性ある人）は、〔マナスは〕あらゆる存在物（一切生類）の本質として存在している、と理解すべし。

34

ete bhāvā jagat sarvaṃ vahanti sacarācaram /
śrītā virajasaṃ devaṃ yam āhuḥ paramaṃ padam // MBh 12.203.34

これら諸々の状態が、動くものと動かないものを含むすべての世界を支え、これらは〔人々が〕最高の境地と言った汚れなき神（ラジャスを超えた神、ラジャスから離れた神、

⁴⁶ ブッディが舌になり、発声器官になるということか。

⁴⁷ 中村氏の訳だと、「顕現する」と訳される [中村 1998b: p. 173]。原語は“vyakta”である。

virajasam devam) に結びつく。

35

navadvaram puram puṇyam etair bhāvaiḥ samanvitam /
vyāpya śete mahān ātmā tasmāt puruṣa ucyate // MBh 12.203.35

これらの状態を伴った9つの門⁴⁸を〔持つ〕聖なる街に、大なるアートマン（マハット・アートマン）は、遍在して横たわる。それ故、〔大なるアートマンは〕プルシャと呼ばれる。

36

ajarah so 'maraś caiva vyaktāvyaktopadeśavān /
vyāpakaḥ saḡuṇaḥ sūkṣmaḥ sarvabhūtaguṇāśrayaḥ // MBh 12.203.37

そしてまさに、それ（プルシャ）は、不老であり、不死であり、顕現（vyakta）と未顕現（avyakta）としての教示を持つものであり、遍在するものであり、グナ（属性）を持ち、微細で、あらゆる存在物のグナ（属性・性質）の居処である。

37

yathā dīpaḥ prakāśātmā hrasvo vā yadi vā mahān /
jñānātmānam tathā vidyāt puruṣam sarvajantuṣu // MBh 12.203.37

灯明は、たとえ小さくともあるいは大きくとも、灯りを本質とするものであるように、あらゆる生物において、（プルシャが微細であっても）プルシャを認識を本質とするものと知るべし。

38

so 'tra vedayate vedyam sa śṛṇoti sa paśyati /
kāraṇam tasya deho 'yam sa kartā sarvakarmaṇām // MBh 12.203.38

ここにおいて、それ（プルシャ）は、認識されるもの（認識対象）⁴⁹を認識する。〔すなわち〕それが聞き、それが見るのである。この身体は、それ（認識）の原因である。それ（プルシャ）はあらゆる行為を行う者である。

39

agnir dārugato yadvad bhinne dārau na drśyate /
tathaivātmā śarīrastho yogenaivātra drśyate // MBh 12.203.39

⁴⁸ 両眼、鼻の両穴、口、両耳、生殖器、肛門の計9つと考えられる。Atharvaveda 10.8.43; 10.2.31 も参照。

⁴⁹ “viṣayāḥ” のこと、すなわち、音声、接触、色、味、そして香りの5種である。MBh 12.203.29 を参照。

木の中にある火（火元素）が、木が分断されても見られない（知覚されない）ように、まさにそのように、身体に存在するアートマンは、ヨーガ⁵⁰によってのみここにおいて⁵¹見られる（知覚される）。

40

nadīṣv āpo yathā yuktā yathā sūrye marīcayah /
samtanvānā yathā yānti tathā dehāḥ śarīriṇām // MBh 12.203.40

水は河と結びつくように、〔また〕光線は太陽と〔結びつく〕ように、〔そして〕結びついているものが進むように、そのように諸々の身体は身体を持つ者たち⁵²と〔結びついて進む〕。

41

svapnayoge yathāivātmā pañcendriyasamāgataḥ /
deham utsrjya vai yāti tathāivātropalabhyate // MBh 12.203.41

アートマンは、睡眠との結合において、5つのインドリヤ（感覚器官）を伴って、身体を離れ、進むように、ここにおいて、まさにそのように〔アートマンが〕理解される。

42

karmaṇā vyāpyate pūrvaṃ karmaṇā copapadyate /
karmaṇā nīyate 'nyatra svakṛtena balīyasā // MBh 12.203.42

〔アートマンによって〕すでに〔身体は〕行為で遍充され⁵³、そして〔身体が〕行為によって得られる。〔すなわち〕自ら行った強力な行為（の結果）によって⁵⁴、別の処に導かれる⁵⁵。

43

sa tu dehād yathā dehaṃ tyaktvānyaṃ pratipadyate /

⁵⁰ このヨーガとは一体どのようなものであったのか。身体的訓練によってではなく、むしろ超感覚（感覚を超えた感覚）とも考えられる。

⁵¹ 茂木氏はこの“ātra”を「身体において」か「この世界で」かのどちらかであると説明している [茂木 1998a: p. 70]。

⁵² 身体を持つ者たちとは、（肉体に宿った）アートマンのことを意味するとも考えられる。茂木氏は「身体をもつ者」と訳し [茂木 1998a: pp. 70–71]、中村氏は「精神」と訳す [中村 1998b: p. 174]。

⁵³ 「〔アートマンは〕行為によって以前に〔身体において〕遍充され」とも訳せる。

⁵⁴ すなわち、自らが行った行為から生まれた強力な力によって、という意味であろう。

⁵⁵ プーナ版では“vyāpyate pūrvaṃ”ではなく“bādhyate rūpaṃ”となっていて、中村氏は「色（＝古い身体、N 註）は取り去られる」と訳している [中村 1998b: p. 174]。茂木氏は「（アートマンは）以前（の身体）を行為によって満たし、行為によって（新たに）生じるのである。自ら為した大きな力をもつ行為によって他のところに導かれるのである」と訳している [茂木 1998a: p. 71]。

tathā taṃ saṃpravakṣyāmi bhūtagrāmaṃ svakarmajam // MBh 12.203.43

まさにそれ（アートマン）が、身体から離れ、別の身体を獲得するように、そのようにその自身の行為から生まれた存在物の一群を私は説明するであろう。

A.3 Mokṣadharmā-Parvan 第 239 章

Śuka uvāca —

シュカは語った。

1

adhyātmaṃ vistareṇeha punar eva vadasva me /
yad adhyātmaṃ yathā cedam bhagavann ṛṣisattama // MBh 12.239.1

内なるアートマンを、まさにまたここで、詳細に私に語れ。内なるアートマンとは何で、そしてこれはどのようなものを〔語れ〕。尊者よ。最上の聖仙よ。

Vyāsa uvāca —

ヴィヤーサは語った。

2

adhyātmaṃ yad idaṃ tāta puruṣasyeha vidyate /
tat te 'haṃ saṃpravakṣyāmi tasya vyākhyām imāṃ śṛṇu // MBh 12.239.2

愛しき者よ。この世界においてプルシャ（人間）にとってこの内なるアートマンとして知られているもの、それを私はあなたに語ろう。それ（内なるアートマン）に関するこれ（以下）の詳細を聞け。

3

bhūmir āpas tathā jyotir vāyur ākāśam eva ca /
mahābhūtāni bhūtānāṃ sāgarasyormayo yathā // MBh 12.239.3

まさに、大地、水、火、風、そして虚空が、諸々の存在物にとっての粗大元素である。海にとっての波のように⁵⁶。

4

⁵⁶ MBh 12.239.3ab = MBh 12.187.4ab, MBh 12.239.3 = MBh 12.187.5cd

prasāryeha yathāṅgāni kūrmaḥ samharate punaḥ /
tadvan mahānti bhūtāni yavīyaḥsu vikurvate // MBh 12.239.4

この世界において、亀が手足を伸ばして、再び引っ込めるように⁵⁷、そのように、粗大な元素はより小さなものへ⁵⁸展開する⁵⁹。

5

iti tanmayam evedaṃ sarvaṃ sthāvarajaṅgamaṃ /
sarge ca pralaye caiva tasmān nirdiśyate tathā // MBh 12.239.5

以上、動かないものと動くもののこの全てが、まさに、それ（粗大元素）からできたものであり、それ故、創造においても、還滅においても、同様に言及される。

6

mahābhūtāni pañcaiva sarvabhūteṣu bhūtakṛt /
akarot tāta vaiṣamyam yasmin yad anupaśyati // MBh 12.239.6

粗大元素は5つのみであり、存在物を創造する者があらゆる存在物における〔さらに〕多様なものを作った。〔一方、ジーヴァは〕それ（5粗大元素）の中にそれ（多様なもの）を觀照する⁶⁰。愛しき者よ。

Śuka uvāca —

シュカは語った。

7

akarod yac charīreṣu katham tad upalakṣayet /
indriyāṇi guṇāḥ kecit katham tān upalakṣayet // MBh 12.239.7

⁵⁷ 茂木氏はここでの比喩に疑問を呈している [茂木 2001: p. 4]。

⁵⁸ より下位のものへ転変することである。Ganguli は “... in numberless small forms, ...” と訳す [Ganguli 1975b: p. 202]。

⁵⁹ MBh 12.239.4ab = MBh 12.187.6ab

⁶⁰ ここでは主語は示されておらず、関係詞がどの語を示しているのか判然としない。“yasmin” は直前の “vaiṣamyam” を受けていると考えれば「多様さの中にそれを觀照する」と訳せる。茂木氏はそのように「その（多様さの）中にそれ（大我？）を見る」と訳し [茂木 2001: p. 127]、中村氏は「彼らの〔行為の目的の〕相違を考慮に入れたのである」と訳している [中村 1998b: p. 348]。同じ趣旨の文章 (MBh 12.187.7) では觀照するものはジーヴァであるとされ、また、次の7偈では「身体の中に作ったもの、それをいかにして觀察するのか」という質問がなされている。そのため「ジーヴァは身体の中に感覺器官やグナなどを觀照する」と解することができるかもしれない。

それぞれの身体の中に作ったもの、それをいかにして観察するのか。あるものがインドリヤ（感覚器官）であり、〔あるものが〕グナであること、それをいかにして観察するのか。

Vyāsa uvāca —

ヴィヤーサは語った。

8

etat te vartayiṣyāmi yathāvad iha darśanam /
śṛṇu tattvam ihaikāgro yathātattvaṃ yathā ca tat // MBh 12.239.8

ここで、その見解を、あなたにありのままに示そう。専心して、真実のままに、真実を聞くべし。そしてそれは次のごとくである。

9

śabdaḥ śrotraṃ tathā khāni trayam ākāśasambhavam /
prāṇas ceṣṭā tathā sparśa ete vāyugūṇās trayah // MBh 12.239.9

音声、耳（聴覚）、そして（身体の）諸々の穴の3種は、〔粗大元素の〕虚空から生まれたものである。呼吸、運動、接触、これらが風のグナ（性質）の3種である⁶¹。

10

rūpaṃ cakṣur vipākaś ca tridhā jyotir vidhīyate /
raso 'tha rasanam sneho guṇās tv ete trayo 'mbhasām // MBh 12.239.10

色、目（視覚）、そして消化が3種の火（jyotis）〔の性質〕であると説明される。さらに、味、舌（味覚）、湿潤（sneha）、これらが水の3種の性質であると伝承されている。

11

ghreyaṃ ghrāṇaṃ śarīraṃ ca bhūmer ete guṇās trayah /
etāvān indriyagrāmo vyākhyātaḥ pāñcabhautikaḥ // MBh 12.239.11

香り、鼻（嗅覚）、そして身体、これらが3種の地のグナ（性質）である。以上のように、5つの元素から成るインドリヤ（感覚器官）の集合が説かれた。

12

vāyoḥ sparśo raso adbhyaś ca jyotiṣo rūpaṃ ucyate /
ākāśaprabhavaḥ śabda gandho bhūmiguṇaḥ smṛtaḥ // MBh 12.239.12

⁶¹ 感覚器官を欠いている。

接触は風から、味は水から、色は火から〔生じる〕と言われる。音声は虚空から生じるものであり、香りは地のグナ（性質）と説明される。

13

mano buddhiś ca bhāvaś ca traya ete ’tmayonijāḥ /
na guṇān ativartante guṇebhyaḥ paramā matāḥ // MBh 12.239.13

マナスとブッディ、そしてバーヴァ（状態・本性）というそれら 3 種は、自己を胎として生じたものである⁶²。〔それら 3 種は〕 諸々のグナより高次であると考えられているが、諸々のグナを超越することはない（＝グナと別物ではない）。

14

indriyāṇi nare pañca śaṣṭhaṃ tu mana ucyate /
saptamīm buddhiṃ evāhuḥ kṣetrajñam punar aṣṭamam // MBh 12.239.14

人において、インドリヤ（感覚器官）は 5 つであり、一方、マナスは 6 番目であると言われる。ブッディがまさに 7 番目であり、さらにクシェートラジュニヤが 8 番目であると言われる。

15

cakṣur ālocanāyaiva samśayaṃ kurute manaḥ /
buddhir adhyavasānāya sākṣī kṣetrajña ucyate // MBh 12.239.15

まさに目は見るためにあり、て、マナスは疑いをなす。ブッディは決定するためにあり、クシェートラジュニヤ（知田者）は証人（確認者）であると言われる。

16

rajastamaś ca sattvaṃ ca traya ete svayonijāḥ /
samāḥ sarveṣu bhūteṣu tad guṇeṣūpalakṣayet // MBh 12.239.16

また、ラジャス、タマス、そしてサットヴァというそれら 3 種は、自ら生じたものである⁶³。〔これらは〕あらゆる存在物において、同等である（等しく存在する）。そのことをグナ（性質）の中に観察しなければならない⁶⁴。

17

yathā kūrma ihāṅgāni prasārya viniyacchati /

⁶² アートマンをヨーニとして持つもの。

⁶³ もとから存在したもの

⁶⁴ 茂木氏の解釈に従った [茂木 2001: p. 128]。

evam evendriyagrāmaṃ buddhiḥ sṛṣṭvā niyacchati // MBh 12.239.17

亀が、この世において、四肢を伸ばして引っ込めるように、まさにそのように、ブッディはインドリヤ（感覚器官）の集合を創造してから引き戻す。

18

yad ūrdhvaṃ pādatalayor avān mūrdhnaś ca paśyati /
etasminn eva kṛtye vai vartate buddhir uttamā // MBh 12.239.18

両足の裏の上方、そして、頭頂部の下方を見ること⁶⁵、まさにそれが為されるとき、ブッディは最上位のものとして存在する。

19

guṇān nenīyate buddhir buddhir evendriyāṇy api /
manaḥṣaṣṭhāni sarvāṇi buddhyabhāve kuto guṇāḥ // MBh 12.239.19

ブッディは諸々のグナ（性質）を制御する。また、ブッディのみが諸々のインドリヤ（感覚器官）を、〔そして〕マナスを6番目とするすべてを〔制御する〕。ブッディが存在しないならば、いかにして諸々のグナは存在しようか。

20

tatra yat prītisaṃyuktaṃ kiṃcid ātmani lakṣayet /
praśāntaṃ iva saṃśuddhaṃ sattvaṃ tad upadhārayet // MBh 12.239.20

その中で⁶⁶、自己において何か喜びと結びついたものを知覚し、〔それが〕平静となったごとくに清浄であれば、それをサットヴァと把握するべし。

21

yat tu saṃtāpasāmyuktaṃ kāye manasi vā bhavet /
rajaḥ pravartakaṃ tat syāt satataṃ hāri dehinām // MBh 12.239.21

しかし、身体あるいはマナスにおいて苦しみに結びついたものであり、いつでも身体を持つものたちにとって傷つけるものであるならば、それは活動するラジャスであろう。

22

yat tu saṃmohasaṃyuktaṃ avyaktaviṣayaṃ bhavet /

⁶⁵ 両足の裏から頭頂部まで、すなわち身体全体を見る。

⁶⁶ 茂木氏は、個々の *vedanā* を取り上げる MBh 第12巻187章と比較して、*tatra* を前後と関係ないとしているが [茂木 2001: p. 129]、これまでに述べてきた自己の話と関連づければ、身体においてと解することができる。

apratarkyam avijñeyaṃ tamas tad upadhāryatām // MBh 12.239.22

さらに、迷妄と結びついたものであり、明らかな対象を持たないもの、思議（思弁）できないもの、認識ができないものであるなら、それはタマスであると考えべきである。

23

praharṣaḥ prītir ānandaḥ sāmyaṃ svasthātmacittatā /
akasmād yadi vā kasmād vartate sāttviko guṇaḥ // MBh 12.239.23

有頂天、喜び、歓喜、平静さ、そして健康を本性とする心性が、偶然にしろそうでないにしろ生じたならば、サットヴァ的属性が作用している。

24

abhimāno mṛṣāvādo lobho mohas tathākṣamā /
liṅgāni rajasas tāni vartante hetvahetutaḥ // MBh 12.239.24

高慢⁶⁷、虚言、貪欲、迷妄⁶⁸、不寛容、それらはラジャスの特徴である。〔そして、十分な〕原因があってもなくても存在する。

25

tathā mohaḥ pramādaś ca tandrī nidrāprabodhitā /
kathaṃcid abhivartante vijñeyās tāmasā guṇaḥ // MBh 12.239.25

さらに、迷妄、酩酊、そして怠惰、睡眠から目覚めないことが、何らかの仕方で生じるが、それらはタマス性のグナ（性質）と認識されなければならない。

A.4 Mokṣadharmā-Parvan 第 240 章

Vyāsa uvāca —

ヴィヤーサは語った。

1

manaḥ prasṛjate bhāvaṃ buddhir adhyavasāyinī /
hr̥dayaṃ priyāpriye veda trividhā karmacodanā // MBh 12.240.1.

⁶⁷ MBh 第 12 卷 187 章では、タマス性のものである。

⁶⁸ 次の 25 偈のタマスの特徴にも、同じく “moha” が説かれている。

マナスはバーヴァ（状態）を創造する。ブッディは決定するものである。心⁶⁹は快と不快を知る。〔これらが〕3種の行為を駆り立てるものである。

2

indriyebhyaḥ parā hy arthā arthebhyaḥ paramaṃ manaḥ /
manasas tu parā buddhir buddher ātmā paro mataḥ // MBh 12.240.2

実に、諸々のインドリヤ（感覚器官）よりも対象が上位であり、対象よりもマナスが上位である。さらに、マナスよりもブッディが上位であり、ブッディよりもアートマンが上位であると考えられている。

3

buddhir ātmā manuṣyasya buddhir evātmano ’tmikā /
yadā vikurute bhāvaṃ tadā bhavati sā manaḥ // MBh 12.240.3

人間にとって、ブッディがアートマンである。まさにブッディはアートマンの本質から成るものである。〔ブッディが〕バーヴァ（状態）に変異するとき、そのときそれ（ブッディ）はマナスとなる⁷⁰。

4

indriyāṇaṃ pṛthag bhāvād buddhir vikriyate hy aṇu /
śṛṅvatī bhavati śrotraṃ sprśatī sparśa ucyate // MBh 12.240.4

諸々のインドリヤ（感覚器官）の個々の状態により、実にブッディは微細なもの（aṇu）に変異する。〔ブッディは〕聞くとき耳になり、触れるとき接触と言われる。

5

paśyantī bhavate dr̥ṣṭī rasatī rasanam bhavet /
jighratī bhavati ghrāṇam buddhir vikriyate pṛthak // MBh 12.240.5

〔ブッディは〕見るとき視力を持つもの（目）になり、味わうとき舌になるであろう。嗅ぐとき鼻になる。〔このように〕ブッディは個々に変異する。

⁶⁹ “hr̥daya” は心臓を意味するが、それだけではなく、心をも指している。しかし、具体的には何を意味しているか分からない。アートマン、アハンカーラ、チッタ、心の作用か、心の場か、何かしら心に関するものであろう。

⁷⁰ 2 偈では、アートマン→ブッディ→マナス→対象→インドリヤというラインが考えられる。そして、1 偈において、アートマンとも考えることのできる心（hr̥daya）は快と不快を知ることに、ブッディは決定すること、マナスは状態を創造することという3つの作用が与えられている。つまり、アートマンとブッディは本質的には同じものであるが、決定を為すときブッディに変異し、同様にブッディはバーヴァ（状態）を創造するときマナスに変異するということが考えられる。

6

indriyāṇīti tāny āhus teṣv adṛśyādhitīṣṭhati /
tiṣṭhatī puruṣe buddhis triṣu bhāveṣu vartate // MBh 12.240.6

それら〔上記のもの〕がインドリヤ（感覚器官）と言われる。そこにおいて、見えないもの（ブッディ）が〔インドリヤを〕制御する。人間（プルシャ）において存在するブッディは、3つのバーヴァ（状態）の中で作用する。

7

kadācil labhate prītiṃ kadācid api śocate /
na sukhena na duḥkhena kadācid iha yujyate // MBh 12.240.7

この世において、〔人は〕あるときは喜びを獲得し、またあるときは悲しむ。あるときは楽にも苦にも結びつけられない。

8

seyam bhāvātmikā bhāvāṃs trīn etān ativartate /
saritām sāgaro bhartā mahāvelām ivormimān // MBh 12.240.8

このバーヴァ（状態）を本質とするそれ（ブッディ）は、これら3つのバーヴァ（状態）を超越する。川の主である波立つ大海が広大な境界を〔越えるように〕。

9

yadā prārthayate kiṃcit tadā bhavati sā manaḥ /
adhiṣṭhānāni vai buddhyā pṛthag etāni saṃsmaret /
indriyāṇy eva medhyāni vijetavyāni kṛtsnaśaḥ // MBh 12.240.9

何かを望むとき、そのときそれ（ブッディ）はマナスになる。実に、それら（インドリヤ）はブッディによって個々に制御されていると考えるべし。インドリヤ（感覚器官）は活発ではあるが、〔ブッディによって〕完全に統御されなければならない。

10

sarvāṇy evānupūrvyeṇa yad yan nānuvidhīyate /
avibhāgatā buddhir bhāve manasi vartate /
pravartamānaṃ tu rajaḥ sattvaṃ apy anuvartate // MBh 12.240.10

まさに、〔ブッディ、マナス、インドリヤの〕全ては規則正しく〔作用している(?)〕。各々が（別々に作用するとは）規定されていない⁷¹。分化していないブッディ⁷²は、バーヴァ（状態）としてのマナスにおいて作用する。しかし、展開している（活動している）ラジャス⁷³は、サットヴァにも従って作用する⁷⁴。

11

ye caiva bhāvā vartante sarva eṣv eva te triṣu /
anvarthāḥ sampravartante rathanemiṃ arā iva // MBh 12.240.11

そして実に、あらゆるバーヴァ（状態）がまさにその3つの中で作用する。それらものは目的に従って展開する。輻（スポーク）が車輪の外縁を〔動かす〕ように。

12

pradīpārthaṃ naraḥ kuryād indriyair buddhisattamair /
niścāradbhir yathāyogaṃ udāsīnair yadṛcchayā // MBh 12.240.12

適切に現れたり、予期せずに休止しても、ブッディを最上とする諸々のインドリヤ（感覚器官）によって、人は灯明（光照）のために活動すべし（＝対象を明らかにすべし）⁷⁵。

13

evaṃ svabhāvam evedam iti vidvān na muhyati /
aśocann aprahr̥ṣyaṃś ca nityaṃ vigatamatsaraḥ // MBh 12.240.13

以上のように、まさにこれが自己の性質であると、賢者は迷わない。〔賢者は〕悲しまず、有頂天にならず、常に嫉妬から離れている。

14

na hy ātmā śakyate draṣṭum indriyaiḥ kāmāgocaraiḥ /
pravartamānair anaye durdharair akṛtātmanibhiḥ // MBh 12.240.14

実に、欲望を領域とするものであり、悪い行為をなし、抑制し難く、無知な（akṛtātman、自己自身で完結していないもの、不完全なもの）インドリヤ（感覚器官）によって、アートマンは見ることはできない。

⁷¹ 「まさに、あらゆるものは規則正しく規定されてはいない、その全てを」とも訳せるか。

⁷² 茂木氏は「(状態に) 分化していない統覚」と訳している [茂木 2001: p. 130]。しかし、状態ではなく、個々のインドリヤに分化していないブッディのことではないだろうか。

⁷³ 活動因としてのラジャスの性質が見られる。

⁷⁴ 茂木氏は、この箇所について、「buddhi-tribhāva と rajas-sattva-tamas との関連で、の伝承に混乱が生じていると思われる」と指摘している [茂木 2001: p. 130]。

⁷⁵ すなわち、「全てのインドリヤによって、対象を正しく認識するべし。」ということ。

15

teṣāṃ tu manasā raśmīn yadā samyanniyacchati /
 tadā prakāśate hy ātmā ghaṭe dīpa iva jvalan /
 sarveṣāṃ eva bhūtānāṃ tamasy apagate yathā // MBh 12.240.15

しかし、それらの光線（＝インドリヤ）をマナスによって正しく制御するとき、実に、アートマンは輝く。水瓶の中で灯明が燃えている（輝いている）ように。まさに、タマス（闇）がなくなると、全ての存在物の〔アートマンが輝く〕ように。

16

yathā vāricaraḥ pakṣī na lipyati jale caran /
 evam eva kṛtaprajñō na doṣair viṣayāṃś caran /
 asajjamānaḥ sarveṣu na kathamcana lipyate // MBh 12.240.16

水鳥が、水の中で動きつつも、汚されないように、まさに同様に、知恵を獲得した者は、諸々の対象へ向かって動きつつも、罪によって〔汚され〕ない。あらゆることに固執していない者は、決して汚されない。

17–18

tyaktvā pūrvakṛtaṃ karma ratir yasya sadātmani /
 sarvabhūtātmabhūtasya guṇamārgeṣv asajjataḥ // MBh 12.240.17
 sattvaṃ ātmā prasavati guṇān vāpi kadācana /
 na guṇā vidur ātmānaṃ guṇān veda sa sarvadā // MBh 12.240.18

以前に行われた行為（すでになされた業）を捨て去り、常にアートマンにおいて喜び、あらゆる存在物の本質になっているもの（sarvabhūtātmabhūta）であり、グナ（性質）の道において固執しているものにとって、アートマンはサットヴァを創造するが、一方、どんなときも諸々のグナ（性質）を〔創造しない〕。諸々のグナはアートマンを知らないが、それ（アートマン）は、あらゆるときにおいて（sarvadā、総合的に）、諸々のグナ（性質）を知っている。

19

paridraṣṭā guṇānāṃ sa sraṣṭā caiva yathātatham /
 sattvaḥsetrajñayor etadantaram vidhī sūkṣmayoḥ // MBh 12.240.19

それ（アートマン）は、諸々のグナの観照者であり、そしてまさに、適切に（真理に従って）創造する者である。微細なものであるサットヴァ⁷⁶とクシェートラジュニヤという両

⁷⁶ ここでは物質要素の意味で、クシェートラジュニヤとの対比において用いられている。

者におけるこの違いを知れ。

20

srjate tu guṇān eka eko na srjate guṇān /
pṛthagbhūtau prakṛtyā tau samprayuktau ca sarvadā // MBh 12.240.20

さて一方はグナを創造し、もう一方はグナを創造しない。本性的に別々の存在物であるが、その両者はどんなときでも結びついている。

21

yathā matsyo 'dbhir anyañ san samprayuktau tathaiva tau /
maśakodumbarau cāpi samprayuktau yathā saha // MBh 12.240.21

魚が水と別のものであっても結びついているように、まさに両者は〔結びついているのである〕。そしてまた、ブヨとイチジクの木がいつも結びついているように。

22

iṣikā vā yathā muñje pṛthak ca saha caiva ca /
tathaiva sahitāv etāv anyonyasmin pratiṣṭhitau // MBh 12.240.22.

また、あるいは、ムンジャ草における茎が、(ムンジャ草と)異なっていてでもあり、まさに一緒でもあるように。まさにそのように、この両者は結合し、互いに依拠している。

A.5 Mokṣadharmā-Parvan 第 241 章

Vyāsa uvāca —

ヴィヤーサは語った。

1

srjate tu guṇān sattvaṃ kṣetrajñas tv anuṣṭhati /
guṇān vikriyataḥ sarvān udāsīnavad īśvaraḥ // MBh 12.241.1

さて、サットヴァ(物質要素)は諸々のグナ(性質)を創造する。一方、クシェートラジュニヤ(知田者)は、変異したすべてのグナに対し、無関心のごとくに主宰神として、支配する(活動する)。

2

svabhāvayuktaṃ tat sarvaṃ yad imān srjate guṇān /
ūrṇanābhir yathā sūtraṃ srjate tantuvad guṇān // MBh 12.241.2

これらのグナを創造するもの（サットヴァ）は、すべてが自己の性質と結びついたものである。蜘蛛が糸を生み出すごとく、糸のように諸々のグナ（性質）を〔生み出す〕⁷⁷。

3

pradhvastā na nivartante pravṛttir nopalabhyate /
evam eke vyavasyanti nivṛttir iti cāpare // MBh 12.241.3

滅したものは消滅してはいない。展開は把握されない。このように、一方の者たちは考える。しかし、他方の者たちは、消滅と〔考える〕⁷⁸。

4

ubhayaṃ sampradhāryaitad adhyavasyed yathāmati /
anenaiva vidhānena bhaved garbhaśayo mahān // MBh 12.241.4

両者を考慮して、（正しい）考えに従ってこれを判断すべし。まさに、このような仕方
で、胎児は大きくなるであろう⁷⁹。

5

anādinidhanaṃ nityam āsādyā vicaren naraḥ /
akrudhyann aprahr̥ṣyaṃś ca nityaṃ vigatamatsaraḥ // MBh 12.241.5

人は、無始無終の永遠なるものに到達して、怒らず、有頂天にならず、そして、常に嫉妬から離れて振る舞うべし。

6

ity evaṃ hr̥dayagranthiṃ buddhicintāmayam dṛḍham /
atītya sukham āsīta aśocaṃś chinnaśaṃśayaḥ // MBh 12.241.6

以上のように、ブッディによる（ブッディの？）思考から成る堅固な心（hr̥daya）の束縛（結び目）を超えて行って、疑念を断った者は、悲しまずに、楽に住すべし。

7

tapyeyuḥ pracyutāḥ pṛthvyā yathā pūrṇaṃ nadīṃ narāḥ /
avaḡāḍhā hy avidvāṃso viddhi lokam imaṃ tathā // MBh 12.241.7

⁷⁷ 蜘蛛はサットヴァ、グナは糸。次の例のように、sattva は生み出されたものすべてと解する。

⁷⁸ 一方は、常住無変のものがあると考える者たち、もう一方は、常住無変のものはないと考える者達である。

⁷⁹ ブッディの別名としてマハットがあるが、ここでは考えにくい。

満ちた川に地上から落ちた人々が苦しむように、実に、無知な人々は溺れ⁸⁰ [苦しむ]。〔あなたは〕そのようにこの世界を知れ。(実に、地上から落ちて満ちた川に沈んだ無知な人々が苦しむように、〔あなたは〕そのようにこの世界を知れ。)

8

na tu tāmyati vai vidvān sthale carati tattvavit /
evaṃ yo vindate ’tmānaṃ kevalaṃ jñānam ātmanaḥ // MBh 12.241.8

しかし、知者は悩まないし、真理を知る者は平地を進む。このようにアートマンを獲得した者⁸¹は、アートマンの独存の知識を [獲得する]。

9

evaṃ buddhvā naraḥ sarvāṃ bhūtānāṃ āgatiṃ gatim /
samavekṣya śanaīḥ samyaḥ labhate śamam uttamam // MBh 12.241.9

人はこのように理解し、存在物の越し方行く末の全てを漸次に完璧に観察して、最高の平安を獲得する。

10

etad vai janmasāmarthyam brāhmaṇasya viśeṣataḥ /
ātmajñānaṃ śamaś caiva paryāptaṃ tat parāyaṇam // MBh 12.241.10

実に、これは、特別に、バラモンにとっての生来の能力である⁸²。そしてそれはまさにアートマンの認識であり、平安であり、獲得された最高の道である。

11

etad buddhvā bhaved buddhaḥ kim anyad buddhalakṣaṇam /
vijñāyaitad vimucyante kṛtakṛtyā maṇiṣiṇaḥ // MBh 12.241.11

これを理解すれば、覚者となるであろう。覚者の相は他に何かあろうか。これを認識して、賢者たちは行うべきことが行われて解脱する。

12

na bhavati viduṣāṃ mahadbhayaṃ yad aviduṣāṃ sumahadbhayaṃ bhavet /
na hi gatir adhikāsti kasyacid bhavati hi yā viduṣaḥ sanātānī // MBh 12.241.12

⁸⁰ 「溺れる」は、「沈んだ」(落胆した、墮落した)などの意味もある。

⁸¹ アートマンの獲得とは、アートマンの究極 (kevala) の知識である。

⁸² 「これ」とは前文のことを指し、バラモンは生まれながらにして解脱する能力を有するという意味である。

知者たちには、愚かな者たちにとって非常に大きな恐れとなるはずの大きな恐れはない。なぜなら、知者たちの永遠〔の帰趨〕があったとして、それより優れた帰趨は、誰にとっても存在しないから。

13

lokam āturaṃ asūyate janas tat tad eva ca nirīkṣya śocate /
tatra paśya kuśalān aśocato ye vidus tad ubhayaṃ kṛtākṛtam // MBh 12.241.13

人は病気の世界を喜ばず、そしてまさに、そのすべてを観察して悲しむ。そこにおいて、正しい者たち、悲しまない者たちを見よ。彼らは行われたことと行われなかったことその両者を知る。

14

yat karoty anabhisam̐dhipūrvakaṃ tac ca nirṇudati yat purā kṛtam /
na priyaṃ tad ubhayaṃ na cāpriyaṃ tasya taj janayatīha kurvataḥ // MBh 12.241.14

無意識に行われること、そして、すでに行われたこと、それらを排除し、その彼にとって好ましいことと好ましくないことのその両者を、〔人は〕この世で行為しつつも、生じさせない。

A.6 Mokṣadharmā-Parvan 第 291 章

Yudhiṣṭhira uvāca —

ユディシュティラは語った。

1

kiṃ tad akṣaram ity uktaṃ yasmān nāvartate punaḥ /
kiṃ ca tat kṣaram ity uktaṃ yasmād āvartate punaḥ // MBh 12.291.1

そこから〔人が〕再び帰ってこないところの不滅と言われるものは何か。また、そこから〔人が〕再び帰ってくるところの消滅と言われるものは何か。

2

akṣarakṣarayor vyaktiṃ icchāmy ariniṣūdana /
upalabdhuṃ mahābāho tattvena kurunandana // MBh 12.291.2

敵を破壊する者よ。不滅と消滅の明示を、正しく把握することを私は欲する。力強き者よ。クル族の子孫よ。

3

tvam hi jñānanidhir viprair ucyase vedapāragaiḥ /
 ṛṣibhiś ca mahābhāgair yatibhiś ca mahātmabhiḥ // MBh 12.291.3

実に、あなたは、ヴェーダに精通したバラモンたち、非常に尊い聖仙たち、そして偉大な魂の苦行者たちによって知の宝庫と言われる。

4

śeṣam alpam dinānām te dakṣiṇāyanabhāskare /
 āvṛtte bhagavaty arke gantāsi paramām gatim // MBh 12.291.4

太陽が南向するとき、あなたに日々の残りがわずかにある。尊き太陽が北に転ずるとき、あなたは最高の帰趨に赴く人となる。

5

tvayi pratigate śreyaḥ kutaḥ śroṣyāmahe vayam /
 kuruvamśapradīpas tvam jñānadavyeṇa dīpyase // MBh 12.291.5

より良き幸福〔の世界〕にあなたが旅立った後に、私たちはどこから聞くことができようか。あなたは、クルー族の灯明であり、知の富によって輝いている。

6

tad etac chrotuṃ icchāmi tvattaḥ kurukulodvaha /
 na tṛpyāmīha rājendra śṛṇvann amṛtaṃ īdṛśam // MBh 12.291.6

まさにこのことをあなたから聞きたいと欲する。クル族の末裔よ。ここで、このようなアムリタ（不死の霊薬）〔のごとき教え〕を聞いても私は満たされない。王の中の王よ。

Bhīṣma uvāca —

ビーシュマは語った。

7

atra te vartayiṣye 'ham itihāsam purātanam /
 vasiṣṭhasya ca saṃvādam karālajanakasya ca // MBh 12.291.7

このことについて、私はあなたに、ヴァシシュタとカラーラ・ジャナカとの対話といういにしえの古事 (itihāsa) を語ろう。

8

vasiṣṭham śreṣṭham āsīnam ṛṣiṇām bhāskaradyutim /
papraccha janako rājā jñānam naiḥśreyasaṃ param // MBh 12.291.8

聖仙たちの最上者であり、太陽の輝きを持つ、座しているヴァシシユタに、ジャナカ王は、至福に関する最高の知を尋ねた。

9-10

param adhyātmakuśalam adhyātmagatiniścayam /
maitrāvaruṇim āsīnam abhivādya kṛtāñjaliḥ // MBh 12.291.9
svakṣaram praśritaṃ vākyaṃ madhuraṃ cāpy anulbaṇam /
papraccha ṛṣivaram rājā karālanakāḥ purā // MBh 12.291.10

最高であり、内なるアートマン⁸³に精通し、内なるアートマンの帰趨を確信し、座しているマイトラーヤヴァルニ⁸⁴に、合掌した〔ジャナカ王〕は礼拝して、昔、カラーラ・ジャナカ王は、正しい言葉を用いて、礼儀正しく、なおかつ心地よく、適切な言葉で最高の聖仙に尋ねた。

11

bhagavan śrotuṃ icchāmi paraṃ brahma sanātanam /
yasmān na punar āvṛttiṃ āpnuvanti manīṣiṇaḥ // MBh 12.291.11

〔ジャナカ王は語った。〕尊者よ。聖者たちが到達しそこから再び戻ってこないところの、最高であり、永遠であるブラフマンを聞きたいと願う。

12

yac ca tat kṣaram ity uktam yatredam kṣarate jagat /
yac cākṣaram iti proktam śivam kṣemyam anāmayam // MBh 12.291.12

また、そこにおいてこの世界が滅するところの消滅と言われるものを、そして、吉祥であり、平安であり、病から離れたものである不滅と言われるものを〔知りたい〕。

Vasiṣṭha uvāca —

ヴァシシユタは語った。

13

śrūyatām pṛthivīpāla kṣarati idaṃ yathā jagat /

⁸³ 中村氏は、「内我は過去・現在の両種に関する知を有するもの」と説明する [中村 1998a: p. 1091]

⁸⁴ ミトラとヴァルナの子のことで、ここではヴァシシユタのこと。

yan na kṣarati pūrveṇa yāvat kālena cāpy atha // MBh 12.291.13

大地の守護者よ。この世界がどのようにして滅するかを聞きなさい。そして、以前にも、また、いつまでも滅しないそれ（＝ブラフマン）を〔聞きなさい〕⁸⁵。

14

yugaṃ dvādaśasāhasraṃ kalpaṃ viddhi caturguṇam /
daśakalpaśatāvṛttam tad ahar brāhmam ucyate /
rātriś caitāvātī rājan yasyānte pratibudhyate // MBh 12.291.14

ユガは 12000 年であり、〔その〕 4 倍がカルパである。1000 カルパ繰り返すことがブラフマーに関するものの昼と言われる。そして、その終わりにおいて〔ブラフマーが〕目覚めるところの夜は、これ（昼）と同じ期間である⁸⁶。王よ。

15

srjaty anantakarmāṇaṃ mahāntaṃ bhūtaṃ agrajam /
mūrtimantaṃ amūrtātmā viśvaṃ śambhuḥ svayambhuvaḥ /
animā laghimā prāptir īśānaṃ jyotir avyayam // MBh 12.291.15

〔シャンブは〕終わりなく行為する最初に生まれた存在物であるマハットを、創造する。〔すなわち〕無形態の自生者（svayambhuva）であるシャンブ（＝シヴァ）は、形あるものすべてを〔創造する〕。〔彼は〕極微のもの（animā）、軽いもの（laghimā）、獲得（prāpti）、支配するもの（īśāna）、光輝（jyotis）、不滅のもの（avyaya）である⁸⁷。

16

sarvataḥ pāṇipādāntaṃ sarvatokṣīsiromukham /
sarvataḥ śrutimal loke sarvaṃ āvṛtya tiṣṭhati // MBh 12.291.16

〔シャンブは〕いたるところに四肢があり、いたるところに目、頭、口（顔）があり、いたるところに耳を有し、世界において、全てを覆い、住する。

⁸⁵ 中村氏は、「yāvat kālena = kṛtsnenāpi kālena」としている [中村 1998a: p. 1091]。

⁸⁶ 2 通りの解釈ができる。yasya の前で切って、「夜は、これ（昼）と同じ期間である。その終わりにシャンブが目覚める。王よ。」とも訳せる。中村氏は、「1 ユガは 12000 年であり、1 カルパは 4 ユガであると知られよ。1000 カルパを覆う期間が、梵天の 1 日であるという。（14） 梵天の夜もそれと同じ〔量〕である。王よ。その〔夜の〕終りに〔シャンブ＝シヴァ神は〕醒める。そして、初世の存在として、無窮の活動をなすマハーン（mahān）を創造する。（15）」と訳す [中村 1998a: pp. 717–718]。

⁸⁷ ヨーガにおいて説かれる 8 種の神通力と類似している。『ヨーガ・スートラ』3.45 に対するヴィヤーサの註には、(1) 微細化 (aṇimā)、(2) 軽化 (laghimā)、(3) 大化 (mahimā)、(4) 獲得 (prāpti) (5) 意欲自在 (prākāmya) (6) 支配 (vaśitva)、(7) 主宰者性 (īśitṛtva) (8) 望み通りの決定 (kāmaśāyitva、欲望の抑制) があげられる [Nārāyaṇamīśra 1971: p. 371]、[本多 1978: p. 206]

17

hiraṇyagarbho bhagavān eṣa buddhir iti smṛtaḥ /
mahān iti ca yogeṣu viriñca iti cāpy uta // MBh 12.291.17

〔一方〕この聖なるものは、ヒラニヤガルバであり、ブッディと言われる。また、ヨーガにおいてはマハットと〔言われ〕、さらにヴィリンチャ (viriñca)⁸⁸とも〔言われる〕。

18

sāṃkhye ca paṭhyate śāstre nāmabhir bahudhātmakaḥ /
vicitrarūpo viśvātmā ekākṣara iti smṛtaḥ // MBh 12.291.18

そして、多様な性質を持つもの (bahudhātmaka) [すなわちマハット] は、サーンキヤの聖典 (śāstra) において、諸々の名前によって言明される。〔それは〕多様な形を持つもの (vicitrarūpa)、ヴィシュヴァートマン (viśvātman)、一音節のもの (ekākṣara) と言われる⁸⁹。

19

vṛtaṃ naikātmakaṃ yena kṛtsnaṃ trailokyaṃ ātmanā /
tathaiva bahurūpatvād viśvarūpa iti smṛtaḥ // MBh 12.291.19

かのアートマンによって、多数からなるものである三界の全ては、覆われている。まさにそのように、多様なものであるから、〔マハットは〕ヴィシュヴァールーパと言われる。

20

eṣa vai vikriyāpannaḥ sṛjaty ātmānam ātmanā /
ahaṃkāraṃ mahātejāḥ prajāpatim ahaṃkṛtam // MBh 12.291.20

まさに転変が始まったこれは、自ら自己を創造する。大いに輝く者は、アハンクリタ (自己の意識) を持ったプラジャーパティであるアハンカーラを〔創造する〕。

21

⁸⁸ おそらくブラフマーことと思われる。Apte の Sanskrit-English Dictionary では、第 1 義がブラフマン (ブラフマー)、第 2 義がヴィシュヌ、第 3 義がシヴァであり、Monier も同様である。

MBh 12.330.29 では次のように説かれる。

viriñceti yaḥ proktaḥ kapilajñāna cintakaiḥ /
sa prajāpatir evāhaṃ cetanāt sarvalokakṛt //

「カピラの教えを考察する者たちによってヴィリンチャと呼ばれるもの、それはまさにプラジャーパティであり、私であり、精神性のもの (cetana) からあらゆる世界を作るものである。」

そして、ここではこれらすべてはナーラーヤナのことである。

⁸⁹ 中村氏はこれらについて、多種からなるもの (bahudhātmaka、衆持)、雑多の相をもつもの (vicitrarūpa)、宇宙我 (viśvātmā)、唯一の聖音 (オーム) (ekākṣara) と訳している [中村 1998a: p. 718]。

avyaktād vyaktam utpannaṃ vidyāsargaṃ vadanti tam /
mahān taṃ cāpy ahaṃkāraṃ avidyāsargaṃ eva ca // MBh 12.291.21

未顕現 (avyakta) から顕現 (vyakta) が生じる。[人々は] それを知の創造 (vidyāsarga) と言う。さらにまた、それをマハットとも [言う]。そして、まさにアハンカーラを無知の創造 (avidyāsarga) と [言う]。

22

avidhiś ca vidhiś caiva samutpannau tathaikataḥ /
vidyāvidyeti vikhyāte śrutiśāstrārthacintakaiḥ // MBh 12.291.22

非規則 (avidhi) と規則 (vidhi)⁹⁰とは、同様に、唯一なるものから共に生じる。天啓聖典と教典の意味を熟慮する者たちによって、[それは] 知 (vidyā) と無知 (avidyā) と呼ばれる⁹¹。

23

bhūtasargaṃ ahaṃkāraṃ trītiyaṃ vidhi pāṛthiva /
ahaṃkāreṣu bhūteṣu caturthaṃ vidhi vaikṛtaṃ // MBh 12.291.23

アハンカーラからの存在物の創造を第3と知れ。プリター夫人の子よ。[また、] 諸々のアハンカーラ [から生まれた] 存在物における変異したものを第4と知れ⁹²。

24

vāyur jyotir athākāśam āpo 'tha pṛthivī tathā /
śabdaḥ sparśaś ca rūpaṃ ca raso gandhas tathā eva ca // MBh 12.291.24

風、火、虚空、水、地、並びに、音声と接触と色、味、香り、実に [それらが、それぞれ] である。

25

evaṃ yugapad utpannaṃ daśavargaṃ asaṃśayaṃ /
pañcamaṃ vidhi rājendra bhautikaṃ sargaṃ arthavat // MBh 12.291.25

⁹⁰ 中村氏はそれぞれ、非儀軌 (avidhi)、儀軌 (vidhi) と訳している。

⁹¹ 非規則とは、知である、すなわち、規則を超えたもの、規則に支配されないもの、未顕現なもの、コントロールするもの。一方、規則は無知である。規則に支配されるもの、顕現である。

⁹² 中村氏は註において次のように説明する。「N 註は冒頭の bhūta を『五タンマートラと名づける微細な五元素』と説明し、G 訳はこれを採用している。D 訳は die Viśeṣas と理解する。五感官対象を指すことになる。G 註3は以上の創造を次のようにまとめている。不滅 (akṣara) → ヒラニヤガルバ → マハーナ (あるいは、ヴィラート、アハンカーラ) ; アハンカーラ → 五元素 (唯)。」[中村 1998a: p. 1092]

このように、同時に 10 からなる集まりが生じたことに、疑いない。大王よ。存在物から作られた創造 (bhautikaṃ sargam) を第 5 として、その通りに知れ。

26

śrotraṃ tvak cakṣuṣī jihvā ghrāṇam eva ca pañcamam /
vāk ca hastau ca pādau ca pāyur meḍhram tathā eva ca // MBh 12.291.26

耳、皮膚、両眼、舌、5 番目には鼻、同様に、発声器官と両手と両足と肛門および生殖器である。

27

buddhīndriyāṇi caitāni tathā karmendriyāṇi ca /
saṃbhūtāṇiḥa yugapan manasā saha pārthiva // MBh 12.291.27

これらの知覚器官と行為器官とは、この世において、マナスと共に同時に生起した。王よ。

28

eṣā tattvacaturvimśā sarvākṛtiṣu vartate /
yāṃ jñātvā nābhiśocanti brāhmaṇās tattvadarśinaḥ // MBh 12.291.28

これら 24 の原理は、あらゆる形を持つもの (ākṛti) 全てにおいて存在する。真理の識者であるバラモンたちは、それらを認識して、悲しまない。

29–32

etad dehaṃ samākhyātaṃ trailokye sarvadehiṣu /
veditavyaṃ naraśreṣṭha sadevanaradānave // MBh 12.291.29
sayakṣabhūtagandharve sakimnaramahorage /
sacāraṇapīśāce vai sadevaṛṣiniśācare // MBh 12.291.30
sadaṃśakīṭamaśake sapūtikṛmimūṣake /
śuni śvapāke vaiṇeye sacaṇḍāle sapulkase // MBh 12.291.31
hastyaśvakharaśārdūle savṛkṣe gavi caiva ha /
yac ca mūrtimayaṃ kiṃcit sarvatra etan nidaśanam // MBh 12.291.32

これ (24 の原理) は、身体 (deha) と呼ばれるものであり、三界における身体を持つもの全てに「存在する」と知るべきである。人の最上者よ。〔すなわち〕神、人、ダーナヴァにおいても、ヤクシャ、ブータ (悪霊)、ガンダルヴァにおいても、キンナラ、大蛇に

おいても、また、チャーラナ⁹³、ピシャーチャ（幽鬼）においても、神仙、ニシャーチャラ（夜行鬼）においても、噛むもの（*daṁśa*）、虫（*kīṭa*）、ブヨ（*maśaka*）においても、悪臭のするもの（*pūti*）、蜘蛛（*kr̥mi*）、ネズミ（*mūṣaka*）においても、犬（*śvan*）、シュヴァパーカ（*śvapāka*）⁹⁴、そしてレイヨウ（*aiṇeya*）⁹⁵において、チャンダーラにおいても、プルカサにおいても、ゾウ（*hastin*）、馬（*aśva*）、ロバ（*khara*）、トラ（*śārdūla*）において、木（*vr̥kṣa*）、牛（*go*）において、[このような、] あらゆるところ（三界）において、どんな形を持つもの（*mūrtimaya* = 身体を持つもの）でも、これ（24 原理）を特徴とするもの（*nidarśana*）である。

33

jale bhuvī tathākāśe nānyatreṭi viniścayaḥ /
sthānaṃ dehavatām astīty evaṃ anuśūruma // MBh 12.291.33

身体を持つもの（*dehavat*）の〔住める〕場所は、水に、あるいは地に、あるいは空にあり、他のところにはないということが確定している。以上、このように私たちは聞いている。

34

kr̥tsnam etāvatas tāta kṣarate vyaktasaṃjñakam /
ahany ahani bhūtātmā tataḥ kṣara iti smṛtaḥ // MBh 12.291.34

愛しき者よ。このようなものであるから、顕現（*vyakta*）と呼ばれる全てのものは日に日に滅する。それ故、ブータートマン（*bhūtātman*、存在物のアートマン）は、消滅するものと言われる。

35

etad akṣaraṃ ity uktaṃ kṣaratīdaṃ yathā jagat /
jagan mohātmakam prāhur avyaktaṃ vyaktasaṃjñakam // MBh 12.291.35

〔それとは異なる〕これが不滅と言われる。〔一方〕この世界はその通りに消滅し、〔人々は〕世界を、迷妄からなるものと言う。〔すなわち、一方は〕未顕現（*avyakta*）、〔もう一方は〕顕現（*vyakta*）と呼ばれるものである⁹⁶。

⁹³ 天界において音楽を演奏したり舞を踊る者。

⁹⁴ 犬を調理する者、あるいはカースト外の者。

⁹⁵ インドレイヨウ（ブラックバック）のことであろうか。

⁹⁶ 中村氏は「この世界は未顕現から生じ、顕現と名付けられ、迷妄を本質とすると言われる。」と訳す [中村 1998a: p. 720]

36

mahāṃś caivāgrājo nityaṃ etat kṣaranidarśanam /
kathitaṃ te mahā rāja yasmān nāvartate punaḥ // MBh 12.291.36

そしてまさに、マハットは最初に生まれたものであり、常に、これは消滅を特徴とするもの (nidarśana) である。大王よ。〔人が〕再び帰ってこないところについて、あなたに語った。

37

pañcaviṃśatimo viṣṇur nistattvas tattvasaṃjñakaḥ /
tattvasaṃśrayaṇād etat tattvam āhur manīṣiṇaḥ // MBh 12.291.37

第 25 番目のヴィシュヌは、〔本来は〕原理を超えたものであるが、原理と名づけられる。原理が依拠するものであるから⁹⁷、知者たちはこれを原理と言った。

38

yad amūrty asrjad vyaktaṃ tat tan mūrty adhiṣṭhate /
caturviṃśatimo vyakto hy amūrtaḥ pañcaviṃśakaḥ // MBh 12.291.38

かの形なきもの (amūrty) は顕現 (vyakta) を創造したが、それ故それは形あるもの (mūrty) として存在している。なぜなら、第 24 は顕現 (vyakta) であり、第 25 番目は形なきもの (amūrta) であるから⁹⁸。

39

sa eva hr̥di sarvāsu mūrtyiṣv ātiṣṭhate ’tmavān /
cetayaṃś cetano nityaḥ sarvamūrtyir amūrtyimān // MBh 12.291.39

まさにかのアートマンを持つもの (ātmavat) は、形あるもの (mūrty) の全てにおける心臓に住している。観照している永遠なる精神 (cetana、精神原理 = 25 番目の原理) は、〔本来〕形を持たないものであるが、形ある (mūrty) 全てのもの〔となる〕。

⁹⁷ 他の 24 原理が存在するには拠り所が必要なために、24 原理の依拠するところであるから、あえてヴィシュヌを原理に数えたのである。

⁹⁸ 「かの形なきもの (amūrty) は顕現 (vyakta) を創造したが、それ故それは形あるもの (mūrty) を支配する。」とも訳せるが、その場合、形なきもの (amūrty) が形あるもの (mūrty) を支配すると解せるであろう。中村氏は「滅するもの (= 流出の性質のプラクリティ) が、〔果として〕顕現を生じたのであるから、これらはすべて形体を持つ。それを未顕現なる第二十四は管理する。第二十五は形を持たない。〔故に世界を管理するということではできない。〕」と訳す [中村 1998a: p. 721]。プーナ版に基づくならば、まるで解釈が異なる。未顕現 (avyakta) が 24 番目の原理となる。形なきもの (amūrty) = ヴィシュヌ = プルシャ、形あるもの (mūrty) = 未顕現 (avyakta) = プラクリティ、vyakta = 23 の原理となる。しかし、この章では、プラクリティは 1 カ所のみで、原理としては理解しがたい。ここでは、物質根源としての原理、24 番目の原理の解釈が曖昧で、混乱しているように見える。

40

sargapralayadharminyā asargapralayātmakaḥ /
gocare vartate nityaṃ nirguṇo guṇasamjñakaḥ // MBh 12.291.40

創造と還滅の性質を持つもの（24番目の原理 vyakta）により、創造と還滅を性質としないものは、感覚器官の領域において、常に活動する（存在する）。〔そして〕グナから離れたもの（nirguṇa）はグナと呼ばれるものとなる。

41

evam eṣa mahān ātmā sargapralayakovidāḥ /
vikurvāṇaḥ prakṛtimān abhimanyaty abuddhimān // MBh 12.291.41

このように、このマハット・アートマン（大なるアートマン、mahān ātmā）は、創造と帰滅を経験し、転変するものであり、プラクリティ（物質性）を持ち、愚者であり、我執する。

42

tamaḥsattvarajoyuktas tāsū tāsū iha yoniṣu /
līyate 'pratibuddhatvād abuddhajanasevanāt // MBh 12.291.42

タマス・サットヴァ・ラジャスを具備した者は、この世において、様々なヨーニ（胎）に帰入する。目覚めない（＝覚らない）が故に、〔また、〕無知なる人々に仕えるから。

43

sahavāso nivāsātmā nānyo 'ham iti manyate /
yo 'ham so 'ham iti hy uktvā guṇān anu nivartate // MBh 12.291.43

共存し、〔身体に〕宿るアートマンは、「私は他のものではない」と考える。実に「私こそが私である」と言って、諸々のグナに沿って還滅する。

44

tamasā tāmasān bhāvān vividhān pratipadyate /
rajasā rājasāmś caiva sāttvikān sattvasāmśrayāt // MBh 12.291.44

タマスによって様々なタマスの状態を獲得し、ラジャスによってラジャス性を、サットヴァによってサットヴァ性を〔獲得する〕。

45

śuklaloहितakṛṣṇāni rūpāṇy etāni trīṇi tu /
sarvāṇy etāni rūpāṇi jānīhi prakṛtāni vai // MBh 12.291.45

しかるに、これら三種は、白・赤・黒の色を持つ。実に、プラークリタ（プラクリティから生じる一切の被造物、創造物）は、これら全ての色を持つと知るべし。

46

tāmasā nirayaṃ yānti rājasā mānuṣāṃs tathā /
sāttvikā devalokāya gacchanti sukhabhāginah // MBh 12.291.46

タマス性の人々は地獄（niraya）に行く。また、ラジャス性の人々は人間界に〔行く〕。サットヴァ性の人々は神の世界に行き幸福を享受する。

47

niṣkaivalyaena pāpena tiryagyonim avāpnuyāt /
puṇyapāpena mānuṣyaṃ puṇyenaikena devatāḥ // MBh 12.291.47

純然たる悪によって獣のヨーニ（胎）に、善と悪によって人間の〔ヨーニ（胎）〕に、善のみによって神の〔ヨーニ（胎）〕に至るであろう。

48

evaṃ avyaktaviṣayaṃ kṣaram āhur manīṣiṇah /
pañcaviṃśatimo yo 'yaṃ jñānād eva pravartate // MBh 12.291.48

このように、未顕現（avyakta）の対象を知者たちは消滅するものと言う。まさに知から現れるものが、第 25 番目のもの（すなわち不滅のもの）である。

A.7 Mokṣadharmā-Parvan 第 298 章

Yudhiṣṭhira uvāca —

ユディシュティラは語った。

1-2

dharmādharmavimuktaṃ yad vimuktaṃ sarvasaṃśrayāt /
janmamṛtyuvimuktaṃ ca vimuktaṃ puṇyapāpayoḥ // MBh 12.298.1
yac chivaṃ nityaṃ abhayaṃ nityaṃ cākṣaram avyayaṃ /
śuci nityaṃ anāyāsaṃ tad bhavān vaktuṃ arhati // MBh 12.298.2

ダルマ（法）とアダルマ（非法）から解放され、全ての依拠するところ⁹⁹から解放され、そして、生と死から解放され、善と悪において解放されており、吉祥であるもの、常に恐

⁹⁹ 中村氏は「一切の疑惑を離れ」[中村 1998a: p. 759] と訳す。

れないもの、永遠なるもの、不滅なるもの、不朽なるもの、清浄なるもの、常に苦難なきなもの、それをあなたが語ってくださることを¹⁰⁰。

Bhīṣma uvāca —

ビーシュマは語った。

3

atra te vartayisye 'ham itihāsaṃ purātanam /
yājñavalkyasya saṃvādaṃ janakasya ca bhārata // MBh 12.298.3

これについて、私はいにしえの古事 (itihāsa) をあなたに明らかにしよう。〔それは〕ヤージュニャヴァルキヤとジャナカとの問答である。バラタ族の者よ。

4

yājñavalkyam ṛṣiśreṣṭham daivarātir mahāyaśāḥ /
papraccha janako rājā praśnaṃ praśnavidāṃ varaḥ // MBh 12.298.4

最上の聖仙であるヤージュニャヴァルキヤに、デーヴァラータ族の誉れ高き諸々の疑問に対する知識 (praśnavid) の最上者¹⁰¹であるジャナカ王は、質問した。

5

katīndriyāṇi viprarṣe kati prakṛtayaḥ smṛtāḥ /
kim avyaktaṃ paraṃ brahma tasmāc ca paratas tu kiṃ // MBh 12.298.5

梵仙よ。インドリヤ (感覚器官) はいくつあるのか。プラクリティはいくつあると言われるのか。未顕現 (avyakta) なる最高のブラフマンとは何か。そして、それを超えて、一体何があるのか。

6

prabhavaṃ cāpyayaṃ caiva kālasaṃkhyāṃ tathaiva ca /
vaktuṃ arhasi viprendra tvadanugrahakāṅkṣiṇaḥ // MBh 12.298.6

¹⁰⁰ これらの語はいろいろな解釈があるが、中村氏は「吉祥であり、常に無畏であり、永遠であり、不壊であり、不滅であり、清浄であり、全く苦勞のないもの」[中村 1998a: p. 759] と訳し、Ganguli は “which is auspiciousness, which is eternal fearlessness, which is Eternal and Indestructible, and Immutable, which is always Pure, and which is ever free from the toil of exertion” [Ganguli 1975a: p. 34] と訳している。

¹⁰¹ “praśnavidāṃ varaḥ” はプーナ版において、“praśnavidāṃ varam” となっており、中村氏も「疑問についての最上の知者である最高仙ヤージュニャヴァルキヤ」[中村 1998a: p. 759] と訳している。すなわち、「諸々の疑問に対する知識の最上者」はジャナカ王では無く、ヤージュニャヴァルキヤ仙に帰されている。

あなたの恩恵を欲する者（たち）に¹⁰²、起源と帰滅を、そしてまさに同様に時間の数え方を、あなたが語ってくださることを。バラモンの主よ。

7

ajñānāt pariṣcchāmi tvaṃ hi jñānamayo nidhiḥ /
tad ahaṃ śrotuṃ icchāmi sarvaṃ etad asamśayam // MBh 12.298.7

〔以上のことを〕知らないなので、私は尋ねる。実に、あなたは知識の大海¹⁰³である。それ故、私は疑問の余地なくこの全てを聞きたい。

Yājñavalkya uvāca —

ヤージュニャヴァルキヤは語った。

8

śrūyatām avanīpāla yad etad anupreçhasi /
yogānāṃ paramaṃ jñānaṃ sāmkyānāṃ ca viśeṣataḥ // MBh 12.298.8

大地の守護者よ。あなたが尋ねたことを聞かれよ。とりわけ、ヨーガとサーンキヤに関する最高の知識を。

9

na tavāviditaṃ kiṃcin māṃ tu jijñāsate bhavān /
pṛṣṭena cāpi vaktavyam eṣa dharmāḥ sanātanaḥ // MBh 12.298.9

あなたには知らないことが何もないのに、しかし、あなたは私に聞きたいと欲する。そしてまた、尋ねられた者は語るべきである。これは永遠なるダルマ（法）である。

10

aṣṭau prakṛtayaḥ proktā vikārāś cāpi ṣoḍaśa /
atha sapta tu vyaktāni prāhur adhyātmacintakāḥ // MBh 12.298.10

プラクリティは 8 つであり、また、変異（vikāra）は 16 であると言われている。さて、内なるアートマンを思慮する者たち（adhyātmacintakāḥ）は、〔それら 8 つのプラクリティ

¹⁰² 中村氏は「あなたの恩恵を願う〔私〕に」[中村 1998a: p. 759] と、Ganguli は “unto me that am solicitous of obtaining thy grace”[Ganguli 1975a: p. 34] と訳し、両者とも単数形の属格と考えているが、複数形の対格でも違和感はないと思われる。

¹⁰³ 中村氏は「知識の大海のような方」[中村 1998a: p. 759] と、Ganguli は “an Ocean of knowledge”[Ganguli 1975a: p. 34] と訳している。「知識の宝庫」とも訳せる。

のうち] 顕現 (vyakta) は7つであると言っている¹⁰⁴。

11

avyaktaṃ ca mahāś caiva tathāhaṃkāra eva ca /
pṛthivī vāyur ākāśam āpo jyotiś ca pañcamam // MBh 12.298.11

[8つのプラクリティとは] 未顕現 (avyakta)、マハット (mahat)、そしてアハンカーラ (ahaṃkāra) であり、さらに、地 (pṛthivī)、風 (vāyu)、虚空 (ākāśa)、水 (āpas)、[粗大元素の] 5番目としての火 (jyotiś) である。

12

etāḥ prakṛtayas tv aṣṭau vikārān api me śṛṇu /
śrotraṃ tvak caiva cakṣuś ca jihvā ghrāṇaṃ ca pañcamam // MBh 12.298.12

さて、これら8つがプラクリティ (物質的根源) である。また、[16の] 変異 (vikāra) も私に聞け。耳、皮膚、目、舌、そして[知覚器官の] 5番目としての鼻 [以上が16の変異のうちの5] である。

13

śabdasparsāu ca rūpaṃ ca raso gandhas tathaiva ca /
vāc ca hastau ca pādaū ca pāyur meḍhraṃ tathaiva ca // MBh 12.298.13

そして、音声、接触、色、味、香り、さらに、発声器官 (口)、両手、両足、肛門、生殖器 [以上が16の変異のうちの10] である。

14

ete viśeṣā rājendra mahābhūteṣu pañcaṣu /
buddhīndriyāṇy athaitāni saviśeṣāṇi maithila // MBh 12.298.14

王の中の王よ。これらは、5粗大元素における区別 (viśesa) である。そして、これらの知覚器官 (buddhīndriyāṇi) は区別を伴うものである。ミティラーの王¹⁰⁵よ。

15

manaḥ ṣoḍaśakaṃ prāhur adhyātmagaticintakāḥ /
tvaṃ caivānye ca vidvāmsas tattvabuddhiviśāradāḥ // MBh 12.298.15

¹⁰⁴ 中村氏は「内我の考察者たち (adhyātmacintakāḥ) は、[次のものを] ハプラクリティと言う。」[中村 1998a: p. 760] と訳している。

¹⁰⁵ ジャナカ王のこと。

内なるアートマンの帰趨を思慮する者たち (adhyātmagāticintakāḥ)、すなわち原理の知識に精通した者たちである、あなたやそのほかの知者たちは、マナスが 16 番目であると言う。

16

avyaktāc ca mahān ātmā samutpadyati pārthiva /
prathamam sargam ity etad āhuḥ prādhānikam budhāḥ // MBh 12.298.16

未顕現 (avyakta) から、マハット・アートマン (mahān ātmā、大なるアートマン) が生じる。王よ。覚者たちは、これを、根本原質に関する第 1 の創造と言う。

17

mahataś cāpy ahaṁkāra utpadyati narādhipa /
dvitīyam sargam ity āhur etad buddhyātmakam smṛtam // MBh 12.298.17

さらに、マハットからアハンカーラが生じる。王よ。〔覚者たちは〕これを第 2 の創造と言ひ、ブッディを本性とするものと言われている。

18

ahaṁkāraś ca saṁbhūtam mano bhūtaguṇātmakam /
tṛtīyaḥ sarga ity eṣa āhaṁkārika ucyate // MBh 12.298.18

また、アハンカーラから、存在物のグナ (性質) を本性とするマナスが生じる。これが、アハンカーラに関する第 3 の創造と言われる。

19

manasas tu samudbhūtā mahābhūtā narādhipa /
caturtham sargam ity etan mānaśam paricakṣate // MBh 12.298.19

そして、マナスから諸々の粗大元素が生まれる。王よ。〔覚者たちは〕これを、マナスに関する第 4 の創造と呼ぶ。

20

śabdaḥ sparśaś ca rūpaḥ ca raso gandhas tathaiva ca /
pañcamam sargam ity āhur bhautikam bhūtacintakāḥ // MBh 12.298.20

音声、接触、色、味、香りが〔5 粗大元素から〕同様に〔生じる〕。存在物を思慮する者たちは、〔これらを〕粗大元素に関する第 5 の創造と言う。

21

śrotraṃ tvak caiva cakṣuś ca jihvā ghrāṇaṃ ca pañcamam /
sargaṃ tu ṣaṣṭhaṃ ity āhur bahucintātmakam smṛtam // MBh 12.298.21

耳、皮膚、目、舌、〔知覚器官の〕5番目としての鼻〔が生じる〕。つまり、〔覚者たちは、これらを〕第6の創造と言ひ、多くの思慮を性質とするもの (*bahucintātmaka*)¹⁰⁶と知られている。

22

adhaḥ śrotrendriyagrāma utpadyati narādhipa /
saptamam sargaṃ ity āhur etad aindriyakam smṛtam // MBh 12.298.22

下方へと、聴覚作用〔などの〕一群が生じる。王よ。〔覚者たちは〕これらを、第7の創造と言ひ、感覚器官を本性とするものと言われている。

23

ūrdhvasrotas tathā tiryag utpadyati narādhipa /
aṣṭamaṃ sargaṃ ity āhur etad ārjavakam budhāḥ // MBh 12.298.23

上方への流れ (*ūrdhvasrotas*)、および水平 (*tiryāñc*) 〔の流れ〕が生じる。王よ。覚者たちは、これらを、直線的なものという第8の創造と言う。

24

tiryaksrotas tv adhaḥsrota utpadyati narādhipa /
navamaṃ sargaṃ ity āhur etad ārjavakam budhāḥ // MBh 12.298.24

しかし、水平の流れ (*tiryaksrotas*) は、下方への流れ (*adhaḥsrotas*) を生じる。王よ。覚者たちは、これらを、直線的なものという第9の創造と言う。

25

etāni nava sargāni tattvāni ca narādhipa /
caturviṃśatir uktāni yathā śrutinidarśanāt // MBh 12.298.25

王よ。これら9の創造と24の原理が、聖典が示している通りに語られた。

26

ata ūrdhvaṃ mahārāja guṇasyaitasya tattvataḥ /

¹⁰⁶ “*bahucintā*” から5つの知覚器官が生じるとも考えられるが、この “*bahucintā*” がいったい何を意味しているのであろうか。中村氏は「多くの省察を性質とするもの」と訳し [中村 1998a: p. 761]、ニーラカンタ註の “*bahucintātmakam = mānasam*” を参照している。すなわち、「心的なもの」ということか。Ganguli は “... is regarded as having for its essence multiplicity of thought” [Ganguli 1975a: p. 35] と訳している。

mahātmabhir anuproktāṃ kālasamkhyāṃ nibodha me // MBh 12.298.26

大王よ。これより次に、このグナの原理より〔生じた（基礎となっている）〕、偉大なる魂を持つ者たちによって説かれた、時間の数え方を私に聞け。

補遺 B

Sāṃkhyatattvakaumudī 抄訳

B.1 Sāṃkhyatattvakaumudī ad. SK 11

(1)

tad anena prabandhena vyaktāvyaktayor vaidharmyam uktam. samprati tayoh
sādharmyam puruṣāc ca vaidharmyam āha —

さて、以上の説明によって、顕現 (vyakta) と未顕現 (avyakta) の異なる性質が説かれた。これより、両者の共通の性質とプルシャ (puruṣa、精神原理) から異なる性質を説く。

Kārikā

triguṇam aviveki viśayaḥ sāmānyam acetanam prasavadharmi /
vyaktaṃ tathā pradhānaṃ tadviparītas tathā ca pumān // SK 11

顕現 (vyakta) は、3種のグナ [から成るもの] であり、[3種のグナと] 別のものではなく、[プルシャが享受する] 対象であり、[多数のプルシャ¹にとって] 共通のものであり、非精神的であり、生産性を持つ。プラダーナ (第1のもの=根本原質) も同様である。純粹精神 (pums = puruṣa) はそれ (根本原質) と反対でもあり同様でもある。

(2)

“triguṇam” iti. trayo guṇāḥ sukhaduḥkhamohā asyeti triguṇam. tad anena sukhādīnām
ātmaguṇatvam parābhimatam apākṛtam.

〈3種のグナ [から成るもの]〉とは。楽・苦・迷妄の3種類の性質 (グナ) を持つものが、この「3種のグナ」(triguṇa) というものである。そして、これによって、「楽などは

¹ 精神原理が個体ごとに存在すること [服部 1979: p. 195].

アートマンのグナ（性質）を持っている」という他の仮説²が、退けられた。

(3)

“aviveki” iti. yathā pradhānaṃ na svato vivicyate, evam mahadādayo ’pi na pradhānād vivicyante, tadātmakatvāt. athavā sambhūyakāritvam atrāvivekaḥ. na hi kiñcid ekaṃ paryāptaṃ svakārye, apitu sambhūya. tatra naikasmāt kasyacit kenacit sambhava iti.

〈別のものではない〉とは。プラダーナ（第1のもの＝根本原質）が自身から分離させられないように、そのように、マハット（＝ブッディ）などもプラダーナ（第1のもの＝根本原質）から分離させられない。それ（プラダーナ）を本性とするからである。あるいは、ここでは、一緒に作用するということが、分けられない（aviveka）ということである。なぜなら、どんなものも単独では、自身の結果に到達することはないが、しかし、一緒に作用して〔結果に到達することができるのである〕。〔すなわち〕そこにおいて、単独のものからは、どのようなものも、どのようなことによっても生じないということである。

(4)

ye tv āhuḥ — ‘vijñānam eva harṣa³viṣādamohaśabdādyākāram,⁴ na punar ito ’nyas taddharmā’ iti — tāt pratyāha — “viṣayaḥ” iti. ‘viṣayo’ grāhyaḥ, vijñānād bahir iti yāvat.

一方、ある人々は「認識（vijñāna、思考、識）は、喜び・落胆・迷妄・音声などの姿があるのみで、さらに、これより他に、それ〔に基づく〕実在（dharma）はない」という⁵。その者たちに対して答える、〈対象である〉と。「対象」（viṣaya）とは〔感覚器官によって〕把握されるべきものである。つまり認識（vijñāna）の外側にあるという意味である。

(5)

ata eva “sāmānyam” sādharmaṇam ghaṭādivat; anekaiḥ puruṣair grhītam ity arthaḥ.

² Jhaによると「ニヤーヤ学派などの説」（“naiyāyikādyabhimatam.” [Jha 2004: p. 57]）である。金倉氏は「勝論派、正理派」とする [金倉 1984: p. 104]。すなわち、ヴァイシェーシカ学派とニヤーヤ学派のことである。

³ Bhaṭṭācāryaには“harya”とあるが [Bhaṭṭācārya 1967: p. 97]、Jhaに基づき [Jha 2004: p. 57]、harṣaに訂正した。

⁴ Jhaのテキストでは“ātmakam”となっている [Jha 2004: p. 97]。

⁵ Jhaは「認識（vijñāna、思考、識）を詳説する仏教徒」（“vijñānavādino bauddhāḥ.” [Jha 2004: p. 57]）と言う。すなわち、「唯識派」 [金倉 1984: p. 105] のことである。

まさにそれ故に、〈共通のものである〉、つまり全てに属するもの（一般的なもの）である。水瓶などの如くである。多くの人間（*puruṣa*）によって把握される⁶、という意味である。

(6)

vijñānākāratve tu asādhāraṇyād vijñānānām vṛttirūpāṇām te 'py asādhāraṇāḥ syuḥ.

しかしながら、〔水瓶などの対象は〕認識が形をとったもの（*vijñāna-ākāra*）とするならば、認識が展開した形態（*vijñānānām vṛttirūpāṇām*）⁷は全てに属さない（一般的なものではない）ことから⁸、それら〔水瓶などの対象〕もまた共通でないものとなるであろう。

(7)

vijñānaṃ yathā pareṇa na gṛhyate parabuddher apratyakṣatvād ity abhiprāyaḥ.⁹ tathā ca nartakībhrūlatābhaṅge ekasmin bahūnām pratisandhānaṃ yuktam. anyathā tan na syād iti bhāvaḥ.

他人のブッディは直接知覚によって〔把握できない〕ということにより（他人のブッディの非直接知覚性により）、認識（*vijñāna*）は、他者によって把握されない、という意味である。そのように、1人の女性ダンサーが美しき眉を曲げるとき¹⁰、多くの人にとって〔その動作が〕同時に確認できる。そうでなければ¹¹、それ（同時に確認できること）はないであろう、という意味である。

(8)

“acetanam” iti. sarva eva pradhāna-buddhyādayo 'cetanāḥ, na tu vaināśikavac caitanyaṃ buddher ity arthaḥ.

〈非精神的である〉とは。まさにあらゆるプラダーナ（第1のもの＝根本原質）やブッディなどは非精神的（*acetana*）であって、仏教徒（*vaināśika*）の如くブッディにとって精神的なもの（*caitanya*）があるということではない、という意味である。

(9)

“prasavadharmi” iti. prasavarūpo dharmo yaḥ so 'syāstīti prasavadharmi. prasava-

⁶ すなわち、様々な人々にとって、水瓶は共通の要素である。

⁷ 金倉氏は「作用を本性とする識」と訳す [金倉 1984: p. 105]。

⁸ 頭の中で認識された水瓶は、他の人には分からないから、共通性を持たないということである。

⁹ クリティカルはこれを省いている。

¹⁰ 金倉氏は、「媚態をもって」一度だけ美しい眉をひそめても（秋波を送っても）」と訳す [金倉 1984: p. 105]。

¹¹ Jha は、「これらを思考の形をとったものというならば」（“*teṣāṃ vijñānākāratve.*” [Jha 2004: p. 57]）と説明する。すなわち、唯識の立場に立てば、ということである。

dharmeti vaktavye matvarthīyaḥ prasavadharmasya nityayogam ākhyātum.
sarūpa¹²virūpaparināmābhyām na kadācid api viyujyata ity arthaḥ.

〈生産性を持つ〉とは。ものを生み出す性質というものがこれ（プラクリティ）にあることを、「生産性をもつ」というのである。“prasavadharma”と言うべきであるが、生産性が常に結合していることを表すために、matup（所有の意味）¹³を付けたのである。どのような時でも、同様の形態や異なる形態に転変することから、離れることはない、という意味である。

(10)

vyaktavṛttam avyakte ’tidiśati — “tathā pradhānam” iti. yathā vyaktaṃ tathā ’vyaktam
ity arthaḥ.

顕現（vyakta）の生起は、未顕現（avyakta）において〔も〕適用される。〔そのため〕〈プラダーナ（第1のもの＝根本原質）も同様である〉（tathā pradhānam）というのである。顕現（vyakta）も未顕現（avyakta）も同様〔の性質〕である¹⁴という意味である。

(11)

tābhyām vaidharmyaṃ puruṣasyāha — “tadviparītaḥ pumān” iti.

プルシャには、両者から異なる性質があることを言って、〈純粹精神（pums = puruṣa）はそれ（根本原質）と反対である〉という。

(12)

syād etat — ahetumattvanityatvādi pradhānasādharmyam asti puruṣasya, evam
anekatvaṃ vyaktasādharmyam, tat katham ucyate “tadviparītaḥ pumān” iti ? ata
āha — “tathā ca” iti.

「それはそうかもしれない。原因を持たないこと、恒常であることなど、プルシャにはプラダーナと共通の性質があり、同様に多数であることは、顕現（vyakta）と共通の性質である。〔それなのに〕なぜ〈純粹精神はそれ（根本原質）と反対である〉と説かれるのか」と問われ、そこで、〈同様でもある〉と答えたのである。

(13)

¹² Jha のテキストでは “svarūpa” となっている [Jha 2004: p. 58].

¹³ “Affix in the sense of matup i.e. in the sense of possession.” [Abhyankar and Shukla 1977: pp. 298–299]

¹⁴ 「vyakta と avyakta の両者にとって、3種のグナの性質が共通するものである。」（“triguṇatvādisādharmyaṃ vyaktāvyaktayor iti yāvat.” [Jha 2004: p. 59]

cakāro 'py arthaḥ;yady apy ahetumattvādikaṃ sādharmaṃ tathā¹⁵ 'py atraiguṇyādi
vaiparītyam asty evety arthaḥ.

“ca”という語は、“api”（でも）の意味である。原因を持たないことなどは〔プラクリ
ティと〕共通の性質であるけれども、また、3種のグナを有さないなどのまさに反対の性
質である、という意味である。

B.2 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 12

(1)

triguṇam ity uktam (dra. 11 kā.), tatra ke te trayo guṇāḥ, kiṃ ca lakṣaṇam ity ata āha

〔SK 11において〕〈3種のグナ〔から成るもの〕である〉と言われた。そこで、その3
種からなるグナとは何か、また、特徴とは何かというのに対し、答える。

Kārikā

prītyaprītiviśādātmakāḥ prakāśapravṛttiniyamārthāḥ /
anyonyābhibhavāśrayajanamithunavṛttayaś ca guṇāḥ // SK 12

〔3種の〕グナは、喜び・嫌悪・落胆を本質とし、照らすこと・活動させること・抑制
することを目的とする。また、相互に、制圧し、依存し、生産し、協力する（相伴う）作
用¹⁶である。

(2)

“guṇāḥ” iti parārthāḥ;

グナとは他のために存在する¹⁷〔ものである〕。

(3)

“sattvaṃ laghu prakāśakam” (kārikā 13) ity atra ca sattvādayaḥ krameṇa nirdeśyante.
tadanāgatāvekṣaṇena tantrayuktyā prītyādīnāṃ yathāsaṃkhyāṃ veditavyam.

¹⁵ Jha のテキストでは“tatra”となっている [Jha 2004: p. 59]。

¹⁶ SS は「相互に起こる」、M と G は「相互に作用する」と、いずれも“vṛtti”の語を3種のグナにおける機
能の一つとみなしている。

¹⁷ 他とはすなわちプルシャのことであり [金倉 1984: p. 108]、グナはプルシャの享受のために作用する。

〈サットヴァは軽快なもの・輝くものである〉(SK 13) という、またそこでも、サットヴァなど〔の性質〕は順に示されるであろう。その後出〔の偈〕を考慮する学術理論¹⁸に従って、喜びなどは順番どおり¹⁹に理解されるべきである。

(4)

etad uktaṃ bhavati — prītiḥ sukham, prītyātmakaḥ sattvagunaḥ; aprītir duḥkham, aprītyātmako rajogunaḥ; viśādo mohah; viśādātmakas tamoguna ity arthaḥ /

このこと（順番通りに理解すること）は〔次のように〕言われているのである。喜びとは楽〔の一種〕であり、喜びを本性とするのがサットヴァというグナである。嫌悪とは苦〔の一種〕であり、嫌悪を本性とするのがラジャスというグナである。落胆とは迷妄〔の一種〕であり、落胆を本性とするのがタマスというグナである、という意味である。

(5)

ye tu manyante “na prītir duḥkhābhāvād atiricyate, evaṃ duḥkham api na prītyabhāvād anyad iti,” tām prati ātmagrahaṇam. netaretarābhāvāḥ sukhādayaḥ, api tu bhāvāḥ, ātmaśabdasya bhāvavacanatvāt. prītir ātmā bhāvo yeṣāṃ te prītyātmānaḥ. evam anyatrāpi vyākhyeyam.

しかしながら、ある人々は「喜びは苦が存在しないことと別ものではなく、同様に、苦もまた喜びが存在しないことと異なるものではない」と考える。その者たちに対して、本性（ātman）〔という語〕を選んだのである。喜びなどは〔反対するものが〕相互に存在しないこと²⁰ではなく、むしろ〔積極的に〕存在する、なぜなら本性（ātman）という言葉とは存在を言うものであるから。喜びが本性（ātman）として存在するところのもの、それが喜びを本性とするもの（prītyātmāna）である。同様に他の場合においても説明されるべきである²¹。

(6)

bhāvarūpatā caiṣāṃ anubhavasiddhā. parasparābhāvātmakatve tu parasparāśrayāpatter ekasyāpy asiddher ubhayāsiddhir iti bhāvaḥ.

そして、これら（喜び、嫌悪、落胆）²²が存在を本質とするということは、経験によって証明される。しかし、〔反対論者のように、喜びと苦が〕相互に存在しないことを本性と

¹⁸ “tantrayukti” は学術理論の定型句のことであり、“anāgatāvekṣaṇa” も “tantrayukti” の一つである。

¹⁹ 喜び・嫌悪・落胆の3種、そして、照らすこと・活動させること・抑制することの3種が、それぞれサットヴァ・ラジャス・タマスに当てはまるということである [金倉 1984: p. 108-109]。

²⁰ 喜びは苦が存在しないことであり、苦は喜びが存在しないこと。

²¹ この箇所では、グナの存在を説明している。

²² “eṣāṃ” について金倉氏は、楽、苦、癡を示していると考えている [金倉 1984: p. 109]。

するという場合には、相互依存〔の過失〕に陥るためにどちらも成立しないから、両者が成立しないことになってしまうという意味である。

(7)

svarūpam eṣām uktvā prayojanam āha — “prkāśapravṛttinīyamārthāḥ” iti. atrāpi yathāsamkhyam eva. rajaḥ pravartakatvāt sarvatra laghu sattvaṃ pravartayet, yadi tamasā guruṇā na niyamyeta. tamoniyatantu kvacid eva pravartayatīti bhavati tamo niyamārtham.

これら〔3種のグナ〕の自性を言ったあと、目的を言う、〈照らすこと・活動させること・抑制することを目的とする〉と。ここにおいてもちょうど順番通りに〔理解されるべきである〕。ラジャスは活動させるものであるから、もし重いタマスによって抑制されなければ、あらゆるところで軽いサットヴァを活動させるだろう。

(8)

prayojanam uktvā kriyām āha — “anyonyābhibhavāśrayajananamithunavṛttayaś ca” iti. vṛtīḥ kriyā, sā ca pratyekam abhisambadhyate.

目的を言ってから作用を述べる、「また、相互に、制圧し、依存し、生産し、協力する（相伴う）作用である」という。作用（vṛtti）は機能（kriyā）であり、そしてそれ（“vṛtti” という語）は、それぞれ（制圧などの諸機能）に結び付けられる。

(9)

“anyonyābhibhavavṛttayah.” eṣām anyatamenārthavaśād udbhūtenānyadabhibhūyate. tathāhi — sattvaṃ rajastamasī abhibhūya śāntām ātmano vṛtīm pratilabhate; evaṃ rajaḥ sattvatamasī abhibhūya ghorām; evaṃ tamaḥ sattvarajasī abhibhūya mūḍhām iti.

〈相互に制圧する作用〉〔とは〕。目的に従って、これら（3種のグナ）のうちのいずれかが増大することによって、他〔のグナ〕が制圧される。例えば、サットヴァはラジャスとタマスを制圧して、平安さという自身の作用を獲得する。同様に、ラジャスはサットヴァとタマスを制圧して、激しさを〔獲得する〕。同じく、タマスはサットヴァとラジャスを制圧して、鈍さを〔獲得する〕ということである。

(10)

“anyonyāśrayavṛttayah.” yady apy ādhārādheyabhāvena nāśrayārtho ghaṭate, tathāpi yad apekṣayā yasya kriyā sa tasyāśrayaḥ. tathāhi — sattvaṃ pravṛttinīyamāv āśritya rajastamasoḥ prakāśenopakaroti, rajaḥ prakāśanīyamāv

āsṛitya pravṛtṭyetaṛayoḥ; tamaḥ prakāśapravṛtṭī āsṛitya niyamenetarayor iti.

〈相互に依存する作用〉〔とは〕。たとえ、保持するものと保持されるべきものの関係として、依存の意味が成立しないとしても、それにもかかわらず、あるもの（A）に依拠することによってあるもの（B）に機能があるならば、それ（B）はそれ（A）に依存している。例えば、サットヴァは活動と抑制に依存して、ラジャスとタマスは照明によって助ける。ラジャスは照明と抑制に依存して、活動によって他の2つを〔助ける〕。タマスは照明と活動に依存して、抑制によって他の2つを〔助ける〕ということである。

(11)

“anyonyajanavṛttayaḥ.” anyatamo ’nyatamaṃ janayati. jananaṃ ca pariṇāmaḥ, sa ca guṇānāṃ sadṛśarūpaḥ. ata eva na hetumattvam, tattvāntarasya hetor asam-bhavāt; nāpy anityatvam, tattvāntare layābhāvāt.

〈相互に生産する作用〉〔とは〕。〔3種のグナの〕いずれかが〔それ以外の〕いずれかを生み出す²³〔ことである〕。そして、生産（janana）とは転変（pariṇāma）であり、またそれ（転変）は〔3種の〕グナと類似したものである。まさにそれ故、他の原理という原因が存在しないから、原因を持つものではない。さらに、他の原理の中に還滅することがないから、無常なものではない（＝無始無終の存在である）。

(12)

“anyonyamithunavṛttayaḥ.” anyonyasahacarāḥ, avinābhāvavṛttaya iti yāvat.

〈相互に協力する（相伴う）作用〉〔とは〕。相互に伴って働くことであり、すなわち、分離させることができない作用（avinābhāvavṛtti、あるものともう一方のものに必要な関係の作用）²⁴という意味である。

(13)

caḥ samuccaye.

“ca” は、接続の意味において〔使用されている〕。

²³ Bhāṭṭācārya は「“anyatamam apekṣya”あるいは“anyatamam āsṛitya janayati”とある者たちによって読まれている」（“anyatamam apekṣya; anyatamam āsṛitya janayati iti kaiścit paṭhyate.” [Bhāṭṭācārya 1967: p. 107]）と説明している。一方、Jha のテキストでは“anyatamo ’nyatamam apekṣya janayati.”となっており [Jha 2004: p. 62]、金倉氏は「何れか〔の徳〕が何れか〔の徳〕に基づいて、生産する〔の意味である〕」と訳す [金倉 1984: p. 111]。

²⁴ Bhāṭṭācārya は「“avinābhāvavarttinah”とある者たちによって読まれている」（“avinābhāvavarttinah iti kaiścit paṭhyate.” [Bhāṭṭācārya 1967: p. 107]）と説明する。金倉氏は“”を「不可分離に〔結合して〕存在している」と訳す [金倉 1984: p. 111]。

(14)

bhavati cātrāgamaḥ — “anyonyamithunāḥ sarve sarve sarvatra gāmināḥ. rajaso mithunaṃ sattvaṃ sattvasya mithunaṃ rajaḥ. tamasaś cāpi mithune te sattvarajasī ubhe. ubhayoḥ sattvarajasor mithunaṃ tama ucyate. naiṣām ādiḥ samprayogo viyogo vopalabhyate.”

そして、これについては、[次のように説いている] 聖典 (āgama) がある。「あらゆるものは相互に協力するものであり、あらゆるものはいたるところに入り込んでいる。サットヴァはラジャスに協力するものであり、ラジャスはサットヴァに協力するものである。そしてまた、タマスについても、サットヴァとラジャスの両者に協力するものである。サットヴァとラジャスの両者に協力するものがタマスであると言われる。これらには、始めも、結合も、分離も認められない。」

B.3 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 13

(1)

“prakāśapravṛttiniyamārthāḥ” ity uktam, tatra ke ye itthambhūtāḥ kutaś cety ata āha

[SK 12 において] 〈照らすこと・活動させること・抑制することを目的とする〉と言われたが、その中で、そのような〔性質を備えた〕ものは何であるか、また、何のために〔そのようである〕のか、という〔問い〕に対して答える。

Kārikā

sattvaṃ laghu prakāśakam iṣṭam upaṣṭambhakaṃ calaṃ ca rajaḥ /
guru varaṇakam eva tamaḥ pradīpavac cārthato vṛttiḥ // SK 13

サットヴァは軽快なもの・輝くものであり、そして、ラジャスは刺激するもの・活動するもの、まさにタマスは鈍重なもの・覆い隠すものであると認められている。〔これらは、灯芯・油・火の3種から成る〕灯火のごとく〔一つの〕目的のために作用する。

(2)

“sattvam” iti. sattvam eva laghu prakāśakam iṣṭam sāṃkhyācāryaiḥ; tatra kāryodgamane hetur dharmo lāghavaṃ gauravapratidvandvi; yato ’gner ūrdhvajvalanaṃ bhavati, tad eva lāghavam. kasyacit tiryaggamane hetur bhavati, yathā vāyoḥ.

〈サットヴァ〉とは。まさにサットヴァは、〈軽快なもの〉であり、〈輝くもの〉であると、サーンキヤの論師たちによって、〈認められている〉。その中で、軽さ (*lāghava*) は、結果を生じさせる原因〔となっている〕性質であり、〔それは〕重さ (*gaurava*) と反対のものである。それ (軽さ) によって、火は上方への燃焼が生じる。それこそが軽さである。〔また、その同じ軽さは〕何らかの水平運動における原因となっている。例えば風のように。

(3)

evaṃ karaṇānāṃ vṛttipaṭutvahetur lāghavam; gurutve hi mandāni syur iti sattvasya prakāśakatvam uktam.

このように、軽さは、諸々の器官にとって、作用の鋭敏性の原因である。なぜなら、もし重ければ〔器官の作用は〕鈍くなるであろうから²⁵。以上、サットヴァの照明性が説かれた。

(4)

sattvatamasī svayam akriyatayā svasvakāryapravṛttim pratyavasīdantī rajasopaṣṭabhyete, avasādāt pracyāvya svakārye utsāhaṃ prayatnaṃ kāryete. tad idam uktam — “upaṣṭambhakaṃ rajaḥ” iti.

サットヴァとタマスは、自らは非活動的であるので、それぞれ自身の結果を〔作り出す〕活動に対して無干渉であるが、ラジャスによって刺激され、無気力から解放され、自らの結果 (為すべきこと) に力強く精進する。そのことが説かれて、〈ラジャスは刺激するものである〉という。

(5)

kasmād ity ata uktam — “calam” iti. tad anena rajasah pravṛṭtyarthatvaṃ darśitam.

〔ラジャスが刺激するものであるのは〕何故かという〔問い〕に対して答える、〈活動するものである〉と。そして、これによって、ラジャスは活動を目的とするということが、示された。

(6)

rajas tu calatayā paritas traiguṇyaṃ cālayat, guruṇā vṛṇvatā ca tamasā tatra tatra pravṛttipratibandhakena kvacid eva pravartyate — iti tatas tato vyāvartya tamo niyāmakam uktam — “guru varaṇakam eva tamaḥ” iti.

²⁵ もし重さが原因であれば、鋭敏に作用することができないだけでなく、活動することすらできなくなってしまう。そのため軽さは活動の原因なのである。

しかし、ラジャスは、動くものであるから、いたるところで3種のグナからからなるものを動かしつつも、重さと覆う〔性質を持つ〕タマスによってあちらこちらで活動が妨げられることにより、あるところでのみ活動させられるという。それ故、それ（ラジャスの活動）から切り離して、タマスが抑制するものであると説いたのである、〈まさにタマスは鈍重なもの・覆い隠すものである〉と。

(7)

evakāraḥ pratyekaṃ bhinnakramaḥ sambadhyate — sattvam eva, raja eva, tama eveti.

“eva”という語は、〔語〕順を越えて、〔3種のグナ〕それぞれに結びつけられる。すなわち、まさにサットヴァは、まさにラジャスは、まさにタマスは、ということである。

(8)

nanu ete parasparavirodhasīlā guṇāḥ sundopasundavat parasparaṃ dhvaṃsanta ity eva yuktam, prāḡ eva tv eteṣāṃ ekakriyākartṛtāyā ity ata āha — “pradīpavac cārthato vṛttih” iti.

「それでは、これら互いに対立する傾向にある諸々のグナは、スنداとウパスンダ²⁶のごとく、互いに滅し合う²⁷というのが正しいのではないか。まして、これら（3種のグナ）が〔まとまって〕1つの作用をなすものとして〔どうして働こうか〕。』という〔問いに〕対して、〔次のごとく〕答える。〈そして、灯火のごとく〔一つの〕目的のために作用する〉という。

(9)

dr̥ṣṭam etat — yathā vartitaile²⁸ analavirodhini; atha ca milite saḥānalena rūpaprakāśalakṣaṇaṃ kāryaṃ²⁹ kurutaḥ, yathā ca vātapittaśleṣmāṇaḥ parasparavirodhinaḥ śarīradhāraṇalakṣaṇa-kārya-kāriṇaḥ evaṃ sattvarajastamāṃsi mithoviruddhāny apy anuvartsyanti ca svakāryaṃ kariṣyanti ca.

²⁶ スンダとウパスンダは、アスラの兄弟であり、MBh 第1巻 200–204章に次のような神話がある。2人の兄弟は、Vindhya山で、三界を征服するために、苦行を行った。神々は彼らの苦行を止めようと企てたが失敗し、遂に、ブラフマーが彼らの前に現れた。彼らはブラフマーから、お互いを除く誰によっても殺されないという恩恵を獲得した。恩恵によって思い上がった兄弟は、三界を支配したが、彼らを殺せる者は誰もいなかった。そこで神々は天女 Tilottamā を彼らに遣わした。両者は、Tilottamā に恋し、彼女を妻とすることを求め、そのため、彼らは仲違いした。そして、2人は争い、互いを殺した。[Mani 1975: p. 765]

²⁷ “dhvaṃsantaḥ” は語根 dhvaṃs から作られた現在分詞である。第一義的な意味としては「衰える」であるが、この文脈では使役的な意味で訳した方が適切と思われる。この語について、金倉氏は「互いに全滅する」[金倉 1984: p. 115]、Jha は “would counteract” [Jha 2004: p. 66] と訳す。

²⁸ 煩瑣であるため “vartitaile” を訂正した。

²⁹ Bhaṭṭācārya のテキストでは “kārya” とあったが [Bhaṭṭācārya 1967: p. 112]、Srinivasan に基づき [Srinivasan 1967: p. 112]、 “kāryaṃ” に訂正した。

これ（以下のこと）はよく見られることである。例えば、灯芯と油に対し、火は対立するものである。だがしかし、火と共に〔それらが〕結合すれば、色を照らす性質を持つ結果を作る。また、例えば、ヴァータ・ピッタ・シュレーシュマー（＝カパ）³⁰は、互いに対立するものであるが、身体を維持する性質を持つ結果をもたらすものである。このように、サットヴァ・ラジャス・タマスは、互いに対立しているものであるが、共に作用し、そして、自己の結果をもたらすのである。

(10)

“arthataḥ” iti puruṣārthata iti yāvat; yathā vakṣyati — “puruṣārtha eva hetur na kenacit kāryate karaṇam” iti. (kārikā 31).

〈目的のために〉とは、プルシャの目的のために、という意味である。次のごとく説かれる、「プルシャの目的こそが原因である。〔他の〕何ものによっても器官は働かされない」（SK 31）という。

(11)

atra ca sukhaduḥkhamohāḥ parasparavirodhinaḥ svasvānurūpāṇi sukhaduḥkhamohātmakāny eva nimittāni kalpayanti. teṣāṃ ca parasparam abhibhāvyaḥ abhibhāvakabhāvān nānātvam.

またここで、互いに対立するものである楽・苦・迷妄は、まさにそれぞれに相応しい楽・苦・迷妄を本質とする原因が確定する。そして、それら（楽・苦・迷妄）は、互いに、支配されるべきものと支配するものとしての状態があるから、多様なものとなる。

(12)

tad yathā ekaiva strī rūpayauvanakulaśīlasampannā svāminam sukhākaroti, tat kasya hetoḥ? svāminam prati tasyāḥ sukhārūpasamudbhavāt. saiva strī sapatnīr duḥkhākaroti, tat kasya hetoḥ? tāḥ prati tasyā duḥkharūpasamudbhavāt. evaṃ puruṣāntaram tām avindamānam saiva mohayati, tat kasya hetoḥ? tat prati tasyā moharūpasamudbhavāt.

そして、例えば、容姿・若さ・家柄・品性が揃った一人の女性は夫に楽しませる。それは何の原因からであろうか。夫に対して、彼女が楽の形態を生じるからである。まさにその〔同じ〕女性が、（夫を同じくする）別の妻たちに苦しみを与える。それは何の原因か

³⁰ アーユルヴェーダにおける3つの構成要素（トリ・ドーシャ）である。ヴァータは、風、気の性質を持ち、全身の機能を調節する働きであり、ピッタは、火、熱の性質を持ち、消化酵素、ホルモンなどの体内の物質代謝に関わる酵素の働きである。そして、シュレーシュマーすなわちカパは、水、粘着の性質を持ち、身体の組織液、分泌液など、水分代謝を行う機能である。[橋本他 2005: p. 303]

らであろうか。彼女たち（夫を同じくする別の妻たち）に対して、彼女（一人の女性）が苦の形態を生じるからである。同様に、彼女を得ることができない他の男を、彼女こそが惑わす。それは何の原因からであろうか。彼（別の男）に対して、彼女が迷妄の形態を生じるからである。

(13)

anayā ca striyā sarve bhāvā vyākhyātāḥ.

この女性〔の例〕によって、全ての状態が説明された。

(14)

tatra yat sukhahetuḥ tat sukhātmakam sattvam, yad duḥkhaetus tad duḥkhātmakam
rajaḥ, yan mohahetus tan mohātmakam tamaḥ.

そこにおいて、楽の原因とは楽を本性とするサットヴァである。苦の原因とは苦を本性とするラジャスである。迷妄の原因とは迷妄を本性とするタマスである。

(15)

sukhprakāśalāghavānām tv ekasmin yugapad udbhūtāv avirodhaḥ saha darśanāt.

しかし、楽・照明・軽さが、同一のものの中に、同時に現れても、対立するものではない。〔実際に〕共に見ることができるから。

(16)

tasmāt sukhaduḥkhamohair iva virodhibhir avirodhibhir ekaikaḡuṇavṛttibhiḥ
sukhprakāśalāghavair na nimittabhedā unnīyante; evaṃ duḥkhopaṣṭambhakatva-
pravartakatvaiḥ; evaṃ mohagurutvāvaraṇaiḥ — iti siddhaṃ traigunyam iti.

それ故、対立する楽・苦・迷妄によってのように、対立することのないそれぞれのグナの働きである楽・照明・軽さをもって、〔それぞれ〕別の原因を取り上げる〔必要は〕ない。同様に、苦・刺激性・活動性によっても、また同じく、迷妄・重性・隠蔽によっても、〔取り上げる必要はない〕。以上、3種のグナからなるものが証明された。

B.4 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 14

(1)

syād etat — anubhūyamāneṣu pṛthivyādiṣv anubhavasiddhā bhavantv aviveki-
tvādayaḥ.

「それはそうかもしれない。〈[顕現 (vyakta) は 3 種のグナと] 別ものではない〉 (SK 11) などということは、経験されている地 [の粗大元素] などにおいては、直接知によって確立する (証明される) であろう。」

(2)

ye punaḥ³¹ sattvādayo nānubhavapatham adhirohanti, teṣāṃ kutastyam avivekitvaṃ viśayatvaṃ acetanatvaṃ prasavadharmitvaṃ ca? ity ata āha —

「しかし、サットヴァなどは直接知の領域に入らないが、それらにとって、〈[3 種のグナと] 別ものではない〉ということや、〈対象である〉ということや、〈非精神的である〉ということや、〈生産性を持つ〉ということが、どうやって起こるのか」という [問い] に対して [次のごとく] 言う。

Kārikā

avivekyādeḥ siddhis traiguṇyāt tadviparyayābhāvāt /
kāraṇaguṇātmakatvāt kāryasyāvyaktam api siddham // SK 14

「[顕現 (vyakta) は 3 種のグナと] 別ものではない」³²などは、(1) 3 種のグナから成ることから、(2) それと反対のものには [3 種のグナが] 存在しないことから、確立する。結果 (= 顕現) は原因であるグナを本質としているということから、未顕現 (avyakta) [の存在] もまた、確立する。

(3)

“avivekyādeḥ” iti. avivekitvaṃ aviveki — yathā ‘dvyekayor dvivacanaikavacane’ (aṣṭā. 1-4-22) ity atra dvitvaikatvayor iti; anyathā dvyekṣu iti syāt.

〈別ものではないなど〉とは。〈別ものではない〉とは別ものではない性質 (不相離性) である。例えば、「2 と 1 は [それぞれ] 両数と単数において [用いられる]」 (*Aṣṭādhyāyī* 1.4.22) という。ここでは、[“dvi” は] “dvitva” (両数性) として、[“eka” は] “ekatva” (単数性) として [考えられているのである]。そうでなければ、“dvyekṣu” として [表記される] であろう³³。

³¹ Bhaṭṭācārya の原文では “tunaḥ” とあるが [Bhaṭṭācārya 1967: p. 118]、Jha に基づき [Jha 2004: p. 68]、 “punaḥ” に訂正した。

³² SK 11. B.1 を参照。

³³ 金倉氏は [“dvi” によって] “dvitva” (両数、二数性) を、[“eka” によって] “ekatva” (単数、一数性) を [あらわすが如くである] という。もしそうでなければ、[2 + 1 = 3 で、複数となるべきが故に、パーニニ文法に於て、dvy-ekayor と両数の語尾を用いないで] dvy-ekṣu と [複数の語尾を用いるべきはずで] あらうから」と訳す [金倉 1984: p. 119]。

(4)

kutaḥ punar avivekitvādeḥ siddhir ity ata āha — “traiguṇyāt” iti. yadyat sukhaduḥkhamohātmakaṃ tattad avivekitvādiyogi yathedam anubhūyamānaṃ vyaktam — iti sphuṭatvād anvayo noktaḥ.

さらに、「どうして〈別ものではない〉などということが証明されるのか」という〔問い〕に対して言う。〈3種のグナから成ることから〉と。あらゆるものは、楽・苦・迷妄を本質としているなら、それらは、〈別ものではない〉などということに結びつくものである。例えば、〔実際に〕経験されているこの顕現 (vyakta) のように。以上は明らかであるから、肯定形式の論証法 (anvaya) は説かれない。

(5)

vyatirekam āha — “tad viparyaye ’bhāvāt” iti. avivekyādiviparyaye puruṣe traiguṇyābhāvāt.

〔次に〕否定形式の論証法 (vyatireka) を言う。〈それと反対のものには存在しないことから〉と。〈別ものではない〉などと反対の〔性質を持つ〕ものであプルシャにおいては、3種のグナから成るものがないからである。

(6)

athavā vyaktāvyakte pakṣīkṛtyā’nvayābhāvenāvīta eva hetus traiguṇyād iti vaktavyaḥ.

あるいはまた、顕現と未顕現を、〔両者共に〕主とすると、肯定形式の論証法 (anvaya) は存在しないことになるので、間接否定形式 (avīta) のみが原因となり、〈3種のグナから成ることから〉と説明されなければならない。

(7)

syād etat — avyaktasiddhau satyāṃ tasyāvivekitvādayo dharmāḥ sidhyanti. avyaktam eva tv adyapī na sidhyati, tat katham avivekitvādisiddhir ity ata āha — “kāraṇaguṇātmakatvāt” iti.

「それはそうかもしれない。未顕現が成立しているならば、それとは〈別ものではない〉などの性質は確立する。しかしまだ、未顕現は確立していない。それでは、どうして〈別ものではないなどということが確立している〉〔と言える〕のか」という〔問い〕に対して答える。〈原因であるグナを本質としているということから〉〔成立する〕と。

(8)

ayam abhisandhiḥ — kāryaṃ hi kāraṇaguṇātmakaṃ dr̥ṣṭam, yathā tantvādiguṇātmakaṃ paṭādi.

これ（以下に述べること）が意図するところである。なぜなら、結果は、原因であるグナを本質とすることが認められているからである。例えば、糸などのグナを本質とするものが布などであるように。

(9)

tathā mahadādīlakṣaṇenāpi kāryeṇa sukhaduḥkhamoharūpeṇa svakāraṇagata-sukhaduḥkhamohātmanā bhavitavyam. tathā ca tatkāraṇaṃ sukhaduḥkhamohātmakaṃ pradhānam avyaktaṃ siddhaṃ bhavati.

そのように、マハットなどの表徴の結果である楽・苦・迷妄からなるものは、自らの原因に遍在している楽・苦・迷妄を本質とするものでなければならない。そしてそのように、その原因であり、楽・苦・迷妄を本質とするものであり、プラダーナである未顕現が確立する。

B.5 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 15–16

(1)

syād etat — ‘vyaktād vyaktam utpadyate’ iti kaṇabhakṣākṣacaraṇatanayāḥ.

「それはそうかもしれない。『顕現は顕現から生じる』とカナバクシャ (kaṇabhakṣa)³⁴とアクシャチャラナ (akṣacaraṇa)³⁵の一門に属する者たちは〔主張する〕。』

(2)

paramāṇavo hi vyaktāḥ, tair dvyaṇukādikrameṇa pṛthivyādīlakṣaṇaṃ kāryaṃ vyaktam ārabhyate.

「なぜなら、〔彼らの主張によれば〕原子 (paramāṇu、極微なもの) は顕現であり、それら (原子) によって、2つの微細なもの (dvyaṇuka、二原子体) などが順次に、〔より粗大なものへ〕地などの表徴である結果という顕現が作られるからである³⁶。』

(3)

pṛthivyādiṣu ca kāraṇaḥ prakrameṇa rūpādyutpattih.

³⁴ ヴァイシェーシカ学派の開祖カナダの別名。

³⁵ ニヤーヤ学派の開祖ガウタマの別名。

³⁶ ヴァイシェーシカ学派において、地・水・火・風の四元素は、原子 (paramāṇu) の状態にある「原因としての実体」(kāraṇa-dravya) と多数の実体が結合して粗大な形をとっている「結果としての実体」(kārya-dravya) とに区別される。原子は恒常性をもち、香り、味、色、接触の属性を有し、なおかつ、その属性は不変である。2個の原子が集まって二原子体 (dvyaṇuka) を作り、さらにそれが3個ずつ集まって三原子体 (tryaṇuka) を創る。この三原子体が、知覚することができる最小のものである。[服部 1998: pp. 275–277]

「そして、地などにおいて、原因〔に内属する〕属性 (*guṇa*) に従って、色などが生じる³⁷。」

(4)

tasmāt vyaktād vyaktasya tadguṇasya cotpatteḥ: kṛtam adṛṣtacareṇāvyaktena ity ata
āha —

「それ故、顕現から顕現とそのグナが生じるから、知覚できない働きである未顕現 (*avyakta*)³⁸は必要はない」という〔反論〕に対して、〔次のように〕答える。

Kārikā

bhedānām parimāṇāt samanvayāt śaktiḥ pravṛtteś ca /
kāraṇakāryavibhāgād avibhāgād vaiśvarūpyasya // SK 15
kāraṇam asty avyaktam pravartate triguṇataḥ samudayāc ca /
pariṇāmataḥ salilavat pratipratiguṇāśrayaviśeṣāt // SK 16

諸々の個物 (*bheda*、区別されたもの) とは、(1) 制限されているから、(2) 共通性を持つから、そして、(3) 力により活動するから、(4) 原因と結果の区別があるから、〔一方〕(5) すべての形を持つもの (*vaiśvarūpya*、万物) とは区別がないから、原因である未顕現 (*avyakta*) は存在する。〔そしてそれは〕3種のグナにより、また、〔3種のグナの〕集合により、水の如くに転変し、それぞれに対応したグナ (属性) に依拠する差別に従って、開展する。

(5)

“*bhedānām*” iti. *bhedānām viśeṣānām mahadādīnām bhūtāntānām kāryānām*
kāraṇam mūlakāraṇam asty avyaktam. kutaḥ? “*kāraṇakāryavibhāgād avibhāgād*
vaiśvarūpyasya”. *kāraṇe sat kāryam iti sthitam.*

〈諸々の個物〉とは。諸々の個物すなわち特殊なもの (= 個別化されたもの) であるマハットから始まり〔粗大〕元素に終わる結果には、原因すなわち根本原因である未顕現 (*avyakta*) が存在する。何故か。〈原因と結果の区別があるから、〔一方〕多様なもの (*vaiśvarūpya*、万物) とは区別がないから〉である。〔この区別について〕原因の中に結果が存在しているということは〔すでに第9偈において〕確立している。

³⁷ 「複合体としての地は香・味・色・可触性を有し、水は香・味・色・可触性・流動性・粘着性を有する。火は色・可触性を、風は可触性のみを有する」とされる [早島他 1982: 124]。

³⁸ 金倉氏は、「いままでに認められていない (*adrṣta-cara*) 未顕現」と訳す [金倉 1984: p. 122]。Jha は “an Unmanifest, an imperceptible Entity” と訳す [Jha 2004: p. 71]

(6)

tathā ca yathā kūrmaśārīre santy evāṅgāni niḥsaranti vibhajyante — ‘idaṃ kūrmaśārīram, etāny etasyāṅgāni’ iti; evaṃ niviśamānāni tasminn avyaktībhavanti; evaṃ kāraṇān mṛtṭpiṇḍād dhemaṇḍād vā kāryāṇi ghaṭamukuṭādīni santy evāvīrbhavanti vibhajyante.

さらに、例えば、亀の体の中にすでに存在している四肢が外に出る、すなわち〔原因と結果が〕区別される。「これは亀の体である、これらはこれ（亀）にとっての四肢である」ということである。同様に、その（体の）中に〔四肢が〕入りつつあれば、未顕現のものとなる。同じく、原因である土塊から、あるいは金塊から、〔その中に〕結果としてすでに存在している水瓶や王冠などがまさに外部に現れる、すなわち〔原因と結果が〕区別される。

(7)

santy eva pṛthivyādīni kāraṇāt tanmātrād āvirbhanti vibhajyante, santy eva ca tanmātrāṇy ahaṅkārat kāraṇāt, sann evāhaṅkāraḥ kāraṇān mahataḥ, sann eva ca mahān paramāvyaktād iti.

すでに〔その中に〕存在している地〔の粗大元素〕などは、原因である微細要素から現れる、すなわち区別される。そして、すでに〔その中に〕存在している微細要素は、原因であるアハンカーラから〔現れ〕、すでに〔その中に〕存在しているアハンカーラは、原因であるマハットから〔現れ〕、そして、すでに〔その中に〕存在しているマハットは、至高の未顕現から〔現れる〕という。

(8)

so ’yaṃ kāraṇāt paramāvyaktāt sāksāt pāraparyeṇānvitasya viśvasya vibhāgaḥ.

まさにこれが、直接に、〔あるいは〕順次に相続して〔現れる〕すべての付随したもの（＝結果）にとっての、至高の未顕現である原因からの区別である。

(9)

pratisarge tu mṛtṭpiṇḍaṃ suvarṇaṇḍaṃ vā ghaṭamukuṭādayo viśanto ’vyaktībhavanti. tat kāraṇarūpam evānabhivyaktaṃ kāryam apekṣyāvvyaktaṃ bhavati.

しかし、〔世界の〕還滅のときに、水瓶や王冠などは土塊や金塊に入っていく、未顕現のものとなる。それは、原因としてのみであり、未だ現れていないもの、すなわち結果に関連して、未顕現となる。

(10)

evam pṛthivyādayas tanmātrāṇi viśantaḥ svāpekṣayā tanmātrāṇy avyaktayanti;
 evam tanmātrāṇy ahaṅkāraṃ viśanty ahaṅkāraṃ avyaktayanti; evam ahaṅkāro
 mahāntam āviśan mahāntam avyaktayati. mahān prakṛtiṃ kāraṇaṃ viśan
 prakṛtiṃ avyaktayati.

同様に、地〔の粗大元素〕などは微細要素に入っていく、自らに関して、微細要素を未顕現の状態のごとくにしている。同様に、諸々の微細要素はアハンカーラに入っていく、アハンカーラを未顕現の状態のごとくにしている。同様に、アハンカーラはマハットに入っていく、マハットを未顕現の状態のごとくにしている。マハットが原因であるプラクリティに入っていく、プラクリティを未顕現の状態のごとくにしている。

(11)

prakṛtes tu na kvacin niveśa iti sā sarvakāryāṇām avyaktam eva.

しかし、プラクリティはどこにも入ることはないという。それ（プラクリティ）はまさに全ての結果にとっての未顕現である。

(12)

so 'yam avibhāgaḥ prakṛtau vaiśvarūpyasya nānārūpyasya kāryasya; svārthikaḥ ṣyañ.
 tasmāt kāraṇe kāryasya sata eva vibhāgāvibhāgābhyām avyaktaṃ kāraṇam astīti.

それこそが、プラクリティにおける、すべての形を持つもの、すなわち多様なものである結果との無区別である。〔“vaiśvarūpya”の接尾辞 ya は〕本来の意味を保持した付加字としての“ya”である³⁹。それ故、すでに原因の中に存在している結果として区別がある〔という理由〕と区別がない〔という理由の〕2つ〔の理由〕によって、未顕現である原因が存在するというのである。

(13)

itaś cāvyaktam astīty ata āha — “śaktiḥ pravṛteś ca” iti. kāraṇaśaktiḥ kāryaṃ pravartata iti siddham. aśaktāt kāraṇāt kāryasyānutpatteḥ.

そして、これ（以下に説かれること）の理由によって、未顕現が存在するということを言う。〈そして、力により活動するから〉と。原因の力（kāraṇa-śakti）により、結果が開展するということは確立している。力のない原因からは、結果は生じないからである。

³⁹ 接尾辞“ya”には3種類の用法がある。(1)「性質」という意味として、(2)「性質」特に「専門的職業」という意味として、(3)元の語と同じ意味として、用いられる [Abhyankar and Shukla 1977: p. 402]。ここでは3番目の用法である。すなわち“vaiśvarūpya”は“vaiśvarūpa”と意味的に異ならないということである。Aṣṭādhyāyī 5.1.123–124 も参照。

(14)

śaktiś ca kāraṇatā na kāryasyāvyaktatvād anyā. na hi satkāryapakṣe kāryasyāvyaktatāyā anyasyāṃ śaktau pramāṇam asti.

そして、原因に遍在する力は、結果が未顕現ということと異ならない。なぜなら、因中有果論においては、結果が未顕現であることより他に、力についての認識手段はないからである。

(15)

ayam eva hi sikatābhyas tilānāṃ tailopādānāṃ bhedo yad eteṣv eva tailam asty anāgatāvasthaṃ na sikatāsv iti.

なぜなら、まさにこれら（ゴマ）において、油は未来の状態であるが、砂においては〔未来の状態としての油は〕ないので、これこそが、砂と、油の原料であるゴマとの区別である、という。

(16)

syād etat — śaktiḥ pravṛtṭiḥ, kāraṇakāryavibhāgāvibhāgau ca mahata eva paramāvyaktatvaṃ sādhaiṣyata iti kṛtaṃ tataḥ pareṇāvyaktenety ata āha — “parimāṇāt” iti. parimitatvāt, avyāpitvād iti yāvat.

「それはそうかもしれない。〈力により活動する〉ということ、そして〈原因と結果の区別がある〉ということは、マハットこそが至高の未顕現であることを確定させる〔だけ〕だろう。このように、それ（マハット）よりも高次である未顕現は〔考える〕必要ない」という〔反論〕に対して〔次のごとく〕言う。〈制限されているから〉と。〔制限されているから〕とはすなわち「限定されているということから」、「遍充していないから」、という意味である。

(17)

vivādādhyāsītā mahadādibhedā avyaktakāraṇavantaḥ parimitatvāt, ghaṭādivat. ghaṭādayo hi parimitā mṛdādyavyaktakāraṇakā dr̥ṣṭāḥ.

〔このことについて、三段論旨を用いて説明する。〕

(主張) 論争の主題であるマハットなどの区別されたもの（諸々の原理）は、未顕現を原因として持つものである。

(理由) 制限されているから。

(比喩) 水瓶などのごとくである。

なぜなら、水瓶などの制限されたものは、粘土などの未顕現を原因とするものであるという事は、認められているからである。

(18)

uktam etad — kāryasyāvyaktāvasthā kāraṇam eveti (dra. 9 vākyam), yan mahataḥ kāraṇam tat paramāvyaktam, tataḥ paratarāvyaktakalpanāyām pramāṇābhāvāt.

これ（次のこと）は〔すでに〕言われた。結果にとって、未顕現の状態は、まさに原因であるという（SK 9）、マハットの原因は至高の未顕現であり、それ（未顕現）よりもさらに高次の未顕現を確定することについて、〔如何なる〕認識手段も存在しないからである。

(19)

itaś ca vivādādhyāsītā bhedā avyaktakāraṇavantaḥ — “samanvayāt”; bhinnānām samānarūpatā samanvayaḥ. sukhaduḥkhamohasamanvitā hi buddhyādayo ’dhyavasāyādilakṣaṇāḥ pratīyante.

また、これ（以下に説かれること）の理由によって、論争の主題である〔マハットなどの〕区別されたもの（諸々の原理）が未顕現を原因として持つものであるということを使う。〈共通性を持つから〉と。共通性とは、個々のものにとって、同じ本質がある〔という意味である〕。なぜなら、決知などを特徴とするブッディなど〔諸原理〕は、楽・苦・迷妄を備えていると、認められているからである。

(20)

yāni ca yadrūpasamanugatāni tāni tatsvabhāvāvyaktakāraṇakāni yathā mṛddhemapiṇḍasamanugatā ghaṭamukuṭādayo mṛddhemapiṇḍāvyaktakāraṇakā iti kāraṇam asty avyaktaṃ bhedānām iti siddham.

そして、ある本質（形態）に遍満されているものは、その自性である未顕現を原因とするものである。例えば、土塊と金塊に遍満されている水瓶と王冠などは、土塊と金塊という未顕現を原因とするものである。そのように、未顕現は、諸々の区別されたもの（諸々の原理）にとっての原因であるということが確立した。

(21)

avyaktaṃ sādhayitvā asya pravṛttiprakāram āha — “pravartate triguṇataḥ” iti. prati-sargāvasthāyām sattvaṃ rajas tamaś ca sadṛśapariṇāmāni bhavanti.

未顕現を確定してから、これ（未顕現）の展開（pravṛtti）の様式を言う。〈3種のグナにより展開する〉と。還滅の状態において、サットヴァ、ラジャス、タマスは、〔それぞれ〕同性質の展開〔をするもの〕となる。

(22)

pariṇāmasvabhāvā hi guṇā nāpariṇamayya kṣaṇam apy avatiṣṭhante.

なぜなら、開展を自性としているグナは、一刹那も、転変せずに、留まることはないからである。

(23)

tasmāt sattvaṃ sattvarūpatayā, rajo rajorūpatayā, tamas tamorūpatayā prati-sargāvasthāyām api pravartate. tad idam uktam — “triguṇataḥ” iti.

それ故、サットヴァはサットヴァの本質のまま、ラジャスはラジャスの本質のまま、タマスはタマスの本質のまま、還滅においても、開展する⁴⁰。そこで、これを〔次のように〕、〈3種のグナにより〉と言う。

(24)

pravṛtṭyantaram āha — “samudayāc ca” iti. sametya udayaḥ samudayaḥ samavāyaḥ. sa ca guṇānām na guṇapradhānabhāvam antareṇa sambhavati, na ca guṇapradhānabhāvo vaiṣamyam vinā; na ca vaiṣamyam upamardiyopamardakabhāvād ṛte, iti mahadādibhāvena pravṛttir dvitīyā.

他の展開⁴¹を言う。〈また、〔3種のグナの〕集合により〉と。集合とは、一緒になって生じることであり、集まり (samavāya) である。そして、それ (グナの集合) は、〔3種のグナに優劣の関係がなければ、起こらない。また、優劣の関係は、不均衡なしには〔起こらない〕。さらに、不均衡は、圧伏されるべきものと圧伏するものとの関係なしに〔起こらない〕。以上が、マハットなどの状態として2番目の開展である⁴²。

(26)

syād etat — katham ekarūpāṇaṃ guṇānām anekarūpā pravṛttir ity ata āha — “pariṇāmataḥ salilavat” iti. yathā hi vāridavimuktam udakam ekarasam api tattad-bhūvikārān āsādyā nārikela-tāla-tālī-bilva-cirabilva-tindukāmalakaprācīnāmalakakapittha-phalarasatayā pariṇāman madhurāmlalavaṇatiktakaṣāyakaṭutayā vikalpate, evam ekaikaguṇasamudbhavāt pradhānaguṇam āśritya apradhānaguṇāḥ pariṇāmabhedān pravarttanti.

⁴⁰ (21) の同性質というように、そのままの状態、足踏みのように、活動する。

⁴¹ 金倉氏によると、他の展開とは、宇宙が出現するときのプラダーナの活動様式である [金倉 1984: p. 127]。

⁴² すなわち、マハット以下の開展である。

「それはそうかもしれない。どうして、単一の形態のグナに対して、多数の形態が展開するのか」という〔問い〕に対して言う。〈水の如くに転変するから〉と。なぜなら、例えば、雨雲から離れた水は一味であるが、それぞれの大地の変異 (vikāra) に到達して、ナーリケーラ (nārikela)⁴³、ターラ (tāla)⁴⁴、ターリー (tālī)、ビルヴァ (bilva)⁴⁵、チラビルヴァ (cirabilva)、ティンドウカ (tinduka)⁴⁶、アーマラカ (āmalaka)⁴⁷、プラーチナーマラカ (prācīnāmalaka)、カピッタ樹 (kapittha)⁴⁸の果汁というものとして転変し、甘い (madhura)、酸っぱい (amla)、塩辛い (lavāṇa)、苦い (tikta)、渋い (kaṣāya)、辛い (kaṭu) というものとして変化する。このように、個々のグナが生起してから、劣勢のグナが優勢のグナに依拠して、種々の転変を現す。

(27)

tad idam uktam — “pratipratiguṇāśrayaviśeṣāt”. ekaikaguṇāśrayeṇa yo viśeṣas tasmād ity arthaḥ.

そして、これ（次のこと）を言う、〈それぞれに対応したグナ（属性）に依拠する差別に従って〉と。個々のグナに依拠することによって差別が〔生じる〕が、それ（差別）によって〔転変する〕、という意味である。

B.6 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 22

(1)

sargakramam āha —

〔次に〕創造の過程を語る。

⁴³ 和名：ヤシ、ココヤシ、椰子、古古椰子。英語名：Coconut Palm。学名：Cocos mucifera。ヤシ科の植物。高さ 15m の高木。果実は成熟するに連れ、中の胚乳水は少なくなり、白く固形化した胚乳層が厚くなる。実は、飲料や料理、敷物の材料など様々な用途で使用され、また、シュリー・パラとも呼ばれ、結婚式やめでたい儀式には祭壇に祀られる。[西岡 2002: pp. 148–151]

⁴⁴ 和名：パルミラヤシ、オオギヤシ、ウチワヤシ。英語名：Palmyra Palm。学名：Borassus flabelifer。ヤシ科の植物。高さ 30m に達する高木。葉は古くから経文を記すのに用いられた。[西岡 2002: pp. 156–158]

⁴⁵ 和名：ベルノキ。英語名：Stone-apple。学名：Aegle marmelos。ミカン科。[西岡 2002: pp. 23–26] D.1 の 49 偈の脚注参照。

⁴⁶ 和名：インドガキ。学名：Diospyros malabarica。実は食用にされる。[西岡 2002: pp. 453]

⁴⁷ 和名：アンマロク、菴摩勒、ユカン、マラッカノキ。英語名：Emblīc Myrobalan。学名：Emblīca officinalis。トウダイグサ科。落葉性の小高木で高さ 6～7.5m。果実はアーユル・ヴェーダのトリ・パラ（三果混合薬）の一つとして、薬用効果が高いことで知られる。[西岡 2002: pp.]

⁴⁸ 和名：ナガエミカン、ゾウノリンゴ。英語名：Elephant apple, Wood apple。学名：Feronia limoninia。ミカン科。10m ほどの中高木。実は大きく、硬い殻の表面には白い毛があり、中はピンクがかかった練り物のような果肉が詰まっている。インドではあまり宗教的意味は見出せないが、ネパールのアナンダ・プージャーでは用いられるという。[西岡 2002: pp.]

Kārikā

prakṛter mahāṃs tato 'haṅkāras tasmād gaṇāś ca ṣoḍaśakaḥ /
tasmād api ṣoḍaśakāt pañcabhyaḥ pañca bhūtāni // SK 22

プラクリティ（根本原質）からマハットが、それからアハンカーラが、またそれから 16 の一群が〔生じる〕。さらにその 16〔の中〕の 5 つのものから 5 粗大元素が〔生じる〕。

(2)

“prakṛteḥ” iti. prakṛtir avyaktam. mahadahāṅkārau vakṣyamāṇalakṣaṇau.

〈プラクリティから〉とは。プラクリティは未顕現 (avyakta) である。マハットとアハンカーラの定義は後 (SK 23、SK 24) で語られる。

(3)

ekādaśendriyāṇi vakṣyamāṇāni, tanmātrāṇi ca pañca; so 'yaṃ ṣoḍaśasamkhyāparimito
gaṇaḥ ṣoḍaśakaḥ. tasmād api ṣoḍaśakād apakṛṣṭebhyaḥ pañcabhyas tanmātrebhyaḥ
pañca bhūtāny ākāśādīni.

11 の感覚器官と 5 微細要素は後 (SK 26、SK 27) で語られる。それこそが、16 の数に限定された〈16 の一群〉である。〈さらに、その 16 のものから〉取り出された 5 微細要素から、虚空などの〈5 粗大元素が〔生じる〕〉。

(4)

tatra śabdatanmātrād ākāśaṃ śabdagaṇam; śabdatanmātrasahitāt sparśatanmātrād
vāyuḥ śabdasparsāgaṇaḥ, śabdasparsatanmātrasahitād rūpatanmātrāt tejah
śabdasparsāgaṇam; śabdasparsārūpatanmātrasahitād rasatanmātrād⁴⁹ āpaḥ śab-
dasparśārūparasagaṇāḥ; śabdasparsārūparasatanmātrasahitād gandhatanmātrāc
chabdasparśārūparasagandhagaṇā pṛthivī jāyata ity arthaḥ.

それらの中で、音声の微細要素から音声を性質 (guṇa) とする虚空〔の粗大元素が生じ〕、音声の微細要素を伴った接触の微細要素から音声と接触を性質 (guṇa) とする風〔の粗大元素が生じ〕、音声と接触の微細要素を伴った色の微細要素から音声と接触と色を性質 (guṇa) とする火〔の粗大元素が生じ〕、音声と接触と色の微細要素を伴った味の微細要素から音声と接触と色と味を性質 (guṇa) とする水〔の粗大元素が生じ〕、音声と接触と色と味の微細要素を伴った香りの微細要素から音声と接触と色と味と香りを性質 (guṇa) とする地〔の粗大元素〕が生じる、という意味である。

⁴⁹ Bhaṭṭācārya のテキスト [Bhaṭṭācārya 1967: p. 167] には “rūpatanmātrād” とあるが、Srinivasan に従って [Srinivasan 1967: p. 128]、 “rasatanmātrād” 訂正した。

B.7 Sāṃkhyatattvakaumudī ad. SK 23

(1)

avyaktaṃ sāmānyato lakṣitam — “tadviparītam avyaktam” (kārikā 10) ity anena; viśesataś ca “sattvaṃ laghu prakāśakam” (kārikā 13) ity anena. vyaktam api sāmānyato lakṣitam — “hetumat” (kārikā 11) ityādinā. samprati vivekajñānopayogitayā vyaktaviśeṣaṃ buddhiṃ lakṣayati —

未顕現 (avyakta) は、一般には、〈未顕現はそれ〔顕現〕と反対のものである〉(SK 10) ということによって、定義された。また、特殊には、〈サットヴァは軽快なもの・輝くものである〉(SK 13) ということによって〔定義された〕。顕現 (vyakta) も、一般には、〈原因を持つものである〉(SK 10) など⁵⁰ということによって、定義された。そこで今、識別知〔を得るため〕に有用なので、〔著者は〕顕現の特殊である（＝顕現における個別なものの一つ）ブッディを〔次のように〕定義するのである。

Kārikā

adhyavasāyo buddhir dharmo jñānaṃ virāga aiśvaryaṃ /
sāttvikam etad rūpaṃ tāmasam asmād viparyastam // SK 23

ブッディとは決知（統覚機能）である。ダルマ（法）と知恵と離欲と自在力、それは、サットヴァ性の形態であり、タマス性はその反対のものである。

(2)

“adhyavasāyaḥ” iti. “adhyavasāyo buddhiḥ” kriyā-kriyāvator abhedavivakṣayā. sarvo vyavahartā ”locya matvā ’ham atrādhikṛta ity abhimatya karttavyam etan mayety adhyavasyati tataś ca pravartata iti lokasiddham.

〈決知〉とは。〈ブッディとは決知である〉。機能と機能を持つもの（機能の主体）との間に、区別がないということ在意図している。あらゆる行為者は、〔ある対象を、まず目で〕知覚し、〔次にマナスで〕思惟し⁵¹、〔そしてアハンカーラで〕「私はこれに権威を与えられている」と固執し、〔最後に、ブッディで〕「これは私によってなされるべきであ

⁵⁰ SK 10 において、顕現 (vyakta) は、「原因を持つもの (hetumat)、恒常ではないもの (anitya)、遍在していないもの (avyāpin)、作用性を持つもの (sakriya)、多数のもの (aneka)、依拠するもの (āsrita)、(根本原質の) 表徴 (līṅga)、部分からなるもの (sāvayava = 結合したもの)、他に従うもの (paratantra)」と説明される。

⁵¹ 対象をそのままに思い描くこと。すなわち、感覚器官で受け取った対象の情報をアハンカーラに運ぶ働きである。

る」と決定する。そしてそれから、〔行為を〕始める。以上は世間の定説である。

(3)

tatra yo 'yaṃ kartavyam iti viniścayaś citisannidhānād āpannacaitanyāyā buddheḥ so
'dhyavasāyaḥ, buddher asādhāraṇo vyāpāraḥ, tadabhedā buddhiḥ. sa ca buddher
lakṣaṇaṃ samānāsamānajātīyavyavacchedakatvāt.

そこにおいての、この「なされるべきである」という決定は、知 (cit、精神、思＝プル
シャ) と近接していることから、精神 (caitanya) を獲得した [かのごとくの] ブッディの
決知であり、ブッディの特殊な働き (ブッディの個別機能) であり、ブッディはそれ (特
殊な働き) と区別はない⁵²。そしてこれがブッディの定義 (表徴) である。なぜなら、同
種のもの (=アハンカーラやマナスなど) と異種のもの (=瓶や布など) と [ブッディ]
を分別するものであるから。

(4)

tad evam buddhiṃ lakṣayitvā vivekajñānopayoginas tasyā dharmān sātṭvikatāmasān
āha — “dharmo” jñānaṃ virāga aiśvaryaṃ. sātṭvikam etad rūpam, tāmasam
asmād viparyastam” iti.

そして、このように、ブッディを定義して、識別知 [を得るため] に有用なものである
から、それ (ブッディ) の諸々の性質 (dharma) であるサットヴァ性とタマス性を言う。
<ダルマ (法) と知恵と離欲と自在力、それは、サットヴァ性の形態であり、タマス性は
その反対のものである。> と。

(5)

dharmo 'bhyudayaniḥśreyasahetuḥ; tatra yāgadānādyanuṣṭhānajanito dharmo
'bhyudayahetuḥ, aṣṭāṅgayogānuṣṭhānajanitāś ca niḥśreyasahetuḥ.

〔その中で〕ダルマ (dharma) は、繁栄 (abhyudaya) と至福 (niḥśreyasa) の原因であ
る。その中で、繁栄の原因としてのダルマは、祭祀や布施などを行うことで生じるもので
ある。また、至福の原因 [としてのダルマ] は、8 部門のヨーガを行うことで生じるもの
である。

(6)

sattvapuruṣānyatākhyātir jñānam.

⁵² 上述されたように、主体と機能に区別はないということである。

知恵 (jñāna) は、サットヴァ⁵³とプルシャが別ものであると認識すること (anyatākhyāti、識別知) である。

(7)

virāgo vairāgyaṃ rāgābhāvaḥ. tasya — yatamānasamjñā, vyatirekasamjñā
ekendriyasamjñā, vaśīkārasamjñā – iti catasraḥ samjñāḥ.

離欲 (virāga) とは、離欲 (vairāgya) のことであり、すなわち貪欲が生じないことである。それには、(1) 精進の意識 (yatamānasamjñā)、(2) 区別の意識 (vyatirekasamjñā)、(3) 単一の感覚器官の意識 (ekendriyasamjñā)、(4) 支配の意識 (vaśīkārasamjñā) という4つの意識がある⁵⁴。

(8)

rāgādayaḥ kaṣāyāś cittavartinaḥ, tair indriyāṇi yathāsvam viṣayeṣu pravartyante;
tan mā'tra pravartīṣata viṣayeṣv indriyāṇīti tatparipācanāyārambhaḥ prayatno
yatamānasamjñā.

(1) 貪欲 (rāga) などは、心 (citta) に在る汚濁 (kaṣāya) である。それら (貪欲など) によって、諸々の感覚器官は、それぞれの対象に対し、働かせられる。そこで、諸々の感覚器官がこれら対象に対し働いてはならないという、その熟させる (=終わらせる) ための努力、すなわち精進が、精進の意識 (yatamānasamjñā) である。

(9)

paripācane cānuṣṭhīyamāne kecit kaṣāyāḥ pakvāḥ pakṣyante ca kecit. tatraivaṃ
pūrvāparībhāvo sati pakṣyamāṇebhyaḥ pakvānāṃ vyatirekeṇāvadhāraṇam
vyatirekasamjñā.

そして、熟させることに行われれば、ある汚濁は [たちまちに] 消滅し、また、ある [汚濁] はあとで消滅する。そこにおいて、このように、前後の関係があるので、[すでに] 消滅した [汚濁] を、[これから] 消滅する汚濁から区別することによって確認することが、区別の意識 (vyatirekasamjñā) である。

(10)

indriyapravṛtṭyasamarthatayā pakvānāṃ autsukyamātreṇa manasi vyavasthānam
ekendriyasamjñā.

⁵³ ここではプラクリティのことを意味する。

⁵⁴ *Yogasūtra* 1.15 およびその註釈を参照 [本多 1978: pp. 66-67]。

(3) 感覚器官の活動ができなくなることによって、消滅した〔汚濁〕が、単なる熱望 (autsukya) として、マナスにおいて留まることが、単一の感覚器官の意識 (ekendriyasamjñā) である。

(11)

autsukyamātrasyāpi nivṛttir upasthiteṣv api dr̥ṣṭānuśravikaviṣayeṣu yā samjñātrayāt parācīnā sā vaśikārasamjñā.

(4) 知覚できるものであり、伝承に従うものである対象が近くにあっても、単なる熱望さえも停止すること、それが、3つの意識の後に起こるもので、支配の意識 (vaśikārasamjñā) である。

(12)

yām atra bhagavān patañjalir varṇayāñ cakāra — “dr̥ṣṭānuśravikaviṣayavitr̥ṣṇasya vaśikārasamjñā vairāgyam” iti. (*Yogasūtra* 1.15) so'yaṃ buddhidharmo virāga iti.

これについて、尊者パタンジャリは〔次のごとく〕説いた。「離欲 (vairāgya) とは、知覚できるものであり、伝承に従うものである対象への欲望から離れた者にとっての支配の意識 (vaśikārasamjñā) である」と。これこそが、離欲 (virāga) というブッディの属性 (dharma) である。

(13)

aiśvaryaṃ yato buddhidharmo yato 'ṇimādiprādurbhāvaḥ.

それにより、微細化など〔の神通力〕が現れるところの自在力 (aiśvarya) もまた、ブッディの属性である。

(14)

atrāṇimā aṇubhāvo yataḥ śilām api praviśati. laghimā — laghubhavaḥ, yataḥ sūryamarīcīn ālambya sūryalokaṃ yāti. mahimā mahato bhāvaḥ, yato mahān bhavati. prāptiḥ — yato 'ṅgulyagreṇa spr̥ṣati candramasam. prākāmyam — icchānabhighātaḥ, yato bhūmāv unmajjati nimajjati ca yathodake. vaśitvam — yato bhūtabhautikaṃ vaśībhavatyavaśyam. īśitvam — bhūtabhautikānām prabhavavyūhavyayānām īṣte. yatra kāmāvasāyitvam⁵⁵ — satyasaṅkalpatā, yena yathāśya saṅkalpo bhavati bhūteṣu tathaiva bhūtāni bhavanti.

⁵⁵ Bhaṭṭācārya のテキストには “kāmavasāyitvam” とあるが [Bhaṭṭācārya 1967: p. 173]、Srinivasan に従い [Srinivasan 1967: p. 130]、 “kāmāvasāyitvam” に訂正した。

この中で、(1) 微細化 (*aṇimā*) とは、極微になることであり、それにより石にさえも進入する。(2) 軽化 (*laghimā*) とは、軽くなることであり、それにより、太陽光線を掴み、太陽界に至る。(3) 大化 (*mahimā*) とは、大きな状態であり、それにより、大きくなる。(4) 獲得 (*prāpti*) とは、それにより、指先で月に触れることである。(5) 意欲自在 (*prākāmya*) とは、意志が妨害されないことであり、それにより、水においてのごとくに、地面に現れたり、潜ったりできる。(6) 支配 (*vaśitva*) とは、それにより、存在物と〔それから〕生まれたものを確実に支配することである。(7) 統御 (*iśitva*) とは、存在物と〔それから〕生まれたものの生成・配置・帰滅を統御する。(8) 望み通りの決定 (*kāmāvasāyitva*、欲望の抑制) とは、真実〔を實現させる〕意志であり、それにより、ある人が存在物に対し意志があるならば、まさに存在物がその通りに成ることである⁵⁶。

(15)

anyeṣāṃ manuṣyāṇāṃ niścayāḥ niścetavyam anuvidhīyante, yoginas tu niścetavyāḥ padārthāḥ niścayam — iti catvāraḥ sātṭvikā buddhidharmāḥ.

他の人間たちにおいては、認識〔する主体〕が認識されるべきものに統制される。しかし、ヨーガ行者にとっては、認識されべきものの範疇が認識〔する主体〕に統制される。以上が、4つのサットヴァ性のブッディの属性 (*dharma*) である。

(16)

tāmasās tu tadviparītā buddhidharmāḥ. adharmājñānāvairāgyānaisvaryābhidhānās catvāra ity arthāḥ.

しかし、それと反対のタマス性のブッディの属性 (*dharma*) がある。アダルマ、無知、非離欲、非自在力と呼ばれる4つという意味である。

B.8 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 24

(1)

ahaṅkārasya lakṣaṇam āha —

アハンカーラの定義を〔次のように〕言う

Kārikā

⁵⁶ ヨーガにおいて説かれる8種の神通力である。『ヨーガ・スートラ』3.45 に対するヴィヤーサの註 ([Nārāyaṇamīśra 1971: p. 371]、[本多 1978: p. 206]) にほぼ同じものがあげられる。

abhimāno 'haṅkāras tasmād dvividhaḥ pravartate⁵⁷ sargaḥ /
ekādaśakaś ca gaṇas tānmātraḥ pañcakaś caiva⁵⁸ // SK 24

アハンカーラとは自己の意識 (abhimāna) である。それから 2 種の創造が起こる。そして [それは] 11 種の一群と 5 種の微細要素に関するもののみである。

(2)

“abhimānaḥ” iti. abhimāno 'haṅkāraḥ, yat khalv ālocitaṃ mataṃ ca tatra
'aham adhikṛtaḥ', 'śaktaḥ khalv aham atra' 'madarthā evāmī viśayāḥ'
'matto nānyo 'trādhikṛtaḥ kaścid asti' 'ato 'ham asmi' iti yo 'bhimānaḥ so
'sādhāraṇavyāpāratvād ahaṅkāraḥ.

〈自己の意識〉とは。アハンカーラは自己の意識である。実に、[感覚器官で] 知覚し、そして [マナスで] 思惟したもの、それに対して、「私は権威を与えられている」、「実に、私はこれに対して能力がある」、「これらの [感覚器官の] 対象は私のためのみにある」、「私より他には誰もこれに関して権限を与えられていない」、「それ故、私である」という自己の意識は、独自 (= 個々人にとって別々) の機能であることから、それがアハンカーラ (自我意識) である。

(3)

tam upajīvyā hi buddhir adhyavasyati 'kartavyam etan mayā' iti niścayaṃ karoti.

実に、それに依拠してブッディは決定する、[すなわち] 「これは私によってなされなければならない」という確定を行うのである。

(4)

tasya kāryabhedam āha — “tasmād dvividhaḥ pravartate sargaḥ” iti. prakāradvayam
āha — “ekādaśakaś ca gaṇaḥ” indriyāhvaḥ, tānmātraḥ pañcakaś ca.

それ (アハンカーラ) にとっての結果の区別を言う、〈それから 2 種の創造が起こる〉と。[そしてその] 2 種類の創造を言う、〈そして 11 種の一群〉すなわち感覚器官 (indriya) と呼ばれるものと 5 種の微細要素に関するものである。

(5)

evaṃ dvividha eva sargo 'haṅkārat, na tv anya iti 'eva'-kāreṇādvadhārayati.

⁵⁷ 煩瑣であるため “pravartate” を訂正した。

⁵⁸ Bhaṭṭācārya は次のように説明する。「“tanmātrapañcakaś caiva” という読みでは韻律の齟齬が生じる。“tanmātraḥ pañcakaś caiva” とある者たちは読んでいる」 (“tanmātrapañcakaś caiva' iti pāṭhe chandobhaṅgo jāyate. 'tanmātraḥ pañcakaś caiva' iti kecana paṭhanti.” [Bhaṭṭācārya 1967: p. 178]) という。

このように、2種のみがアハンカーラからの創造であり、しかも、他に〔創造は〕ないということが、“eva”という言葉によって確定する。

B.9 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 25

(1)

syād etat — ahaṅkārad ekarūpāt⁵⁹ katham jaḍaparakāśakau gaṇau vilakṣaṇau bhavata
ity ata āha —

「それはそうかもしれない。〔しかし、〕 どうして、アハンカーラという1種から、生命のないもの (jaḍa = 5 tanmātrāṇi)⁶⁰と輝くもの (prakāśaka = 11 indriyāṇi)⁶¹という特徴が異なる2種の一群が生じるのか」という〔問い〕に対して、〔次のように〕言う。

Kārikā

sāttvika ekādaśakaḥ pravartate vaikṛtād ahaṅkārat /
bhūtādes tānmātraḥ⁶² sa tāmasas taijasād ubhayam // SK 25

「ヴァイクリタ・アハンカーラ」(vaikṛta-ahaṅkāra) から、サットヴァ性の11から成るものが開展する。「ブーターディ〔・アハンカーラ〕」(bhūtādi-ahaṅkāra) から、タマス性の微細要素が〔開展する〕。「タイジャサ〔・アハンカーラ〕」(taijasa-ahaṅkāra) から、両者が〔開展する〕⁶³。

(2)

“sāttvikaḥ” iti. prakāśalāghavābhyām ekādaśaka indriyagaṇaḥ sāttviko vaikṛtāt

⁵⁹ Jhā のテキストでは、“ahaṅkārad ekarūpāt kāraṇāt” となっている [Jha 2004: p. 97]。

⁶⁰ 金倉氏は、“jaḍa” を「非情」あるいは「昧鈍」と訳している [金倉 1984: p. 157]。

⁶¹ 光照、すなわち認識を生じさせる感官ということである [金倉 1984: p. 157]。

⁶² Bhaṭṭācārya は、“tanmātraḥ” と、多くの集積において、読まれる。註釈書で、読みの探究は、詳細になされていく。(“tanmātraḥ” iti bahuṣu saṃskaraṇeṣu paṭhyate. vyākhyāyām pāṭhasamikṣā vistareṇa kṛtā.) と説明している [Bhaṭṭācārya 1967: p. 181]。

⁶³ Jha は Gaudapāda に基づいて次のように説明している。「(a)“vaikṛta”、(b)“bhūtādi”、(c)“taijasa” は、純粋に、アハンカーラ (I-principle) の3つの形態、あるいは状態にあてはめられたテクニカルタームとしての名前である。アハンカーラが、サットヴァの属性によって支配されたとき“vaikṛta”と呼ばれ、タマスの属性によって支配されたとき“bhūtādi”と呼ばれ、ラジャスの属性によって支配されたとき“taijasa”と呼ばれる。これらは、単なる専門用語にすぎず、何も意味していない」 [Jha 2004: p. 98] という。金倉氏は“vaikṛta”を「変異した我慢」、「bhūtādi」を「元素の初めと称する我慢」、「taijasa」を「炎熾と称する我慢」と訳し [金倉 1984: p. 157]、服部氏はそれぞれ「変化した自我意識」、「元素のもととなった自我意識」、「激質的な自我意識」と訳している [服部 1979: p. 198]。

sāttvikād⁶⁴ ahaṅkāṛāt pravartate. bhūtādes tv ahaṅkāṛāt tāmasāt tānmātro⁶⁵ gaṇaḥ pravartate. kasmāt? yataḥ ‘sa tāmasaḥ.’ etad uktam bhavati — yady apy eko ’haṅkāras tathāpi gaṇabhedodbhavābhibhavābhyāṃ bhinnam kāryam karotīti.

〈サットヴァ性〉とは。光照と軽さ（の性質をもつもの）であるから、11 から成る感覚器官の一群は、サットヴァ性であり、ヴァイクリタというサットヴァ性のアハンカーラから開展する。また、ブーターディというタマス性のアハンカーラから微細要素の一群が開展する。何故か。〈それはタマス性である〉ということから〔判断される〕。これは〔次の如く〕言われている。「アハンカーラは一つであるけれども、それにもかかわらず、〔3種の〕グナの区別ある優勢（生起）と劣勢（圧伏）によって⁶⁶区別された結果になる」という。

(3)

nanu yadi sattvatamobhyāṃ eva sarvaṃ kāryam janyate, tadā kṛtam akiñcitkareṇa rajasye ata āha — “taijasād ubhayam” iti. taijasād rājasād ubhayam gaṇadvayam bhavati.

「もし、サットヴァとタマスのみから、あらゆる結果が生まれるというならば、その時、何の働きもなさないラジャスが何の役にも立たないのではないか。」という〔問い〕に対して、答える。〈タイジャサ〔・アハンカーラ〕から両者が生じる〉と。つまり、タイジャサというラジャス性〔のアハンカーラ〕から、両方すなわち2種類の一群が生じるのである。

(4)

yady api rajaso na kāryāntaram asti tathāpi sattvatamasī svayam akriye samarthe api na svasvakāryam kurutaḥ, rajas tu calatayā te yadā cālayati tadā svasvakāryam kuruta iti.

ラジャスには、別の結果がないとしても、それにもかかわらず、サットヴァとタマスそれ自体は、無活動であるので、能力があるとしても、それぞれの結果をつくらない。しかしながら、ラジャスは、活動性によって、それら2つを活動させるとき、そのとき〔サットヴァとタマスは〕それぞれの結果をつくるという。

⁶⁴ Jhā のテキストでは “sāttvikād” を欠いている [Jha 2004: p. 98]。

⁶⁵ Bhāṭṭācārya は “tanmātro gaṇa” と一般的に読まれているが、これは誤った読みである (“tanmātro gaṇa iti prāyeṇa paṭhyate; apapāṭho ’yam.”) とし、“tanmātro” を “tānmātro” に訂正している [Bhāṭṭācārya 1967: p. 182]。Jha は “tanmātro” とし [Jha 2004: p. 98]、Srinivasan も同様である [Srinivasan 1967: p. 132]。ここでは Bhāṭṭācārya に従った。

⁶⁶ Jha は “by reason of the domination or suppression of one or other of these Attributes” と訳し [Jha 2004: p. 98]、金倉氏は「特殊の徳の出現と圧伏とによって」と訳す [金倉 1984: p. 158]。

(5)

tadubhayasminn api kārye sattvatamasoḥ kriyotpādanadvāreṇāsti rajasaḥ kāraṇatvam
iti na vyartham raja iti.

また、その両者の結果において、サットヴァとタマスの作用が生み出されることから、ラジャスが原因となっているので、ラジャスが不必要であるというわけではないという。

B.10 *Sāṃkhyatattvakaumudī* ad. SK 26

(1)

sāttvikam ekādaśakam ākhyātum bāhyendriyadaśakam tāvad āha —

サットヴァ性の 11 種を説明するために、まず、外的感覚器官 (bāhyendriya) の 10 種を説く。

Kārikā

buddhīndriyāṇi cakṣuḥśrotraghrāṇarasanatvagākhyāni /
vākpāṇipādapāyūpasthān karmendriyāṇy āhuḥ // SK 26

知覚器官 (buddhīndriyāṇi) とは、目 (cakṣus)、耳 (śrotra)、鼻 (ghrāṇa)、舌 (rasana)、皮膚 (tvac) と名づけられるものである。発声器官 (vāc)、手 (pāṇi)、足 (pāda)、肛門 (pāyu)、生殖器 (upastha) を、行為器官 (karmendriyāṇi) と言う。

(2)

“buddhīndriyāṇi” iti. sāttvikāhaṅkāropādānakatvam indriyatvam. tac ca dvividham —
buddhīndriyaṃ karmendriyaṃ ca.

〈知覚器官〉とは⁶⁷。つまり、サットヴァ性のアハンカーラを原因とするものが、感覚器官 (indriya) というものである。そして、それは 2 種類である。知覚器官 (buddhīndriya) と行為器官 (karmendriya) とである。

(3)

ubhayam apy etad indrasyātmanaś cihnatvād indriyam ucyate. tāni ca svasaṃjñābhiś
cakṣurādibhir uktāni.

⁶⁷ Jha は、「“im” は諸々の対象のことである。それらに対して向かうというので、“indriya” という語源解釈がある者たちによってなされている。」(““im” viṣayāḥ, tāt prati dravantīti ‘indriya’ śabdavyutpattiḥ kaiścit kriyate” [Jha 2004: p. 100]) と説明する。おそらく通俗的語源解釈と思われる。

また、この両者は、インドラとしてのアートマン（＝プルシャ）の表徴性から、感覚器官（*indriya*）と言われる。そして、それらは〔偈において〕、それぞれの名称である「目」等として言われたのである。

(4)

tatra rūpagrahaṇalīṅgaṃ cakṣuḥ, śabdagrahaṇalīṅgaṃ śrotram, gandhagrahaṇalīṅgaṃ ghrāṇam, rasagrahaṇalīṅgaṃ rasanam, sparśagrahaṇalīṅgaṃ tvak — iti jñānendriyāṇāṃ saṃjñāḥ.⁶⁸

この中で、色（*rūpa*）の把握を特徴とするのが目（*cakṣus*）であり、音声（*śabda*）の把握を特徴とするのが耳（*śrotra*）であり、香り（*gandha*）の把握を特徴とするのが鼻（*ghrāṇa*）であり、味（*rasa*）の把握を特徴とするのが舌（*rasana*）であり、接触（*sparsā*）の把握を特徴とするのが皮膚（*tvac*）である。以上が、諸々の知覚器官（*jñānendriyāṇi*）の名称である。

(5)

evaṃ vāgādīnāṃ kāryaṃ vakṣyati (kārikā 28).

同様に、言葉など〔行為器官〕の作用は、後（SK 28）で語る。

⁶⁸ Bhāṭṭācārya は「“iti saṃjñā” とある所では読んでいる。」（“‘iti saṃjñā’ iti kvacid eva paṭhyate.” [Bhāṭṭācārya 1967: p. 189]）と説明している。

補遺 C

Ahīrbudhnyasaṃhitā 第 7 章 訳註

C.1 Ahīrbudhnyasaṃhitā 第 7 章 「不浄なる創造説」 1–43ab

prakṛtipuruṣakālānāṃ samaṣṭiḥ

【プラクリティ、プルシャ、カーラの集合】

Ahīrbudhnyaḥ —

アヒルブドニヤは〔語った〕。

1

anyūnānatiriktaṃ yad guṇasāmyaṃ tamomayam /
tat sām̐khyair jagato mūlaṃ prakṛtiś ceti kathyate // AhS 7.1

過不足のないグナの均衡は、タマスで覆われた（タマスから成る）ものである。それは、サーンキヤの論師たちによって、世界の根本すなわちプラクリティと呼ばれる。

2

kramāvatīrṇo yas tatra caturmanuyugaḥ pumān /
samaṣṭiḥ puruṣo yoniḥ sa kūṭastha itīryate // AhS 7.2

プンス（精神原理）は、4組のマヌ（＝8人のマヌたち）として、そこにおいて段階的に降下する。それは、総体（集合体）¹、プルシャ、ヨーニ²、頂点に存在するものと言われる。

3

yat tat kālamayaṃ tattvaṃ jagataḥ saṃprakālanam/

¹ “the aggregate [of the manus]” [Matsubara 1994: p. 229]

² ジーヴァのヨーニである [Matsubara 1994: p. 236]。

sa tayoh kāryam āsthāya saṃyojakavibhājakaḥ // AhS 7.3

世界の作動者であるかのカーラ（時間）から成る原理は、2 者（プルシャとプラクリティ）に結果をもたらし、結合させたり分断させたりするものである。³。

bhagavatsaṃkalpacoditāt tritayād asmāt mahadādyutpattiḥ

【バガヴァットの意欲に駆り立てられたこの 3 つ組みからマハットなどが展開すること】

4

mṛtṣiṅḍībhūtam etat tu kālādītritayaṃ mune /
viṣṇoh sudarśanaiva svasvakāryapracoditam // AhS 7.4

聖者よ。しかしながら、この時間などの 3 組（プルシャ、プラクリティ、カーラ）は、土塊の〔ような〕状態であって、ヴィシュヌの円盤（sudarśana）によってのみ、それぞれの結果に向かわせられる。

5ab

mahadādiṣṭhivantatattvavargopapādakam / AhS 7.5ab

【これより】マハットから地までの原理の一群が生み出される。

prakṛtiḥ svarūpataḥ svabhāvataś ca pariṇāminī

【プラクリティが本性上、また自己の性質として展開すること】

5cd

payomṛdādivat tatra prakṛtiḥ pariṇāminī // AhS 7.5cd

ミルク⁴や粘土などのように、それら 3 つの中で、プラクリティが展開するものである。

puruṣaḥ svarūpato 'pariṇāmī

【プルシャが本性上展開しないこと】

³ 松原氏は “The principle Time, the great impeller of the world, is the agent uniting and separating the two (i.e., Puruṣa and Prakṛti, in the evolution and dissolution, respectively), influencing their effects” と訳している。[Matsubara 1994: p. 229]

⁴ 松原氏は SK 16 を参照して、“water” と訳している [Matsubara 1994: p. 230]。しかし、その箇所では「水」は “payas” ではなく “salila” である。Shrader が「ミルクや粘土がそれぞれヨーグルトや壺などに変化するように、プラクリティは転変する」[Shrader 1916: p. 79] と解釈しているようにミルクの方が妥当と思われる。

6ab

pumān apariṇāmī san saṃnidhānena kāraṇam / AhS 7.6ab

プンス（男＝精神原理）は展開しないものであり、有（存在＝プラクリティ）に近接していることによって、原因となる。

kālasya prakṛtipuruṣapācakatvam

【カーラとはプラクリティとプルシャの料理人であること】

6cd

kālaḥ pacati tattve dve prakṛtiṃ puruṣaṃ ca ha // AhS 7.6cd

カーラ（時間）は、プラクリティとプルシャという2つの原理を料理する（食べる、消化する）⁵。

prakṛter mahattattvotpattiḥ

【プラクリティからのマハット原理の出現】

7-8ab

puruṣādhiṣṭhitāt tasmād viṣṇusaṃkalpacoditāt /

kālena kalitāc caiva guṇasāmyān mahāmune // AhS 7.7

mahān nāma mahattattvam avyaktād uditam mune / AhS 7.8ab

偉大なる聖者よ。かのプルシャの支配により、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、そして、実に、時間によって強いられることにより、グナが均衡している未顕現（avyakta）から、マハットという名前の大なる原理が、生まれた。聖者よ。

mahattattvaparyāyāḥ

【マハット原理の異名】

8cd-9ab

vidyā gaury avanī brāhmī vadhūr vṛddhir matir madhuḥ // AhS 7.8cd

akhyātir īśvaraḥ prājñety ete tadvācakā mune / AhS 7.9ab

⁵ “pacati”は「料理する」と「食べる」両方の意味がある。「料理する」という意味で取った場合、時間は展開へと導く原理と考えることができる。しかし、時間の性質を考えれば「食べる」という表現も妥当であろう。あるいは、展開のときには2つの原理を料理し、還滅のときにはその2つを食べるという両義を表しているのかもしれない。この“kāraḥ pacati”は『マハーバーラタ』でよく見られる表現である（Mbh. 1.1.188; 12.217.39; 12.220.84; 12.231.25; 12.309.90; 17.1.3. など）。

ヴィディヤー（知識）、ガウリー（色白の女性＝パールヴァティー）、アヴァニー（大地）⁶、ブラーフミー（ブラフマーの神妃）、ヴァドゥー（花嫁）、ヴリッディ（生起）、マティ（思考力）、マドゥ（蜜）、アキヤーティ（不定のもの）⁷、イーシュヴァラ（主宰神）、プラージュニヤー（聡明なるもの）というこれらがそれ（マハット）を示す言葉である⁸。聖者よ。

mahatas traividhyam

【マハットの 3 種類】

9cd

kālo buddhis tathā prāṇa iti tredhā sa gīyate // AhS 7.9cd

カーラ（時間）⁹、ブッディ（統覚器官）およびプラーナ（氣息）がその 3 種類であると説明される。

10–11ab

tamaḥsattvarajobhedāt tattadunmeṣasaṃjñayā /

kālas truṭilavādyātmā buddhir adhyavasāyinī // AhS 7.10

prāṇaḥ prayatanākāra ity etā mahato bhidāḥ / AhS 7.11ab

タマス、サットヴァ、ラジャスの区別により、それぞれ開眼（＝覚醒）の〔仕方の〕名称として、カーラはトルティやラヴァなど〔の時間単位〕を本質とするものとなり、ブッディは決定するものとなる。〔また、〕プラーナは活動という形態となる。以上、これらがマハットの分類である。

⁶ Schrader は、“go (cow)”と“avanī (earth)”としている [Schrader 1916: p. 80]。しかし、“go”は文法的におかしく、松原氏も誤りであると指摘している [Matsubara 1994: p. 236]。一方、Malaviya のヒンディー語訳では、“gaur”と“yavanī”としていて [Malaviya 2007: p. 63]、「牛」と訳しているところは Schrader と同じであるが、“yavanī”はギリシャ人という意味で、不適當である。ここでは松原氏に従って“gaurī”と“avanī”とした。

⁷ “akhyāti”について、Sanskrit-English Dictionary では、Apte は“infamy”“ill-repute”、Monier は“infamy”“bad repute”“disgrace”と説明しているが、これら「悪い評判」という意味はここでは相応しくない。Śabdakalpadruma (Reprint, Dillī: Nāg Pabliśars, 1987) には“akhyātaḥ”という項目が立てられ、“apratīṣṭitaḥ”が同義語として引かれている。さらに、Schrader はこの語を“non-discrimination in dreamless”と説明している [Schrader 1916: p. 84]。

⁸ Schrader は、マハットと同義語について分析し、『チャンドギヤ・ウパニシャッド』に見られるマハット＝プラーナという同一視がマハットという名前の起源であると論じている。[Schrader 1916: pp. 84–85]

⁹ ここで説かれているカーラは、3つの根源の一つとして説かれているもの (AhS 7.3) よりも低次であると考えられる。ここでのカーラ、すなわちマハットのタマス性としてのカーラは具体的な時間であるが、3つの根源としてのカーラは創造原理で、展開しないものである。[Schrader 1916: p. 81]

tatra sātṭvikasya cāturvidhyam

【それらの中でのサットヴァ性の4種類】

11cd-12ab

dharmo jñānaṃ virāgaś cāpy aiśvaryaṃ iti saṃjñayā // AhS 7.11cd

mahataḥ sātṭvikam rūpaṃ caturdhā pravibhajyate / AhS 7.12ab

そしてまた、ダルマ（法）、知、離欲、自在力という名称として、マハットのサットヴァ性の形態は、4種に分けられる。

tāmasasyāpi cāturvidhyam

【タマス性のものも4種類】

12cd

adharmājñānāvairāgyam anaiśvaryaṃ ca tāmasam // AhS 7.12cd

〔それとは反対に〕アダルマ（非法）、無知、不離欲、そして非自在力がタマス性のものである。

mahattattve manūnām avasthitiḥ

【マハット原理におけるマヌたちの存在】

13

vidyāyā udare 'ṣṭau te sudarśanasamīritāḥ /

manavo garbhatāṃ yānti sarvajñāḥ sarvadarśinaḥ // AhS 7.13

ヴィディヤー（＝マハット）の内部において、〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されて、全てを知り、全てを理解する8人のマヌたちが、〔ヴィディヤーの〕胎児の状態になる¹⁰。

tatra buddhyutpattiḥ

【それらの中でのブッディの出現】

14

bodhanaṃ nāma vaidyaṃ tad indriyaṃ teṣu jāyate /

¹⁰ 胎児の状態になるというのは器官や性質などを獲得することであり、ここではマハットの器官や性質を備えたことを意味している。

yenārthān adhyavasyeyuḥ sadasatpravibhāgīnaḥ // AhS 7.14

彼ら（マヌたち）の中に、ボーダナ（覚）¹¹と呼ばれるヴィディヤー（＝マハット）に属するもの、すなわちインドリヤ（器官）が生まれる。それ（知識）によって、良い悪いの分類をする人たち（＝マヌたち）は、諸々の対象を決定する。

mahato 'haṃkārotpattiḥ

【マハットからアハンカーラの出現】

15

vidyāyā udare tatrāhaṃkṛtir nāma jāyate /
saṃkalpāc coditā viṣṇoś coditāyāḥ sudarśanāt // AhS 7.15

そのヴィディヤー（＝マハット）¹²の内部に、自己の概念（ahaṃkṛti）というものが生まれる。そして、〔それは〕ヴィシュヌの意欲から、〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に駆り立てられことにより、生まれるものである。

ahaṃkāraparyāyāḥ

【アハンカーラの異名】

16

ahaṃkāro 'bhimānaś ca prajāpatir ahaṃkṛtiḥ /
abhimantā ca boddhā cety asyāḥ paryāyavācakāḥ // AhS 7.16

自己の概念（ahaṃkṛti）は、アハンカーラ（ahaṃkāra、自我意識）であり、自己の意識（abhimāna）であり、プラジャーパティ（prajāpati）¹³である。また、あらゆる事を自己に帰するもの（abhimantṛ）¹⁴であり、認識するもの（boddhṛ）である。以上が、この〔アハンクリティ〕の異名である。

ahaṃkārasya traividyaṃ

【アハンカーラの3種類】

17

tasya vaikārikam nāma rūpaṃ sāttvikam ucyate /

¹¹ 個人にそなわる器官としてのブッディである。[Matsubara 1994: p. 236]

¹² ヴィディヤーはマハットの異名である。AhS 7. 8cd

¹³ MBh 12.291.20 にアハンカーラとプラジャーパティと同一視している説が見られる。

¹⁴ ここで説かれる“abhimāna”や“abhimantṛ”は、我慢とも訳されるように、自己に執着する概念である。

taijasaṃ rājasam rūpaṃ bhūtādir nāma tāmasam // AhS 7.17

それ（アハンクリティ）にとって、ヴァイカーリカという形態が、サットヴァ性と言われる。タイジャサがラジャス性の形態であり、ブーターディという〔形態〕がタマス性と言われている。

ahaṃkārasya rūpabhedāḥ

【アハンカーラの多様な形態】

18

kāmaḥ krodhaś ca lobhaś ca mānaś cāvamatis tṛṣṇā /
ity ahaṃkṛtirūpāṇi darśitāni mune tava // AhS 7.18

愛欲と怒りと貪欲と自尊心、侮蔑、渴望。以上が、あなたが示したアハンクリティ（自己の概念）のそれぞれの形態である。聖者よ。

ahaṃkāre manūnām avasthitih

【アハンカーラにおけるマヌたちの存在】

19

nānāvibhavayuktāyām utpannāyām ahaṃkṛtau /
tadantargarbham āyāti manūnām taccaturyugam // AhS 7.19

アハンクリティ（自己の概念）がそれぞれに遍在するものに結びつき生み出された時、4組のマヌたち（= 8人のマヌたち）は、その（アハンクリティの）胎児になる。

ahaṃkārāt mana utpattiḥ

【アハンカーラからマナスの出現】

20

sudarśaneritaṃ viṣṇor āhaṃkārikam indriyam /
mano nāma manūnām taj jāyate cintanātmakam // AhS 7.20

ヴィシュヌの円盤（sudarśana）に促されて、アハンカーラに属するインドリヤであり、思考を本質とする、マナスと呼ばれるものが、マヌたちに生まれる。

21ab

manasvī buddhimāṃś cāpi garbho manumayas tathā / AhS 7.21ab

そして、マヌから成る胎児は、ブッディ同様に、マナスを所有する〔ようになる〕。

bhūtādeḥ śabdatanmātrotpattiḥ

【ブーターディから音声の微細要素の出現】

21cd

bhūtādeḥ śabdatanmātraṃ tāmasād atha jāyate / AhS 7.21cd

次に、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、音声の微細要素が生まれる。

tasmād ākāśotpattiḥ

【それから虚空の出現】

22ab

viyac ca śabdatanmātrāḥ jāyate śabdalaṅkāraḥ / AhS 7.22ab

音声の微細要素から、音声の表徴である〔粗大元素の一つ〕虚空（*viyat = ākāśa*）が生まれる。

ākāśasya guṇakarmanī

【虚空の性質としての活動】

22cd

śabdaikaguṇam ākāśam avakāśapradāyi ca // AhS 7.22cd

虚空（*ākāśa = viyat*）は、音声ただ一つをグナ（属性）とするものであり、空間を与えるものである¹⁵。

ākāśe manūnāṃ sthitiḥ

【虚空の中におけるマヌたちの存在】

23

tadantargarbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ /

manavo 'ṣṭau mahābuddhe tadā vaikārikāt punaḥ // AhS 7.23

¹⁵ すなわち、いろいろなものに存在場所としての空間を作り出すということ。

8人のマヌたちは、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、その（虚空の）胎児の状態になる¹⁶。偉大なる覚者よ。その次に、ヴァイカーリカ〔・アハンカーラ〕から〔、以下のものが生まれる〕。

śrotravācor utpattiḥ

【耳と発声器官の出現】

24

śrotraṃ vāg iti vijñānakarmendriyayugaṃ mune /
samikṣayaiva devasya manuṣu pratijāyate // AhS 7.24

聖者よ。耳（聴覚器官）と発声器官という、一組の知覚および行為器官が、神の熟慮（＝ヴィシュヌの意欲）によってのみ、マヌたちの中に生まれる。

manūnāṃ tadvaiśiṣṭyam

【マヌたちにとってのその特殊性】

25ab

śrotravān atha vāgmī ca garbho manumayas tathā / AhS 7.25ab

さらに、マヌから成る胎児は、〔今までと〕同様に、耳（聴覚器官）を持ち、発声器官を所有する。

atha sparśatanmātrotpattiḥ

【次に、接触の微細要素の出現】

25cd

sudarśaneritād viṣṇor bhūtādeḥ sparśamātrakam // AhS 7.25cd

ヴィシュヌの円盤（sudarśana）に促されることにより、ブーターディ〔・アハンカーラ〕から、接触の〔微細〕要素を持つものが〔生まれる〕。

tasmād vāyūtpattiḥ

【そこからの風の出現】

26ab

jāyate sparśavān vāyus tasmād api ca jāyate / AhS 7.26ab

¹⁶ 虚空性を獲得するということである。以降、粗大元素それぞれの性質を獲得していく。

〔接触の微細要素が〕生まれ、そして、また、それ（接触の微細要素）から、接触〔の性質〕を持つ〔粗大元素である〕風が生まれる。

vāyoḥ kriyābhedāḥ

【風的作用の区別】

26cd

śoṣaṇaṃ preraṇaṃ ceṣṭā vyūhanaṃ ca samūhanaṃ // AhS 7.26cd

kriyābheda ime tasmā jāyante vāyuto mune / AhS 7.27ab

乾燥 (śoṣaṇa)、促進 (preraṇa)、運動 (ceṣṭā)、分散 (vyūhana)、そして集合 (samūhana)、これら作用の区別がその風から生まれる。聖者よ。

tvakpāṇyor utpattiḥ

【皮膚と手の出現】

27cd

vaikārikād ahaṃkāraṭ tvakpāṇidvitayaṃ mune // AhS 7.27cd

jñānakarmendriyadvandvaṃ saṃkalpāt tasya jāyate / AhS 7.28ab

ヴァイカーリカ・アハンカーラから、皮膚（触覚器官）と手の2つが〔生まれる〕。聖者よ。〔これら〕一対の知覚および行為器官は、彼（ヴィシュヌ）の意欲から生まれる。

vāyau manūnāṃ sthitiḥ

【風におけるマヌたちの存在】

28cd

tadantargarbhatāṃ yāti tadā manumayaḥ pumān // AhS 7.28cd

その時、マヌ〔たち〕から成るプンス（精神原理）は、その（風の）胎児となる。

teṣāṃ tvakpāṇivaiśiṣṭyam

【彼らにとっての皮膚と手の特殊性】

29

ceṣṭamānas tadā garbho viṣṇusaṃkalpacoditaḥ /

tvakpāṇidvayavān āsīt sparśādānādisiddhye // AhS 7.29

その時、活動している胎児は、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、触れたり〔手に〕取ることなどを成就するために、皮膚（触覚器官）と手の2つを所有するものとなった。

rūpatanmātratejasor utpattiḥ

【色の微細要素と火の出現】

30

tāmasād atha bhūtādeḥ sudarśanasamīritāt /
jāyate rūpamātraṃ tu jyotis tasmāc ca rūpavat // AhS 7.30

次に、〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、色の〔微細〕要素が生まれ、そして、それ（色の微細要素）から色の〔性質〕を所有する〔粗大元素である〕火（jyotis = tejas）が〔生まれる〕。

tejasaḥ kriyābhedāḥ

【火の作用の区別】

31

rūpaṃ vyaktis tathā pākaḥ kāntir dīptir itīdṛśāḥ /
jāyante taijasā bhedaḥ bhedād vaikārikāt tathā // AhS 7.31

形態、可視性、消化（成熟）、および光沢、光輝という、このような火に属する区別が生まれる。〔そして〕ヴァイカーリカに区別される〔アハンカーラ〕から、次のように〔生まれる〕。

cakṣuḥpādayor utpattiḥ

【目と足の出現】

32ab

sudarśaneritāj jātaṃ cakṣuḥpādayugaṃ mune / AhS 7.32ab

〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、一組の目（視覚器官）と足が生まれる。聖者よ。

tejasi manūnāṃ sthitiḥ

【火におけるマヌたちの存在】

32cd

tadantargarbhatām yānti te sudarśanacoditāḥ // AhS 7.32cd

〔ヴィシュヌの〕円盤 (sudarśana) に促されて、彼ら (マヌたち) はその〔火の〕胎児となる。

teṣām cakṣuḥpādavaiśiṣṭyam

【彼らにとっての目と足の特殊性】

33

manavo rūpavantas te kāntidīptyādisālināḥ /
cakṣuṣmantaḥ pādavanto vīkṣaṇāṭanayogināḥ // AhS 7.33

彼ら〔8人の〕マヌたちは、色〔の性質〕を持ち、光沢、光輝など〔の性質〕を所持し、目（視覚器官）を所有し、足を持ち、見ることと歩き回ること〔の性質〕を備えている。

rasatanmātrāmbhasor utpattiḥ

【味の微細要素と水の出現】

34

tāmasād atha bhūtāder viṣṇor īkṣāniyojitāt /
jāyate rasamātraṃ tu jāyante 'mbhāṃsi vai tataḥ // AhS 7.34

次に、ヴィシュヌの熟慮 (= 意欲) に促されることにより、タマス性のブーターディ〔・アハンカーラ〕から、味の〔微細〕要素が生まれ、さらにそれ（味の微細要素）から、まさに〔粗大元素である〕水が生まれる。

tatkriyābhedāḥ

【その作用の区別】

35ab

jāyante 'tha guṇās teṣām rasasnehadravādayaḥ /35ab

次に、彼らにとって、味性、粘着性、流動性などの諸々のグナが生じる。

rasanopasthendriyotpattiḥ

【舌と生殖の器官の出現】

35cd–36ab

atha vaikārikāt tasmād viṣṇusaṃkalpacoditāt // AhS 7.35cd

rasanopastham ity etaj jāyate ḍṛkkriyātmakam / AhS 7.36ab

次に、ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、そのヴァイカーリカ〔・アハンカーラ〕から、舌（味覚器官）と生殖器官というこの認識と作用の性質が生まれる。

apsu manūnām sthitiḥ

【水におけるマヌたちの存在】

36cd-37ab

tadantargarbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ // AhS 7.36cd

manavas te mahābuddhe viṣṇukarmādhikāriṇaḥ / AhS 7.37ab

ヴィシュヌの意欲に駆り立てられて、ヴィシュヌのカルマ（業）の所有者である彼ら〔8人の〕マヌたちは、その（水の）胎児となる。偉大なる覚者よ。

teṣām rasanopasthavaiśiṣṭyam

【彼らにとっての舌と生殖器官の特殊性】

37cd-38ab

sarasāḥ snehavantaś ca rudhirādīdravānvitāḥ // AhS 7.37cd

jāyante rasanāvantaḥ puṃstrīvyañjanabheditāḥ / AhS 7.38ab

味性を伴うもの、粘着性を持つもの、そして血などの流動性を所持するもの、舌（味覚器官）を持つもの、男女を分けるもの¹⁷が生まれる。

gandhatanmātramahyor utpattiḥ

【香りの微細要素と地の出現】

38cd-39ab

sudarśaneritāt tasmād bhūtādes tadanantaram // AhS 7.38cd

jāyate gandhatanmātraṃ tasmād gandhavatī mahī / AhS 7.39ab

かの〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、すぐ後に、ブーターディ〔・アハンカーラ〕から香りの微細要素が生まれ、それ（香りの微細要素）から香り〔の性質〕を持つ地〔の粗大元素〕が〔生まれる〕。

¹⁷ すなわち生殖器官のこと。

pārthivaguṇabhedāḥ

【地の属性の区別】

39cd

kāṭhinyam gauravam sthairyam ity ādyāḥ pāṛthivā guṇāḥ // AhS 7.39cd

固さ、重さ、不動性（安定性）などが地の属性である。

ghrāṇapāyvor utpattiḥ

【鼻と肛門の出現】

40

vaikārikād ahaṃkāṛāt sudarśanasamīritāt /

ghrāṇam pāyur iti dvandvam jñānakarmātmakam mune // AhS 7.40

〔ヴィシュヌの〕円盤（sudarśana）に促されることにより、ヴァイカーリカ・アハンカーラから、鼻（嗅覚器官）と肛門（排泄器官）という一組の知覚および行為を本質とする〔器官〕が〔生まれる〕。聖者よ。

pṛthivyām manūnām sthitiḥ

【地におけるマヌたち存在】

41ab

bhuvas te garbhatām yānti viṣṇusaṃkalpacoditāḥ / AhS 7.41ab

ヴィシュヌの意欲に駆り立てられることにより、彼ら〔8人のマヌたち〕は、地の胎児となる。

teṣām ghrāṇapāyuvaiśiṣṭyam

【彼らにとっての鼻と肛門の特殊性】

41cd–42ab

guravaḥ sthiraṣaṅghātā asthidantādisaṃyutāḥ // AhS 7.41cd

ghrāṇavantaḥ pāyumantaḥ saṃpūrṇāvayavā mune / AhS 7.42ab

グルたち（＝8人のマヌたち）は、骨や歯などに備わる不動なものの集合であり、鼻（嗅覚器官）を持ち、肛門（排泄器官）を所持し、〔それぞれの〕部分を完全に備える。聖者よ。

samkalpādyutpattiḥ

【意欲などの出現】

42cd-43ab

samkalpaś caiva saṃrambhaḥ prāṇāḥ pañcavidhās tathā // AhS 7.42cd

manaso 'haṃkṛter buddher jāyante pūrvam eva tu / AhS 7.43ab

実に、マナスとアハンクリティ（＝アハンカーラ）、そしてブッディから、それぞれ意欲と熱意と5種のプラーナ（氣息）が、すでに生まれた。

evaṃ manūnāṃ sarvāvayavapūrṇatā

【このようなマヌたちの部分〔を備えた〕完全性】

43cd-44ab

evaṃ saṃpūrṇasarvāṅgāḥ prāṇāpānādisaṃyutāḥ // AhS 7.43cd

sarvendriyayutās tatra dehino manavo mune / AhS 7.44ab

このように、[8人の] マヌたちは、ここにおいて、あらゆる肢部が完全であり、プラーナやアパーナなどを備え、あらゆるインドリヤ（器官）を備えた身体となる。聖者よ。

補遺 D

Lakṣmītantra 第 1–3 章訳註

D.1 Lakṣmītantra 第 1 章「シャーストラ（聖典）の顕現」

（『ラクシュミー・タントラ』の作者）

1

namo nityānavadyāya jagataḥ sarvaḥetave /
jñānāya nistarāṅgāya lakṣmīnārāyaṇātmane // LT 1.1

恒久で完全なるもの、世界の全ての原因であるもの、知恵、不動のもの¹であるラクシュミー・ナーラーヤナのアートマン²に敬礼せん³。

2

khagāsanam ghr̥ṇādhāram⁴idr̥śam somabhūṣitam /
akalaṅkendusūryāgniṃ lakṣmīrūpam upāsmahe // LT 1.2

¹ Gupta の解釈に従えば、ここでは「最高の主宰神が、不変で、不二で、創造の根源であり」、次に「根本的な性質が究極的な知恵として」、そして「絶対者の第 1 の状態は完全な受動性である」ことが述べられる。なぜ不動なのかというと「活動性を伴う創造は単に副次的な側面にすぎない」[Gupta 2000: p. 1] からである。

² Gupta はこのラクシュミー・ナーラーヤナのアートマンについて次に様に説明している。「絶対者は、ラクシュミー・ナーラーヤナ状態より高次なもの、すなわちより理念的なものである。そのラクシュミー・ナーラーヤナ状態において、主宰神とその属性は、あまり微妙なものではなく、擬人化を帯びている。しかしながら後で、この見解はいくらか変えられ、真実の 2 側面の存在として、両者は同じものと言及された。」[Gupta 2000: p. 1]

³ まずはじめに、『ラクシュミー・タントラ』の作者により中心尊格への敬礼がなされる。その次に聖仙アトリとその妻アナスーヤへの賛美がなされる。

⁴ Krishnamacharya は「〔彼が確認した〕全ての写本は誤って “r̥ṇādhāram” と読んでいる」と考え、“ghr̥ṇādhāram” に変更している [Krishnamacharya 1959: p. 1]。

鳥⁵に座す者、憐れみという感情⁶の土台、そのような⁷、ソーマに飾られたもの⁸、汚れなきスーリヤ、インドゥ、アグニ〔の組み合わせ〕⁹、〔これらの〕ラクシュミーの形態を崇拜せん。

3

vedavedāntatattvajñam sarvaśāstraviśāradam /
sarvasiddhāntatattvajñam dharmāṇām āgatāgamam // LT 1.3

(聖仙アトリに呼びかけて) ヴェーダとヴェーダーンタの真実を知る者、あらゆるシャーストラに精通する者、あらゆる教義の真実を知る者、諸々のダルマに関するアーガマ(伝承)に到達した者に〔礼拝する〕。

4

jitendriyaṃ jitādhāraṃ rāgadveṣāvaśīkṛtam /
caturdaśāṅgayogasthaṃ prasamkhyānaparāyaṇam // LT 1.4

インドリヤ(感覚器官)を克服した者、アダーラ(ādhāra)を克服した者¹⁰、貪欲と憎しみに征服されない者、ヨーガの14部門¹¹を確立した者、瞑想¹²に専念する¹³者に〔礼拝する〕。

5

viddhe svarbhānūnā bhānau purā tapanatām gatam /
nidānaṃ tapasāmādyam tejoṛāśimanāmayam // LT 1.5

⁵ Gupta が解釈する通り、ガルダのことである [Gupta 2000: p. 1]。

⁶ ghrṇādhāra は、ヒンディー語では嫌悪など悪い意味で用いられる。

⁷ Gupta は、「īdṛśam」を“shaped like ī”と訳し、「ī」は māyā あるいは Mahāmāyā を象徴し、ここでは、全てに遍在している Śakti である」と説明している [Gupta 2000: p. 1]。しかし、恣意的な読みと思われるので、ここでは字義通りに訳した。

⁸ Gupta は、ソーマは「不死の霊薬か月かどちらか」として、「不死の霊薬はラクシュミーの永遠性を象徴し、月(Śakti の図像のいくらかにおいて部分的に見られる)は時間としての彼女、すなわち全ての破壊者を擬人化している」と説明している [Gupta 2000: p. 1]。

⁹ Gupta は「Śakti の varṇādhvan の顕現」と考えている [Gupta 2000: p. 1]。varṇādhvan とはシャクティの段階の中の varṇa 階梯のことである。

¹⁰ Gupta は「ādhāra cakra の克服、すなわち特殊なヨーガの成就である」と説明している [Gupta 2000: p. 1]。ādhāra cakra は会陰部にあり、その cakra の上に蛇が住まう。

¹¹ 一般的には yogāṅga は 8 つ、すなわち、yama、niyama、āsana、prāṇāyāma、pratyāhāra、dhāraṇā、dhyāna、samādhi である。別の説によれば、先の最後の 4 つに āsana、prāṇasamrodha を加えた 6 つとするものもある。

¹² prasamkhyāna は「数える」も意味するが、瞑想するとき数えていると思われ、それに関係あるかもしれない。

¹³ parāyaṇa (専念する) とは、例えば『バーガヴァタ・プラーナ』などに対して用いる時、24 時間連続で読誦することを意味する。

その昔、太陽が天界の光によって貫かれた時、熱（*tapana*）という性質に到達した者、最初にタパス（苦行）の原因となった者（＝世界初の苦行者）、不滅の光輝の集まりより成る者に〔礼拝する〕。

6

atrim atriguṇopetam atrivargastham avyayam /
prātaḥ saṃdhyām upāsīnam ṛṣiṃ hutahutāśanam // LT 1.6

3種のグナに左右されず、トリヴァルガ¹⁴に立脚せず、不壊なる者であり、朝夕に瞑想し、献供を行っている者¹⁵である聖仙アトリ¹⁶に〔礼拝する〕。

7

pativratānām paramā dharmāpatnī yaśasvinī /
brahmaviṣṇumaheśānām janānī kāraṇāntare // LT 1.7

（アナスーヤーに呼びかけて）夫に貞節な妻たちの中で最高の女性、ダルマに則って結婚した妻（正妻）、別の理由においてブラフマー・ヴィシュヌ・マヘーシャ（シヴァ）達の母¹⁷。

8

devair abhiṣṭutā śāśvac chāntinityā tapasvinī /
viduṣī sarvadharmajñā nityam patimanuvratā // LT 1.8

永遠に神々によって賞賛された女性、寂靜なること常なる女性、苦行者、賢き女性、あらゆるダルマを知る女性、常に夫に従う女性。

9

patyuh śrutavatī tās tā vividhā dharmasaṃhitāḥ /
praṇipātapuraskāram anasūyā vaco 'bravīt // LT 1.9

¹⁴ trivarga は人生の3大目的「*artha*, *kāma*, *dharma* を意味している」[Gupta 2000: p. 2] が、3種のグナすなわち *sattva*, *rajas*, *tamas* を表すこともある。

¹⁵ “*hutahutāśana*” 「献供を行っている者」とは、“*hutāśana*” 「供物を食べるもの」すなわち「火」に“*huta*” 「捧げる」ということである。

¹⁶ 『リグ・ヴェーダ』の多くの讃歌を作ったといわれる偉大な聖者（*Maharṣi*）。ブラフマーの息子であり、*Mānasaputra* あるいは *Saptarṣi* の一人。MBh 12.327.30 では、物質世界を生み出す8つのプラクリティが説かれ、その中にアトリの名が見られる。

¹⁷ 伝説では「アナスーヤーの信仰心を試すために、これら3柱の神たちは自分たちを息子として育てよう彼女に懇願した。彼女は彼らを2歳まで育てて、彼らの望みを叶えた。彼らは彼女の実際の息子—*Rāmāyaṇa*, *Araṇya*, *Kāṇḍa*—として地上へ降りることを約束して、彼らはとても喜んだ。」[Gupta 2000: p. 2]

夫によく従う女性、様々なダルマに従う女性¹⁸。[このような女性である] アナスューヤーは、平伏した後で、言った¹⁹。

Anasūyā —

アナスューヤーは [語った]。

10

bhagavan sarvadharmajña mama nātha jagatpate /
tvatta eva śrutā dharmās te te bahuvīdhātmakāḥ // LT 1.10

(夫アトリに向かって) 尊き人よ、あらゆるダルマを知る者よ、私の主よ、世界の保護者よ。あなたから、実に、ありとあらゆる種類の性質のダルマを [すでに] お聞きしました。

11

jñānāni ca vicitrāṇi phalarūpādibhedataḥ /
etebhyo bhagavaddharmo viśiṣṭo vidhṛto mayā // LT 1.11

そして、結果や形態などの識別によって、様々な知識を [お聞きしました]。それらよりバガヴァッド・ダルマ²⁰は優れていて、[そのことは] 私によって理解された (=そのことを私は理解した)。

12

tvayā kathayatā tās tā bhagavaddharmasamhitāḥ /
sūcitam tatra tatraiva lakṣmīmāhātmyam uttamam // LT 1.12

あなたによりあらゆるバガヴァッド・ダルマ・サンヒター²¹が語られることによって、実に、いたるところで、最上なるラクシュミー・マーハートミヤ (ラクシュミーの偉大さ) が示された。

13

rahasyatvād aprṣṭatvān na tvayā prakatīkṛtam /
tad ahaṃ śrotum icchāmi lakṣmīmāhātmyam uttamam // LT 1.13

¹⁸ Gupta は “having been instructed by her husband in many and diverse religious samhitās” と訳し、religious samhitās は「ここでは法典を示している」と説明している [Gupta 2000: p. 2]。

¹⁹ 次からアナスューヤーの語りが始まり、夫アトリにラクシュミーの偉大さを説いて欲しいと乞う。

²⁰ この bhagavaddharma は「pāñcarātra として知られているバクティ信仰に関する一般用語である」 [Gupta 2000: p. 2] という。すなわち、バガヴァッド・ダルマとはパーンチャラートラ派の教えのことである。

²¹ Gupta によると「種々の他の Dharmasamhitā から区別されたところの諸々の Pāñcarātra Samhitā である」 [Gupta 2000: p. 2] という。

秘密であるということから、問われていないということから²²、あなたによって〔これまで〕明らかにされていなかった。〔しかし〕今、私は最上なるラクシュミー・マーハートミヤ（ラクシュミーの偉大さ）を聞きたいと願う²³。

14

yat²⁴svabhāvā hi sā devī yatsvarūpā yadudbhavā /
yatpramāṇā yadādhārā yadupāyātha yatphalā // LT 1.14

なぜなら、その女神（ラクシュミー）とは、自己の状態であるもの、自己の形態であるもの、根源であるもの、認識手段であるもの、支えであるもの、手段であるもの、結果であるもの²⁵であるからです。

15

tad ahaṃ śrotum icchāmi tvatto brahmaividāṃ vara /
bhaveyaṃ kṛtakṛtyāhaṃ yasya vijñānayogataḥ // LT 1.15

ブラフマンを知る者の中の優上者よ、今、私はあなたからそれ²⁶を聞きたいと願う。それに関する知識のヨーガにより²⁷、私は目的を成し遂げた者になりたい。

16ab

taṃ me darśaya panthānam upasannāsmi adhīhi bho / LT 1.16ab

おお、その道を私のためにお示してください、お教えてください。私は〔あなたの〕お側に控えます。

²² Guptaによると、「秘密の伝承の中で伝授されるために、自分の師匠へ入門儀礼の要望を示すのが志望者の慣習であった」[Gupta 2000: p. 2]という。すなわち、最高の教えは自ら積極的に発するのではなく、乞われることによってはじめて明らかにされるのである。

²³ ラクシュミー・マーハートミヤ（ラクシュミーの偉大さ）は、今まではバガヴァッド・ダルマ・サンヒター、すなわちパーンチャラートラの教えの中で示されていたにすぎないが、ここで直接に明示して欲しいという意味である。

²⁴ ここでそれぞれの関係詞 *yat* を *sā* が受けていると考えられる。あるいは、n.sg.acc. なので、直後の 15 偈の *tat* に受けさせるためとも思われる。

²⁵ Gupta の解釈 [Gupta 2000: p. 2] も併せて考えると、認識手段であるものとは認識手段そのものであると同時に女神を認識する手段でもあり、支えとは宇宙の基盤も表し、手段であるものとは女神と同一化が成し遂げられる手段も表し、結果であるものとは女神を知ることによる結果でもある。これは手段と目的が一緒であり、すなわち女神が全てであるということを表している。

²⁶ 13 偈のラクシュミー・マーハートミヤ（ラクシュミーの偉大さ）を指していると思われる。あるいは、この “*tat*” (n.sg.acc.) は直前の 14 偈の 7 つの “*yat*” (n.sg.acc.) を指しているとも考えられる。

²⁷ Gupta は “Through contact with thy knowledge” [Gupta 2000: p. 2] と訳しているがおそらく意識し過ぎであろう。vijñānayoga は単純に『バガヴァッド・ギーター』などで説かれる 3 つのヨーガ（知識・行為・バクティ）のうちの知識のヨーガと同じような用法であると考えられる。

(『ラクシュミー・タントラ』の作者)

16cd

iti tasyā vacaḥ śrutvā bhagavān atrir abravīt // LT 1.16cd

以上のように彼女の言葉を聞いて、尊者アトリは語った。

Atriḥ —

アトリは〔語った〕²⁸。

17

sādhu saṃbodhito 'smy adya dharmajñe dharmacāriṇi /
mayā pṛṣṭena vaktavyam iti nodghāṭitaṃ purā // LT 1.17

今、私が思い起こされたことは良きかな（＝あなたが、私のことを思い出してくれてありがとう）。ダルマを知る女性よ、ダルマを実践する女性よ。私が聞かれたならば²⁹語るべきことが、かつては明らかにされなかった。

18

arhā tvam asi kalyāṇi lakṣmīmāhātmyam uttamam /
śrotuṃ śrutiśiraḥśreṇihṛdayasthaṃ sanātanam // LT 1.18

幸福なる女性よ。シュルティの一連の頂の中心にあるもの³⁰で、不滅で最上なるラクシュミー・マーハートミヤ（ラクシュミーの偉大さ）をあなたは聞く価値がある³¹。

19

purā malayaśailasthā munayo dharminatparāḥ /
śrutasāttvatavijñānā nāradād devadarśanāt // LT 1.19

²⁸ アナスーヤーの願いに答えてアトリはナーラダ仙の物語を語る。

²⁹ ここは instrumental absolute と解釈した。

³⁰ “i.e. that which is the very gist of the most important Śrutis.”[Gupta 2000: p. 3]

³¹ 次に語られるナーラダの物語もアトリとアナスーヤーの場合と同じように、聖仙たちがナーラダに対してラクシュミーの偉大さを教示して欲しいと願う。そこでナーラダにより神話が語られ、その神話の中で『ラクシュミー・タントラ』が明らかにされる。

昔、マラヤ山に住み³²、ダルマに従う聖者たちは、神々しい³³ナーラダ³⁴からサーツヴァタ³⁵の知恵を聞いた。

20

apṛcchann etam evārthaṃ bhagavantam sanātanam /
nāradam brahmasaṃkāśam bhagavaddharmavedinam // LT 1.20

実に、この同じ目的（質問）を、神聖で不滅であり、ブラフマンに近き者であり、バガヴァッド・ダルマ（＝パーンチャラートラ派の教え）を知るナーラダに〔聖仙たちは〕尋ねた。

Ṛṣayaḥ —

聖仙たちは〔語った〕。

21

bhagavaṃs tvac chruto 'smābhiḥ sāttvataḥ sattvasaṃśrayaḥ /
śuddho bhāgavato dharmo mokṣaikaphalalakṣaṇaḥ // LT 1.21

（ナーラダに向かって）バガヴァットよ。あなたから、清浄であり、バガヴァットに関するダルマ³⁶であり、モークシャ（解脱）という一つの結果を示すものであるサツヴァ性のサーツヴァタ³⁷を私たちは聞いた。

22

tatra tattvārthakathane lakṣmīmāhātmyam uttamam /
sūcitam tatra tatraiva nāpṛṣṭatvāt prakāśitam // LT 1.22

³² Gupta は、ナーラダをマラヤ山という南インドの山脈に関連づけることによって、「Pāñcarātra 派が南インドにおいて大きな影響を及ぼしていたということを示唆している」と指摘している。[Gupta 2000: p. 3]

³³ “Devadarśana” はナーラダの異名でもある。

³⁴ 有名な聖仙で、偉大なる聖者（Devarṣi）である。ブラフマーの息子とも言われ、神と人との間の伝達者とされる。また、『リグ・ヴェーダ』数篇を作ったともいわれる。

³⁵ サーツヴァタ（sāttvata）とはパーンチャラートラのことと考えられる。しかし、サーツヴァタの語源は不明。Monier の *A Sanskrit-English Dictionary* の “sāttvata” の項目には、“sāttvata” は “sat-vat” に関するもので、南インドに住む者たちも意味し、かなり古い時代からクリシュナの意味で使用されているという。あるいは、字義通りとすれば「サツヴァに関するもの」という意味とも考えられる。LT 1.21 ではサツヴァ性であり、バガヴァット・ダルマと同義で用いられている。しかしながら、Gupta のコメントによると後代ではほとんど派生的な意味、すなわち “sāttvata” が “sattvasaṃśraya” の意味で使用されているということ [Gupta 2000: p. 3]、また、パーンチャラートラが初期のころバガヴァタと深い関連があったことを考えると、“sattva” ではなく “sat-vat” が語源として可能性が高いかもしれない。

³⁶ すなわち、パーンチャラートラ派の教えのこと。

³⁷ ここでのサーツヴァタはパーンチャラートラ派のことではなく、その教義のこと、すなわちバガヴァット・ダルマと同義として用いられている。

そこにおいて真実が語られるとき、最上なるラクシュミー・マーハートミヤ（ラクシュミーの偉大さ）はしばしば明らかにされていたが、質問されなかったから示されなかった。

23

icchāmas tad idaṃ śrotuṃ bhavasāgaratāarakam /
padminīvaibhavaṃ sarvaṃ prajñāpayatu no bhavān // LT 1.23

まさに、この俗世間の大海（＝現象世界）を越えさせる者である、あらゆるパドミニ（蓮華）³⁸の栄光を³⁹私たちは聞きたいと願う。あなたが私たちにお示してください。

24

natāḥ sma śirasā pādaḥ tava saṃsāratāarakau /
adhīhi bho mune divyaṃ prapannās tvāṃ ciraṃ vāyam // LT 1.24

輪廻を越えさせる者であるあなた（ラクシュミー）の両足に私たちは頂礼いたします。おお、聖者よ、神々しいものをお教えてください。ずっと、私たちはあなた（ラクシュミー）〔の御御足〕に頼ります。

Nāradaḥ —

ナーラダは〔語った〕。

25

sādhu saṃbodhito 'smy adya munayaḥ saṃśītavratāḥ /
prasannaḥ kathayāmy adya lakṣmītantraṃ sanātanam // LT 1.25

今、私が思い起こされたことは良きかな。〔そのあなた方〕聖仙たちは堅固な誓願⁴⁰を持つ者である。今、喜ばされた私は不滅なる『ラクシュミー・タントラ』を語ろう。

26

yatra sā dr̥śyate devī svarūpaṅavaibhavaḥ /
padminī padmanābhasya mahiṣī padmasaṃbhavā // LT 1.26

³⁸ ここではラクシュミーのことを指す [Gupta 2000: p. 3].

³⁹ Gupta は、“divine attributes of Padminī (i.e. Lakṣmī) which afford protection against the (miseries) of life” と訳している [Gupta 2000: p. 3].

⁴⁰ 宗教的実践を行うという誓願 [Gupta 2000: p. 3].

そこにおいて、女神は本体と自己の属性と自己の機能⁴¹によって顕現する。彼女は、パドマナーバ（蓮華を臍とする者＝ヴィシュヌ）⁴²にとっての〔配偶神である〕パドミニー（蓮華＝ラクシュミー）であり、マヒシー（高貴な女性）⁴³であり、パドマサンバヴァー（蓮華より生まれし女性）である⁴⁴。

27

purā durvāsasaḥ śāpād abhibhūte puraṁdare /
niḥsvādhyāyavaṣaṭkāre bhraṣṭaśrīke jagattraye // LT 1.27

昔、ドゥルヴァーサス⁴⁵の呪いから、プランダラ（＝インドラ⁴⁶）が打ち負かされ、ヴェーダが学習されず、供犠が行われなくなり、三界が吉祥なるものを失ったとき〔があった〕。

28

daridre devavarge ca kṛṣe dharme nisaṁtate /
pitāmahe suraiḥ sārḍhaṁ kṣīrodārṇavam eyuṣi // LT 1.28

そして〔そのとき〕、神々が低落し、ダルマが墮落し、子孫が途絶えてしまったため、ピターマハ（偉大なる祖先＝ブラフマー）は〔他の〕神々と一緒に、クシーローダ海（乳海）に近づいて⁴⁷〔次のことを行った〕。

29

bahūn varṣagaṇān divyāṁs taptvā tīvraṁ mahattapaḥ /
saṁbodhite jagannāthe devadeve janārdane // LT 1.29

〔ブラフマーは〕神々におけるところのとても長い年数、激しい苦行をして、〔そのおかげで、〕ジャガンナータ（世界の支配者）であり、神の中の神であり、ジャナールダナ（かき立てる者）である〔ナーラーヤナ〕が目覚めたので〔あった〕。

⁴¹ 本体・属性・機能という実在の3つの要素はタントラでよく言われるものである。女神はこれらの全てが自己のものとする。すなわち完全なる自立存在である。

⁴² Padmanābha はここで Nārāyaṇa の異名であるが、後の Vyūhāntara などでは Nārāyaṇa の化身であるとも述べられる [Gupta 2000: p. 4]。

⁴³ 牝水牛の意味もある。

⁴⁴ Gupta は、“she manifests herself on a lotus and appears with all her essential attributes and powers”（「彼女は自身を蓮華の上に化身させ、そして、あらゆる自身の本質的属性と共に力で現れる」）と訳している [Gupta 2000: p. 4]。

⁴⁵ アトリとアナスーヤの息子、怒りっぽい聖者で、裸の者と言われる。

⁴⁶ 神々の王。雷を擬人化した神でもあり、『リグ・ヴェーダ』においては最も崇敬を集める英雄神である。

⁴⁷ Monier の *A Sanskrit-English Dictionary* には、“abhyupe” の項目に “to admit as an argument or a position (perf. p. gen. pl. [-upeyuṣām])” の用例が載っている。これをふまえ、√i あるいは ā-√i の pf.pt.m.sg.loc. と考えた。

30

pitāmahena devāya kārye ca vinivedite /
kṣīrode mathite devais tadādiṣṭena vartmanā // LT 1.30

[そこで] ピターマハ（ブラフマー）は、神になすべきことを伝えて、その命令に従って神々は、クシーロード（乳海）を攪拌（かくはん）したとき [次のことが起こった]⁴⁸。

31

pārijāte hayaśreṣṭhe gajendre 'psarasāṃ gaṇe /
kālakūṭe samudbhūte vāruṇyām amṛte tathā // LT 1.31

パーリジャータ（デイゴ）⁴⁹、最良の馬⁵⁰、象の王⁵¹、アプサラスたちの一団⁵²、カーラクタータ（毒）⁵³、ヴァールニー（神酒）⁵⁴、アムリタ（甘露）が生まれたその後で、

32

saha candramasā devyām utthitāyāṃ mahārṇavāt /
padminyām padmanābhasya vakṣaḥsthāyām anantaram // LT 1.32

⁴⁸ Gupta は “deva” と “tad” をヴィシュヌと解釈している [Gupta 2000: p. 4]。すなわち「ヴィシュヌになすべきことを伝えて、ヴィシュヌの命令に従って神々は、クシーロード（乳海）を攪拌（かくはん）した」ということである。

⁴⁹ 和名：デイコ、デイゴ。英語名：Coral tree。学名：Erythrina indica。マメ科。10m 余りに達する落葉性の小高木。原産はインド、マレーシア。ひときわ赤い蝶形花が枝の先にまとまってつく。ヒンドゥー教ではこの木を神聖なものとし、花はシヴァに捧げられ、材はホーマ（護摩）をたくのに使われる [西岡 2002: p. 80-82]。インド神話においては天界（Devaloka）に生える願いを叶える木、Kalpavṛkṣa の一つ。Kalpavṛkṣa は、Mandāra、Pārijāta、Santāna、Kalpavṛkṣa、Haricandana という 5 つがある。Agni Purāna, Chapter 3 によると乳海攪拌のときに誕生したという [Mani 1975: p. 378]。また、その際、この木をインドラ神が所有したが、後にクリシュナに持って行かれ地上にもたらされたという [西岡 2002: p. 82]。

⁵⁰ Uccaiḥśravas のことである [Gupta 2000: p. 4]。Uccaiḥśravas とは、いなくものを意味し、乳海攪拌のとき生まれたインドラの馬である。

⁵¹ Airāvata のことである [Gupta 2000: p. 4]。Airāvata は、白い象で、インドラの乗り物である。乳海攪拌のとき生まれた。

⁵² Gupta は註で “headed by Ūrvaśī” 「ウールヴァシーを先頭として」 ([Gupta 2000: p. 4]) と説明しているが、“Ūrvaśī” (ウールヴァシーに関する) は誤植かもしれない。Urvaśī は Purūravas の妻となった天女のことである。『マハーバーラタ』「アーディパルヴァン」第 3 章に「ウールヴァシーは美しき天女たちの中で第 1 の位を得た」とあるという ([Mani 1975: p. 811]) ので、ウールヴァシーを先頭にして多くのアプサラス (天女) たちが現れたということであろう。

⁵³ 乳海攪拌のときに現れた猛毒。その際、シヴァが呑み込んで、のどにとどめた。そのため、シヴァは Nīlakaṇṭha と呼ばれるようになった。「そして、Kālakūta は世界全てを焼き尽くす炎のように生じた。そのにおいは三界を気絶に追いやった。ブラフマーの要求に対し、シヴァは、完全崩壊から世界を守るために、その毒を飲み込んだ。そしてシヴァは自身の首にそれを留めた。」 (Ādi Parva, Chapter 18) [Mani 1975: p. 372]

⁵⁴ ヴァールニーはヴァルナ (司法神) のシャクティであり、彼の妻あるいは娘として化身する。乳海攪拌のときに生まれ、酒の神とみなされる。

月⁵⁵と共に大海から女神が生まれ、すぐに、〔その女神〕パドミニー（蓮華＝ラクシュミー）はパドマナーバ（蓮華を臍とする者＝ヴィシュヌ）の胸に落ち着いたとき、

33

tayāvalokite devavarge śriyam upeyuṣi /
tayānavekṣite daityavarge caiva parājite // LT 1.33

彼女によって見られた神々は、吉祥さを獲得した⁵⁶が⁵⁷、しかし、彼女によって見向きもされなかったダイティヤ（悪魔）たちは打ち負かされると⁵⁸、すると、

34

svārājyam akhilaṃ prāpya modamāne puraṃdare /
br̥haspatir upāgamyā raḥasīdaṃ vaco 'bravīt // LT 1.34

天界の支配を完全に獲得して⁵⁹、プランダラ（城塞の破壊者＝インドラ）が喜んだとき、ブリハスパティ（神々の師）は近づいて、秘密に、〔インドラに〕この（次の）言葉を語った。

Br̥haspatiḥ —

ブリハスパティは〔語った〕。

35

kāle saṃbodhayāmy etac chṛṇu vākyaṃ puraṃdara /
anvayavyatirekābhyāṃ lakṣmyās te kathitā purā // LT 1.35

私はふさわしい時に知らせる。プランダラ（＝インドラ）よ。この言葉を聞け。積極的と消極的な主張の両方によって、ラクシュミーに関して、あなたのためにすでに語った。

36

mahattā mahatāṃ nātha tasyām āyatate sthitiḥ /

⁵⁵ 乳海攪拌では月と太陽が生まれるが、ここでは太陽が生まれることは説かれていない。月はラクシュミーを象徴するものでもある。

⁵⁶ 28 偈を参照。

⁵⁷ Gupta は “they recovered their lost splendour” 「彼ら（神々）の失った壮麗さを取り戻した」と訳している [Gupta 2000: p. 4]。

⁵⁸ 力あるいは不死を獲得するためにアムリタを生み出すのが乳海攪拌である。神々たちはアムリタを飲むが、悪魔たちはアムリタを飲めず神々たちに打ち負かされる。ここでは、その力の獲得もラクシュミーの恩寵に結び付けていると考えられる。

⁵⁹ 前偈と同じく、ここでも Gupta は “the recovery of his entire kingdom” と訳している [Gupta 2000: p. 4]。おそらく、1.27 を考慮してのことと思われるが、ここだけでは「取り戻す」と訳するのは難しい。

na bhraśyeta yathaivaiṣā tava rājyasthiṭṭh parā // LT 1.36

主よ。諸々の大なるものの偉大なる状態は、彼女に依拠している。実に、あなたのその最高の統治が消失するようなことがないように。

37

tathā yatasva deveśa śaraṇaṃ gaccha padminīm /
eṣā hi śreyaso mūlam eṣā hi paramā gatiḥ // LT 1.37

神の長よ。そのために、パドミニー（蓮華＝ラクシュミー）に守護を願いに行け。なぜなら、彼女は最良の根本であるから。なぜなら、彼女は最上の到達点であるから。

38

śrutinām abhisamdhīś ca saiva devī sanātānī /
eṣaiva jagatām prāṇā eṣaiva jagatām kriyā // LT 1.38

まさに女神である彼女は、シュルティ（天啓聖典）の目的であり、また、永遠である⁶⁰。彼女のみが世界のプラーナ（生命の源）であり、彼女のみが世界の作用である⁶¹。

39

eśaiva jagatām icchā jñānam eṣā parāvarā /
eṣaiva sṛjate kāle saiṣā pāti jagattrayam // LT 1.39

彼女のみが世界の意欲である⁶²。彼女は低次と高次の知である⁶³。彼女のみがふさわしい時に創造する⁶⁴。彼女こそが三界⁶⁵を守護する。

⁶⁰ ヴェーダ聖典は、実は、ラクシュミーについて書いてあるということを主張している。ヴェーダ聖典や初期のウパニシャッド聖典で考えられていたのは、リタ（天則）を受けて *asat*（非實在）から *sat*（實在）が展開するというもの。この *asat* は無というより非存在で、未顕現のカオス状態とも考えられる。ここで説かれているラクシュミーは、質料因であり、動力因であり、そして永遠の實在であり、ヴェーダの時代と思想的に異なるが、絶対的な権威であるヴェーダ聖典に結び付けているのである。

⁶¹ Gupta は “the potent force behind all creation” と訳している [Gupta 2000: p. 5]。

⁶² *icchā*, *kriyā*, *jñāna* は女神（シャクティ）の 3 つの属性である。

⁶³ 段階的ブラフマンのことと思われる。

⁶⁴ すなわち、彼女の意欲しだいで創造が行われるということである。

⁶⁵ *bhūr*（地界）、*bhuvā*（中空間）、*sva*（天空）のことである。インド思想においては世界を基本的に大地・中空間・天空の 3 つに分ける。プラーナなどの一説によると、この 3 つの世界の上に、*mahar*, *janar*, *tapas*, *satya* という天界が順次あり、合わせて 7 つの世界が存在するという。さらに、地上世界の下には、*atala*, *vitala*, *sutala*, *rasātala*, *talātala*, *mahātala*, *pātala* という 7 つの地下世界があり、それとは別に *naraka*（地獄）があるという。地上世界は、7 州 (*dvīpa*) と 7 海 (*samudra*) によって構成され、その中心に *jambu* 州がある。この *jambu* 州が人間の住む場所であり、その中央には *melu* 山がそびえ立つ。*jambu* 州は東西に走る 6 つの山脈と *melu* 山の脇に南北に走る山脈とによりいくつかの国に分けられ、その最南端に *bhārata* 国がある [橋本他 2005: p. 72-73]。Gupta は「あるいは *svarga*（天界）、*marttya*（大地）、*pātala*（地下世界）のことかもしれない」とも説明している [Gupta 2000: p. 5]。

40

jagat saṃharate cānte tattatkāraṇasaṃsthitā /
mātaraṃ jagatām enām anārādhyā mahat kutaḥ // LT 1.40

そして、あらゆるものが依拠する原因である彼女は、最終的に世界を破壊する。世界の母である彼女を崇拜しないで、どうして偉大なるものがあるだろうか。

41

etat tu vaiṣṇavaṃ dhāma yato nāvartate yatīḥ /
eṣā sā paramā niṣṭhā sāmkyānām vidadātmanām // LT 1.41

しかるに、これは、そこから修行者が戻らないヴァイシュナヴァ（ヴィシュヌを信奉する者）の住まい（＝ヴィシュヌ・ローカ）である。彼女こそがアートマンを知る者たちであるサーンキヤ論者たちにとっての究極の状態（住処）である⁶⁶。

42

eṣā sā yoginām niṣṭhā yatra gatvā na śocati /
eṣā pāsupatī niṣṭhā saiṣā vedavidāṃ gatiḥ // LT 1.42

彼女こそがヨーガ行者たちにとっての〔究極の〕状態であり、そこへ至ると、悲しみはない。彼女がパーシュパタ（パシュパティを信奉する者）⁶⁷の〔究極の〕状態であり、彼女こそがヴェーダに精通する者たちの到達点である。

43

pañcarātrasya kṛtsnasya saiṣā niṣṭhā sanātānī /
saiṣā nārāyaṇī devī sthitā nārāyaṇātmanā // LT 1.43

あらゆるパーンチャラートラの人たちにとって、彼女こそが永遠なる〔究極の〕状態である。彼女こそが、女神ナーラーヤニー（ナーラーヤナのシャクティ）であり、ナーラーヤナのアートマンとして存する。

44

prthagbhūtāprthagbhūtā jyotsneva himadīdhiteḥ /

⁶⁶ Gupta が「一致への傾向を示すもの」[Gupta 2000: p. 5] と説明しているように、サーンキヤ学派との折衷を試みている。「アートマンを知る」というのはサーンキヤ学派の最高の到達点である識別智のことであり、それと同等とみなしているのである。続く 42 偈でも、ヨーガ、パーシュパタ派やヴェーダの到達点は『ラクシュミー・タントラ』で説かれているものと同じとし、他派やヴェーダなどの説を組み入れている。

⁶⁷ 多くのシヴァ派の中でパーシュパタ派のみが言及されている理由として、Gupta は「おそらく、パーンチャラートラ派があったとき、同じ地域の中で、影響力が強かったという理由であろう」としている [Gupta 2000: p. 5]。

tais tair jñānaiḥ pṛthagbhūtaiḥ āgamaiś ca pṛthagvidhaiḥ // LT 1.44

〔彼女は〕月にとっての月明かりのごとく、単独存在（ナーラーヤナとは別の存在）であると同時に〔ナーラーヤナと〕同一存在である。別のあらゆる知識によって、そして、〔この書とは〕異なるあらゆるアーガマ（聖典）によっても〔彼女は崇拝されている〕。

45

ekaivaiṣā parā devī bahudhā samupāsyate

tām upehi mahābhāgām śaraṇaṃ padmasambhavam // LT 1.45

唯一で最高の女神である彼女は、様々に崇拝されている。マハーバーガー（至福なる女性）であり、パドマサンバヴァー（蓮華より生まれし女性＝ラクシュミー）である彼女のもとに守護を受けに行け。

46

tapoviśeṣair vividhais tais taiś ca niyamaiḥ śubhaiḥ /

ārādhya mahiṣīm viṣṇoḥ sthīrīkuru nijaśriyam // LT 1.46

あらゆる種類の特殊な（個別の）タパス（苦行）によって、清浄なるニヤマ（勸戒）⁶⁸によって、ヴィシュヌのマヒシー（高貴な女性＝ラクシュミー）を崇拝して、自己の吉祥さを堅固にせよ⁶⁹。

47

eṣā prasādasumukhī svaṃ padaṃ prāpayiṣyati /

abhīpsitārthadā devī kāmīnām api kāmāḥ // LT 1.47

この女神は、恩寵を持つ美しき女性であり、願望を成就させる者であり、また、愛するものたちにとっての愛を与えるものであり、〔彼女〕自身の足元に〔人を〕導く⁷⁰。

Nāradaḥ —

ナーラダは〔語った〕。

⁶⁸ ヨーガにおける 8 つの修行体系の二番目。積極的に行うべき宗教的心得で、心身の清浄、満足、苦行、読誦、自在神への祈念の 5 つがある [橋本他 2005: p. 86]。

⁶⁹ Gupta は、“by performing the appropriate rites for self-restraint see to it that thou ensurest thy destiny” と訳している [Gupta 2000: p. 5]。

⁷⁰ すなわち、女神の恩寵によって彼女のもとに導かれるということで、それは解脱を意味している。Gupta は “This goddess fulfils every desire, satisfies the yearnings of the passionate and leads (the adept) to the state of self(-realization)” と訳し、「ウパニシャッドとヨーガの説の両方を反映している」と説明している [Gupta 2000: p. 5]。

48

iti saṃbodhitāḥ śakro guruṇā guruṇā svayam /
ārādhayitukāmas tāṃ kṣīrodasyottaraṃ yayau // LT 1.48

以上のように、グルの中のグル（神々の師＝ブリハस्पティ）自身によって思い起こされたシャクラ（＝インドラ）は、彼女（ラクシュミー）を崇拜しよう欲し、クシーローダ（乳海）の北部に向かった⁷¹。

49

tatra divyaṃ tapas tepe bilvamūlaniketanaḥ /
ekapādasthito maunī kāṣṭhabhūto 'nilāśanaḥ // LT 1.49

そこにおいて、[インドラは] ビルヴァ⁷²のふもとを住まいとし、片足で立つ、無言の誓いを守る、杭のようになる（不動となる）、空気を糧にする（断食をする）という神聖なる苦行を行った。

50

ūrdhvadṛgbāhuvaktraś ca niyato niyatātmavān /
divyaṃ varṣasahasraṃ vai tapas tepe suduścaram // LT 1.50

そしてさらに、視線、腕、顔を上に向けて固定して、自己が持つものを抑制した。[このように、インドラは] 神における 1000 年の間⁷³、実に、激しい苦行を行った。

51

tapaso 'vabhr̥the tasya sā devī padmasaṃbhavā /
prasannavadanā viṣṇor mahiṣī darśanaṃ yayau // LT 1.51

彼（インドラ）のタパス（苦行）が成就した⁷⁴とき、女神パドマサンバヴァー（蓮華より生まれし女性）であり、ヴィシュヌのマヒシー（高貴な女性）である彼女（ラクシュミー）は、喜びの表情で、姿を現した。

⁷¹ ブリハस्पティは天の神々の導師であり、クシーローダは伝説上の天の海である [Gupta 2000: p. 6]。

⁷² 和名：ベルノキ。英語名：Stone-apple。学名：Aegle marmelos。ミカン科。高さ 9m ほどになる落葉性中高木。厚い殻を持つ 6～10cm ほどの果実をつける。豊かな丸みを持った実はラクシュミーの乳房にたとえられる。一方、ベルノキはシヴァ神を表し、3 枚の小葉は三叉戟に見たてられると考えられている。この木の葉はシヴァの祭礼には欠かせず、シヴァの社のそばにはたいていベルノキが植えられている [西岡 2002: p. 23–26]。

⁷³ Gupta は “for two thousand divine years” と訳している [Gupta 2000: p. 6] が、誤りである。

⁷⁴ “avabhr̥tha” は、供犠の終わりや成就、浄化儀礼の終わりの沐浴を意味している。Gupta は “final bath” と訳し「沐浴による苦行の終わりを示している」と説明している [Gupta 2000: p. 6]。

52

agrataḥ saṁsthitāṃ devīm jagatāṃ mātaram parāṃ /
tāṃ śakraś cakṣuṣā vīkṣya vismayam paramam yayau // LT 1.52

〔彼の〕前に立った世界の母であり、至高の女神である彼女を、シャクラ（＝インドラ）は目で見て、非常に驚いた。

53

vihvalaḥ praṇipatyātha prāñjalir balasūdanaḥ /
śriyam sūktena tuṣṭāva padminīm pākaśāsanaḥ // LT 1.53

当惑した〔彼は〕、〔彼女に〕敬礼して、次に、合掌したバラスーダナ（バラの殺害者）⁷⁵であり、パーカシャーサナ（パーカの調伏者）⁷⁶である〔インドラ〕は、良き言葉によって、吉祥なるパドミニ（蓮華＝ラクシュミー）を賞賛した。

（『ラクシュミー・タントラ』の作者）

54

ekāntabhāvam āpannam avyājām bhaktim āsthitam /
taṃ vīkṣya jagatāṃ mātā vākyam etad uvāca ha // LT 1.54

唯一の存在を得て、誠実なバクティ（信愛）を確立した彼を、世界の母（ラクシュミー）は見て、この（次の）言葉を語ったのであった。

Śrīḥ —

シュリーは〔語った〕。

55

vatsa śakra prasannāsmi tapasā tava suvrata /

⁷⁵ アタラと呼ばれる地下世界に住んでいる。96種類の呪術を作り出し、アスラたちにそれらを与えた。アスラたちはそれらを用いて神々に甚大な災難をもたらした。かつて、バラがインドラを打ち破ったとき、インドラは彼に保護を求め、彼を賞賛した。これに喜んだバラはインドラに望むものを尋ねた。狡猾なインドラはバラの身体を要求した。少しもためらわず、バラは自身の体を切り刻んで彼に与えた。インドラは分断された体をあちこちに投げ捨てた。全ての場所で、分断された体は金剛石の鉢床となった。彼の死後、妻ブラバーヴァティーは再生を願ったが叶わなかった。しかし、彼の声を聞くことができ、それに従い肉体を捨てバラと合一し、川となった。（Padma Purāṇa, Uttara Khaṇḍa, Chapter 6）[Mani 1975: p. 99]

⁷⁶ パーカは強力なアスラである。かつてこのアスラは巨大な軍隊を集め、インドラに対抗して戦いを挑んだ。激しい戦いは何日も続いたが、軍隊は破壊され、パーカは殺された。それ故インドラは Pākaśāsana と呼ばれるようになった。（Chapter 70, Vāyu Purāṇa）[Mani 1975: p. 545]

varam vṛṇu mahābhāga kim iṣṭam karavāṇi te // LT 1.55

愛しき子シャクラ（＝インドラ）よ。あなたの苦行によって私は喜んだ。誓い堅固なる者よ。願いを頼みなさい。マハーバーガ（至福なるもの）よ。私はあなたのためにどのような望みを叶えようか。

Śakraḥ —

シャクラは〔語った〕。

56

adya me tapaso devi yamasya niyamasya ca /
sadyaḥ phalam avāptaṃ yad dṛṣṭā bhagavatī mayā // LT 1.56

女神よ。今、ヤマ（禁戒）⁷⁷とニヤマ（勸戒）という私のタパス（苦行）により、まさに今、私によって尊き女性〔であるあなた〕が現れるという結果を獲得した⁷⁸。

57

yadi vāpi varo deyas tvayā me parameśvari /
tattvaṃ kathaya deveśi yāsi tvam yat prakārikā // LT 1.57

至高の主宰女神よ。それでもなお、もし、あなたによって私のために願いが授けられるというなら、あなたが〔あらゆるものの〕根本であるという真理を語ってください。神々の支配者よ。

58

yat pramāṇā yad ādhārā yad upāyā sanātānī /
yasya tvam tena vā devi sambandhas tava yad vidhaḥ // LT 1.58

〔また〕認識手段であるもの、支えであるもの、永遠なる手段であるもの⁷⁹、そのあなたにとって、彼⁸⁰とあなたの関係のあり方を〔語ってください〕。女神よ。

59

yac cānyad veditavyaṃ te nānāśāstropabṛṃhitam /
kathayeśvari tat sarvam upasanno 'smy adhīhi bho // LT 1.59

⁷⁷ ヨーガの修行階梯の一番目。修行にのぞむ者が遵守すべき道徳的心得で、不殺生、正直、不盗、不淫（禁欲）、不貪（必要以上のものを所有しないこと）の5つがある [橋本他 2005: p. 86]。

⁷⁸ 女神が現れるということで、目的はすでに成就したということ。

⁷⁹ 14 偈参照。

⁸⁰ おそらく、ナーラーヤナのことを指すと考えられる。

そしてさらに、様々なシャーストラ（聖典）に広がったあなたの知られるべきことを、全て語ってください、お教えください。おお、主宰女神よ。私は〔あなたの〕お側に控えます。

(Nāradaḥ —)

〔ナーラダは語った。〕

60

iti prasāditā tena vatseneva payasvinī /
snihyatā manasā padmā pākaśāsanam abravīt // LT 1.60

以上、乳牛が子牛によって喜ぶように、彼（インドラ）の信愛する心によって〔喜んだ〕パドマー（蓮華＝ラクシュミー）は、パーカシャーサナ（パーカの調伏者＝インドラ）に語った。

Śrī —

シュリーは〔語った〕。

61

śṛṇu śakra mahābhāga yā hy ahaṃ yat prakārikā /
yasyāhaṃ tena vā yādṛk saṃbandho mama vṛtrahan // LT 1.61

シャクラ（＝インドラ）よ。マハーバーガ（至福なるもの）よ。私が〔あらゆるものの〕根本であるということ、また、その私にとって、彼⁸¹と私の関係がいかなるものかを聞きなさい。ヴリトラの殺害者⁸²よ。

⁸¹ ここもおそらく、ナーラーヤナのことを指していると思われる。

⁸² 『リグ・ヴェーダ』において、ヴァジュラ（金剛杵）を投じて水を塞き止める悪竜ヴリトラを殺す彼の武勇は、繰り返し讃えられ、それ故ヴリトラハンと呼ばれる。ヴリトラは天地創造以前に存在するカオスを表し、インドラが悪竜を殺すことにより周期的に天地開闢の技を繰り返しているという。『マハーバーラタ』でも、インドラがヴリトラを殺す話が見られるが、インドラの復権という物語に詳しい。トヴァシュトリ（工巧神）はインドラを害するために3面を持つヴィシュヴァルーバを造った。その1つの口で全世界を飲み込むかのように見え、それを恐れたインドラはヴァジュラによって彼を殺害した。トヴァシュトリは、息子の復讐をするためにヴリトラを生み出し、ヴリトラにインドラは破れ、撤退する。神々はヴィシュヌに助けを求め、彼の助言によりヴリトラと偽りの和平を結ぶ。その際、ヴリトラと、乾いたものや湿ったもの、昼も夜も、ヴァジュラによっても殺されないなどの条約を結んだ。しかし、黎明（あるいは黄昏）のときに、インドラは泡を投げ、そこに入り込んだヴィシュヌが彼を殺した。卑劣な策とバラモン（ヴィシュヴァルーバ）殺しに打ちひしがれ、インドラは水中に隠れる。そこで、ナフシャが神々の王となるが傲慢によりその地位を失い、ヴィシュヌにより罪を浄化されたインドラは神々の王に復権した。インドラは『マハーバーラタ』の時代でも神々の王であるが、すでに地位の低下が見られ、力が弱まってい

iti śrīpāñcarātrasāre lakṣmītantra śāstrāvātāro nāma
prathamo 'dhyāyaḥ

以上、パーンチャラートラ派の精髓『ラクシュミー・タントラ』における
第1章「シャーストラ（聖典）の顕現」⁸³。

D.2 *Lakṣmītantra* 第2章「清浄なる道の明示」

Śrīr uvāca —

シュリーは語った⁸⁴。

1

asti nirduḥkhaṇiḥsīmasukhānubhavalakṣaṇaḥ /
paramātmā paraṃ yasya padaṃ paśyanti sūrayaḥ // LT 2.1

聖仙 (sūri) たちが認める至高のアートマン (paramātman) の最高の境地 (pada) は⁸⁵、
苦しみを離れ、計り知れなく、至福の経験という特徴を持つものである⁸⁶。

2

kaścit keṣāṃcid ātmā syāt tasyānyeṣāṃ ca kaścana /
tasyāpy anya itītham tu yatraiṣā vyavatiṣṭhate // LT 2.2

あるアートマンは他の何ものかのものであり、またそれにとってもそれも別の何ものかの
ものである。それにとってもまた別の、というように、ここにおいて、彼女は〔それら
個々のアートマンとは〕異なる⁸⁷。

る [上村 1992: pp. 19–21, 114–134]。

⁸³ 以上のように、(1) インドラに願われラクシュミーが『ラクシュミー・タントラ』を明らかにする、(2) 聖
仙たちがナーラダに頼み彼が(1)の神話を語る、(3) その(2)の物語をアナスーヤに乞われアトリが教示
する、という三重の構造になっている。ナーラダとアトリというヴェーダに登場する偉大な聖仙に語らせ
ることによって、この『ラクシュミー・タントラ』の権威付けを行っているのである。

⁸⁴ 第1章においてインドラより『ラクシュミー・タントラ』を示して欲しいと乞われたラクシュミーが、そ
の教えを語る場面から、第2章は始まる。

⁸⁵ Gupta は「有名なヴェーダマントラの繰り返し : tad viṣṇoḥ paramam padam sadā paśyanti sūrayaḥ divīva
cakṣur ātatam (Ṛg V. I. 22. 20)」と説明している [Gupta 2000: p. 8]。

⁸⁶ 第1偈では、創造の最初の状態は至高のアートマン (paramātman) から始まる、ということが示されて
いる。

⁸⁷ 個々のアートマンは同じアートマンであるにも関わらず異なるものであるが、ここではさらに、それら
個々のアートマンと彼女すなわちラクシュミーは、性質が同じであるが異なるものであるということを示
していると考えられる。そして、そのラクシュミーを LT 2.1 で説かれる至高のアートマンと同一視してい
る。そのために「彼女」という語を用いているのであろう。Krishnamacharya による註釈では、「アートマ
ンは。統御するものという意味である。“eṣā”とは。個々に異なるもの (vyavasthā) ということが省略さ

3

adhvanām adhvanah pāraṃ paramātmānam ūcire /
 ahaṃ nāma smṛto yo 'rthaḥ sa ātmā samudīryate // LT 2.3

至高のアートマンをあらゆる道にとっての道の彼岸と言い⁸⁸、わたし (aham) として意味が想起されるもの、それがアートマンであると語られる⁸⁹。

4

anavacchinnarūpo 'haṃ paramātmēti śabdyate /
 kroḍīkṛtam idaṃ sarvaṃ cetanācetanātmakam //LT 2.4

束縛から離れたものとしてのわたし (aham) が至高のアートマンと呼ばれる⁹⁰。〔その至高のアートマンは〕このあらゆる知覚できる性質のものとはできない性質のものを包含する⁹¹。

5

yena so 'haṃ smṛto bhāvaḥ paramātmā sanātanaḥ /
 sa vāsudevo bhagavān kṣetrajñāḥ paramo mataḥ // LT 2.5

れている。別のものである、すなわち完成しているのであり、それが至高のアートマンという前者 (1 偈) と結びつく。] (“ātmā. niyantety arthaḥ. eṣeti. vyavastheti śeṣaḥ. vyavatiṣṭhate samāpnoti, sa paramātmēti pūrveṇānvayaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 6]) と説明される。

⁸⁸ グプタは *Kaṭha Upaniṣad* 1.3.9 を例に挙げ、「この概念はウパニシャッドに遡る」としている [Gupta 2000: p. 8]。

⁸⁹ 至高のアートマンとアートマンは別ものである。最高処において、活動せず、彼岸であるのが、至高のアートマンであるが、自身をわたしとして想起するときにアートマンになるのである。

⁹⁰ LT 2.3 で説かれている「わたし」と異なることに注意しなければならない。〈「わたし」として意味が想起されるもの〉がアートマンであり、〈束縛から離れた「わたし」〉が至高のアートマンである。ラクシュミーは至高のアートマンと同一であり、その在り方の違いを示しているのである。

⁹¹ 知覚できる性質のものとはできない性質のものとは、精神性のものと非精神性のものを指すと考えられる。前者はこころを持つものであり、生物のことである。一方、後者はこころを持たないもので、無生物のことである。そして、至高のアートマンは、あらゆる精神性のものと非精神性のもの、つまり世界の一切を支配するのである。

永遠なる至高のアートマンの状態であるそれはわたし（*aham*）であると想起することによって、彼はヴァースデーヴァ⁹²、バガヴァット、クシェートラジュニャ⁹³、最高存在（*parama*）とみなされる⁹⁴。

6

viṣṇur nārāyaṇo viśvo viśvarūpa itīryate /
ahaṃtayā samākrāntaṃ tasya viśvam idaṃ jagat // LT 2.6

〔また彼は〕ヴィシュヌ、ナーラーヤナ⁹⁵、ヴィシュヴァ、ヴィシュヴァルーパーと呼ばれる。彼（＝ナーラーヤナ）の「わたし性」（*ahaṃtā*）によって、この世界全てが把握されている⁹⁶。

7

vastvavastu ca tan nāsti yan nākrāntam ahaṃtayā /
idaṃtayā yad ālīḍham ākrāntaṃ tad ahaṃtayā // LT 2.7

そして、「わたし性」（*ahaṃtā*）によって満たされないもの、それは実在の物質にも非実在（＝未顕現）の物質にも存在しない。「これ性」（*idaṃtā*）によって解消される（示され

⁹² ヴァースデーヴァとヴィシュヌ派についてバンダルカル氏は次のように説明する。サートヴァタ族、別名ヴリシュニ族において、ヴァースデーヴァは最高神として崇められていた。この一族にはヴァースデーヴァやサンカルシャナという戦士がいたという。この宗教は広く信仰されるようになり、やがてクリシュナとも同一視され、ヴァースデーヴァ・クリシュナとも呼ばれるようになった [バンダルカル他 1984: pp. 24–31]。さらに、「ヴェーダの神に起源をもつヴィシュヌ神の系統」、「宇宙的・哲学的神であるナーラーヤナの系統」、「歴史的な神格であるヴァースデーヴァの系統」という3つの系統が明確にひとつの流れを形作り、さらに第4の系統として「牛飼いのクリシュナの系統」が加わり、ヴィシュヌ派が形成されていくという [バンダルカル他 1984: p. 105]。

⁹³ 知田者とも訳される。*kṣetra*（土地）を *jñāḥ*（知る者）という意味で、*kṣetra* とはプラクリティあるいは物質原理を指し、*kṣetrajñāḥ* とはプルシャすなわち精神原理のことである。

⁹⁴ 至高のアートマンから始まる創造の次の段階であり、無活動であった至高のアートマンが、「わたしである」と自己を認識することによって、自己を最高神として顕現させるのである。これが創造の2番目の段階である。

⁹⁵ ナーラーヤナ神は、「ナーラ（ナラの集団＝人々）が赴く休息所（目的地）」や、「ナーラ」を男らしい者としての神々と解して「神々の休息所（目的地）」を意味すると言われる。あるいは原初の水と結びつけられ、「水はナラの息子だからナーラーといわれ、この水がハリ神の休息所だからハリ神はナーラーヤナと呼ばれるのだ」と説明されている。ナーラーヤナは、ブラーフマナ文献の時代には最高神の地位に登っており、ヴァースデーヴァ崇拜が発展するようになると、その2神は同一視されるようになっていったという [バンダルカル他 1984: pp. 90–99]。

⁹⁶ *Krishnamacharya* による註釈では、「別のところで、シャクラ（インドラ）は「ヴィシュヌであるここなるあなたによって、水、世界、動くものと動かないものは遍満されている」と語っている（“*aha ca śakro 'nyatra — 'tvayaitadviṣṇuṇā cāmba jagadvyāptam carācaram' iti.*” [Krishnamacharya 1959: p. 6]）と説明される。ここではおそらく、ナーラーヤナは、「わたし性」（*ahaṃtā*）すなわち自身を自身として認識することによって、全世界に行き渡っているということが説かれているのであろう。

る?) もの、それは「わたし性」(ahamṭā) によって満たされる⁹⁷。

8

sarvataḥ śānta evāsau nirvikāraḥ sanātanaḥ /
ananto deśakālādiparicchedavivarjitaḥ // LT 2.8

実に彼(ナーラーヤナ)は、完全に静寂で、不変化で、永遠であり、終わりがなく、場所や時間などの制限から自由である。

9

mahāvibhūtir ity ukto vyāptiḥ sā mahatī yataḥ /
tad brahma paramaṁ dhāma nirālambanabhāvanam // LT 2.9

偉大なる彼女(ラクシュミー)は遍充である故に、「大いなる力の顕現」(mahāvibhūti) と呼ばれる。それ⁹⁸がブラフマンであり、最高の居処、独立した本質⁹⁹である。

10

nistaraṅgāmṛtāmbhodhikalpaṁ śaḍguṇyam ujjjvalam /
ekaṁ taccidghanaṁ śāntam udayāstamayojjhitam // LT 2.10

[ブラフマンは] 凧いだアムリタ(不死の霊薬)の海と等しいものであり、6つのグナ¹⁰⁰が集合したものであり、輝くものである、その唯一の最高精神(cidghana)は、静寂であり、生起と消滅から離れている。

11

apṛthagbhūtaśaktitvād brahmādvaitaṁ tad ucyate /
tasya yā paramā śaktir jyotsneva himadīdhiteḥ // LT 2.11

⁹⁷ Krishnamacharya の註釈では、「“idaṁtāyā” [云々] とは。“idam” という言葉の意味によって、すべての世界は知られるという意味である」(“idaṁtāyēti. idaṁśabdārthatayā pratītaṁ sarvaṁ jagad ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 6]) と説明される。「これ性」(idaṁtā) とは、ものをものとして成立させるもの、個別に成り立つものと考えられ、名称とも解せるであろう。“ālīdha” は「舐められる」「食べられる」「解体される」などを意味する。「これ性」(idaṁtā) によって解体される(示される?) ものとは、この世界のあらゆるものを意味すると考えられる。そして、それらが「わたし性」(ahamṭā) によって満たされる、すなわち全世界に「わたし性」(ahamṭā) が遍満していると考えられる。あるいは、解体・解消されるということは、個性性がなくなることであり、あらゆる世界が同一になるということの意味しているとも考えられる。

⁹⁸ ここでは、ラクシュミーとブラフマンを同一視している。

⁹⁹ すなわち、他に依存することなく存在するのである。

¹⁰⁰ シャクティの6つのグナ(属性)、すなわち、(1) 知識(jñāna)、(2) 自在力(aiśvarya)、(3) 潜在力(śakti)、(4) 力(bala)、(5) 勇猛さ(vīrya)、(6) 光輝(tejas) である。

存在物とシャクティは不可分であるから、そのブラフマンは不二であると言われる。彼（ナーラーヤナ）にとって、最高のシャクティは、月にとっての光線のごとくである¹⁰¹。

12

sarvāvasthāgatā devī svātmabhūtānapāyinī /
ahamṭā brahmaṇas tasya sāham asmi sanātānī // LT 2.12

あらゆる状態に到達した女性、女神、自己の存在が堅固なる女性（自己の実在が不滅なる女性）であり、そのブラフマンにとっての「わたし性」（ahamṭā）である彼女（シャクティ）は、永遠なるわたし（aham）である。

13

ātmā sa sarvabhūtānām ahaṃbhūto hariḥ smṛtaḥ /
ahamṭā sarvabhūtānām aham asmi sanātānī // LT 2.13

彼（ナーラーヤナ）はアートマンであり、あらゆる存在物にとっての「わたしという存在」（ahaṃbhūta）であり、ハリであると認められている。あらゆる存在物にとっての「わたし性」（ahamṭā）は、永遠なるわたし（aham）なのである¹⁰²。

14

yena bhāvena bhavati vāsudevaḥ sanātanaḥ /
bhavatas tasya devasya sa bhāvo 'ham itīritā // LT 2.14

その存在するものとしての神にとって、その（神の）状態は、わたし（aham）と言われている。その状態によって永遠なるヴァースデーヴァが存在してる¹⁰³。

15

bhavadbhāvātmakam brahma tatas tac chāśvataṃ padam /
bhavan nārāyaṇo devo bhāvo lakṣmīr aham parā // LT 2.15

¹⁰¹ Krishnamacharya の註釈では、「自己と不可分に確立したシャクティである「わたし性」（ahamṭā）に限定されるということから、その限定されたものが、まさに唯一のブラフマンであり、真実であるという意味である」（“svāpṛthaksiddhśaktyahamṭāviśiṣṭatvāt tadviśiṣṭam brahmaikam eva tattvam ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 6]）と説明される。

¹⁰² 「わたし」（aham）は、「わたしという存在」（ahaṃbhūta）＝「わたしという実在」（ahamartha）と「わたし性」（ahamṭā）という2側面があるが、シャクティである「わたし性」（ahamṭā）を、属性でありながら永遠なる「わたし」（aham）という最高処と同置している。

¹⁰³ ラクシュミーが存在するから、ヴァースデーヴァが存在するのである。

存在するものと状態という〔2つの〕本質がブラフマンであり、それ故にそれは永遠の境地である。存在がナーラーヤナ神であり、状態¹⁰⁴がラクシュミーであり、わたし（*aham*）であり、最高処（*parā*）である。

16

lakṣmīnārāyaṇākhyātam ato brahma sanātanam /
ahamṭayā samākrānto hy ahamarthaḥ prasidhyati // LT 2.16

それ故、永遠なるブラフマンをラクシュミー・ナーラーヤナと呼ぶ。なぜなら、「わたし性」（*ahamṭā*）によって遍満され、「わたしという実在」（*ahamartha*）が完成するから。

17

ahamarthasamutthā ca sāhamṭā parikīrtitā /
anyonyenāvinābhāvād anyonyena samanvayāt // LT 2.17

彼女（ラクシュミー）は、「わたしという実在」（*ahamartha*）から生起するものであり、「わたし性」（*ahamṭā*）と言われる。互いに離れていないから、互いに結合しているから¹⁰⁵。

18

tādātmyaṃ vidhī sambandhaṃ mama nāthasya cobhayoḥ /
ahamṭayā vināhaṃ hi nirupākhyo na sidhyati // LT 2.18

わたしと支配者（*nātha*）という両者の関係は同性質であること¹⁰⁶を知れ。なぜなら、「わたし性」（*ahamṭā*）なしに、わたし（*aham*）は存在せず、完成することはない。

19

ahamarthaṃ vināhamṭā nirādhārā na sidhyati /
bhavadbhāvātmakaṃ rūpaṃ samastavyastagocaram // LT 2.19

「わたしという実在」（*ahamartha*）なしには、「わたし性」（*ahamṭā*）は支えがなく、完成しない。存在するもの（ナーラーヤナ）と状態（ラクシュミー）から成る形態は、全体として、また個々のものとして認識される¹⁰⁷。

¹⁰⁴ *bhāvaḥ*は男性形であるが、ラクシュミーに対応する。

¹⁰⁵ 実在が先にできて、そこに属性が付与される。

¹⁰⁶ ラクシュミーとナーラーヤナは同じ存在であるということ。

¹⁰⁷ 「わたし」には2つの側面がある。すなわち「本体としてのわたし」と「機能ないし属性としてのわたし」である。「本体としてのわたし」は、「わたしという実在」（*ahamartha*）であり、ナーラーヤナである。「機能ないし属性としてのわたし」とは、「わたし性」（*ahamṭā*）であり、ラクシュミーである。両者は同一であるが別のものであり、片方が欠けることは想定されていなく、両者は互いに一方がなくては存在できない、すなわち両者は互いに限定し合っているのである。

20

parokṣam aparokṣam ca jagati pravicitintyate /
nirunmeṣe nirunmeṣā sāhaṁtā parameśvarī // LT 2.20

世界において、見えないものも見えるものも、〔人々によって〕考えられている。彼女は閉眼（未顕現）のときに閉眼（未顕現）である¹⁰⁸。〔その彼女は〕「わたし性」（ahaṁtā）である最高の主宰女神（parameśvarī）である。

21

croḍīkrtyākḥilaṁ sarvaṁ brahmaṇi vyavatiṣṭhate /
unmeṣas tasya yo nāma yathā candrodaye 'mbudheḥ // LT 2.21

あらゆるものを包含するすべて（の世界）は、ブラフマン（の状態）において存在している。海から月が昇るときのように、それ（ブラフマン）がまさに開眼（unmeṣa）であり〔それは次のものである〕。

22

ahaṁ nārāyaṇī śaktiḥ sisṛkṣālakṣaṇā tadā /
nimeṣas tasya yo nāma saṁhṛtau paramātmanaḥ // LT 2.22

そのとき¹⁰⁹、〔それは〕わたし（ahaṁ）であり、ナーラーヤナのシャクティ（nārāyaṇī śaktiḥ）であり、創造のための意欲を特徴とするものである。至高のアートマンにとって、世界の還滅のときに、それ（ブラフマン）がまさにの閉眼（nimeṣa）であり〔それは次のものである〕。

23

ahaṁ nārāyaṇī śaktiḥ suṣupsālakṣaṇā hi sā /
sisṛkṣāyā mamodyantyā devāl lakṣmīpateḥ svayam // LT 2.23

その彼女が¹¹⁰、わたし（ahaṁ）であり、ナーラーヤナのシャクティ（nārāyaṇī śaktiḥ）であり、まさに眠り（＝還滅）のための意欲を特徴とするものである。創造のための意欲からわたし（ahaṁ）が生起することによって、ラクシュミーの主（夫）である神（＝ナーラーヤナ）から自分自身で〔生起する〕。

24

¹⁰⁸ ブラフマンが未顕現のときには顕現しないということである。あるいは顕現したいときに顕現するとも考えられるかもしれない。

¹⁰⁹ 前偈 21 の C パダ “yah” を受けて。

¹¹⁰ 前偈 22 の C パダ “yah” を受けて。

avyāhatam asaṃkocam aiśvaryaṃ pravijrmbhate /
jñānaṃ tatparamaṃ brahma sarvadarśi nirāmayam // LT 2.24

〔その彼女は〕 妨げられず、抑圧されない「自在力」(aiśvarya) が、満ちあふれている。かの究極の「知識」(jñāna) がブラフマンであり、全てを見るもの、汚されないものである。

25

jñānātmikā tathāhamtā sarvajñā sarvadarśinī /
jñānātmakaṃ paraṃ rūpaṃ brahmaṇo mama cobhayoḥ // LT 2.25

同様に、「わたし性」(ahamtā) の「知識」(jñāna) の本質は、全てを知るものであり、全てを見るものである。ブラフマンとわたしの両者の「知識」(jñāna) の本質は最高の形態である。

26

śeṣam aiśvarya-vīryādi jñānadharmāḥ sanātanaḥ /
aham ity āntaraṃ rūpaṃ jñānarūpaṃ udīryate // LT 2.26

他の「自在力」(aiśvarya) や「勇猛さ」(vīrya) などは「知識」(jñāna) の特質（属性、dharma）であり、永遠である。「知識」(jñāna) の形態は、わたし (aham) という固有の形態であると言われている¹¹¹。

27

prakāśakādikaṃ rūpaṃ sphaṭikādisalakṣaṇam /
atas tu jñānarūpatvaṃ mama nārāyaṇasya ca // LT 2.27

〔その「知識」(jñāna) の形態は〕 水晶などの特徴を伴っている輝きなどの形態であり、それ故に、わたしとナーラーヤナの「知識」(jñāna) の形態を持つものである。

28

avyāhatir yad udyatyās tad aiśvaryaṃ paraṃ mama /
iccheti socyate tattattatvaśāstreṣu paṇḍitaiḥ // LT 2.28

¹¹¹ シャクティの6つのグナ（属性）のうち、「知識」(jñāna) が彼女の本質であり、それ以外の5つは付随するものである。

生起する (*udyatī*) [わたし] は妨げられない (*avyāhati*)¹¹²、それがわたしの最高の自在力 (*aiśvarya*) である。それは意欲 (*icchā*)¹¹³であると、あらゆる真理 [が説かれる] シャーストラ (聖典) において、賢者たちによって語られている¹¹⁴。

29

jagatprakṛtibhāvo me yaḥ sā śaktir itīryate /
srjantyā yac chramābhāvo mama tad balam iṣyate // LT 2.29

世界の物質的根源 (*prakṛti*) としてのわたしの状態が「潜在力」 (*śakti*) であると言われている¹¹⁵。わたしは創造しながらも疲れることはない、それが「力」 (*bala*) であると考えられている¹¹⁶。

30

bharaṇaṃ yac ca kāryasya balaṃ tac ca pracakṣate /
śaktyaṃśakena tat prāhur bharaṇaṃ tattvakobidāḥ // LT 2.30

結果 (創造されたもの) の維持、それもまた「力」 (*bala*) と言っている。真理を体得した者たちは、その維持を「潜在力」 (*śakti*) の部分¹¹⁷として説明する¹¹⁸。

31

vikāraviraho vīryaṃ prakṛtitve 'pi me sadā /
svabhāvaṃ hi jahāty āśu payo dadhisamudbhave // LT 2.31

¹¹² Gupta は、「創造性のわたしの原初の状態に言及して」と訳し、この “*udyatī*” を直前の創造の局面に言及していると説明している [Gupta 2000: p. 10]。

¹¹³ Krishnamacharya の註では次のように説明されている。「*icchā* とは、創造の目的としてのシャクティの自在力 (*aiśvarya*) の形態が前の 24 偈に説明され、ここで思い起こされる。なぜなら、*sisṛkṣā* は創造のため (*sraṣṭum*) の意欲 (*icchā*) であるから。」 (“*iccheti. sisṛkṣāśakteraiśvaryarūpatvaṃ pūrvaṃ caturviṃśe śloke varṇitamatra smartavyam. sisṛkṣā hi sraṣṭumicchā.*” [Krishnamacharya 1959: p. 8])

¹¹⁴ 「自在力」 (*aiśvarya*) によって彼女の創造は妨げられない、すなわち、彼女にとって創造は自由自在なのである。

¹¹⁵ Krishnamacharya の註では次のように説明されている。「女神による世界のプラクリティの状態は、自己の本質ではないから、その状態のように、変化する性質を付加される故に。それにもかかわらず、自己のあり方が実在する知と無知であるアートマンによって、と理解されるべきである。なぜなら、まさにこの彼女は、ブラフマンから世界のプラクリティというものに帰着するからである。」 (“*devyā jagatprakṛtibhāvo na svarūpataḥ, tathātve vikāritvaprasaṅgāt. kiṃtu svaprakārahūtacidacidātmaneti draṣṭavyam. eṣaiva hi brahmaṇo jagatprakṛtitve gatiḥ.*” [Krishnamacharya 1959: p. 8])

¹¹⁶ シャクティによって、女神は世界の根源 (*prakṛti*) となる。女神は「力」 (*bala*) によって何の労もなく世界を創造する。

¹¹⁷ シャクティにはおそらく 2 つの側面があると考えられる。ラクシュミーそのものとしてのシャクティ (宇宙の根源力) と 6 つのグナ (属性) の一つとしてのシャクティ (「潜在力」) である。ここでは後者を意味していると考えられる。

¹¹⁸ 「力」 (*bala*) によって結果 (創造されたもの = 世界) は維持される。

わたしは世界の物質的根源 (*prakṛti*) であるけれども、常に変異しない (変異から離れている)、〔それが〕「勇猛さ」 (*vīrya*) である。なぜなら、牛乳は、ヨーグルトに変わるとき、自己の性質を直ちに捨て去る¹¹⁹。

32

jagadbhāve 'pi sā nāsti vikṛtir mama nityadā /
vikāraviraho vīryam atas tattvavidāṃ matam // LT 2.32

しかし、世界の存在において (世界が出現しても)、わたしにとってそれ (シャクティ) は永遠に変化しない。それ故、変異しない (変異から離れている) ことが「勇猛さ」 (*vīrya*) であると、真理を知る者たちは理解している。

33

vikramaḥ kathito vīryam aiśvaryāṃśaḥ sa tu smṛtaḥ /
sahakāryanapekṣā me sarvakāryavidhau hi yā // LT 2.33

「勇猛さ」 (*vīrya*) は勇敢さ (*vikrama*) であると語られ、さらに、それは「自在力」 (*aiśvarya*) の部分 (要素) であるとも言われる。わたしはあらゆる行為の法則において共に行動するもの (*sahakārin*) とは関わりがない。

34

tejaḥ śaṣṭhaṃ guṇaṃ prāhus tam imaṃ tattvavedinaḥ /
parābhibhavasāmarthyam tejaḥ kecit pracakṣate // LT 2.34

これこそを¹²⁰6番目のグナ (属性) である「光輝」 (*tejas*) であると、真理を知る者たちは言う。「光輝」 (*tejas*) は、他者を支配下に置く能力であると、ある者たちは述べる。

35

aiśvarye yojayanty eke tattejas tattvakovidāḥ /
iti pañca guṇā ete jñānasya srutayo 'malāḥ // LT 2.35

真理を体得した者たちの一部は、その「光輝」 (*tejas*) を「自在力」 (*aiśvarya*) に結びつける。これら5つのグナ (属性) が、「知識」 (*jñāna*) の清浄なる流出 (*sruti*) である。

36

jñānādyāḥ ṣaḍguṇā ete ṣaḍguṇyaṃ mama tadvapuḥ /

¹¹⁹ 様々なものは、様々な性質を変化させていくが、シャクティのみは本質として変化しないということである。

¹²⁰ 前文 “yā” を受けて。

udyatīttham sisṛkṣāyā mamāyutatamī kalā // LT 2.36

これら「知識」(jñāna)などの6つのグナ(属性)は、6つのグナ(属性)から成るわたしの顕現体(出現した姿)である。このように、わたしの創造の意欲により、何万もの部分¹²¹が出現しつつある。

37

śuddhāśuddhātmako vargas tayā kroḍīkṛto 'khilah /
tatra śuddham ayaṃ mārgaṃ vyākhyāsyāmi sureśvara // LT 2.37

清浄と不浄な本質を持つ一群は、彼女(=ラクシュミー)によって、完全に包含されている。そこで、この清浄なる道をわたしは語ろう¹²²、神々の主¹²³よ。

38

abhivyaktānabhivyaktaśāḍguṇyakramam ujjalā /
ālabhitacatūrūpaṃ rūpaṃ tatpārameśvaram // LT 2.38

その最高の主宰神の形態は、顕現しあるいは顕現していない6つのグナ(属性)から成る階梯に基づくものであり、輝きであり、4つの形態である¹²⁴。

39

guṇakalpanayādhyasto guṇonmeṣakṛtakramaḥ /
mūrtikṛtaguṇaś ceti tridhā mārgo 'yam adbhutaḥ // LT 2.39

グナ(属性)の形成によって位置づけられたもの、グナ(属性)の開眼(顕現)がなされる歩み、具現化がなされたグナ(属性)という驚異的な3種の道がある¹²⁵。

¹²¹ 何万ものわたしの部分になって出現する。あらゆる存在物が出現する。

¹²² 61 偈に示されるとおり、不浄な道は次章以降に説かれる。

¹²³ インドラのこと。

¹²⁴ この4つの形態とは、ヴェーハ(配置)と呼ばれる4柱の神の顕現である。その神々は、ヴェースデーヴァ、サンカルシャナ、プラディユムナ、アニルツダである。サンカルシャナは別名 Balabhadra と呼ばれ、ヴェースデーヴァの兄である。また、プラディユムナとアニルツダはそれぞれヴェースデーヴァの息子と孫である。ヴェーハの神格は、上記の4名に Sāmba を足した、ヴリシュニ族の5人の英雄が元になっているとされる。いつのころからか Sāmba は除外され、ヴェースデーヴァを頂点とするヴェーハが形成されたという [Rastelli 2009: p. 444]。Gupta はヴェーハについて次のように説明している。「清浄なる創造と不浄なる創造の間の違いは、3つの現象の属性、サットヴァ、ラジャス、タマスが、清浄なる創造において存在していないのであり、その清浄なる創造は時折 nityavibhūti と呼ばれ、反対に不浄なる創造は līlavibhūti と名付けられる。前者は4つの顕現 (caturmūrti あるいは caturvyūha) から成る。これら4つの顕現(ヴェーハ)の最初(すなわちヴェースデーヴァ)において、属性は休止状態であり、それ故、うっすらと顕現しているのみである。顕現が進行するにつれ、それらはより輝き、深淵となる。」 [Gupta 2000: p. 11]

¹²⁵ すなわち、グナ(属性)の段階的な顕現を示していると考えられる。

40

yugāni trīṇi ṣaṅṅāṃ yāny āhur jñānādikāni vai /
samāsvyāsatas teṣāṃ cāturātmyaṃ vivicyate // LT 2.40

6つの「知識」(jñāna)など(の属性)を持つものは一対ずつの3つになると言う。それらが、実に、それぞれの組合せと配列により、4つの性質を持つものに分離される¹²⁶。

41

samastavyastabhedena guṇānāṃ tadyugatrāyam /
vivakṣyate yadā sā me śāntāyās cāturātmyatā // LT 2.41

結合したものと分離したものの区別によって、諸々のグナ(属性)がそれぞれ3つの組み合わせになるとき、それはわたしの寂靜なる4つの性質そのものと言われる¹²⁷。

42

ākṛtīr anavekṣyāpi guṇānāṃ kalpanākṛtam /
cāturātmyam idaṃ prāhuḥ śāntāyās tattvacintakāḥ // LT 2.42

たとえ顕現体を見なくても、この諸々のグナ(属性)が具現化することによって作られたものを、真理を考察する者たちは寂靜なる4つの本質と呼ぶ¹²⁸。

43

śāntātiśāntād unmeṣo mama rūpād yugatrāye /
kramavyaktaṃ tadādyam me cāturātmyam amūrtimat // LT 2.43

寂靜と完璧な寂靜の形態から、3つの組み合わせ(という状態)で、わたしの開眼(顕現)がある。段階的に顕現するわたしの4つの本質のその最初のものが、形象を有さないものである¹²⁹。

44

atarāṅgam anirdeśyaṃ niḥsattaṃ sattvam avyayam /
saccinmātrākhyā unmeṣaḥ sādyā me śāntatācyutiḥ // LT 2.44

¹²⁶ 6つのグナ(属性)が、2つずつ組み合わせたり、3組できる。また、6つのグナ(属性)を全て組み合わせたものが1組できる。これらが、併せて4つの性質のものである。

¹²⁷ 前掲 LT 2.40 を参照。

¹²⁸ 諸々のグナが具現化すること、すなわち、実際に形成することによって作られたものが、4つの顕現体という具象したものであるが、それらは、顕現体と言えども、直接に見ることはできないのである。

¹²⁹ 4つのヴェーハの中で最初のもの、すなわちヴァースデーヴァは、未だはっきりと現れていないため、形象を有していないのである。

〔すなわちそれは〕不動のものであり、指し示すことができないものであり、存在から離れたもの¹³⁰であり、サットヴァであり、不変なものである。〔その〕開眼（顕現）は存在と知そのものと呼ばれる。それは、寂静性（不活動性）¹³¹からのわたしの最初の分離である¹³²。

45

vyaktajñānabalākhyāyāṃ pūrvam saṃkarṣaṇātmani /
tilakālakavat sarvo vikāro mayi tiṣṭhati // LT 2.45

まずはじめに、わたしの「知識」（jñāna）と「力」（bala）の顕現と呼ばれるサンカルシャナの本質（アートマン）の中に、（皮膚の下の）ほくろのごとくに、すべての変異（vikāra）が存在する¹³³。

46

tan mām saṃkarṣaṇātmānaṃ vidur jñānabale budhāḥ /
svayaṃ gr̥hṇāmi kartṛtvam unmiṣantī tataḥ param // LT 2.46

かのわたしであるサンカルシャナの本質を、「知識」（jñāna）と「力」（bala）であると、知者たちは認識する。それから、〔わたしは〕開眼（顕現）しつつ、作者性を自らに獲得する¹³⁴。

47

pradyumna iti mām āhuḥ sarvārthadyotanīm tadā /
yugaṃ prasphuritaṃ rūpaṃ tasminn aiśvaryavīryayoḥ // LT 2.47

その時、すべての対象を輝かせるわたしをプラディユムナと言う。そこにおいて、「自在力」（aiśvarya）と「勇猛さ」（vīrya）の組み合わせの形態が現れる。

48

tatas tayā kriyāśaktyā labdhāveśā cikīrṣayā /
yujyamānāniruddhākhyāṃ lambhitā tattvakovidaiḥ // LT 2.48

¹³⁰ “niḥsattam” は、“nir-sattā” を中性にしたものと解した。プラークリットなどで“satta” は“sattva” の意味であるが、ここではその意味はふさわしくない。

¹³¹ おそらく至高のアートマンのことを指すのであろう。

¹³² この44偈は、4 ヴューハの最初であるヴァースデーヴァについて、説明していると考えられる。

¹³³ 変異したものが、うっすらと見えている状態。

¹³⁴ 徐々に顕現しつつある状態で、それは同時に徐々に活動性を有することでもある。作者性とは創造者としての性質で、それを自ずから獲得するのである。この状態は、次の偈で説明されているとおり、プラディユムナである。

それから、その活動力 (*kriyāśakti*) によって浸透され、〔また〕活動の意欲と結びついたものが¹³⁵アニルツダという名称で真理を体得した者たちによって呼ばれる¹³⁶。

49

avasthāḥ kramaśo me tāḥ suṣuptisvapnajāgarāḥ /
tisro mama svabhāvākhyā vijñānaiśvaryaśaktayaḥ // LT 2.49

わたしにとって、その諸々の状態は、段階的に、熟睡状態 (*suṣpti*)、夢眠状態 (*svapna*)、覚醒状態 (*jāgara*) である¹³⁷。3つのわたしの自性 (*svabhāva*) と呼ばれるものは、「知識」 (*vijñāna* = *jñāna*)、「自在力」 (*aiśvarya*)、「潜在力」 (*śakti*) である。

50

unmiṣantyāḥ pṛthaktattvatrayeṇa parikīrtitāḥ /
balaṃ vīryaṃ tathā teja ity etat tu guṇatrayam // LT 2.50

〔それらの自性は〕開眼 (顕現) しつつあり、原理 (*tattva*) の3種の区分として言及される。他方、「力」 (*bala*)、「勇猛さ」 (*vīrya*)、そして「光輝」 (*tejas*) というこの3つのグナ (*guṇatraya*) がある。

51

śramādyavadyābhāvākhyāṃ jñānāder upasarjanam /
itthaṃ śāntoditāvasthādvayabhedajuṣo mama // LT 2.51

〔それら3つのグナ (属性) は〕疲労などの不完全さは存在せず、知識 (*jñāna*) などの流出 (*upasarjana*) である¹³⁸。このように、わたしにとって、平安なるもの¹³⁹から生起し

¹³⁵ 前者は自在力 (*aiśvarya*)、後者は光輝 (*tejas*) であると思われる。

¹³⁶ ここでのヴェーハの神々の展開は、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラディユムナ→アニルツダの順で行われる。

¹³⁷ ヴェーダーンタ学派を中心に、覚醒状態 (*jagāt*)、夢眠状態 (*svapna*)、熟睡状態 (*suṣpti*)、そして3つの状態を超越した第4状態 (*catūrtha*, *turya*, *turīya*) というアートマンの4つの状態は古代から思索されてきた。これら「四つの状態に関する哲学的思索はウパニシャッドに始まり、その最も体系的な説明は、シャンカラの註釈をもつ『マインドゥーキヤ・ウパニシャッド』に見られる」という。アートマンの覚醒状態においては5感覚器官と内的器官が機能し、夢眠状態のときは感覚器官は停止して、内的器官のみが働き、さらに、熟睡状態では、内的器官さえも停止する。そして、第4状態はいかなる語によっても表現されることができず、清浄なものである [前田 1980: pp. 188-192]。ここでは、熟睡状態 (*suṣpti*) にサンカルシャナを、夢眠状態 (*svapna*) にプラディユムナを、そして覚醒状態 (*jāgara*) にアニルツダを同定している。そして、第4状態 (*turya*) はヴァースデーヴァに対応すると考えられる。ヴァースデーヴァからアニルツダまでの4ヴェーハ神の顕現は、徐々に明確になっていくことであり、それはアートマンが覚醒に向かうことである。

¹³⁸ 28-35 偈では「知識」 (*jñāna*) を除く5つのグナ (属性) の特徴が述べられる。例えば 29 偈においては、創造において疲れないということが、「力」 (*bala*) の性質として説かれている。

¹³⁹ 創造における最初の段階である平安の状態のこと。

た状態は2種の区別を持つものである¹⁴⁰。

52

svadharmormisamullāso na bhedāyām budher iva /
prāyo yad guṇakartavye varte kṛtyā yayā hy aham // LT 2.52

自己の性質のあらわれ（波）である喜びが、知者（＝ラクシュミー）から離れてはいないように、わたしが現れる創造によって、主にグナが作られるから¹⁴¹。

53

tatra tadguṇayugmaṃ tu mama rūpatayocyate /
ato jñānabale devaḥ saṃkarṣaṇa udīryate // LT 2.53

さて、そこにおいて¹⁴²、そのグナの一对（組み合わせ）が、わたしにとって形態性（形あるもの）として、語られる。それ故、「知識」（jñāna）と「力」（bala）〔の組み合わせ〕である神は、サンカルシャナと述べられる。

54

aiśvaryavīrye pradyumno 'niruddha śaktitejasī /
ādyas tv abhinnaśāḍguṇyo brahmatattvāpṛthaksthitaḥ // LT 2.54

「自在力」（aiśvarya）と「勇猛さ」（vīrya）〔の組み合わせ〕がプラディユムナであり、「潜在力」（śakti）と「光輝」（tejas）〔の組み合わせ〕はアニルツダである。しかし、最初の分化していない6つのグナに関するものは、ブラフマンという原理と不可分な状態として〔存在する〕¹⁴³。

55

eko 'py anunayaudāryakrauryaśauryādibhir guṇaiḥ /
naṭaḥ pravartate yadvad veṣaṣeṣādibhedavān // LT 2.55

¹⁴⁰ 6つのグナ（属性）には2種の分類があり、一方は自性（svabhāva）と呼ばれる。もう一方は3つのグナ（guṇatraya）と呼ばれ、それぞれが自性（svabhāva）から流出（upasarjana）する。サンカルシャナなどの3神は、両者から1つずつを有し、一对の組み合わせを形成する。すなわち、「知識」（jñāna）から「力」（bala）が、「自在力」（aiśvarya）から「勇猛さ」（vīrya）、「潜在力」（śakti）から「光輝」（tejas）が流出（upasarjana）し、それぞれ組となるのである。

¹⁴¹ 最高存在であるラクシュミーは、自身が顕現していく創造の時に、6つのグナ（属性）を作るということである。

¹⁴² 前掲の“yad”を受けて、「グナ（属性）が作られるときにおいて」という意味である。

¹⁴³ 4 ヴューハの中で、最初に現れるものは、6つのグナを全て有しており、ブラフマンと不可分であるということである。

一人の役者でも、平静さ、高潔さ、残虐さ、勇敢さなどの諸々の性質（グナ）によって、衣装や演技などが異なって現れるように。

56

tadvad ekāpi saivāhaṃ jñānaśaktyādibhir guṇaiḥ /
saṃkarṣaṇādisadbhāvaṃ bhaje lokahitepsayā / LT 2.56

まさにそのように、かのわたしは一人であっても、「知識」（jñāna）や「潜在力」（śakti）などの（6つの）グナ（属性）によって、世界の利益を望むことにより、サンカルシャナなどの実在に、〔自身を〕分割する。

57

kramaśaḥ pralayotpattisthitibhiḥ prāṇyanugrahaḥ /
prayojanam athānyac ca śāstraśāstrārthatatphalaiḥ // LT 2.57

〔わたしの目的は〕順番に破壊・創造・維持〔を行うこと〕による、人類の救済である。また、もう一つの目的は、教え（śāstra）と教えの意味（śāstrārtha）のその諸々の結果によって〔人類を救済することである〕。

58

daśās turyasuṣuptyādyāś caturvyūhe 'pi lakṣayet /
vibhavo 'nantarūpas tu padmanābhamukho vibhoḥ // LT 2.58

第 4 状態（turya）や熟睡状態（suṣupti）などの状態（daśā）を、4 つのヴェーハ（配置）においても、見るべし¹⁴⁴。一方、遍在者（神）のヴィバヴァ（展開）は、パドマナーバ（蓮華を臍とする者＝ヴィシュヌ）を始めとする無限の形態である¹⁴⁵。

59

aniruddhasya vistāro darśitas tasya sāttvate /
arcāpi laukikī yā sā bhagavadbhāvitātmanām // LT 2.59

¹⁴⁴ LT 2.49 を参照。

¹⁴⁵ ヴェーハ（配置）とは別に、ヴィバヴァ（展開）という顕現がある。Schrader は、ヴィバヴァとはアヴァターラであり、「清浄な創造」に属するとし、『アヒルブドニヤ・サンヒター』に説かれる 39 の神々を列挙している [Schrader 1916: p. 49]。また、引田氏は、ヴィバヴァ神は最高神のエネルギーの顕現であり、この顕現は経験世界にも超越的世界にも生じると論じている [引田 1997: p. 80]。

ア Niluḍḍa の詳述は、かのサーットヴァタ¹⁴⁶において示される。バガヴァットによってアートマンが清められた世間の神像 (arcā) も、また [サーットヴァタにおいて示される]。

60

mantramantreśvaranyāsāt sāpi śāḍguṇyavigrahā /
parādyarcāvasāne 'smin mama rūpacatuṣṭaye // LT 2.60

マントラとマントラの主宰神を付置することにより、それ (神像) もまた、6つのグナ (属性) を備えた身体となる¹⁴⁷。最高神 (parā) で始まり神像 (arcā) に至るこのわたしの4種の形態 (ヴューハ) において。

61

turyādyavasthā vijñeyā itīyaṃ śuddhapaddhatiḥ /
īṣadbhedena vijñeyam tadvyūhavibhavāntaram /
śuddhetaram tv atho mārgam mama śakra niśāmaya // LT 2.61

[4 ヴューハは] 第4状態 (turya) などの状態が知られるべし。以上、これが清浄なる道 (śuddhapaddhati) である。そのヴューハとヴィバヴァの違いは、わずかな差異として知るべし。では次に、わたしの不浄なる道 (śuddhetaram mārgam)¹⁴⁸を聞け。シャクラよ。

iti śrīpāñcarātrasāre lakṣmītantrē śuddhamārgaparakāśo nāma dvitīyo 'dhyāyaḥ

以上、パーンチャラートラ派の精髓『ラクシュミー・タントラ』における第2章「清浄なる道の明示」。

D.3 *Lakṣmītantra* 第3章「3つのグナから成るものの明示」

Śrīr uvāca —

シュリーは語った。

1

nityanirdoṣaniḥśīmakalyāṇagūṇaśālinī /
ahaṃ nārāyaṇī nāma sā sattā vaiṣṇavī parā // LT 3.1

¹⁴⁶ Gupta は、「サーットヴァタはここではパーンチャラートラ派の中でも最古の文献の一つである『サーットヴァタ・サンヒター』を意味する」としている [Gupta 2000: p. 14]。この語は第1章の19偈と21偈でも示されるが、そこではパーンチャラートラ派の教えそのものを指していると解される。

¹⁴⁷ 神像は、マントラとマントラの主宰神を付置することにより、生きた身体を獲得しつつも、4柱の神と同質のものになるということである。

¹⁴⁸ ここでいう不浄 (śuddhetaram) とは、より物質的な創造に移ることを言う。

わたしは、恒久で、汚れがなく、計り知れなく、世のためになるグナ（属性）¹⁴⁹を持つものであり、ナーラーヤニーであり、実にかの最高存在であるヴァイシュナヴィーである。

2

deśāt kālāt tathā rūpāt paricchedo na me smṛtaḥ /
saṁvittir eva me rūpaṁ sarvaiśvaryādiko guṇaḥ // LT 3.2

空間、時間、そして形態によって限定されないとわたしは語られる。わたしにとって「知」(saṁvitti)¹⁵⁰のみが形態であり、あらゆる「自在力」(aiśvarya)などはグナ（属性）である¹⁵¹。

3

svasvāntryavaśenaiva vibhāgas tatra vartate /
vijñānaiśvaryaśaktyātmā vibhāgo yaḥ sa īritaḥ // LT 3.3

自己の意欲 (svāntrya、独立性) によってのみ、〔グナの〕 区別 (vibhāga) は、そこに生じる¹⁵²。〔グナの〕 区別は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti) から成るといふこと、それが言われた¹⁵³。

¹⁴⁹ 第 2 章で示された 6 つのグナ（属性）、すなわち、(1) 知識 (jñāna)、(2) 自在力 (aiśvarya)、(3) 潜在力 (śakti)、(4) 力 (bala)、(5) 勇猛さ (vīrya)、(6) 光輝 (tejas) を示すと考えられる。

¹⁵⁰ ここではシャクティの 6 つの属性の一つ、「知識」(jñāna) のことである。

¹⁵¹ 6 つのグナ（属性）のうち、「知識」(jñāna) が本質であり、それ以外の 5 つは付随するものということである。LT 2.26 において、「知識」は形態 (rūpa) と説かれ、さらに、ラクシュミーの形態と同じ性質とされている。一方、「自在力」(aiśvarya) などの 5 つのグナ（属性）は特質 (dharma) とされ、LT 2.35 で、その「知識」からの流出 (sruti) と説かれる。Krishnamacharya による註釈では、『知識』(jñāna) は、本性 (自己の形態) を観察する特質である。一方、その他の 5 つのグナ（属性）は、観察された本性 (自己の形態) という副次的なもの (guṇabhūta) である、という意味である (“svarūpanirūpako dharmah jñānam. anye pañcāpi guṇaḥ nirūpitavarūpaguṇabhūtā ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。Gupta は「シャンカラチャーリヤは、ほとんどの場合、対象 (事物) を nāmarūpa と呼ぶ。3 つの経験的な制限は一般的に時間、場所、対象 (事物) である。したがって、ここでは rūpa は一般的に対象 (事物) について言及していると推定されうる」と説明し、“rūpaṁ” を “the essence of my being” と訳している [Gupta 2000: p. 16]。

¹⁵² Krishnamacharya による註には、「このように、区別 (vibhāga) もまた、まさにわたしの意欲 (icchā) によってなされることを言って、〈自己の意欲〉 (“svasvāntrya”) というのである。」 (“itthaṁ vibhāgo ’pi madicchākṛta evety āha — svasvāntryeti.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) とある。Gupta は「ラクシュミーの完全な至高性は、ここにおいて、創造活動のあらゆる局面における彼女の完璧な独立性を断言することによって、強調されている」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。このように、ここでは、ラクシュミーの独立性を提唱していると解することができる。

¹⁵³ この分類は LT 2.49 においても説かれ、そこでは自性 (svabhāva) と呼ばれている。これらの自性は、顕現しつつある状態で、原理 (tattva) の 3 種の区分とされる。残りの 3 つ、すなわち「力」(bala)、「勇猛さ」(vīrya)、「光輝」(tejas) は、LT 2.50 において、3 つのグナ (guṇatraya) と呼ばれ、続く LT 2.51 で、知識 (jñāna) などの流出 (upasarjana) とされる。

4-5ab

vijñānaiśvaryaśaktīnām unmeṣas tv aparo 'dhunā /
 atarkyāyā mamodyatyā niyogānarhayā sadā // LT 3.4
 icchayānyat kṛtaṃ rūpam āsīj jñānādike trike / LT 3.5ab

しかし、今、開眼 (unmeṣa) は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti) とは別である¹⁵⁴。常に、推し量れない者であるわたしの自由自在な生起（創造）の意欲 (icchā) によって作られた別の形態は、「知識」(jñāna) などの3種の中に存在する¹⁵⁵。

5cd-6

yathaivekṣurasah svaccho guḍatvaṃ pratipadyate // LT 3.5cd
 tadvat svaccham ayam jñānaṃ sattvatāṃ pratipadyate /
 rajastvaṃ ca mamaśvaryaṃ tamastvaṃ śaktir apy uta // LT 3.6

まさに、澄んだサトウキビの汁が糖蜜性を獲得するように。そのように、この¹⁵⁶澄んだ「知識」(jñāna) は、サットヴァ性を獲得する。そして、わたしの「自在力」(aiśvarya) はラジャス性を、そしてまた〔わたしの〕「潜在力」(śakti) はタマス性を〔獲得する〕¹⁵⁷。

¹⁵⁴ ここでの創造は、LT 第2章の開眼 (unmeṣa) と呼ばれる清浄な創造とは異なるということを説明していると考えられる。LT 2.21; 22 では、開眼 (unmeṣa) とは、海から月が昇るときのように顕現しつつある状態のことであり、わたし (aham) すなわちラクシュミーであり、ナーラーヤナのシャクティ (nārāyaṇī śaktiḥ) であり、創造のための意欲を特徴とするものであると説明される。Krishnamacharya の註では、「〈別である〉 (“aparah”) [云々] とは。すでに、清浄な創造において、1つの開眼 (unmeṣa) が言われた。今、清浄ではない性質の3つのグナから成るもの (traiguṇya) の創造において、開眼 (unmeṣa) は別のものであるという意味である。」 (“apara iti. pūrvam śuddhasṛṣṭau eka unmeṣa uktaḥ. adhunā aśuddhātmakatraiguṇyasṛṣṭāv anyā unmeṣa ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。

¹⁵⁵ 別の形態とは、サットヴァ、ラジャス、タマスからなる3種のグナのことである。Krishnamacharya の註では、「「知識」(jñāna) などの3種の形態は、サットヴァなどの3つから成るものとして、別様に作られたという意味である」 (“jñānāditrikarūpaṃ sattvāditrikātmanā anyathā kṛtaṃ āsīd ity arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。

¹⁵⁶ “ayam” は男性形であるが、“jñānam” を修飾していると解した。

¹⁵⁷ Krishnamacharya の註には次のようにある。「まさにそれを言って、〈そのように〉という。「知識」(jñāna) はサットヴァ性によって、「自在力」(aiśvarya) はラジャス性によって、「潜在力」(śakti) はタマス性によって生み出される、ということが意趣されている。」 (“tad evāha — tadvat iti. jñānaṃ sattvatayā, aiśvaryaṃ rajastayā, śaktiś ca tamastayā jātam iti bhāvah.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) という。このように、註釈ではサットヴァなどの3種のグナによって知識などの3つのグナから成るものが生み出されるとされるので、3種のグナは手段として言及されている。しかし、本文では、知識などが3種のグナの性質を獲得するのであって、サットヴァ性などは獲得される対象である。サトウキビの例に照らし合わせれば、最初から3種のグナを具備しているということであろうが、それでも註釈において原因として語られているのは矛盾を感じる。なぜならば、SKなどで説かれる3種のグナはプラクリティに帰されるものであり、物質的なものであるから、それらが清浄であるはずの最高神の6つのグナに本来的に備わっているのは不自然である。さらに、後の偈で語られるとおりに、創造、維持、還滅の3つの循環に結び付けられることを考えれば、むしろ、3つのグナから成るものに3種のグナの性質が付与されることにより、現象世界

7

ete trayo guṇāḥ śakra traiguṇyam iti śabdyate /
 rajaḥpradhānaṃ tat sṛṣṭau traiguṇyaṃ parivartate // LT 3.7

シャクラよ。これら 3 つのグナは、3 つのグナから成るもの (traiguṇya)¹⁵⁸ と呼ばれる。その 3 つのグナから成るもの (traiguṇya) は、創造において、ラジャスが第 1 のもの (優勢) となる。

8

sthitau sattvapradhānaṃ tat saṃhṛtau tu tamomukham /
 ahaṃ saṃvinmayī pūrvā vyāpiny api puraṃdara // LT 3.8

それ (3 つのグナから成るもの) は、維持において、サットヴァが第 1 のもの (優勢) に、一方、還滅において、タマスが前面 (優勢) に [なる]¹⁵⁹。わたしは、「知」(saṃvid) からできている者であり、最初の者であり、遍充する者である。プランダラ (城塞の破壊者=インドラ) よ。

9-10ab

adhiṣṭhāya guṇān sṛṣṭisthitisamhṛtikāriṇī /
 nirguṇāpi guṇān etān adhiṣṭhāyātmavāñchayā // LT 3.9
 cakraṃ pravartayāmy ekā sṛṣṭisthityantarūpakam / LT 3.10ab

創造・維持・還滅を行う者 [であるわたし] は、諸々のグナを支配し、また、グナを持たない者 [であるわたし] は、自分の望みによって¹⁶⁰、これら諸々のグナを支配する¹⁶¹。

の成り立ちに関与するようになるのである。

¹⁵⁸ Krishnamacharya の註によると、「“traiguṇya” (3 つのグナから成るもの) とは、“cāturvarṇyam” と同じように、[接尾辞 ya については] 本来の意味を保持した付加字としての “ya” である。」(“traiguṇyam iti cāturvarṇyam itivat svārthe ṣyañ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]) と説明される。すなわち、“traiguṇya” とは “traiguṇa” と同様の意味ということである。B.5(12) の脚註も参照。

¹⁵⁹ ラジャスは「自在力」(aiśvarya) と結びつき世界の創造に関与し、サットヴァは「知識」(jñāna) と結びつき創造された世界の維持に関与し、そしてタマスは「潜在力」(śakti) と結びつくことにより維持された世界が還滅することに関与する。

¹⁶⁰ Krishnamacharya の註では、以下のように説明される。「<自分の望みによって> (“ātmavāñchayā”) とは。これによって、世界の創造において、リーラー (遊戯) がそが目的 (動機) であるということが言われているのである。次のように尊者バーダラーヤナは語った。『しかし、世間と同じく、単なる遊戯 (līlā) である』と (“ātmavāñchayety anena jagatsṛṣṭyādau līlaiva prayojanam ity uktam bhavati. yathāha bhagavān bādarāyaṇaḥ — “lokavat tu līlakaivalyam” iti.” [Krishnamacharya 1959: p. 11])。このように、注釈者は『ブラフマストラ』II.1.33 を引用し、最高神の意欲を遊戯 (līlā) に結びつけている。

¹⁶¹ 創造・維持・還滅を行う者 (sṛṣṭisthitisamhṛtikāriṇī) とは、これらの循環を支配し、それらを超えた存在であることが示唆されている。また、グナを持たない者 (nirguṇā) とは、ここでのグナはサットヴァ、ラジャス、タマスからなる 3 種のグナという物質的要素の機能を有するものであり、それを持たないということはブルシャの機能をも示唆している。Krishnamacharya の註には、「<また、グナを持たない者 [であるわたし]

そして、唯一なるわたし（ラクシュミー）は、創造、維持、還滅（終わりを形作るもの）の循環（チャクラ）¹⁶²を廻らす。

Śakraḥ —

シャクラは〔質問した〕。

10cd–11

vidhādvayaṃ samāsthāya jñānādye tu yugatrāye // LT 3.10cd

śuddhetaravibhāgena kimarthaṃ tvaṃ pravartase /

vidhayor anayoḥ padme saṃbandhaḥ kaḥ parasparam // LT 3.11

さて、「知識」（jñāna）などの3つの組み合わせに2種の分類を当てはめて¹⁶³、清浄とそれ以外（不浄）との区分によって、あなたが顕現するのはなぜか。パドマー（蓮華）よ。これら2つの分類において互いに結合（関係）するものは何か。

12ab

etat prṣṭā mayā brūhi namas te padmasaṃbhave /

私によってこれ（問い）を尋ねられた〔あなた〕は、語れ。あなたに敬礼する。パドマサンバヴァーよ。

Śrīḥ —

シュリーは〔答えた〕。

12cd

aniyojyaṃ mamaiśvaryaṃ icchaiva mama kāraṇam // LT 3.12cd

わたしの「自在力」（aiśvarya）は抑制されないもの（aniyojya）であり、わたしの意欲こそが〔自身が顕現する〕原因である¹⁶⁴。

し〕は〉（“nirguṇāpi”）とは。すでに6つのグナに関して言われたことから、グナかを持たない（nirguṇa）という語とはサットヴァ、ラジャス、タマスの形態（性質）が混ざったグナから離れているという意味である」（“nirguṇāpīti. pūrvaṃ śāḍguṇasyoktatvāt atra nirguṇapadasya sattvarajastamorūpamiśraguṇarahitety arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11]）と説明される。これらはいずれもラクシュミーのことであり、本来ヴィシュヌが持つ最高神の機能がラクシュミーに帰されているのである。

¹⁶² 循環とヴィシュの持物である円盤を掛けているのであろう。

¹⁶³ おそらく、「自在力」（aiśvarya）に創造とラジャスを、「知識」（jñāna）に維持とサットヴァを、「潜在力」（śakti）に還滅とタマスを対応させていることを示していると思われる。

¹⁶⁴ ラクシュミーは、「自在力」（aiśvarya）により、妨げられることなく、思いのままに世界を創造し、彼女が創造の意欲を起こすことにより、世界は始まるのである。LT 2.24 には、ラクシュミーは妨げられず、抑

13

muhyanty atra mahānto 'pi tattvaṃ śṛṇu tathāpi me /
īśēsitavyabhāvena parivarte sadā hy aham // LT 3.13

偉大な者たちもこれについて誤解している。そのような真理を私に聞け。なぜなら、支配者 (īśa) と被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) の状態として、わたしは常に顕現するからである¹⁶⁵。

14

īśo nārāyaṇo jñeya īśatā tasya cāpy aham /
īśitavyaṃ tu vijñeyaṃ cid acic ca purāṇdara // LT 3.14

ナーラーヤナは支配者 (īśa) であり、そして、わたしは彼にとっての支配者性 (īśatā) であると知るべきである。一方、被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) とは知 (cit) と無知 (acit) [の混合したもの] であると知るべきである¹⁶⁶。プランダラよ。

15

cicchaktis tu parā tatra bhoktrtām pratipadyate /
bhogyopakaraṇasthānarūpaṃ tasyā acitpadam // LT 3.15

圧されない「自在力」(aiśvarya) が、満ちあふれていると説かれる。また、LT 2.28 において、生起する (udyatī) ラクシュミーが妨げられないのは「自在力」(aiśvarya) のためであり、また、それは意欲 (icchā) であるとも説かれる。Gupta は、「ここでの aiśvarya は、その語がラクシュミーの本質的な性質として使用されているので、神的属性の 2 番目を意味してはいないであろう。それ故、このコンテキストにおいて、aiśvarya は、彼女の本質を構成する 6 つの属性の集合を示している」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。しかし、LT 2.28 の説を鑑みれば、この偈では単純に 6 つの属性の 2 番目である「自在力」(aiśvarya) の性質について説かれていると考えることもできるであろう。

¹⁶⁵ 支配者 (īśa) とは清浄な創造の段階で、ラクシュミー・ナーラーヤナの状態である。一方、被支配者 (īśitavya) は不浄な創造の段階である。Krishnamacharya による註釈においては、「清浄とそれとは別 (不浄) の創造の 2 つの関係が言われて、支配者と被支配者 (支配されるべき者) という。守護されるべきものと守護するものの状態という意味である」(“śuddhetarasrṣṭyoḥ sambandha ucyate — īśēsitavyeti. rakṣyarakṣakabhāva ity arthaḥ.”) [Krishnamacharya 1959: p. 12] と説明される。一方、Gupta は「最高神の本質、すなわち最高の真実 (最高原理) としてのラクシュミーは、おおむね未分化のブラフマンと同一である。次の段階において、〈最高神〉と〈彼の本質〉は、顕現した属性すなわち、ラクシュミーとナーラーヤナで表された神的実在と最高精神として区別される。次の段階では、最高神は創造の内にあるけれども、それを超越している。超越者としての彼は Īśa (支配者) であり、一方、内在者としての彼は支配された (宇宙) すなわち Īśitavya である」[Gupta 2000: p. 16] と説明し、支配者 (īśa) の位置づけがはっきりとしていないように思われる。

¹⁶⁶ 支配者 (īśa) と支配者性 (īśatā) の対応は、LT 第 2 章で説かれた清浄な創造の段階における「わたしという実在」(ahamartha) と「わたし性」(ahamṭā) の関係に対応すると考えられる。そして、被支配者 (īśitavya) は不浄な創造の段階であり、知 (cit) と無知 (acit) の 2 種からなるのである。Gupta は「このように、同じ原理が、主観的であると同時に客観的である世界に展開する。主観的創造としての最高の意識原理はその意識的性質を保持しているが、しかし、客観的創造としてのそれは物質に変化する」と説明する。[Gupta 2000: p. 16]

さて、そこにおいて、最高処である「知としてのシャクティ」(cit-śakti)は享受者性(bhoktrtā)を獲得する。無知(acit)の境地(pada)は、彼女の享受される(bhogyā)もの(upakaraṇa)としての状態である¹⁶⁷。

16–17ab

anādyayā samāviddhā sā cicchaktir avidyayā /

mat pravartitayā nityaṃ cicchaktir bhoktrtāṃ gatā // LT 3.16

ahaṃmatvasaṃbandhād dhy acit svenābhimanyate / LT 3.17ab

かの「知としてのシャクティ」(cit-śakti)は、常に、わたしによって促された、始まりを持たないものである無知(avidyā)によって影響されたもの¹⁶⁸である。[その]「知としてのシャクティ」(cit-śakti)は享受者性に到達する¹⁶⁹。なぜなら、わたし(aham)とわたしのもの(mama)という関係により、無知(acit)は、自己によって自己を認識するから¹⁷⁰。

17cd–18ab

avidyā sā tirobhāvaṃ vidyayā yāti vai yadā // LT 3.17cd

cicchaktir nirabhīmānā tadā madbhāvam eṣyati / LT 3.18ab

かの無知(avidyā)が、知(vidyā)によって、まさに消滅に向かうとき、そのとき、自己の認識から離れたもの(nirabhīmānā)である「知としてのシャクティ」(cit-śakti)は、わたしの状態にいたるであろう。

18cd–19ab

tāṃ vidyāṃ śuddhamārgasthāṃ paravyūhādirūpiṇī // LT 3.18cd

¹⁶⁷ 被支配者は2種からなるのであるが、それぞれが、知(cit):「知としてのシャクティ」(cit-śakti)=享受者性(bhoktrtā)、無知(acit):「無知としてのシャクティ」(acit-śakti)=享受されるもの(bhogyopakaraṇa)ということである。

¹⁶⁸ すなわち、揺さぶれたもの、促されたもの、または刺激されたものという意味である。

¹⁶⁹ 無知(avidyā)によって影響された「知としてのシャクティ」は享受者性を獲得するということ。

¹⁷⁰ 享受者として確立するには、自己とそれ以外を区別しなければならない。自己とそれ以外の区別が曖昧であれば享受者と享受されるものの関係は成立することはできない。すなわち、享受者である主体と享受されるものである対象の関係である。対象があるからこそそれを受け取る主体が必要であるし、逆にまた主体があるからこそ対象は成立するのである。そして、その最初のものが「わたし」と「わたしのもの」の区別である。自己によって自己を認識するとは、すなわち、わたしである主体から享受されるものとしての対象が区別されるということである。このような無知(acit)の機能はアハンカーラの機能を連想させる。MBh 12.291.21にはマハットの誕生を「知の創造」(vidyāsarga)、アハンカーラの誕生を「無知の創造」(avidyāsarga)と説く。用語は異なるが、このようなアハンカーラのイメージを踏襲しているのかもしれない。一方、Guptaは“*That conscious element (citśakti), influenced by beginningless nescience (avidyā) which is introduced by me, becomes the enjoyer and, on account of its own ego-hood, identifies itself with non-conscious objects in terms of the relationship I and mine.*”と訳す[Gupta 2000: p. 16]。

pravartayāmi kārūṇyāj jñānasadbhāvadarśinī / LT 3.19ab

最高のヴェーハをはじめとするものであり、「知識」(jñāna) の本性(正しいあり方)を見るものであるわたしは、かの知(vidyā) という清浄な道(=創造)の段階を、恩寵により顕現させる¹⁷¹。

19cd-20

rakṣyarakṣakabhāvo 'yaṃ saṃbandho vidhayor dvayoḥ // LT 3.19cd

vidhā rakṣati śuddhādyā rakṣyate ca vidhāparā /

etat te kathitaṃ śakra kiṃ bhūyaḥ śrotum icchasi // LT 3.20

この守護されるものと守護するものの関係は、2つの在り方として存在する。清浄などの在り方は守護し、そして、他方の(不浄などの)在り方は守護される¹⁷² [ものである]。これがあなたに語られた。シャクラよ。さらにあなたは何を聞きたいのか。

Śakraḥ —

シャクラは [質問した]。

21

īśaitavyabhāvena kimarthaṃ tvaṃ pravartase /

īśitavyaṃ kiyad bhedaṃ kiṃ rūpaṃ tatra me vada // LT 3.21

支配者(īśa)と被支配者(支配されるべき者、īśitavya)の状態として、あなたが顕現するのはなぜか。被支配者(支配されるべき者、īśitavya)はどの程度区別され、そこではどのようなものか、わたしに語れ。

Śrī —

シュリーは [答えた]。

22

svabhāvo nānuyojo 'yaṃ mama nārāyaṇasya ca /

¹⁷¹ LT 3.16-19 は前後関係が不明瞭で、内容が入り乱れている。まず知(cit)と無知(acit)、知(vidyā)と無知(avidyā)の関係について説かれるが、その後に唐突に恩寵による顕現について語られる。Guptaは“*That (absolute) knowledge present in the pure course (of creatoin) is introduced by me as the supreme Vyūha, ...*”と訳し、「この文は混乱していて、無関係であるように見えるが、最高神と彼の Śakti の究極的な本質を弟子に思い起こさせるためにここに置かれている」と説明している [Gupta 2000: p. 16]。

¹⁷² 13 偈の Krishnamacharya の註釈にある通り、守護するものは、清浄の創造の段階であり、支配者(īśa)である。一方、守護されるものは、不浄の創造の段階であり、被支配者(īśitavya)である。

īśo 'ham īśitavyo na sa ca devaḥ sanātanaḥ // LT 3.22

これは¹⁷³、わたしの自性とナーラーヤナの〔自性〕とは、関与していない。かの永遠なる神である支配者 (īśa) とわたしは、被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) ではない¹⁷⁴。

23

īśitavyaṃ dvidhā proktaṃ cidacidvyatirekataḥ /
cicchaktir bhoktrūrūpātra sā ca cidrūpadhāriṇī // LT 3.23

知 (cit) と無知 (acit) という2つの違いにより、被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) は2種として言われた。「知としてのシャクティ」 (cit-śakti) は、ここでは、享受者としてであり、そしてそれが知 (cit) の姿を持つ者である。

24

bhogyopakaraṇasthānair acicchaktis tridhā sthitā /
prasarantyaś trṭīyaṃ me sā ca parva smṛtaṃ budhaiḥ // LT 3.24

「無知としてのシャクティ」 (acit-śakti) は、享受される (bhogya) もの (upakaraṇa) の状態により、3種として存在する¹⁷⁵。それ (「無知としてのシャクティ」) は、覚者たちによって、顕現しつつあるわたしの第3番目の段階と言われる¹⁷⁶。

25

vibhakte api te ete śaktī cidacidātmike /
matsvācchandyavaśenaiva mama rūpe sanātane // LT 3.25

¹⁷³ 支配者 (īśa) と被支配者 (īśitavya) とが区別される状態のこと。Gupta も参照 [Gupta 2000: p. 17]

¹⁷⁴ この文章は乱れているため、意味が判然としない。「わたしは支配者 (īśa) であって、被支配者 (īśitavya) ではない。かの永遠なる神もまた」と訳すことも可能であるが、ラクシュミーであるわたしが、支配者 (īśa) であるのは不自然であり、支配者 (īśa) は男性形であるから矛盾が生じる。また、「わたしは支配者 (īśa) でも被支配者 (支配されるべき者、īśitavya) でもない。かの永遠なる神もまた〔同様である〕」と訳すこともできるかもしれない。Gupta も “The eternal God and myself do not (really possess the aspects of) Īśa or īśitavya.” と訳している。しかしこの場合、支配者 (īśa) はナーラーヤナ、支配者性 (īśatā) はラクシュミーと同定される LT 3.14 の内容と矛盾してしまう。おそらくこの偈では、被支配者 (īśitavya) は、不浄な創造の段階であるため、清浄な創造の段階であるラクシュミー (わたし) とナーラーヤナは直接に関係していないということの意味しているのであろう。

¹⁷⁵ LT 第5章では、物質的創造が3種類において説かれている。このことを指している可能性もある。

¹⁷⁶ 第3番目の段階とは何を指しているのだろうか。まず考えられるのは、1番目は支配者 (īśa) と支配者性 (īśatā)、2番目が被支配者 (īśitavya)、そして3番目が「知としてのシャクティ」 (cit-śakti) と「無知としてのシャクティ」 (acit-śakti) である。あるいは LT 第5章の物質世界の創造の第3番目と関連しているかもしれない。

また、まさにそのシャクティは、わたし自身の意欲 (*mat-svācchāndya*) のみに従って、知 (*cit*) と無知 (*acit*) というわたしの永遠なる 2 つの形態に分割されている¹⁷⁷。

26

cicchaktir vimalā śuddhā cinmayyānandarūpiṇī /
anādyavidyāviddheyam itthaṃ saṃsarati dhruvam // LT 3.26

「知としてのシャクティ」(*cit-śakti*) は、汚れなきものであり、清浄であり、知 (*cit*) からなる歓喜そのものである。このように、この始まりを持たない無知によって貫かれたもの (*anādyavidyāviddheyam*)¹⁷⁸ は、確かに、輪廻する。

27

acicchaktir jaḍāpy evam aśuddhā pariṇāminī /
triguṇāpi mamaivedaṃ svācchāndyāt pravijṛmbhitam // LT 3.27

また、「無知としてのシャクティ」(*acit-śakti*) は、同様に、理性なきものであり、不浄であり、転変するものであり、さらに 3 種のグナ〔から成るもの〕である。〔しかし〕まさにわたしのこれ¹⁷⁹ は、自身の意欲 (*svācchāndya*) により、伸張したもの (遍く広がったもの = 顕現したもの) である¹⁸⁰。

28

dhūmaketur yathā dhūmaṃ dīpyamāno bhajet svayam /
śuddhasaṃvitsvarūpāpi bhaje sāham acidgatim // LT 3.28

燃やされる火が、自ずから、煙〔の状態〕をとることができるように、清浄なる「知識」¹⁸¹ を自性とするもの (*śuddhasaṃvitsvarūpā*) であるかのわたしも、無知の帰趨 (*acit-gati*) 〔の状態〕をとる¹⁸²。

¹⁷⁷ Gupta は、「これらのシャクティは、一見すると、異なるものとして認められるが、基本的にそれらはまったく同一のシャクティである」と説明し、第 4 章を参照するよう指示している [Gupta 2000: p. 17]。

¹⁷⁸ おそらく不浄な創造の段階にあるものであろう。LT 3.16 も見よ。Gupta は、“Influenced by beginningless nescience it ...” と訳す。[Gupta 2000: p. 17]

¹⁷⁹ “*idam*” は中性名詞であり、何を指しているのか不明である。文法的に合わないが、知としてのシャクティか無知としてのシャクティ、あるいはシャクティそのものを挿しているのかもしれない。

¹⁸⁰ Gupta は “... yet I voluntarily manifest myself as such.” と訳す [Gupta 2000: p. 17]。

¹⁸¹ *saṃvid* = *jñāna* と考えられる。LT 3.2; 8 を参照。

¹⁸² Gupta は “*bhajet*” を “*produces*”、“*bhaje*” を “*assume*” と訳している [Gupta 2000: p. 17] が、両方とも「〔の状態〕をとる」と訳した。火が自ら生み出したによって煙の性質を帯びるということ、そして同様に、本来清浄であるものが、不浄なものへと変化するが、それによって、清浄であるものもまた、不浄なものの性質を帯びるということである。Krishnamacharya による註釈では、「炎 (*jvalana*) の本性である火 (煙の印を持つもの、*dhūmaketu*) も、汚れた煙の性質を受け取るように、そのように、無知 (*ajñāna*) の自性であるわたしも、無知 (*acit*) の状態になって、という意味である。」 (“*jvalanasvabhāvo*

29

anākrāntā vikalpena śabdair apy akadarthitā /
 ādhyānopadhināpy evaṃ varte 'ham acidātmanā // LT 3.29

このように、私は、誤謬 (vikalpa) によって覆われないもの (anākrāntā)、また、諸々の言葉 (śabda) によって拒否されないもの (akadarthitā)¹⁸³であるが、心に想起させる (ādhyāna) 拠り所 (upādhi) として¹⁸⁴、無知のアートマン (acit-ātman) として、展開する。

30

bahirantaḥpadārthe hi citsvarūpam akhaṇḍitam /
 viśiṅaṣṭi tathāpy etac citrayopādhisampadā // LT 3.30

また同様に、壊れることのないこの知 (cit) の本性は、様々な制限 (upādhi) を持つことによって、外と内のものに¹⁸⁵、個別化する。

31

svāntryam eva me hetur nānujoyjāsmi kiṃcana /
 itthaṃprabhāvām evaṃ mām vidan buddho bhaviṣyasi // LT 3.31

わたしの自己の意欲 (svāntrya、自己の独立性) のみが原因であり、わたしは誰かに支配される者 (anuyojyā) ではない¹⁸⁶。以上、このようにわたしの威光を認識しているあなたは、悟った者となるであろう。

'pi dhūmaketur yathā malinadhūmarūpatāṃ pratipadyate, tathājñānasvarūpāpy aham acidbhāvam āpadya ity arthaḥ.) [Krishnamacharya 1959: p. 12] と説明されている。

¹⁸³ すなわちすべての言葉によって確証されているということである。

¹⁸⁴ Krishnamacharya による註釈では、次のように説かれている。「<心に想起させる拠り所として> (“ādhyānopadhinā”) とは、『わたしの意欲としての制限によって』という意味である。あるいは『瞑想の拠り所のために』という意味である。次のように言われる。『瞑想という平安の場所である』 (“dhyānaviśrāmabhūmayah” LT 4.24) と (“ādhyānopadhineti. madicchārūpopādhinety arthaḥ. dhyānalambanārtham iti vārthaḥ. yathā vakṣyati — ‘dhyānaviśrāmabhūmayah’ (LT 4.24) iti.” [Krishnamacharya 1959: pp. 12–13])。これに関して、Gupta は、「編者は “ādhyānopadhi” に2つの説明を与えている。1) 制限としてのわたしの意欲、2) わたしを心に描くために必要な制限。最初の方が妥当と思われる。」と説明し、“voluntarily” と訳している [Gupta 2000: p. 17]。しかし、“ādhyānopadhi” には意欲というような意味は見出せず、2番目の方が妥当と考えられ、そのように訳した。

¹⁸⁵ Gupta は外を無知 (non-conscious) の創造、内を知 (conscious) の創造に当てはめている [Gupta 2000: p. 17]。

¹⁸⁶ おそらくこの偈は、30偈で制限されると説かれたため、知 (cit) が制限されるのであって、女神は本来的に制限されるものではないということを説明するために説かれているのであろう。Gupta の訳では、“Such limitations are imposed by my own (divine) sovereign (will) and I am subordinate to none” というように、“Such limitations” を補っている [Gupta 2000: p. 17]。

Śakraḥ —

シャクラは〔質問した〕。

32

kathaṃ sr̥jasi vai lokān sukhaduḥkhasamanvitān /
asr̥ṣṭir hi varam yadvā sr̥ṣṭir astu sukhātmikā // LT 3.32

あなたはまさに楽と苦に満たされた世界をどうして創造するのか。創造しないことの方が良いのではないか、もしくは楽〔のみ〕を本質とする創造〔の方が良いの〕ではないか¹⁸⁷。

Śrīḥ —

シュリーは〔答えた〕。

33

anādyavidyāviddhānām jīvānām sadasanmayam /
saṃcitaṃ karma saṃprekṣya miśrām sr̥ṣṭim karomy aham // LT 3.33

始まりを持たない無知によって貫かれている (anādyavidyāviddhā) 諸々の生類 (jīva) によって積み上げられた善と悪からなる行為を観察して、わたしは (楽と苦が) 混合した創造を行う。

Śakraḥ —

シャクラは〔さらに質問した〕。

34

kṣīrodasaṃbhave devi svācchandyaṃ te kathaṃ bhavet /
karma cet samavekṣya tvaṃ vidadhāsi sukhāsukhe // LT 3.34

乳海より生まれし女神¹⁸⁸よ。もし、行為 (karma) を観察して、あなたは楽と不楽 (苦) を生み出すならば、どうして、あなたに自身の意欲 (svācchandya) はどのようなものと

¹⁸⁷ Krishnamacharya による註釈には、「〈創造しないこと〉 (“asr̥ṣṭih”) とは。ここにおいて「そして、慈悲 (anukampā) に促されたものは、ただ楽のみを創造すべし」という『シュローカヴァールツェイカ』の言葉が思い出されるべきである」 (“asr̥ṣṭir iti. atra “sr̥jec ca sukham evaikam anumāpāpraciditah” iti śloka-vārttikavacanāṃ smartavyam.” [Krishnamacharya 1959: p. 13]) と説かれる。

¹⁸⁸ LT 1.30-32 を参照。

してあるのか。

Śrī —

シュリーは〔答えた〕。

35

kurvatyā mama kāryāṇi karma tatkarāṇaṃ smṛtam /
kartuś ca karaṇāpekṣā na svātantryavighātinī // LT 3.35

行為 (karma) は、わたしの諸々の機能を果たすものとして、その手段 (動機) であると言われている。そして、行為者¹⁸⁹と手段 (動機) の関係は、意欲 (svātantrya、独立性) を壊すものではない。

36

niravadyā svatantrāhaṃ nānuyogapade sthitā /
vibhaje bahudhātmānaṃ kartṛkarmakriyādinā // LT 3.36

非の打ち所のないものであり、独立したものであるわたしは、従属する状態にない。わたしは、行為者、行為、作用などとして、様々な自身 (ātman) を分割する。

37ab

līlayai kāraṇaṃ nātra mṛgyam evaṃ sthira bhava // LT 3.37ab

遊戯 (līlā) のために〔創造が行われるのであって〕、ここで原因は探求されるべきものではない。それ故、落ち着け¹⁹⁰。

¹⁸⁹ “kartṛ” について、Gupta が “a creator” と訳しているように [Gupta 2000: p. 18]、ここでの行為者とは創造者のことであろうか。2.46cd; 47ab において、わたし (ラクシュミー) が作者性 (kartṛtva) を自らに獲得する状態がプラディクムナであると説かれており、その作者性 (kartṛtva) は創造者の性質であると考えられる。これに従えば、ここでも同様に、“kartṛ” に創造者の性質を認めることはできるのであろうが、単純に行為者としても考えられる。

¹⁹⁰ 32 偈から 37 偈のこの一連の問答は、インド思想に横たわる根本的問題を孕んでいる。32 偈では、まず、楽と苦がある世界をどうして創造するのか、楽のみの世界を創造するか、そうでなければ創造しなければ良いのではないかと問われる。それに対する回答として、33 偈では、善と悪があるから、楽と苦のある世界を創造するという、ある意味単なる現状説明にすぎない回答がなされる。そこでさらに追求して、自身の意欲により創造しているのではないのか、いったいどこに自身の意欲があるのか、自身の意欲によってではなく、創造させられているのではないのかとの問いが投げかけられる。そこで、自身の意欲は行為によって影響されることはなく、また、独立したものであり、何ものにも従属することはないと説明し、最終的に遊戯 (līlā) が原因であるとして、この問答を締めくくる。このように、清浄であり、恩寵を持つ最高神が、どうして苦の世界を創造するのかという問いに対する説明として、最終的に最高神の遊戯 (līlā) として問答を終わらせてしまうのである。

Śakraḥ —

シャクラは〔語った〕。

37cdef

yadvā tadvāstu tad devi svātantryaṃ te yadīdṛśam /
 sṛṣṭiprakāram ākhyāhi namas te padmasambhave // LT 3.37cdef

女神よ。それはそのようであるが、あなたの意欲（svātantrya、独立性）が以上のようならば、創造の種類を話せ。あなたに敬礼します。パドマサンバヴァー（＝ラクシュミー）よ。

iti śrīpāñcarātrasāre lakṣmītantre traiguṇyaparakāśo nāma tṛtīyo 'dhyāyaḥ
 以上、パーンチャラートラ派の精髓『ラクシュミー・タントラ』における
 第 3 章「3 つのグナから成るものの明示」。